

聖なる預言者ムハンマドの生涯

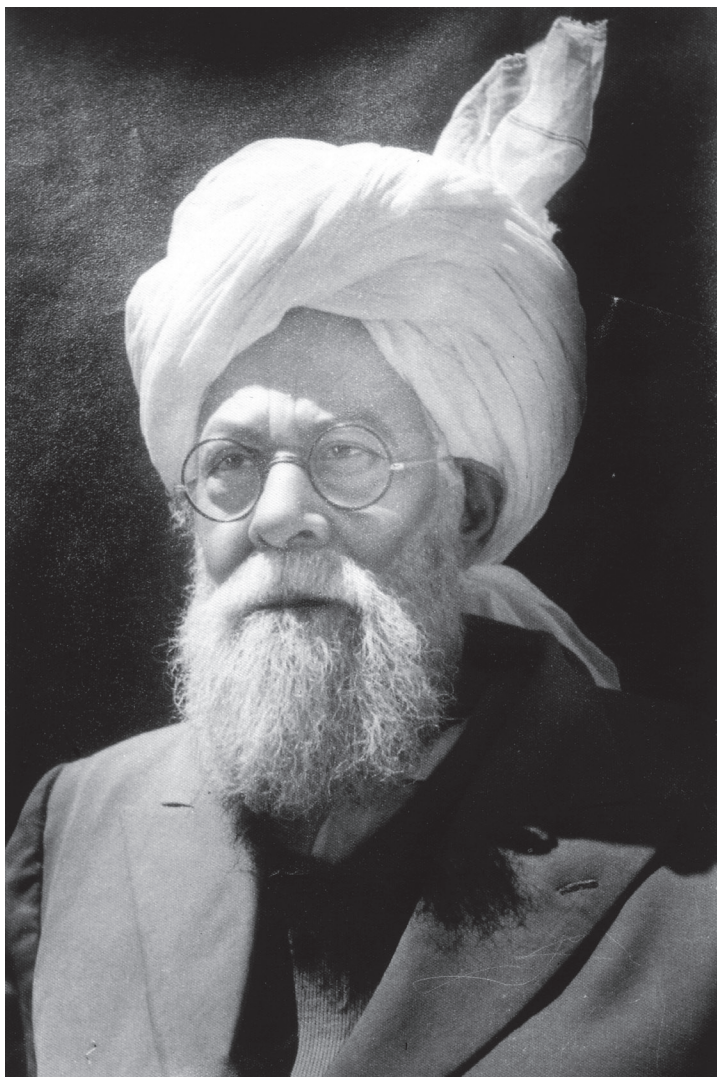
Life of Muhammad^(saw)

聖なる預言者ムハンマドの生涯

著者

HADHRAT MIRZA BASHIR-UD-DIN MAHMUD AHMAD

メシア
(救世主の第二カリフ)



著者について

繁栄を約束する救世主とマフディーの、繁栄を約束する後継者、全能の神、アッラーの明白なしるし。

その出現が過去の預言者だけでなく、聖なる預言者ムハンマドと繁栄を約束する救世主にも預言された神の言葉。

世界が何百年もの間、その出現を待たなければならないような崇高な天空の星。信者に精神的な生活を浸透させ、不幸にも彼に従わなかった人々を魅了する、煌めく光を放つ崇高な円光を冠する聖人。言葉が彼の舌から、滴り落ちる蜜のように聴衆の耳に流れ、彼らの魂の奥に達して、彼らを知識で満たし、信仰を鼓舞する間も、その演説は晴雨を問わず、聴衆を夜遅くまで何時間もじっと居させる、驚くべき才能を持つ雄弁家。

神の海と現世の知識。その時代を明確に表した発言。間違いなく 20 世紀の最も偉大な天才。驚くべき知性と記憶力を持つ人。指導者としての資質の典型。その多才さを量り得ない人－ Muslih Mau'ud（繁栄を約束する改革家）、Hadrat・ミルザ・バシールッディーン・マフムード・アハマド (1889－1965) は、繁栄を約束する救世主の長男であり、二番目の後継者（カリフ）であった。

ジャマートがまだ揺籃期だった時、彼は 24 歳の若さでアハマディア協会を担当し、彼の宗教的な指導、祈り、涙、苦勞と血を以って、50 年以上に渡って、それが十分に発達するまで育んだ。

彼の鋭敏な知性、鋭い英知、深く広範な学識と、何よりも神から与えられた知識によって、彼は書物や演説などの膨大な集成を作ることができた。彼の全作品はとても広大なので、出版の見通しがつくまでに何年もかかるだろう。繁栄を約束する救世主が、イスラム教を支えるしるしを与えるように熱心に神に祈った時、アッラーは彼のこの息子についての吉報を彼に与えて言った。

「…彼は非常に知的であろう…。そして、現世の知識と崇高な知識で満たされるであろう…」

息子よ、心の喜び、高位、高貴。最初で最後の、真実と天の啓示。

アッラーが天から降りたかのように。

見よ、光が来る。

私達は、生命の息吹を彼に注がなければならない…」

[1886 年 2 月 20 日の黙示録]

日本アハマディア・ムスリム協会

日本本部長、主任宣教師

アニース・アハマド・ナディーム

目 次

聖預言者誕生当時のアラブ	1
聖預言者と Khadīja の結婚	7
聖預言者ムハンマド、最初の啓示を受ける	10
最初の改宗者たち	12
迫害される信仰者たち	13
イスラムの布教	20
アビシニアへの移住	23
Umar、イスラム入信	25
激化する迫害	27
聖預言者、Tā'if へ行く	29
イスラム、メディナへ広まる	33
最初の Aqabah の誓い	39
ヒジュラ：メディナへの大移動	41
聖預言者を追跡する Surāqa	43
聖預言者、メディナ到着	46
聖預言者をもてなす Abū Ayyūb Ansarī	47
メディナでの不安な生活	49
メディナの各部族間協定	52
メディナ攻撃計画を進めるメッカ人	55
バドルの戦い	58
大預言成就	64
Uhud の戦い	68
勝利転じて敗北	71
聖預言者の死の噂、メディナへ	77
Banū Mustaliq との遭遇戦	88
濠の戦い	91
メディナ襲われる	93

Banū Quraizah 族の裏切り	97
連合軍、四散	104
罰せられる Banu Quraiza 族	107
聖書の教えに従った Sa'd の裁定	110
聖預言者は戦闘続行を求めたか？	113
戦争についてのユダヤ教とキリスト教の教え	116
聖クルアーン・戦争と平和についての教え	118
戦争についての預言者の戒め	128
不信仰者達の散発的攻撃	131
聖預言者と 1500 人の仲間達：メディナへの旅立ち	133
Hudaibiyah（フダイビア）の和議	137
諸王への預言者の手紙	140
イラン王への手紙	146
アビシニア皇帝への手紙	149
エジプトの統治者への手紙	151
バーレーンの長への手紙	153
カイバル陥落	154
預言者ムハンマドの幻夢の成就	160
Mūtah の戦い	162
預言者ムハンマドと 1 万の従者、メッカへ行進	168
メッカ陥落	171
聖預言者ムハンマド、メッカに入る	174
カーバ神殿、偶像排除	180
敵を許す聖預言者ムハンマド	183
Ikrima ムスリムに改宗	185
Hunain の戦い	188
使徒があなたを呼んでいる	190
不倶戴天の敵、敬虔な信者となる	194

聖預言者ムハンマド、戦利品を分配	195
Abū Āmir の陰謀	198
Tabūk 遠征	199
最後の巡礼	202
聖預言者ムハンマド、死の暗示を受ける	207
聖預言者ムハンマド、最後の日々	210
聖預言者・逝く	213
聖預言者ムハンマドの人柄と性格	217
聖預言者ムハンマドの精神的純潔と身体的清潔さ	219
聖預言者ムハンマドの質素な生活	220
神との関わり	226
苦行を非難す	235
妻たちに対する態度	237
高い道徳性	238
自制心	240
正義と公正な処遇	242
貧しき者への配慮	244
貧しき者の利益保護	247
奴隷への処遇	249
女達への処遇	250
死者への態度	255
隣人への処遇	255
親族への処遇	256
良き友を持って	260
人々の信仰を守れ	261
他人の誤ちを見逃せ	261
逆境における忍耐	265

相互協力	265
正直さ	267
他人の詮索	268
公然且つ正直な取引き	269
悲観主義	270
動物虐待	270
宗教的事柄における寛容さ	271
勇敢さ	272
無教養な人々への配慮	272
盟約の遂行	273
人間愛に身を奉げる者への敬意	273
聖クルアーンの完全性	274
聖クルアーンの原文保護のための工夫	276
聖クルアーンの指導者	278
聖クルアーンの暗誦者	280
暗記された聖クルアーン	282
一冊にまとめられた聖クルアーン	284
聖クルアーンの標準版	285
聖クルアーンを暗記する習慣の続行	287
章および節の配列	290
聖クルアーンに於けるいくつかの預言	293
聖クルアーンの教えにおける特徴	300
不滅なる神への信仰	301
救いに対する聖クルアーンの見え方	305
奇跡	308
神を崇拝すること	314
イスラムの礼拝堂	315
イスラムの断食	317

巡礼	318
ザカート (喜捨)	319
イスラム式行政	320
奴隷制度と聖クルアーン	322
人間の魂	323
聖クルアーンによる精神世界の構想	327
全人類の神	331
神 — あらゆる創造の究極的起因	332
神の主要属性	335
神のその他の属性	339
三種に分類される神の特性	343
矛盾のない神の属性	346
宇宙の中心をなす人類	349
頂点を極めた進化の過程	351
人類創造の目的	354
自然の法則とシャリーアの法則	355
聖預言者ムハンマドにおいて完成された精神的宇宙の進化	358
完全なる聖典－聖クルアーン	358
社会的秩序設定の原則	360
死後の生命	361
約束された救世主アハマド	362
救世主の約束された息子	365
他の言語への翻訳	368
謝辞	370
あとがき	372

聖預言者誕生当時のアラブ

聖預言者は西暦 570 年 8 月にメッカで生まれた。彼はムハンマドと名づけられた。その名は「讃美された人」という意味であった。彼の生涯と人間性を理解するためには彼の誕生時のアラブの状況を頭に入れておかなければならない。

彼が誕生した頃、あちこちに例外があるとはいえ、アラブでは多神教が全面的に幅をきかせていた。アラブ人の系図を遡るとアブラハムにいたった。彼等はアブラハムが一神教の伝道者であることを知っていたにもかかわらず、多神教に満足し、その教えを守ることに専念していた。その矛盾した立場を弁護するために、神とのふれあいに関して抜きんでいる人間も中にはいる、という言葉を彼等は使った。そのような人間が他の人々と神との仲介をすることは神も許していた。神は崇高かつ高貴である。凡人が神の域に到達するのは難しい。完全な人間のみが神の域に到達できるのだ。だから凡人が神の域に達し、神の喜びと救いを得るためには、誰か他の人々に仲介してもらわなければならないのだ。このように考えたからこそ、彼等は一神論者であるアブラハムへの敬意と彼等自身の多神教への信仰心を結びつけることができたのである。アブラハムは聖なる人であると彼等は言った。アブラハムは誰の仲介も必要とせず、神の域に達することが出来た。だがメッカの凡人たちは、他の聖者にして有徳なる人物の仲介なくして、神の域に近づくことはできなかった。この仲介を求めて、メッカの人々は聖者にして且つ、有徳なる人物を偶像化し、崇め奉り、彼等を通して神を喜ばせるために供物をした。このような態度は原始的であり、非論理的である。また、欠点や矛盾も数多く含んでいた。だがメッカの人々はそんなことは気にもとめなかった。彼等には長い間一神教を唱える伝道者がいなかったし、多神教は、一度社会に根をおろすと、ますます広がって際限を知らない。神の

数も増え始めた。聖預言者の誕生当時には、アブラハムとその息子イシュマエルによって建てられた礼拝堂であり、全イスラムの聖なるモスクであるカーバ神殿だけでも、360の偶像が存在したと言われている。この様子ではまるで陰暦の各一日に一体ずつ像があるようである。他の場所や何かの大きな中心地に行っても、どこにも必ず偶像があり、アラブ全体が多神教的信仰に傾倒していたといえるであろう。アラブ人は言語文化に力を注いでいた。彼等は口語に関心を向け、発展させることに夢中になっていた。とはいえ、彼等には知的野心が欠けていた。歴史、地理、数学などの学問に関しては、何も分かっていなかった。しかし彼等は砂漠の住人であり、陸標なしでも砂漠の中での大体の位置を知る必要があった。そこから天文学が発展した。アラブには学校はただの各校すらなかった。だからメッカの住人で読み書きができるのはほんのわずかしかなかった。

道徳的見地からみれば、アラブ人は矛盾の多い民族であった。彼等には道徳的欠陥が非常に多いが、同時に称えるべき素晴らしい資質も兼ね備えていた。彼等には飲みすぎる習慣がある。酔ってそのあげく破目を外したとしても、彼等にとってそれは美德とはなっても、決して悪徳にはならなかった。彼等が描く理想の人物像は、友人や隣人を酒宴に招き、楽しくもてなす人であった。金持ちならば、少なくとも1日に5回は酒宴を催したものだ。ギャンブルは彼等の国民的スポーツであった。しかも彼等はギャンブルを芸術ともいえるレベルまで高めた。彼等は金儲けをねらってギャンブルはしなかった。勝者は友人をもてなした。戦争の時にはギャンブルを通して基金が集められた。今日でも軍事費調達のための賞金つき債権制度がある。この制度は今の時代になってから、欧米諸国の人々によって復活されたものである。しかし、欧米諸国の人々は、その制度はアラブ人の真似に過ぎないことを忘れてはならない。戦争が起これば、アラブの様々な種族が集まり、ギャンブルパーティーを開いたものだった。勝利者となった者は軍事費のかなりの分を負担しな

ければならなかった。

文明生活の快適さについて、アラブ人は何も知らなかった。そのかわり、酒とギャンブルに悦楽を求めている。彼等の主な職業は交易であり、そのために隊商を遠く離れた地まで送っていた。このような形で交易していた相手はアビシニア（現在のエチオピア）、シリア、パレスチナであった。インドとの交易もあった。彼等の中でも裕福な者はインドの刀に魅せられていた。衣類の供給源は主にイエメンとシリアであった。取引は町を中心にして行なわれていた。イエメンと北部の一部を除いて、その他のアラブ人は遊牧民であった。定住地や、永久に住むべき場所というものはない。異なった部族が国を分け合い、それぞれの部族民が自分の領土内を自由に移動していた。どの地にしようと、水の供給源が尽き次第、他の場所へ移り、そこに住みついた。彼等の資産は羊と山羊とラクダであった。羊毛からは布地を作り、皮からはテントを作った。残った物は市場で売った。金銀の存在が知られていなかったわけではないが、当然その金銀を所有する者はほとんどいなかった。並みの生活を営む者、或いは貧しき者は、子安貝から装飾品を作ったり、芳香料を作ったりした。メロンの種を洗って乾燥させ、糸でつないでネックレスを作ったりもした。犯罪や非道徳的行為が氾濫していた。窃盗はほとんどなかったが、強盗は日常茶飯事であった。お互いに人を襲ったり、物を奪ったりするのは、誰もが生まれながらに持つ権利であるとみなされていた。だが、その一方で、彼等ほど自分の言葉を尊重する部族は他にはいなかった。ある人間が権力を持つ指導者か部族のところへ行って保護を求めた場合には、その指導者か部族は自分達の名譽をかけて、その人間を保護した。もしその約束が守れなかった場合には、彼等はアラブ全土で自分達の地位を失うことになった。詩人は名声をほしいままにした。彼等は国の指導者として尊敬された。指導者たる者は大變雄弁でなければならず、韻文を作る能力すら要求された。歓待は国民的美徳にまで高められた。孤独な旅人が部族の中心がいたあたりに到達すると、名譽ある客と

して歓迎され、大変なもてなしを受けた。最上の動物が彼のために料理され、最大の配慮がなされた。その訪問者が何者であろうとその部族にはどうでもよかった。訪問者があるというだけで充分であった。訪問されたということでその部族の地位や名誉が上がるのだ。だから、訪問者に敬意を払うのが部族の務めとなったのである。訪問者への敬意はそのまま、自分たち自身に対する敬意として反映されたのだ。アラブ人社会において、女性たちには何の地位も権利も与えられてはいなかった。彼等の間では女の赤子を殺すのは名誉とされていた。しかし国中で、幼児殺しが行なわれていたと考えるのは間違っている。このような危険な制度が国中に栄えるはずはない。それでは、その部族は滅亡してしまっていただろう。実際には、アラビアや、まだ幼児殺しの習慣が残っているインド、その他の国々ではこの習慣はある特定の家族内のみに限られている。アラブ人家族のうちでこの習慣を守っている者は、社会的地位について余りにも誇張された概念を持っていたか、或いは何らかの理由で止むを得なかったのであろう。彼等の娘に適当な結婚相手を見つけることができなかったのだらう。これを知った上で、彼等は女の赤子を殺したのだ。この制度が悪いという理由はその野蛮さと残酷さにある。決して国の人口問題から生じた結果だからということではない。女の赤子を殺すにも色々な方法が取られ、生き埋めや絞殺などもその例であった。アラブ人社会では生母のみが母とみなされ、継母は母とみなされなかった。だから、父の死後、息子が継母と結婚するのに、何の障害もなかった。一夫多妻は極く一般的で、一人の男に許される妻の数にも制限はなかった。姉妹が同時に同じ一人の男の妻となることも可能であった。

戦争の時には敵同士でお互いに最悪の扱いを受けることになった。憎しみが深くなると、戦傷者の体を引き裂き、その一部を持って帰り、人食い人種さながらに、その肉をたべた。敵の体をいたぶるのに何のためらいも感じなかった。鼻や耳を切り取ったり、目をくりぬいたりする残虐行為は極普通のことであった。奴隷制度は各地に広まっていた。弱い

部族は奴隷とされた。奴隷には何の地位も与えられなかった。どの主人も自分の奴隷に対しては、何でも好きなようにできた。主人が奴隷に対してどんな残虐な行為を行なっても、何の措置も取られなかった。主人が奴隷を殺したとしても、何の責任を負う必要もなかった。もし、一人の主人が別の人の奴隷を殺したとしても、その罰として死刑が言い渡されるわけではなかった。感情を害した主人に対して、適当な弁償をすれば、それで充分であった。奴隷女は、性的欲求を満たす道具にすぎなかった。その性交渉の上で生まれた子供もやはり奴隷として扱われた。その母親となった奴隷も奴隷の立場から逃れることはできなかった。このようにアラブ人とは、文明や社会的進歩という意味ではかなり立ち遅れた民族であった。お互いに対する親切とか思いやりという概念は彼等にはまだなかったのだ。女性の地位は最悪であった。それでもアラブ人には徳と言うべきものもあった。例えば、個々の人間が持つ勇氣は、時として、非常に高い水準に達していた。

このような人々の間で、イスラムの聖預言者ムハンマドは生まれたのであった。彼の父アブドゥッラーは彼が生まれる前に亡くなられた。したがって、彼とその母アーミナは祖父であるアブドゥルムッタリブの庇護下に面倒あった。幼児ムハンマドはターイフの近くに住んでいた土地の女を乳母としてた。子供を土地の女に委ね、その女が子供を育て、話す訓練をし、その子に健康に恵まれた人生の良いスタートをきらせるというのは当時のアラビアの習慣であった。メディナからメッカへの旅の途中、母親が死に、その遺体を途中で埋葬しなければならなかった。そのとき幼児ムハンマドは六歳であった。女の召使が彼をメッカに連れていき、祖父に託した。彼が八歳の時に祖父も死に、その遺言書に従って、彼の伯父アブー・ターリブが彼の保護者となった。ムハンマドは幼児時代にアラビアを出て旅をする機会が二、三度あった。一度は十二歳のときに伯父についてシリアへ赴き、南東部にある町を訪れた。この旅に関する歴史的文献によると、聖預言者ムハンマドがエルサレムへ行つたこ

とは明記されていない。それ以降、青年期に至るまで、彼はメッカに留まっていた。彼は幼い頃から沈思熟考や瞑想にふける習慣があった。争いや競争には一切関わるのがなく、関わるとすれば、その争いをやめさせる時くらいであった。メッカやその周辺に住む部族は果てしない血で血を洗う確執に飽き飽きしており、余りにも行き過ぎた不正な扱いを受けている犠牲者たちを助けようと一つの会を結成する決意をしていた。その話を聞いて、聖預言者ムハンマドは喜んで参加した。この会の加入者は次のような条件で約束を取り交わした。

海に一滴でも水がある限り、抑圧されている人々を助け、彼等に権利を取り返そう。もし、それができなければ、自分自身の財を使い、その犠牲者に代償すべし (Al-Raud al-Unuf by Imām Suhailī)。

この会の会員が別の会員たちから約束を遂行するよう要求されるということはなかったようだ。聖預言者ムハンマドが神から自分に授けられた使命を公表していた頃に、ある機会が訪れた。彼にとって最大の敵はメッカのある部族の長、アブー・ジャフルであった。アブー・ジャフルは聖預言者ムハンマドを社会から排斥し、彼を公然と辱めるよう人々に説いた。その頃、ある人物がメッカへやってきた。その人物にアブー・ジャフルが負債を返済するはずであったが、アブー・ジャフルは返済を拒否した。その人はメッカの中の人々にこのことを話した。全くのいたずら心から、数人の若者が、彼に聖預言者ムハンマドの所へ行くように勧めた。聖預言者ムハンマドが世間一般、特にアブー・ジャフルの反感を恐れて、何か行動を起こすことは断るだろうと彼等は考えたのだ。もし彼がこの人を助けるのを断れば、会に対する約束を破ったと言われるであろう。一方、もし彼が拒否せず、この負債の返済を求めてアブー・ジャフルのところへ行くことを選べば、アブー・ジャフルはきっと屈辱から聖預言者を追放するであろう。青年達の勧めに従い、この人は聖預言者のところへ行って、アブー・ジャフルについての不平をぶちまけた。聖預言者は一瞬のためらいすらなく立ちあがり、その人を連れて、アブー・

ジャフルの家のドアを叩いた。アブー・ジャフルが外へでてみると、この債権者が聖預言者と共に立っていた。聖預言者は負債について話し、その返済を促した。アブー・ジャフルは狼狽し、一言の弁解もせず、その場で支払った。この話しを聞いた他の部族の長達はアブー・ジャフルがいかに軟弱で、自己矛盾があるかを自ら証明したと言って、彼を非難した。アブー・ジャフルは聖預言者の社会的排斥を説いておきながら、自ら彼の支持に従い、彼の勧めに従って借金の返済をしたのだ。自己弁護に立ったアブー・ジャフルは、他の誰でも同じことをしただろうと釈明した。聖預言者が戸口のところに立っており、その両側で二頭の野生のラクダが今にも攻撃しそうな様相を見せていたのだと彼は言った。この経験が一体何を表しているのか、我々にはわからない。アブー・ジャフルを動転させようと奇跡的に現れたものだったのか、それとも畏敬を感じさせずにはいられない聖預言者の存在がこのような幻想を生み出したのであろうか。街中に嫌われ、抑圧されていた男が、勇気を奮ってたった一人で町の指導者のところへ乗り込んで、借金の返済を要求した。恐らく、この正に予期し得なかった光景がアブー・ジャフルを恐れさせ、その瞬間、彼は聖預言者に対して取るよう誓った内容を忘れ、聖預言者の勧めに従わざるを得なくなってしまったのだろう（Ibn Hishām）。

聖預言者と Khadīja の結婚

聖預言者が 25 歳になった頃には、彼の誠実さと人への思いやりは街中の評判になっていた。人々は賞賛の目で彼を指さし、信頼できる人がここにいるといったものであった。この評判がある金持ちの未亡人の耳に入った。彼女は聖預言者の伯父、アブー・ターリブの所へ行行って、聖預言者が彼女の所有する隊商をシリアまで率いて行ってくれるように依頼した。アブー・ターリブがこのことを聖預言者に告げると、彼はすぐ承知した。その遠征は大成功をおさめ、予想外の利益をもたらした。金

持ちの未亡人 Khadija はこの交易隊の成功はシリアの市場での状況が良かっただけでなく、この隊を率いた者の誠実さと有能さによるものであると確信した。彼女は奴隷の Maisara にこのことについて尋ねてみた。Maisara は主人の考え方を支持し、この若き隊商長が仕事の上で見たこれほどの誠実さと思いやりは、まず、他の人には期待できないであろうと答えた。Khadija はこの説得に大いに心を動かされた。彼女は既に 40 歳になっており、今までに 2 度も夫を亡くしていた。聖預言者が彼女との結婚の説得に応じるか否かを知らうと、Khadija は女友達を彼のところへ遣わした。この女性は聖預言者の所へ行って、なぜいまだに独身なのかを尋ねた。彼の答えは、結婚できるほどの財政的余裕がない、というものであった。もし金持ちで立派な女性が結婚相手として見つかったら、結婚を承諾するか否かを彼女は重ねて聖預言者に尋ねた。聖預言者が一体その女性は誰かと尋ねると、Khadija であるという答えが返ってきた。Khadija は彼には身分が高すぎると言って、彼は断った。Khadija の友人が「あらゆる面倒は全部自分にまかせて欲しい」と言うのと、彼はそれならば文句なく結婚を承諾すると答えた。それで Khadija は伝言を聖預言者の伯父に送った。聖預言者と Khadija の結婚は決まり、式が行なわれた。少年期に孤児となった貧しい男が、初めて成功を覗き見たのだった。彼は金持ちになった。しかし、彼の富の使い方はすべての人類への教訓ともなった。結婚後、Khadija は彼女が金持ちで聖預言者が貧しいという二人の間の不平等は、幸福への妨げとなると感じた。それで彼女は、自分の財産と奴隷を彼に譲り渡すと申し出た。彼女が真剣であると確認した聖預言者は、彼女の奴隷たちが彼のものとなったらすぐに、彼等を解放し自由にしてしまおうだろうと述べた。そしてその通りに彼は実行した。さらに Khadija から譲り受けた財産の大部分を彼は貧しき者達に分け与えた。彼がこのようにして自由にしてやった奴隷達の中に Zaid がいた。Zaid は他の者たちと比べて、見るからに知的

で機敏そうであった。彼は身分のある家柄の出身で、子供の頃に誘拐され、あちこちに売りとばされたあげく、メッカにきたのだった。自由になったばかりの若き Zaid はその場で、自由を犠牲にしても、聖預言者に奴隷として使えたほうがよいと見抜いた。聖預言者が奴隷たちを解放したとき、Zaid は自由になるのを拒み、引き続いて聖預言者と共に暮らすことを許してほしいと願い出た。彼の願いは聞き入れられ、時が経つにつれて、聖預言者への敬愛がふくらんでいった。そうこうするうちに、Zaid の父親と叔父が彼の行方を捜して手がかりを得、彼がメッカに住んでいることを聞きつけた。メッカへ来て、彼等は Zaid を求めて、聖預言者の家を探し出した。聖預言者を訪ねて、彼等は Zaid の自由解放を頼んで、聖預言者の望むだけの身受け金を支払うと申し出た。Zaid は自由なのだから、彼が望めばいつでも君達と共に出て行っているのだと聖預言者は答えた。彼は Zaid をお呼びになり、父親と叔父を引き合わせた。三人は顔を合わせ、涙を流した後で、Zaid の父親は親切な主人のおかげで、Zaid は自由の身になったのだと言った。そして彼の母親は別れ別れになっている運命に非常に嘆き苦しんでいるので、家へ帰ったほうがよいと勧めた。「お父さん、両親を愛さぬ者がどこにいるでしょう。私の心はお父さん、お母さんへの愛で一杯です。ですが、私はこの方、ムハンマド様を心からお慕い申し上げますので、ムハンマド様と離れて別の所で住むことなどとても考えられないのです。あなたに会えたこと、本当によかったと思います。でもムハンマド様と別れることは、私には堪えられません」。と Zaid は答えるのだった。Zaid の父親と叔父は何とか説得して、彼を一緒につれて帰ろうとしたが、Zaid は頑として応じなかった。この成り行きを見て、聖預言者は言った。「Zaid はもう自由な人間になっているが、今日からは私の息子となるのだ」。Zaid と聖預言者の間の心のふれあいをみて、父親と叔父はあきらめて帰って行き、Zaid は聖預言者の許しに留まったのである (Ibn Hishām)。

聖預言者ムハンマド、最初の啓示を受ける

聖預言者が30歳を過ぎた頃、神への愛、そして神を崇拜する愛が、彼の心の中で益々強くなっていった。メッカの人々の悪影響、間違った行為、その他多くの悪に対する嫌悪感がつのり、彼は2,3マイル離れた所に瞑想の場を選んだ。丘の上にある岩場の洞穴のような所であった。妻 Khadija が作ってくれた数日分の食糧を持って、彼は Hira の洞穴へ足繁く通った。洞穴の中で彼は昼夜、神に対する祈りを捧げた。40歳になったころ、彼は幻影を見た。まさにこの洞穴内で、誰かが彼に復誦するように命じているのが見えた。何を、どう復誦したらいいのかわからないと彼は答えた。その影は何度も命じて、ついに彼に次のような節を復誦させた。

読め、創造したる汝の主の御名^{みな}において、彼は吸いつく塊^{かたまり}より人間を創り給えり。読め、されば汝の主は最も尊貴なる御方にまします、筆によっておしえ給うた御方、人間^{ひと}にその知らざりしことを教え給えり (96:2-6)。

この節は初めて聖預言者に下された神の啓示であり、後に啓示された言葉と同様に、聖クルアーンの中に納められている。この節には、非常に多くの意味が含まれている。この言葉の命じるままに、聖預言者は立ちあがり、彼にとって、そして他のすべての人類にとってのただ唯一の神、唯一の創造主の御名を褒め称えようとした。この神こそが、人間を創られ、神の愛の種子をそして聖預言者を信じる者達の種子を彼の心の中にまかれたのであった。聖預言者はこの神の言葉を人々に伝えるよう命じられ、この神の言葉を伝える時には、神の助けと保護が与えられることを約束された。この節では、筆という手段を通して、あらゆる知識が世の中の人々に教えられ、今まで耳にもしたことがないような新しい事柄が教えられるであろう時が来ることを予告している。上記の引用箇

所が聖クルアーンの要約となっているのだ。聖預言者が後の啓示によって教えられる内容の兆しのすべてが、この節の中で芽生えている。人間の精神的発達段階において、今まではまだ知られていなかった大きな進展の基盤がこの節の中に置かれていた。この節の意味と説明は解説書の該当箇所に書かれている。この時点でこの節を参照したのは、この啓示が聖預言者の生涯において、重大な出来事となっているからである。聖預言者はこの啓示を受けた時、神から課せられた責任に対して大きな恐れを抱いた。他の人間が彼の立場だったら鼻高々になったであろう。自分が偉くなったように感じただろう。だが聖預言者は違っていた。彼ならば、大事業をやったのけるだろうが、自分の功績に対して何の自慢もしないだろう。この啓示という畏れ多い経験をした後、彼は顔をひきつらせ、非常に動揺した様子で家に辿り着いた。不安そうに尋ねる Khadija に、聖預言者は彼の身に起こったことをすべて話し、自分が感じている恐怖についても語った。「私のように弱い者が、神に課せられたこの責任をどうやって果たすことができるだろうか」。Khadija は即座に答えた。

「神はすべてをお見通しです。あなたは失敗するだろうし、その任にふさわしくないのだから、あなたをあてにはしないという言葉、神はお使いになりませんでした。あなたが、親族のものに親切で、思いやりがあり、貧しい者達や、哀れな者達を助け、彼等の重荷を肩代わりしてあげているというのに、どうして神がそのようなことをおっしゃるでしょう。あなたはこの国では失われてしまった美德を持っています。あなたは客人を丁重にもてなし、難儀をしている人々を助けてあげています。あなたは神からの試練を受けているのではないのでしょうか (Bukhari)。」このように答えた後、Khadija は聖預言者を彼女の従弟であり、キリスト教徒の Waraqa bin Naufal のところへ連れて行った。事の成り行きを聞いた Waraqa はこう言った。

「モーゼの上に舞い降りた天使があなたの上にもきっと舞い降りたのです」(Bukhari)。

最初の改宗者たち

Waraqa は明らかに申命記第 18 章 18 節の預言を頭に浮かべている。聖預言者によって奴隸身分から解放され、今では 30 歳位になっている Zaid と、聖預言者の従弟で 11 歳になる Ali は、この話を聞いて、に聖預言者への信心を誓った。その頃、聖預言者の子供時代の友人であった Abū Bakr は町を出ていた。Abū Bakr が町へ近づくにつれ、聖預言者のこの新しい体験についての噂が彼の耳に伝わってくるようになった。噂は聖預言者が発狂し、天使が彼に神からの伝言を伝えたと言いはじめた、というものであった。だが Abū Bakr は心から聖預言者のことを信じていたので、一瞬たりとも、疑うことなく、聖預言者は真実を語っているのだと確信した。良識があり、誠実な聖預言者の人柄をよく知っていたからだった。彼は聖預言者の家を訪ね、彼に会って何事が起こったのか直接尋ねた。Abū Bakr が誤解するかもしれないと心配した聖預言者は始めから詳しく語り始めた。Abū Bakr は聖預言者の言葉をさえぎり、本当に天使が神から彼の所へ遣わされ、神の言葉を伝えたのかどうか、それさえ聞けば、十分だと言った。聖預言者はもう一度説明しなかったが、Abū Bakr は詳細を聞く気はないと頑として言い張った。聖預言者が神の言葉を伝えられたのか、否か、その問いに対する答ええもらえば良かったのである。聖預言者ムハンマドは「そうだ」と答えた。そして Abū Bakr は即座に彼に対する信心を誓った。信心を誓ってから、Abū Bakr は彼に言った。議論しても、信仰の価値が下がるだけだ、と。Abū Bakr と聖預言者ムハンマドの付き合いは長く親密なものであった。だから、Abū Bakr は、聖預言者を疑うなどとてもできなかったし、彼の真実を確認するために、議論をすることを嫌った。以上の一握りの信

仰者が最初のイスラム教徒になった。つまり、熟年の女性、11歳の少年、他人の中で暮らしている解放奴隷、若き友人、そして聖預言者自身のたった5人であった。彼等だけで神の光を世界中に広げようと静かな決意を固めたのだった。人々やその指導者たちは、彼等の話しを聞いて大笑いをし、この五人の仲間は気が触れたのだと言って、恐れるものも思い悩むことも何もないと思った。それでも時が経つにつれ、真理が人々の心に伝わり始めた。そして預言者イザヤがずいぶん昔に言ったように（イザヤ書 28:13）、教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則、ここにも少し、そこにも少しとなった。真理が聖預言者自身に明らかになったのである。

迫害される信仰者たち

神は聖預言者に「別の言葉」で語りかけられるようになった。その国の若者たちは不思議に思い始め、真理を探究する者たちは夢中になり始めた。あざけりや愚弄から、賛同や賞賛が芽生え始めた。奴隷や若者たち、そして不運な女性たちが、聖預言者の周りに集まるようになってきた。聖預言者が啓示を受けた言葉や彼の教えに、墮落した者、意気消沈した者、そして若者たちが希望の光を見出した。女性たちは、自分たちの権利が復活する日が近いことを感じた。奴隷たちは、解放される日が来たと考え、若者たちは、自分たちの行く手に進むべき道が開きつつあると思った。愚弄が賛同に変わり、無関心が傾倒に変わりつつあるのを見て、メッカの部族長たちや役人は恐れをなした。彼等は集会を開き、討論をした。そして、愚弄するだけでは、この脅威をどうすることもできないという結論に至った。もっと厳しい対策を取らなければならない。新しい影響力は力で抑えつけなければならない。その結果、迫害や何らかの排斥措置が絶対に必要だということになった。すぐに実行に移され、メッカはイスラムと深刻な闘争状態に陥ってしまった。聖預言者とそのわず

かな仲間たちはもはや気狂いとは見られなくなったが、もし、そのまま放置すれば、メッカの信仰、威信、慣習、そして伝統をおびやかすような増大しつつある影響力とみなされていた。イスラム教はメッカにおける従来の社会構造を壊し、再建して新しい天地を築こうとしていた。新しい天地が誕生すれば、当然、古いアラビアの天地は失われることになる。メッカの人々はもはやイスラムをあざ笑っている場合ではなくなった。彼等にとって、それは今や死活問題となったのである。イスラム教は大きな挑戦となり、預言者の敵が常に預言者の挑戦に応じて来たように、メッカもイスラムの挑戦に応じた。だがメッカの人々はその挑戦に議論で応じるのは避け、刀を抜いて、武力でその危険な教えを封じ込めようとした。聖預言者やその信徒の良き模範と自分たちの良き模範とを対等に比較しようとしなければ、穏やかは言葉に対し、穏やかな言葉で渡りあうということもしなかった。ただ、無実の者たちを迫害し、穏やかに話しかける人々を虐待したのであった。信仰と不信の争いが、再び世界に広まり始めた。悪魔の力が天使に宣戦布告したのである。信仰者たちの数は依然としてほんのわずかしなく、不信者たちの殺戮や暴力に対抗する何のすべもなかった。この上ない残虐な行為が広まった。女性たちは破廉恥にも体をばらばらに切り刻まれた。男たちも惨殺された。聖預言者に信仰を誓った奴隷たちは、焼けた砂や石の上をひきずりまわされ、彼等の皮膚は動物の皮のように硬くなってしまった。ずっと後になって、イスラム教があちこちで確立された頃、最初の改宗者の一人である Khabbāb bin Al-Aratt は自分の体を人前に晒したことがあった。友人は彼の皮膚が動物の皮のように硬くなっているのを見て、その訳を尋ねた。だが、Khabbāb は笑って、何でもないと答えた。イスラム教に改宗した奴隷たちが、硬くまた焼けた砂や石の上をメッカの町中ひきずりまわされた、最初の頃の思い出であった。

信仰心を持つ奴隷たちはあらゆる社会から生まれていた。Bilāl は黒人であったし、Suhaib はギリシャ人であった。彼等はそれぞれ異

なった宗教を持っていた。Jabr と Suhaib はキリスト教徒で、Bilāl と Ammār は偶像崇拝者であった。Bilāl は焼けた砂の上に寝かされ、石のをせられ、彼の胸の上で浮浪児たちが踊らされた。彼の主人 Umayyah はこのようにして彼を拷問にかけ、彼にアッラーと聖預言者を放棄し、メッカの神 Lat と Uzza を称える讃歌を歌うように強要した。それでも Bilāl の口から出た言葉はこれだけであった。Ahad、Ahad…（神は唯一なり）。

激怒した Umayyah は浮浪児たちに Bilāl の身柄を引き渡し、彼の首に縄をつけて、とがった石の上を町中ひきずりまわすように頼んだ。Bilāl の体は血だらけになったが、それでも彼は Ahad 、Ahad とつぶやき続けたのだ。後にイスラム教徒がメディナに住みつき、比較的平穏な状態で暮らし、礼拝ができるようになった頃、聖預言者は Bilāl を Mu' adhdhin に任命した。Mu'adhdhin とは、信徒たちを礼拝に呼び集める人のことである。アフリカ人である Bilāl にはアラビア語の Ash-hadu(我こそは証人なり) の H が発音できなかった。メディナの信徒たちが彼のおかしな発音を笑うと、聖預言者は彼等を咎め、メッカ人からの拷問を受けながらも Bilāl が示した信仰の深さゆえに、いかに彼が神に愛されているかを説いた。Abū Bakr は Bilāl やその他多勢の奴隷たちのために身受け金を支払ってやり、彼等を晴れて自由の身にしてやった。その中に Suhaib がいた。彼は商人として成功したが、クライシュ族は彼が自由になってからもまだ彼のことをあざけり続けていた。聖預言者がメッカを出て、メディナへ移り住んだ時、彼も聖預言者について行きたかった。だがメッカの人々が彼の邪魔をした。彼がメッカで稼いだ富をメッカから持ち出してはいけないと言うのであった。Suhaib は自分の持つあらゆる富、財産を差し出して、メッカを出て行かせて欲しいと頼んだ。メッカの人々はこの申し出に応じた。Suhaib は一文無しでメディナに行き、聖預言者に会った。聖預言者は彼の話を聞き、彼の態度を褒め称えて、「あなたの人生で最高の売買であった」と言った。

このような奴隷の改宗者たちのほとんどは、彼等の信仰の誓いに表面的にも内面的にも確固たるものを持っていたが、中には弱い者もいた。ある日、聖預言者は Ammār が苦痛にうめきながら涙をふいているのを見つけた。聖預言者が近づいて行くと、Ammār はひどく殴られ、無理やり信仰を撤回させられたのだと訳を話した。聖預言者が「心から信仰していたのか」と尋ねると、Ammār がはっきり肯定したので、神は彼の弱さを許してくださるだろうと彼を慰めた。

Ammār の父 Yasir と母 Sumayyah もまた、不信者たちに痛めつけられていた。ちょうどその場面に、聖預言者が通りかかったことがあった。胸が一杯になって、「Yasir の家族たちよ。忍耐強く堪えるのだ。神があなたたちに樂園を用意して下さっているから」と彼は言った。彼の言葉はまもなく本当のこととなった。Yasir は拷問に倒れ、その少し後に彼の年老いた妻 Sumayyah はアブー・ジャフルに槍で突き殺されてしまった。奴隷女の Zunaira は不信者の残虐行為のため、目をつぶされてしまった。

Safwan bin Umayya の奴隷である Abū Fukaih は焼けた砂の上に寝かされ、胸の上に重く、真っ赤に焼いた石をのせられ、その苦痛のために、口がきけなくなってしまった。他の奴隷たちも似たり寄ったりの形で虐待された。

このような残酷さは忍耐の域を越えたものであった。それでも最初の頃の信徒たちは、日々、神から自信を与えられ、心を強く持ってその残酷さに堪えた。聖クルアーンは聖預言者に与えられたが、神の励ましの声は信徒一人一人に届いた。そうでなければ、いくら信仰心の篤い者でも、彼等にむけられる残酷さに堪えられなかったであろう。仲間や友人、親族に見捨てられても、彼等には神がいた。だから他に誰もいなくても気にもとめなかった。神故に残酷さも何でもないことのように思われ、罵りも祈りのごとく響き、石すらもベルベットのよう感じられたのだった。

自由な一般市民でも、信仰心のある者は同じように迫害された。長老や長達は彼等を様々な方法で苦しめた。Uthmān は 40 歳で裕福な暮らしをしていた。だがクライシュ族がムスリムを全面的に迫害すると決定すると、彼の叔父 Hakam は彼を縛り上げて打ち据えた。後に偉大なムスリムの将軍となった勇敢な Zubair bin Al-Awwam がまだ若者だったころ、彼の叔父は彼をむしろでぐるぐる巻きにし、下から煙でいぶして、もう少しで窒息させるという拷問を加えた。それでも彼は信仰をあきらめなかった。彼は真理を見出しており、決して放棄しようとはしなかった。

Ghaffār 族の Abū Dharr は聖預言者の噂を聞きつけ、調査をしにメッカへ出かけた。メッカの人々は自分たちは聖預言者のことをよく知っているが、彼のやっていることは身勝手な考え方に基づいたものにすぎないと言って、Abū Dharr を説得しようとした。彼等の言葉には、何の感銘をあたえるものもなかったので、彼は聖預言者を訪ね、本人の口から直接にイスラムの神の言葉を聞き、すぐに改宗した。Abū Dharr が彼の信仰を部族の仲間たちに秘密にしておけるかどうか尋ねると、聖預言者は 2,3 日ならばできるだろうと答えた。ところが、彼がメッカの町を歩いていると、メッカの人々が聖預言者をののしり、ひどく攻撃的な言葉を吐いているのが耳に入ってきた。もうこれ以上、信仰を隠しておくことが出来なくなって、彼はその場で宣言をした。「アッラー以外に神はなく、アッラーのような神も他にはいないことを証言する。そして聖預言者はアッラーの使徒であり、預言者である」。不信者たちが集まっている場で突如沸き起こったこの叫びは、彼等にとっては厚顔無知もはなはだしい。彼等は怒り狂って、Abū Dharr が気を失って倒れるまで、彼を強打した。その頃、まだ改宗をしていなかった聖預言者の叔父 Abbās がちょうど、その場を通りかかり、痛めつけられた Abū Dharr に代わって抗議し始めた。「あなたがたの食糧隊商が Abū Dharr の部族を通り抜ける時、部族の人々は今日の彼に対するあなたがたの仕打ち

に腹を立てて、あなたがたを飢え死にさせることだってできるのだぞ」。翌日、Abū Dharr は家にいた。その翌日に彼が再び同じ集会場所へ行くと、やはり前と同様、人々が聖預言者の悪口を言っていた。彼がカーバ神殿へ行ってみても、そこにいる人々も同様であった。自分を抑えられなくなって立ち上がり、彼は自分の信仰を大きな声で誓い、再びひどい虐待を受けた。三度同じ目にあって、それから Abū Dharr は自分の部族のもとへ帰って行った。

信心深い者に向けられた虐待を受けたという点では、聖預言者自身も決して例外ではなかった。祈りを捧げている最中のことであった。不信者の一団が彼の首にマントをかけて、ひきずりまわした。彼の目玉はとびだしそうであった。偶然そこへ来合わせた Abū Bakr が彼を救い出して言った。「神こそが主なり、と唱えるだけで聖預言者を殺そうというのか」。また、聖預言者が祈りを捧げながら平伏している時のことであった。彼等は彼の背にらくだのはらわたをのせたので、この重いものが取り除かれるまで彼は立ちあがることもできなかった。また、このようなこともあった。彼が通りを歩いていると、浮浪児たちが何人か彼の後からついて来た。彼等は聖預言者の首をびしゃり、びしゃりと叩きながら、彼は自分のことを預言者だと呼んでいるんだと人々に言い続けた。彼に対する憎しみや悪意はそれほど強く、彼はどうすることもできなかった。

聖預言者の家は、周囲の家々から石を投げつけられていた。生ごみや屠殺された動物の遺骸が彼の家の台所に投げ込まれることもあった。祈りの最中に廃棄物^{ごみ}をなげつけられることも多く、そのために公の礼拝をするために安全な場所に退かなければならなかった。

弱くかつ罪のない人たちや、正直で善意あふれる、だが無力な指導者に向けられたこのような残虐行為は、しかし決して無駄にはならなかった。良識ある人々はこの状況をすべて見て、イスラム教へと走った。ある日、聖預言者はカーバ神殿の近くにある Safa の丘で休んでいた。彼

の最大の敵であるメッカの長、アブー・ジャフルがちょうどそこを通りかかり、彼に対して悪口雑言を浴びせかけた。聖預言者は一言も返さず、帰宅した。彼の家の女奴隷はこの悲惨な光景を目撃していた。そこへ聖預言者の叔父であり、町中の人々から恐れられている勇敢な男、Hamzaが森での狩りから帰ってきて、肩に弓をぶら下げて、誇らしげに家の中に入ってきた。朝の光景が忘れられないでいる女奴隷はHamzaがこのように家の中を歩くのを見て、腹が立ってきた。彼女は彼をなじり、自分では勇敢なつもりで武装して歩きまわっているくせに、その日の朝に、彼の甥がアブー・ジャフルにどんな目に合わされているか、何も知らないではないかと言った。Hamzaはその朝の出来事を詳しく教えられた。彼は信仰心はなかったが、高潔な人間であった。彼も聖預言者が受けた神の言葉には感銘を受けたが、公然と信仰に加わる程ではなかったのだろう。彼はアブー・ジャフルの悪意あふれる嫌がらせを聞いて、黙ってはいられなくなった。その新しい啓示の言葉に対するためらいは消え去った。今まではその啓示に関して余りにも無頓着すぎたと彼は思い始めた。彼はカーバ神殿の方へまっすぐに出向いていった。メッカの長達がそこで集まり、協議するのを常としていたからである。彼は弓を取って、アブー・ジャフルをしたたかに打ち据えた。「今日から私も聖預言者の仲間だと覚えておいてもらおう。おまえは今日聖預言者が何も言おうとしなかったからこそ、彼を罵ったのであろう。もしおまえに勇気があるのなら、さあ私と戦え」と彼は言った。アブー・ジャフルは物も言えないほど、怖気づいた。彼の友人たちが彼を助けようと立ちあがったが、Hamzaとその部族を恐れたアブー・ジャフルは友人たちを押しとどめて、公然と戦ったりしたら大きな犠牲を払わなければならないだろうと考えた。そして朝の事は全面的に自分が悪かったとみとめたのだった (Ibn Hishām & Tabari)。

イスラムの布教

反対はますます強くなっていった。その間も聖預言者とその信徒たちはメッカの人々にイスラムの啓示をわかりやすく伝えようと最善の努力をしていた。この多面的で非常に意義深い神の啓示は、アラブ人だけではなく、世界中の人々に向けたものであった。正に神から授けられた神の言葉であった。その内容は次の通りである。

「この世界の創造主は唯一なり。他に崇拜すべきものはない、預言者たちは神が唯一だけであると信じ、信徒たちにそう教えている。メッカ人はすべての偶像を破棄せよ。メッカ人は、足下に供えられた供物にたかる蠅すらも追い払う力は偶像にはないということがわからないのか。外から攻撃されたとしても、撃退することすらできないであろう。彼等は質問を受けても答えられないであろう。助けを求められても、何をすることもできないであろう。だが唯一の神は、助けを求めて来るものには救いの手を差し伸べ、神に祈りを捧げる者には応じ、神の敵を征服し、神の前ではへりくだる人々を励まされるであろう。それなのに何故メッカの人々は神を無視し、生命をもたない偶像に頼り、人生を無駄に使っているのか。彼等は唯一の真実の神を信じる心が足りないために、迷信に走り、無能になっている自分たちが見えないのか。彼等には何が清潔で何が不浄なのかわかっていないし、善悪の区別もつかないのだ。母親を称えようとしめない。姉妹や娘たちを残酷に取り扱い、彼女等の権利を否定してしまう。妻に対する態度もひどい。未亡人を苦しめ、孤児や貧者、弱者を搾取し、彼等の犠牲の上に自分達の富を築こうとする。恥ずかしげもなく嘘をつき、人をだまし、押し込みをし、略奪をする。ギャンブルや飲酒が彼等の喜び。文化や国の発展には何の注意も払わない。いつ

まで彼等は唯一の神を無視し、衰退を続け、苦しみを重ねていくつもりなのか。そろそろ改革を手がけたほうがいいのではないか。他人を搾取するのをやめて、当然の権利を持つべき人に復活させ、国のために財産を使い、貧しき者すべてを救い、責任を持って孤児の世話をし、孤児を保護するのが義務だと考え、未亡人に援助の手を差し伸べ、社会における慈善事業を確立し、促進し、正義や公正さだけではなく思いやりや慈悲の心を養うようにしたほうが良いのではないか。この世での生活は善行の積み重ねとなるべきである。「善行を残せ」と啓示は伝えている。

「そうすればその善行の芽は大きく育ち、あなた方がいなくなった後にも、実を結ぶようになるであろう。人に施されるのではなく、施すことに徳がある。人に譲ることを知りなさい。そうすれば、あなた方は神に近づく。仲間のために無欲になりなさい。そうすれば神からの信用を高めることができる。確かにムスリムは弱いが弱さを求めている。真理は勝利をもたらすであろう。これが神意である。預言者を通して、善悪の新しい基準、新しい尺度がこの世に確立されるであろう。正義と慈悲がこの世を支配するようになる。宗教には何の制約も介入も許されない。女性や奴隷に強いられて来た残虐行為はなくなるであろう。神の王国が悪の王国にとって変わるのだ」(Ibn Hishām)。

この啓示がメッカの人々に説教され、その中の善意にあふれ、思慮深い人々がこの啓示に心動かされるようになると、メッカの長老たちは事態を深刻に受け取るようになった。彼等は聖預言者の伯父、アブー・ターリブのところに代表者を送り、このように伝えた。

おまえは我々長達の一人である。だから今までの所はおまえに免じて、甥の聖預言者には寛容な処置をしてきた。だがついに、この国家的危機ともいうべき紛争に終止符を打つ時が来た。彼の、我々の偶像に逆らうような発言は止めるように要求する。神が唯一だと断言することはかま

われないが、我々の偶像に逆らうような発言だけは許さない。もし彼がこれに同意すれば、我々と彼との紛争や議論はこれで終りになる。必ず彼を説得せよ。もしおまえにそれができなければ、残された道は二つに一つだ。おまえが甥を見放すか、さもなければ、我々がおまえを見放すかだ (Ibn Hishām)。

アブー・ターリブは厳しい選択を迫られた。甥を見放すのは辛い。そして仲間から縁を切られるのも同じ位辛いことであつた。アラブ人はお金は余り持っていなかった。名声は指導力にあるのだった。彼等は仲間のために生き、仲間は彼等のために生きていた。アブー・ターリブは非常に動揺した。彼は聖預言者を呼びにやり、メッカの長老たちがつきつけた要求を説明した。「もしおまえが同意してくれなければ、私がおまえを諦めるか、私の仲間が私を見放すかのどちらかになってしまう」と彼は目に涙を浮かべて話した。聖預言者は心から伯父に同情した。彼も涙に濡れてこう言った。

「あなたの仲間の人々を諦めないでください。私の肩を持たないでください。代わりに私を諦め、仲間の人たちの味方になってあげてください。たとえ彼等が私の右に太陽を、そして私の左に月を据えたとしても、わたしは唯一の神の真理を説くのを止めることはしません。その私の行動は唯一の神がすべてご存知です。死ぬまでこの態度は変わりません。どうぞあなたの喜びとなる方を選んでください」 (Ibn Hishām & Zurqāni)。

この毅然として率直で誠意あふれる答えはアブー・ターリブの目を開かせた。彼はじっくり座って考えた。彼には信じる勇氣は無かったけれども、信仰の強さと義務への配慮をまざまざと見せつけられ、生きていてよかったと心から思った。聖預言者の方へ開き直り、彼はこう言った。「我が甥、ムハンマドよ。おまえの道を進むが良い。おまえの義務を果たしなさい。仲間のことは諦めよう。そして私はおまえの味方だ (Ibn Hishām)。」

アビシニアへの移住

暴虐が極限に迫った頃、聖預言者は信徒を集めて、西方を指し、海を渡ったところにある土地について語った。その地は改宗したというだけで殺されることも無く、何の危害を加えられることなく神を崇拝でき、公正な王のいる所であった。そこへ行こう。転地によって安堵が得られるかもしれない。ムスリム達は男も女も一体となって、この提案を受けてアビシニアへと向った。移住者の数は少なく、哀れをさそった。アラブ人は自分たちこそカーバ神殿を守る主だと自負しており、事実そうであった。だから彼等にとってメッカを去るのは苦痛以外のなにものでもなく、メッカに住むことが全く不可能とならない限り、誰もこの地を出ることなど考えもしなかった。また、メッカの人々もこのような動きを黙認するつもりなどなかった。彼等は自分たちが痛めつけた人々が、メッカを逃れ、他に住む場所を見つけることなど許す気もないだろう。そのため、移住者達は極秘の内に旅立ちの準備をすすめ、友人や親族に別れの言葉すら告げずに出発しなければならなかった。それにもかかわらず、彼等の旅立ちの一部のものたちに発覚し、感動を与えずにはおかなかった。後にイスラムの2代目のカリフとなった Umar はまだその頃は信仰心をもっておらず、ムスリムの大敵であり、迫害者であった。全くの偶然で、彼はこの移住者たちの内の何人かに出会った。その中に Umm Abdullah という女性がいた。家財道具が荷造りされ、動物の背に乗せられているのを見て、Umar はすぐに一行がメッカを去って、どこか他の地に逃れようとしているのだと察した。「行くのか」と彼は尋ねた。「はい。神がすべてご存知です」。と Umm Abdullah は答えた。「私たちは他の地へ参ります。あなたたちの私たちに対する残虐行為があまりにひどいからです。アッラーが私たちを戻らせてくださるまでは、もうこの地へ帰ってくることはないでしょう」。Umar は感動して、「あなた方に

神のお恵みを」と言った。彼の声には心がこもっていた。この静かな光景に彼は動揺した。メッカの人々がこの移住のことを知り、追っ手をかけた。追っ手は海辺までも追いかけていったが、ムスリム達はすでに出港した後であった。追いつけなかった追っ手はアビシニアへ使節を送り、王を刺激して避難民に対する反感をあおり、彼等をメッカ側へ引き渡してくれるよう説得することにした。その使節の中に Amr Bin al-Ās がいた。彼は後にイスラムに加わり、エジプトを征服した人である。使節団はアビシニアへ行って王と会い、廷臣たちと計略を巡らした。しかし王は毅然たる態度をとって、使節団や廷臣達のあらゆる限りの圧力にも屈せず、ムスリム達を迫害者の手に引き渡すことを拒否した。使節団はがっかりして帰途についたが、メッカに戻るとすぐに別の計略をめぐらして、ムスリム達をアビシニアからメッカへ戻ってこさせることを考えた。アビシニアへ行く隊商の間で、メッカ中がイスラムを受け入れたという噂を流させたのである。噂がアビシニアまで伝わると、ムスリム難民の多くは喜んでメッカへ戻ってきたが、着いた途端に、その噂が全くの作り事であるのがわかった。一部のムスリムはアビシニアへ引き返していったが、そのままメッカに残った者もいた。残留組の中に、メッカの長の中でも指導的立場にいる人の息子である Uthmān bin Maz'ūn がいた。Uthmān は父親の友人である Walīd bin Mughirah の保護を受け、平和に暮らし始めた。しかし、彼は他のムスリム達が残忍な迫害を受け、苦しんでいるのを知り、暗い気持ちになった。彼は Walīd の所へ行って、彼の保護を断った。片方で他のムスリム達が苦しみ続けていると言うのに、自分だけそのような保護を受けるべきではないと彼は考えたのだった。Walīd はこのことをメッカの人々に話した。

ある日、アラビアの桂冠詩人、Labīd がメッカの長達の間に座って詩を詠じている時のことであった。彼があらゆる栄光にはいつか必ず終わりが来るという意味の一節を読んだ。Uthmān は果敢に反駁して「楽園の栄光は永遠である」と言った。このような反駁になれていない Labīd

は癩癧を起こして叫んだ。「クライシュ族の皆さん、あなたがたの客人でこれほどの侮辱を受けたものが今までにあったらどうか。一体いつからこんな慣習が始まったのか」。Labīd をなだめようと聴衆の一人が立ち上がり、「続けてください。こんな愚か者は無視してください」。と言った。Uthmān はばかげたことは何も言っていないと主張した。この態度に激怒したそのクライシュ族の男は Uthmān に飛び掛って鋭い一撃を食らわせた。すると Uthmān の片目がつぶれてしまった。Uthmān の父親の親友、Walīd はその場に{i>い合わせていた。Walīd は自分の亡き友人の息子が、このような目に遭うのを見るに忍びなかった。だが今では Uthmān は彼の公的保護下にいないのだから、アラブの慣習に従って Uthmān の弁護をすることは許されなかった。だから彼にはどうすることもできなかったのである。怒り半分、苦悩半分の気持ちを抱いて、彼は Uthmān の方を向いて「友人の息子よ。私の保護を拒絶しなければ片目を失うこともなかったのに。保護の有り難味をしらなければならない」と言った。Uthmān は答えた。「長い間これを待っていたのです。片目を失ったからと言って悲しくなんかありません。どうせもう一方の目も同じ運命を辿るのでしょうか。覚えておいてください。聖預言者が苦しんでいる限り、私たちは平和なんて欲しくないのです」(Halbiyyah, vol.1、P.348)。

Umar、イスラム入信

この頃、もう一つの重大な出来事が起こった。後に2代目のイスラムのカリフとなった Umar はその頃はまだ、イスラムにとって最も残忍且つ最も恐ろしい敵の一人であった。新しい動きに対する政策が何の効果も奏していないため、彼は聖預言者を殺すことに決めた。彼は刀を手に立ちあがった。友人が彼の様子を見て変に思い、どこへ何しに行くのかと尋ねた。「ムハンマドを殺す」と Umar は言った。

「だけどそんなことをして、彼の仲間たちが君を無事に済ますと思うのか。それにそれがどういう影響を引き起こすかわかっているのか。君の妹夫婦もイスラムに入っていることは承知の上なのだろうね」。

その言葉は正に青天の霹靂であった。そして Umar を大いに動揺させた。彼はまず妹夫婦を先に始末することにした。彼等の家に行くと、中では朗唱の最中であつた。聞こえてくる声は聖典を教える Khabbāb であつた。Umar はすばやく家の中に入った。急ぎ足の音に警戒して、Khabbāb は既に身を隠していた。Umar の妹 Fatimah は聖クルアーンが書かれた紙を隠してしまった。妹夫婦と直面した Umar は「おまえ達は自分の信仰を捨てたそうだな」と言うなり、彼の従弟でもある妹の夫を殴ろうと手を振り上げた。Fatimah が Umar と夫との間に立ちはだかったため、Umar の手は Fatimah の顔に当たり、鼻を直撃してしまった。ひどく鼻血が流れた。この一撃を受け、Fatimah は開き直った。「そうです。私たちは今ではもうムスリムです。そしてこの信仰は変わりません。どうぞ好きにしてください」と叫んだ。Umar は粗野だが勇士であつた。彼自身の手で鮮血に染めてしまった彼女の顔を見て、彼は深い後悔の念に襲われた。まもなく人が変わったようになって、Umar は彼等が詠んでいた聖クルアーンの文書を見せて欲しいと頼んだ。Fatimah は彼が聖クルアーンを引き裂いて捨ててしまうのではないかと恐れ、断つたが、彼はそんなことはしないと約束をした。それでもまだ、Fatimah は彼が不潔であると言張った。Umar は身を洗うといった。清潔になり、気を落ち着けて、聖クルアーンの文書を手に取った。ターハ一章であつた。そして次のような節が彼の目に入ってきた。

げにわれはアッラーなり。われの外に神なし。されば、われに
仕え、われを念ずるために礼拝を遵守せよ。げに（定めたる）時
は来るなり。われ之を隠さんとするかもしれぬ、各人がその努力
に^{これ}応じて返報されんがために（20:15,16）。

神の存在の保護、そして今メッカに存在する慣習的な信仰に代わり、イスラム教が純粋な信仰をまもなく確立するであろうという明解なる約束。これら二つに加えて、その他沢山の関連した考え方が、Umar を感動させたのであろう。彼はもはや自分自身を抑えきれなかった。信仰が心の中から湧いてきて、思わず「何と素晴らしい。何と輝かしい」と叫んだ。隠れていた Khabbāb も飛び出してきて言った。「聖預言者が Umar か Amr bin Hishām の改宗を念じてお祈りになったと昨日聞いたばかりです。神がすべてご存知です。あなたの改宗はその祈りがあったからです」。Umar の心は決まった。彼は聖預言者の居場所を尋ね、彼に会いに Dar Arqam へ向った。手に抜き身の刀を下げたままであった。ドアをノックすると、聖預言者の仲間たちは隙間から Umar の姿を認め、彼が良からぬ悪巧みをしているのではないかと恐れた。ところが聖預言者は「彼を中に入れなさい」と命じた。Umar は手に刀を持ったまま、中へ入った。「何のご用ですか」と聖預言者は尋ねた。「神から遣わされた預言者さま。ムスリムに入れていただきたくてここへ参りました」と Umar は答えた。Allahu Akbar と聖預言者は声を上げた。仲間たちも口々に Allahu Akbar と叫んだ。この叫びはメッカ中の丘にこだました。彼の改宗のニュースは猛火のごとく広まった。かつてはイスラムの迫害者として恐れられていた Umar 自身が他のムスリム達と共に迫害される側に回ったのである。だが Umar はもう以前の Umar ではなかった。以前人に苦しみを科すことに喜びを感じていたように、今では喜んで苦しみを受けるようになっていた。彼はメッカでひどく迫害をうける対象となった。

激化する迫害

迫害はますますひどく、堪え難いものとなっていった。ムスリムの多くは既にメッカを去っていた。後に残された人々が受ける迫害は、前に

も増してひどくなっていた。それでもムスリム達は、自分たちが選んだ道から一歩たりともは外れるようなことはしなかった。彼等の心は相変わらず確固として、信仰もゆるぎなかった。唯一の神に対する献身は増し、同時にメッカの国家的偶像に対する憎しみは募った。対立は今までにも増して、深刻になった。メッカの人々は再び大きな会合を開き、この場でムスリムの全面的排斥を決議した。ムスリムからは何も買わず、何も売らないというものであった。メッカの人々はムスリムとの正常な取引は一切しないことになったのである。聖預言者とその家族、そして彼等自身はムスリムではなかったが、彼の味方になっていた数多くの親族はアブー・ターリブの所有地である人里はなれた土地に避難することを余儀なくされた。この隔離状態の下で、金もなく、なすすべもなく、蓄えもない聖預言者の家族や親族の苦難は筆舌に尽くせないほどであった。この厳しい状態のまま、3年の年月が流れた。そしてついに、敵の中から、5人の良識ある人々がこの状態に反逆したのである。彼等は封鎖された家族のところへ行き、排斥を解くことを約束し、出て来るように呼びかけた。アブー・ターリブが出てきて、彼等をたしなめた。この5人の反逆はメッカ中に知れ渡るところとなったが、善意がおのずと明らかになり、メッカの人々はこの残酷な排斥は取りやめなければならないと決定した。排斥は終わったが、その影響は残っていた。23日後に聖預言者の敬虔な妻 Khadija が亡くなり、1ヶ月後に伯父のアブー・ターリブが後を追った。

聖預言者は Khadija という伴侶とその支えを失い、ムスリムの人々はアブー・ターリブの居心地よい場所を失ってしまった。当然ながら、彼等の死は一般からの共感を失う結果となった。聖預言者のもう一人の叔父 Abū Lahab は当初は彼の味方をしようとしていたようだった。兄の死から受けたショックと彼のいまわの願いに対する配慮は今でも心の中にありありと残っていた。ところが、まもなくメッカの人々は首尾良く

彼に敵愾心を抱かせるようになった。彼等は普段の訴えかけを利用したのである。つまりこの者は神の唯一性を信じないのは罪であり、来世になって罰せられるであろうと説き、彼の教えは、今まで彼等が祖先から学んできたことと全く矛盾するなどと主張したのである。Abū Lahabは今まで以上に聖預言者に逆らうことにした。ムスリムとメッカの人々の関係は緊迫した。3年に渡る排斥運動と封鎖は両者の溝を広げる結果となった。会合や説教は不可能と思われた。聖預言者は虐待や迫害に関しては意に介さなかった。人々に会い説教ができる限り、虐待や迫害などは何でもなかった。だが今や聖預言者が、メッカで会合や説話をする機会がなくなってしまったのである。一般的な反感は別にしても、人々は彼にごみを投げつけ、家へ追い返してしまうであろう。ある日、彼は頭をごみだらけにして、家へ帰ってきた。娘は泣きながらごみを払った。彼は、神はいつでもそばにいてくださるのだから、と語り、娘に泣かないように言った。虐待で彼が動揺することはなかった。虐待は、彼の伝える言葉に関心がある証拠だとして、むしろ歓迎していた。また別のときには、メッカの人々は、全員で策謀して、彼に一言も口をきかなければ、彼を虐待すらもしなかった。聖預言者は落胆して家に引きこもってしまった。そして神の励ましの声があるまで、彼は二度と人々の集まる場所へ出ていこうとはしなかった。

聖預言者、Tā'if へ行く

今では、メッカで彼の言葉に耳を傾ける者は誰もいなくなり、彼の心に悲しみが広がった。彼は行き詰まりを感じていた。そのため、目先を変えて、他の地で神の啓示を説くことにした。彼が選んだ場所は、メッカの南西 60 マイルの地点にある Tā'if で、果物やその他豊作物で知られた小さな町であった。聖預言者の決心は今までの預言者たちがすべて辿ってきた道であった。モーゼは、今日はパロへ、今度はイスラエルへ、

そして今度はミデアンへと出向いていった。イエスもまた、今日はガラヤへ今度はヨルダンを超えてはるか遠くの地へ、そして今度はエルサレムへと出向いた。だから、聖預言者もメッカの人々が残虐行為はするが、耳は傾けないのを知って、Tā'if へ向ったのだ。多神教の信仰と礼拝という点では、Tā'if もメッカに劣らなかった。カーバ神殿にある数々の偶像が、アラビアにおけるすべての偶像という訳でも、それらだけが、大切な偶像だというわけでもなかった。一つの大切な偶像である Al-Lat は Tā'if にあった。そのために、Tā'if も巡礼の中心地となっていた。Tā'if の住人たちはメッカの住人たちと血縁関係にあった。そして Tā'if とメッカの間にある多くの緑地は、メッカ人が所有していた。Tā'if に到着するとすぐに、聖預言者はその地の長達の訪問を受けたが、やはり誰も神の啓示を受け入れたがらない様子であった。一般庶民は指導者に服従しており、軽蔑をこめて、聖預言者の教えをはねつけた。これは珍しいことではなかった。世俗的な事柄にどっぷりとつかっている人々は必ず、このような神の言葉を何か干渉や、時には罪とみなしたりする。この神の言葉には数字とか武器のように目に見える証拠がないために、軽蔑をこめてはねつけてもいいのだと思っている。聖預言者に関しても例外ではなかった。彼についての報告は既に Tā'if に届いていたし、ここでは聖預言者には武器もなければ、従者たちもいなかった。彼が連れてきたのは Zaid たった一人であった。街の人々は彼のことを厄介者と考え、取り除かなければならないと思った。彼等は長達を喜ばせればよかったのである。彼等は町の浮浪者や浮浪児をそそのかして彼に石をぶつけ、町から追い出させた。Zaid は傷つき、聖預言者も激しく出血した。それでも追跡は止まず、それはこの無防備な二人が Tā'if から数マイル離れるまで続いた。聖預言者がひどく気落ちし、嘆き悲しんでいるときに、彼の頭上に神の御使が現われ、迫害者が滅ぼされることを望むかどうか彼に尋ねた。「いいえ」と聖預言者は答えた。「これらの迫害者の中

から、唯一の真の神を崇拝する者が生まれることを望んでいるのです」(Bukhari、Kitab Bad'ul-Kihalq)。

疲れ、気落ちした聖預言者は二人のメッカ人が所有するぶどう畑に立ち寄った。偶然にその二人の所有者がそこに居合わせた。彼等はメッカでの迫害者の中に加わっていたが、この時ばかりは彼に哀れみを感じた。あるメッカ人が Tā'if の人々に虐待されたことがあったからか、それとも人間のやさしさは突然心の中で輝きはじめるものだからであろうか。彼等はキリスト教徒の奴隷にぶどうをもった盆を持たせ、聖預言者のところへ遣わした。その奴隷は名を Addas と言い、ニネベ出身であった。Addas はその盆を聖預言者と伴の者に差し出した。彼は二人を物言いたげに見つめていたが、聖預言者が「光の神、慈悲の神であるアッラーの名によって」と言うのを聞いて、更に好奇心が湧いてきた。彼にキリスト教の教養がよみがえってきて、彼はヘブルの預言者の前にいるような気がしてきた。聖預言者が彼に出身地を尋ねると、ニネベという答えが返ってきた。それを聞いて「アミタイの息子ヨナもニネベの出身だ。彼は聖なる人間で、私のように預言者であった」と聖預言者は述べた。彼は Addas に、彼自身が聞いた神の預言者についても語った。Addas は心惹かれ、その場で信じた。彼は目に涙を一杯に浮かべて聖預言者を抱き、彼の頭、手、足にキスをし始めた。彼と別れてから、聖預言者は再びアッラーに向って語りかけた。

アッラーよ、私の悲しみを訴えることをお許してください。私は弱く、何のすべももちません。人々は私を蔑みます。あなたは、弱き者貧しき者の主、そして私の主でいらっしゃる。私を見捨てて、あなたは一体誰に私の身柄をお引渡しになるのでしょうか。私をいじめる見知らぬ者達にでしょうか。それとも私自身の町で私を迫害する敵にでしょうか。もしあなたが私に怒りを感じていらっしゃるのならば、私も敵のことは気にかけますまい。あなたの慈悲がありますように。あなたのお顔の光の中に救いを求めます。この世界から暗闇を追い払い、今世も来世

もいつでも平和を与えてくださるのはあなたしかいません。怒りや腹立ちを私に向けないでください。すぐ後に喜びを表される時以外はあなたは怒りを示されないはずです。そしてあなたの保護なしには何の力も何の慰め也没有 (Ibn Hishām & Tabari)。

この祈りを済ませてから、彼はメッカへ戻っていった。途中 Nakhlah に2,3 日立ち寄り、またそこから出発した。メッカの慣習によれば、彼はもうメッカの市民ではなかった。メッカが彼に対して敵意を抱いているのを感じ、メッカの人々の許しがなければ、そこへは戻れないので、メッカを去っていたのであった。そのため、彼はメッカの長である Mut'im bin Adi の許へ手紙を送り、メッカの人々が彼の帰郷を許してくれるかどうか尋ねた。Mut'im は他の人と負けず劣らずの残虐な敵であったが、高潔な人でもあった。彼は息子たちと親族とを呼び集めた。彼等は武装してカーバ神殿へ出かけていった。中庭に立ち、彼は聖預言者が戻ってくるのを許そうと思っていると告げた。それから聖預言者は戻ってきて、カーバ神殿を一巡した。その後、Mut'im と彼の息子たちや親族たちが抜き身の刀を下げたまま、聖預言者を彼の自宅へと案内した。聖預言者に与えられたのは、普通のアラビア社会でいう保護ではなかった。聖預言者の苦しみは続き、Mut'im は彼を守ろうとはしなかった。Mut'im の行動は公式に聖預言者が戻ることを許可する宣言となっただけである。

聖預言者の Tā'if への旅は、イスラムの敵からも賞賛を招かずにはおかなかった。William Muir 卿は彼の著作による聖預言者の伝記の中で、(Tā'if への旅について) 次のように書いている。

聖預言者の At-Tā'if への旅には何か崇高で、英雄を感じさせるものがある。たった一人の男が、自分自身の国の人々から軽蔑され、拒絶されて、ヨナがニネベに出かけたように、神の御名の下に大胆に Tā'if へ行き、偶像崇拜の町中に自責の念を喚起させ、彼の使命を支持させてしまった。彼の呼びかけの基には神の力があると信じる彼の信仰の深さに強い光が

流れ出している（W.Muir 卿著：聖預言者の生涯、1923 年版、PP.112-113）。

メッカは以前通りに敵意の町に戻ってしまった。聖預言者の故郷はまたしても彼にとって地獄と化した。それでも彼はひたすら、彼が受けた神の言葉を人々に語り続けた。「神は唯一なり」という言葉があちこちで聞かれるようになった。愛と敬意を込めて、そして仲間意識を持って聖預言者は粘り強く、神の啓示を人々に示し続けた。たとえ人々がそっぽを向いても、何度も何度も彼等に訴えた。人々が注意を払う払わないにかかわらず、彼は啓示を表した。そしてついにその粘りが効を奏し始めたようであった。アビシニアから戻ってきてメッカに留まる決意をしたわずかのムスリムたちが、こっそりと友人や隣人、そして親族たちに説教をしたのだ。説教を聞いた人々の中には、公然と信仰を誓い、他のムスリムたちと苦しみを分け合うように説得された者もいた。しかし、多くの者は、心の中では説得に応じていたものの、公然と宣言する勇気がなかった。彼等は神の王国が地上にきたるべき時を待っていた。

そうこうするうちに、聖預言者は受けた啓示がメッカから他の地へ移住する可能性が強くなっていることをにおわせ始めた。彼等の移住先に関しての考えも聖預言者に浮かんできた。井戸とナツメヤシの森がある町であった。彼は Yamamah の町を考えていたのだ。だが、間もなくその考えは消えた。その後、彼は彼が行く運命になっている場所は、どこであろうとも、イスラム発祥の地となるだろうという確信の下に、その日が来るのを待った。

イスラム、メディナへ広まる

毎年恒例の巡礼（Hajj）の日が近づき、アラビア中の各地から巡礼団がメッカに到着し始めた。聖預言者は人々が集まっているところならばどこへでも出かけて行き、唯一神の思想を詳しく説き、人々にあらゆ

る不行跡をやめ、神の王国に備えるよう話した。耳を傾け、興味を示す者もいた。聞きたかったが、メッカの人々に追い散らされてしまった者もいた。聖預言者が Mina の谷にいた時、彼は 6,7 人の人々に出会った。彼等はユダヤと同盟を結んでいる Khazraj 族であることがわかった。彼は自分の話を聞いてくれるかどうか彼等に尋ねた。彼等は話を聞いて、興味を示した。そして同意したのだ。神の王国はもうすぐそこまで来ており、偶像は消え去り、唯一神の思想は勝利を得ることになり、信心深さと純潔が再びこの世を支配するようになるという内容を聖預言者は十分に時間をかけて、彼等に語った。その人々は深い感銘を受けた。彼等は神の言葉を受け入れ、メディナへ戻り次第、他の人々と協議して、メディナがメッカからのムスリムの難民を喜んで受け入れるかどうか翌年報告すると約束をしてくれた。彼等は戻り、友人や親族と協議をした。その頃、メディナには二つのアラブ部族と三つのユダヤ部族がいた。アラブ系は Aus 族と Khazraj 族でユダヤ系は Banū Quraiza 族と Banu Nadhir 族と Banu Qainuqa 族であった。Aus 族と Khazraj 族は交戦状態にあった。Quraizah 族と Nadhir 族は Aus 族と同盟を結んでおり、Qainuqa 族は Khazraj 族と同盟を結んでいた。彼等は果てしない戦闘に疲れ果て、平和を求めている。そしてついに彼等は Khazraj 族の長である、Abdullah bin Ubeyy bin Salul をメディナの王として認めることに合意した。Aus 族も Khazraj 族もバイブルの預言についてユダヤ民族から聞いたことがあった。彼等はイスラエルの失われた栄光や「モーゼのような」預言者の出現についてのユダヤの伝説を聞いていた。この預言者が現れるべき日はもうそこまで来ているとユダヤ人たちはよく言っていた。その出現は、イスラエルの努力の復興と彼等の敵の滅亡を意味していた。メディナの人々は聖預言者の噂を耳にすると、心を動かされ、このメッカの預言者がユダヤ人の言う預言者ではないのかと尋ねた。若者たちの多くは直ちに信じた。次の巡礼の時にメディナから 12 人の巡

礼者がメッカにやって来て、聖預言者に会った。この12人のうち、10人がKhazraj族で残りの二人がAus族であった。彼等はMinaの地で聖預言者に会い、聖預言者の手を握り、唯一神の信仰と、あらゆる一般的な邪心、幼児殺害、そして偽りに基づいてお互いに非難することを抑制する決意とを速やかに誓った。彼等はまた、善行すべてにおいて聖預言者に見習うことを決意した。彼等はメディナに帰ると、この新しい信仰について他の人々に語り始めた。熱意はいや増した。偶像是壁がんなら取り払われ、通りに投げ捨てられた。以前は像の前で頭を下げていた人々も、頭を高く上げたままになっているようになった。彼等は唯一の神以外の物には頭を下げないことに決めたのである。ユダヤ人は戸惑った。何世紀にも渡る友情や詳しい説明、そして議論をしても起こせなかった変革をこのメッカの伝道者は2,3日の内に起こしてしまったのである。メディナの人々は数人のムスリムたちの中に入って行き、イスラムについて色々質問をした。ところが、このムスリムたちは余りに数の多い質問に対処しきれず、また、彼等自身にも十分な知識がなかった。それで彼等は聖預言者に、誰か一人イスラムについて教えてくれる人をメディナに送って欲しいと依頼をした。聖預言者は同意して、アビシニアへ行っていたムスリムたちの一人であるMus'abを遣わした。Mus'abはメッカを出て、他へ教えに行く、イスラムの最初の宣教師であった。このころ、聖預言者ムハムドは神の偉大なる契約を得た。彼がエルサレムにいて、彼の後に預言者たちが従い、集団礼拝に参加している幻影を見たのである。エルサレムはメディナに他ならず、そこは唯一の神の崇拜中心地となろうとしていた。イスラムの預言者の後に従うほかの預言者たちに暗示されているのは、さまざまな預言者に従う人々がイスラムに加わり、イスラムがこうして普遍的宗教となるだろうということであった。

メッカでの状況は深刻極まりない状態になっていた。迫害はこれ以上考えられないほどひどい様相を呈していた。メッカの人々はこの幻影をあざ笑い、希望的観測だと言っていた。彼等には新しいエルサレムの基

盤が既に築かれているのがわからなかったのである。東西を問わず、国々がわくわくして待っていたのである。最後の偉大なる神の言葉が聞きたかったのだ。一方ちょうどその頃、神聖ローマ帝国とイランのホスロエス人は互いに戦争状態に突入していた。ホスロエスが勝利を治め、シリアとパレスチナはイラン軍に侵略された。エルサレムも崩壊した。エジプトと小アジアは征服された。コンスタンチノーブルからほんの 10 マイルしか離れていない、ボスポラス海峡の入り口辺りにイラン軍の將軍たちはテントを張ることができた。メッカの人々はイラン側の勝利を喜び、神の審判が下ったのだと言った。つまり、イランの偶像崇拜者たちが啓示書崇拜者たちを打ち負かしたと考えたのである。その頃、聖預言者は次のような啓示を受けていた。

ローマ人は打ち負かされたり、近接する地に於て。而して彼等は、その打ち負かされたる後、必ず勝利せん、数年の中には。以前も以後も命令はアッラーに属す。さればその日、信者たちは喜ばん、アッラーの助けによって。彼は己の欲する者を助け給う。而して彼は偉力にして、慈悲深くまします。(こは)アッラーの約束なり。アッラーは己が約束を違^{しか}わらず。然るに、世人の多くは知らずなり (30:3-7)。

預言は、数年後に成就された。ローマ人はイラン人を打ち破り、彼等のために以前失った領土を取り返した。「その日が来たら、信心深い者たちは、アッラーの助けで勝てたと大喜びをするであろう」という預言の箇所も成就された。イスラムの力が増大し始めた。メッカの人々は人々にムスリムの言うことには耳を傾けず、代わりに激しい敵意を見せるよう説得していたので、イスラムは崩壊したと信じていた。ちょうどその頃、聖預言者は受けた啓示の中で、ムスリムの大勝利とメッカの人々の滅亡の知らせを知った。聖預言者は次のようなことを人々に知らせた。

而して彼等は云えり、「何故彼はその主から神兆^{しるし}を我等にもたらさざるか？」と。彼等に、以前の諸經典の中にある明証が来た

れるに非ざるか？もしわれらが、それ以前に天罰によって彼等を滅ぼしたれば、彼等は必ず云わん、「我等の主よ、何故汝は我等に使徒を遣わさざりしか？さすれば、我等は、卑しめられ、辱しめられる前に汝の神兆^{しるし}に従いたりしものを」云え、「各人は待つなり。されば、汝等も待て。お前たちは必ず知るべし、誰が正道に在る者か、また誰が導かれたる者かを」(20:134-136)。

メッカの人々は証^{しるし}がないと不平を言っていた。イスラムに関する預言も、以前の聖典に記されている預言者も十分に成就していると彼等は教えられた。もしメッカの人々がイスラムの神の言葉について詳しい説明を受ける前に滅ぼされていたら、証について考える機会が足りなかったと不平を言っただろう。

だからメッカの人々も待たなければならないのだ。

毎日、信心深い者には勝利を、そして不信者には敗北を約束する啓示があった。メッカの人々は自分たちの権力と繁栄を見、ムスリムの無力と貧困を見つつも、聖預言者が受ける啓示の中で、神の助けとムスリムの勝利が約束されているという噂を耳にして、ますます頭が混乱した。自分達がどうかしているのか、それとも聖預言者が狂っているのか。迫害に負けて、ムスリム達が自分達に信仰を捨てメッカに戻ってくることと、聖預言者自身がその敬虔な信徒たちとともに、自分自身の信仰に疑問を持つようになることをメッカの人々は望んでいた。しかし彼等の望みに反して、次のような自信あふれる宣言を彼等は聞かされることになったのである。

「されば用心せよ、われはお前たちが見得るものすべてにかけて誓う、そしてお前たちが見得ざるものにもまた然り。げに、そは高貴なる使徒の言葉なり。而して、そは詩人の言葉に非ず。お前たちが信ずるは僅かなり。また、占い師の言葉にも非ず。お前たちが忠告に従うことは僅かなり。森羅万象の主より降されたる^{もの}啓示なり。さらば彼、もしわれらに関して幾つかの言葉^{はなし}を捏造せ

しなば、われらは必ず彼を右手で捕えし筈、然る後我等は彼の
頸動脈を切断したる筈なり。されば、お前たちの中誰一人も（わ
れらを）それより妨げること能わざりき。而して、そは実に畏敬
者たちへの訓戒なり。されどわれらは確かに知るなり、お前たち
のうち虚偽とみなす者あることを。そはまた不信者どもにとりて、
確かに遺憾なり。げにこれこそ真の確信なり。されば、汝の至尊
者たる主の御名を讃え奉れ」(69:39-53)。

メッカの人々は、彼等の独り善がりな望みはことごとく打ち碎かれる
であろうという警告を受けた。聖預言者ムハンマドは詩人でも占い師で
も預言者の名をかたる詐称者でもなかった。聖クルアーンは敬虔な信者
の読み物であった。確かに聖クルアーンの内容を否定する者もいた。け
れども、聖クルアーンの教えと真理にねたみを感じながらも心ひそかに
崇拜している者もあった。聖クルアーンの中に出て来る約束や預言はこ
とごとく成就するであろう。聖預言者はすべての敵意を無視し、全能の
神をたたえ続けるように命じられたのであった。

三度目の巡礼の日が来た。メディナからの巡礼団の中にはムスリムが
大勢含まれていた。メッカの人々の敵意のために、このメディナからの
ムスリム達は彼等だけで聖預言者に会見することを望んだ。聖預言者の
心は移住の候補地として、ますますメディナの方へ傾いていた。彼はま
ず身近な親族にだけこの考えを伝えたが、彼等は何とかこの意志を翻さ
せようとした。彼等の主張は、メッカには確かに激しい敵意があるが、
有力な親族からの支援が得られるというものであった。メディナでの見
通しは全く心許ないものであり、もしメディナがメッカ同様に敵意あふ
れる場所であったならば、聖預言者のメッカにいる親族達が助けの手を
差し伸べることができるであろうか。しかし、聖預言者はメディナへの
移住は神の意志であると確信していた。そして親族の忠告を退け、メディ
ナへの移住を決意したのであった。

最初の Aqabah の誓い

真夜中すぎに、聖預言者は再びメディナから来ているムスリム達と Aqabah の谷で会った。彼の叔父 Abbās が彼について行った。メディナから来ているムスリムの総数は 73 人、そのうち 6 二人が Khazraj 族で十一人が Aus 族であった。この一行の中には二人の女性がいた。そのうちの一人が Banu Najjar 族の Umm Ammārah であった。彼等は Mus'ab からイスラムの教えを受け、心から信仰するようになり、決意を固めたのであった。彼等の誰もがイスラムの柱石となっているのがわかった。Umm Ammārah もその良い例であった。彼女は自分の子供達にイスラムに対する永遠の忠誠を教え込んだのだ。彼女の息子の一人である。Habīb は聖預言者の死後、偶然のめぐり合わせで、預言者の名をかたる詐称者 Musailima に捕虜として捕らえられてしまった。

Musailima は Habīb の信仰心をぐらつかせようと試みた。「おまえは聖預言者が神の使徒であると信じるか」と彼が尋ねると、「はい」という肯定の返事が帰って来た。「私を神の使徒であると信じるか」と尋ねてみると、「いや信じない」と Habīb は答えた。詐称者 Musailima はこの答えに怒って、Habīb の手足を一本切り落とすよう命じた。この刑が済むと、「聖預言者を神の使徒であると信じるか」と、もう一度同じ質問をした。Habīb は「はい」と答えた。「私を神の使徒であると信じるか」という問いに対しては、今度も答えはやはり「いいえ」であった。詐称者 Musailima は Habīb の体からもう一本手か足を切り落とすように命じた。このように一本一本手足を切り落とされて、Habīb の体はばらばらにされてしまった。彼の死は無残なものであったが、宗教的信念にかけての犠牲をも、いとわなかった個人的英雄行為の手本として、人々の心のなかにいつまでも残った (Halbiyyah、Vol.2.p.17)。

Umm Ammārah は聖預言者と一緒に数度の戦いを経験した。要する

に、メディナから来ているこのムスリムの一行は、彼等の忠誠と信仰の故に高い名声を勝ち得た。彼等がメッカに来たのは富を得るためではなく、信仰のためであった。そして信仰上の名声を多分に得たのである。

家族の絆に心を動かされ、また法的にも聖預言者の安全を守る責任を感じて Abbās はこの一行に次のように語った。

「おお、Khazraj の皆さんよ！この私の甥はここでは人々からの尊敬を受けております。皆さん方はムスリムではありませんが、彼を守ってくれています。そして今彼は私たちを捨てて、あなたがたのところへ行こうとしているのです。おお、Khazraj の皆さんよ！もしそうなったら、どういうことになると思いますか。アラビア中全部が皆さんの敵にまわってしまうのですよ。もし彼を招き入れることによって生じる危険を承知の上ならば、どうぞ彼をおつれなさい。でももしそれに気がついていないのならば、あなたがたの計画は諦めて、彼をここに残していきなさい。」

この一行の指導者である Al-Barā ははっきりと答えた。

「あなたのおっしゃることはよくわかりました。ですが私たちの決意は固いのです。わたしたちの命は神の使徒にお預けしてあります。私たちはもう決心を致しました。後はただ聖預言者の決断を待つのみです (Halbiyyah, vol.2, p.18)。」

聖預言者は更にイスラムの解説をし、その教えを伝えた。この説明をしながら、もし彼等一行が彼等の妻や子供に対すると同様の愛を込めてイスラムを信じるのならば、自分はメディナへ行くつもりであると、彼等に語った。彼がまだすべてを語り終えないうちに、73 人の敬虔な信徒達は、「はい、信じております」と声をそろえて叫んだ。彼等は有頂天のあまり、自分たちの声が誰かに聞かれるかもしれないことを忘れていた。Abbās は彼等に声を落として話すように注意した。だが彼等の心は深い信仰心で一杯であった。もう彼等にとって死などは何でもないこ

とであった。Abbās が一行に注意を与えると、その内の一人が大きな声で言った。「神から遣わされた預言者様よ、私たちはもう何も恐れません。私たちは直ちにメッカの人々とぶつかり、彼等があなたに与えた不当な行為に対して復讐をしてやろうと思います。どうかそれを私たちにお許してください」。だが、聖預言者はまだ戦えという神の指令を受けていないからと言って、彼等を制した。

それで一行は忠誠の誓いを交わし、解散した。

メッカの人々はこの集まりのことは知らなかった。彼等はメディナの野営地へ行き、メディナからメッカへやってきたムスリム達についての不満をメディナの長達に並べ立てた。メディナの長達の中で、一番力のある Abdullah bin Ubbay bin Salul は事の成り行きについて何も知らなかった。彼はメッカの人々に彼等が聞いた噂は何かの間違いであろうと言った。メディナの人々は彼を指導者として仰いでおり、彼の知識と許可なしには何もすることができなかった。彼はメディナの人々が今まで悪の支配を捨て、神の支配を受け入れたことを知らなかったのである。

ヒジュラ：メディナへの大移動

一行はメディナへ戻り、聖預言者とその使徒たちは移住の準備を開始した。一家族、そして、また一家族と次々に姿を消して行った。ムスリム達は神の王国が近づいていると確信し、勇気一杯であった。時には一夜のうちに一本の道筋に済む人々の家が空になることもあった。朝になってメッカの人々が各戸口に錠がかかっており、その住人達がメディナへ移住してしまっているのを発見することもよくあった。イスラムの勢力が余りに大きくなっているのを知って、彼等は哑然とするばかりであった。

ついに、数人の改宗した奴隷達、聖預言者自身、Abū Bakr そして Ali を除くと、ムスリムは一人もメッカにはいなくなってしまった。メッ

カの人々は彼等にとってのいいカモが逃げようとしているのに気付いた。長達は再び集会を開き、今こそ聖預言者を殺すときだと決議した。恐らく神のおぼし召しであろう。彼等が聖預言者を殺そうと指定した日は、彼がメッカを後にすると決めていたまさにその日であった。メッカ人の一団が聖預言者を殺そうと彼の家の前に集まっていた頃、当の本人は夜陰に乗じて抜け出そうとしていた。メッカ人の一団は、聖預言者に彼等の悪巧みを感じかれるのを恐れていたのだろう。彼等は細かい注意を払ってことを進めていたので、聖預言者がそばを通りすぎる時にも、彼を別の人間だと思い、見咎められるのを避けて退いてしまった。聖預言者の親友、Abū Bakr はその前日に聖預言者の計画を知らされていた。彼は予定通りに聖預言者と落ち合い、二人ともメッカを出て、メッカから 3.4 マイル離れた丘の上にある Thaur と呼ばれる洞穴に仮の宿を取った。メッカの人々は聖預言者の逃亡を知ると、人を集めて追っ手をかけた。追跡者の先導に従って人々は Thaur に辿り着いた。聖預言者と Abū Bakr が潜んでいる洞穴の入り口に立ち、追跡者は聖預言者はこの穴の中にいるはずであり、そうでなければ天へ昇ってしまったはずだといった。この声を聞いて Abū Bakr は心が沈んだ。「敵に捕まるのも時間の問題です」と彼はささやいた。「恐れてはいけない。神は私たちと共にいてくださるのだから」と聖預言者は答えた。「私自身はどうなっても構いません。でも、あなたのことが心配なのです」と Abū Bakr は続けた。「だって、もし私が死んだとしても、それはごく普通の死でしかないからです。でも、もしあなたが死ぬようなことがあれば、それは信仰と精神の死を意味するのです」(Zurqāni)。すると聖預言者はこう断言した。「たとえそうであっても恐れてはいけない。この洞穴にいるのは私たち二人だけではない。神と一緒にいらっしゃるのです」(Bukhari)。

メッカの暴虐も終りを告げ、逆にイスラムの方は発展する機会を得る

運命にあった。追っ手の一団はだまされたのだ。彼等は追跡者の判断をばかにした。この洞穴は仮の宿を取ろうと思う者なら、誰でも入ろうと考えるような所であるし、蛇や蝮がいるため、一端入ったら無事には出てこれないと彼等は言った。もし彼等がほんの少しでも身をかがめて中を覗いたら、二人の姿を見つけることができたであろう。でも、それすらモーゼず、追跡者を解雇して彼等はメッカへ戻っていったのであった。

聖預言者と Abū Bakr が洞穴に潜んだまま二日が過ぎた。三日目の夜、計画通り、足の早い二頭のらくだが、洞穴へ連れて来られた。一頭は聖預言者のため、もう一頭は Abū Bakr とその召使 Āmir bin Fuhairah のためであった。

聖預言者を追跡する Surāqa

出発する前に聖預言者はメッカを振り返った。万感の思いが胸に迫った。メッカは彼が生まれた土地である。彼はここで育ち、ここで神の声を聞いたのであった。イシュマエルの時代からずっと、彼の祖先が暮らし、栄えたところであった。このような思いを胸に、メッカの地の見納めをし、メッカに向って語りかけた。「メッカよ、私は世界中のどの地よりもおまえを愛している。だがおまえの地に住む人々は私がここに住むことを許してくれないのだ」。これを聞いて、「この地はその預言者を追い出してしまった。後は滅亡しかない」と Abū Bakr は言った。メッカの人々は、二人の追跡に失敗したので、この二人の逃亡者の首に賞金を懸けた。聖預言者或いは Abū Bakr を生死にかかわらず捕らえ、メッカに連れ帰った者には 100 頭のらくだを与えるというものであった。この告示はメッカ周辺の部族に伝えられた。Bedouin の長、Surāqa bin Malik は賞金に釣られて、二人の探索を開始し、最後にはメディナへの街道に目を光らせて、彼等の姿を求めた。彼は人を乗せた二頭のらくだ

を見つけ、聖預言者と Abū Bakr に違いないと確信し、馬に拍車をかけた。あまり行かないうちに、馬は後ろ足で棒立ちになって、それから倒れ、彼も馬と共に地面に放り出された。このときの出来事についての彼自身の説明が面白い。彼はこのように言っている。

落馬した後、私はアラブ人がよくやる迷信的方法で矢を射て、自分の運勢を占ってみた。結果は凶であった。だが賞金の魅力は大きかった。もう一度馬に乗って追跡を開始し、もう少しで一行に追いつくところまで行った。預言者の姿は威厳にあふれており、後を振り向こうともしなかった。一方 Abū Bakr は何度も何度も後を振り返っていた。(明らかに聖預言者に身の危険が降りかかるのを恐れているのだった)。私が彼等に近づくと、またもや馬は後足で棒立ちになり、私は振り落とされてしまった。もう一度矢で占ってみると、やはり結果は凶であった。馬の蹄は深く砂にめり込んでいた。もう一度乗って追跡するのはとても無理だと思われた。それでやっとこの一行は神のご加護を受けているのだとわかった。私は彼等に大声で呼びかけ、止まってくれるようお願いした。ずっと近づいてから、彼等に私の間違っただけと改心のことを話した。そして追跡は諦め、引き返すことにしたと言った。聖預言者は私を許してくれたが、彼等の居場所を誰にも話さないよう私に約束させた。確かにこの預言者は本物であり、必ず成功するはずである。彼が絶対的地位についたら、私の安全を保障してくれるよう保証書を書いてくれと私は聖預言者に頼んだ。すると実際に、彼は Amir Bin Fuhaira に私の保証書を書いてくれた。それを受けとって立ち去ろうとしたときに、聖預言者は将来についての啓示を受け、言われた。「Surāqa、おまえの手首に Chosroes の金の腕輪をはめてみたくないか？」この聖預言者の言葉に驚いて、「どの Chosroes のことですか。イランの皇帝である Chosroes Bin Hormizd のことですか」と私は尋ねた。預言者は「そうだ」と答えられた (Usud Al-Ghāba)。

16,17 年の年月が流れ預言は文字通り成就された。Surāqa はイスラム

を受け入れ、メディナへ行った。聖預言者は亡くなられた、その後最初に Abū Bakr が、そして次に Umar がイスラムのカリフになった。イスラムの力はますます栄え、そのためにイラン人の嫉妬をあおり、彼等のムスリム攻撃を招くことになった。ところが結果はイスラム征服ではなく、彼等自身がイスラムに征服されてしまった。イランの首都はムスリムの手に落ち、ムスリムはその財宝を没収した。その中に Chosroes が国家的儀式の際に身につけていた金の腕輪があった。Surāqa の方は、改宗後、聖預言者とその一行を追跡したときの話しをし、聖預言者と彼の間に起こった出来事をよく語っていた。イランからの戦利品を目の前に並べたとき、Umar はその中に金の腕輪を見つけ、聖預言者が Surāqa に言われた言葉を思い出した。それはどうしようもなく無力であった時代に予告された大切な預言であった。Umar は目に見える預言成就を行なおうと決心した。それで彼は Surāqa を呼びにやり、彼に金の腕輪を身につけるように命じた。Surāqa は人が金を身につけるのはイスラムの掟で禁じられていると断言した。Umar はその通りであるが、この場合は例外であると言った。聖預言者は Chosroes の腕輪が Surāqa の手首にはめられるのを予知されていたのだ。だから Surāqa はたとえ罰の苦しみを受けることになっても、今その腕輪を身につけなければならなかったのである。彼は聖預言者の教えに絶対服従を誓っていたため嫌がっていたが、一方で偉大なる預言が成就する目に見える証拠を示したいという熱意も他の誰にも優るとも劣らなかった。彼は腕輪をはめ、ムスリムたちは預言が成就するのをみた。(Usud Al-Ghāba)。逃亡者であった聖預言者は王となった。彼自身はもうこの世にいなかったが、彼の後を継いだ者たちが彼の言葉、そして幻想が確かに成就していくのを見届けたのである。

聖預言者、メディナ到着

ヒジュラの話しに戻ろう。Surāqa を去らせた後、聖預言者は何の危害を受けることもなく、メディナへの旅を続けた。彼がメディナへ着いた時、人々が、今か今かと彼の到着を待ちうけていたのがひしひしと感じられた。彼等にとってこれほど縁起のよい日はかつてなかった。いつもメッカに昇っていた太陽が、ついにメディナに輝くようになったからである。

聖預言者がメディナを発ったという知らせが届いて以来、彼等は彼の到着を心待ちにしていたのだ。メディナの人々は彼の姿を求めて、メディナから何マイルも離れたところまで出かけていった。朝出かけて、夕方、がっかりして帰ったりしていたのだ。聖預言者はようやくメディナに到着すると、しばらく近くの村、Qubā にとどまることにした。一人のユダヤ人は2頭のらくだをみつけて、聖預言者とその伴の者達だと思った。彼は高台へ登り叫んだ。「Qailah の息子達よ、あなた達の待ちうけた人がおいでになったぞ」。この叫びを聞いたメディナの人々は誰もが我先に Qubā へ駆けつけ、一方 Qubā の人々は自分達の中に聖預言者を迎えて大喜びをし、彼を称える歌を歌った。

聖預言者の比類なき誠実さは、このとき Qubā で起こった出来事からよくわかる。ほとんどのメディナの人々はまだこの預言者に会ったことがなかった。この一行が木の下で休んでいるのを見て、Abū Bakr を聖預言者と間違えた者が多かった。Abū Bakrの方が年は若かったが、彼のひげの方が白く、身なりも聖預言者より良かったからである。それで彼等は聖預言者ムハンマドに対して敬意を表してから Abū Bakrの方を向き、彼の前にひざまづいた。聖預言者と間違えられていると気付いた Abū Bakr は立ちあがり、自分のマントを取って日にかざし、「神の使徒よ、あなた様は日の当たる中におわします。こうしてあなた様に日陰

を作って差し上げましょう」と言った (Bukhari)。礼儀を保ちつつ機転をきかせ、彼はメディナの人々に彼等の間違いを正したのであった。聖預言者ムハンマドは10日間 Qubā に滞在し、その後、メディナの人々に導かれ、メディナの町へ入った。彼が町へ入ると、メディナ中の人々が、男も女も子供達まで、彼を迎えに出てきた。彼等が歌う歌の中に次のようなものがあつた。

14日目の月が、Al-Widā (メディナにあつた丘) の向こうから我等の頭上に昇った。我等を神に導いてくださる方がわれらの中にいる限り、神に感謝の意を捧げるのが我等の義務である。我等のために神から遣わされたあなたに、心からの服従を誓います (Halbiyyah)。

聖預言者は東側からメディナへ入るようなことはしなかった。メディナの人々が彼を「14日目の月」と称したのは、彼が人々に光をなげかけてくれるようになるまでは、彼等は暗黒の世界に暮らしていたからである。聖預言者がメディナへ入ったのは月曜日であつた。彼が Thaur の洞穴を出たのも月曜日なら、不思議なことに彼が10年後メッカを取り戻したのも月曜日であつた。

聖預言者をもてなす Abū Ayyūb Ansārī

聖預言者がメディナに滞在する間、誰もが聖預言者に宿を提供する榮譽を望んだ。彼の乗ったらくだが通りを通過すると、各家族が彼を迎え入れようと道に並んだ。声をそろえて彼等は言ったものであつた。「私どもには家も富もございます。そして命をかけてあなた様をお迎えし、お守り致したいとこうしてここに参りました。どうぞ私どもの所へ来て、私どもと暮らしてください」。必死に前へ進み出て、らくだの手綱を掴み、聖預言者が彼等の家の前でらくだを降り、家の中へ入ってくれるよう主張する者も多かつた。だが聖預言者は「どうぞ私のらくだにはお構いくださいな。これは神の意のままに動きます。神が止まれと命じられたと

ころで、止まるでしょう」と言って、丁寧に断った。そしてようやくくらは、Banu Najjar 族の孤児達が住んでいる所で止まった。聖預言者はらくだを降り、「ここが、神が私たちに留まるよう望んでおられる所ようだ」と言った。彼は中へ入って行った。孤児の世話人が進み出て、聖預言者が使える地所を提供した。聖預言者は借地料を受け取ってもらえないならば、この申し出を受ける訳にはいかない、と答えた。金額が決められ、彼はその場所にモスクと家を数軒建てることにした。これがすむと、彼はこの土地に一番近いところに住んでいる者は誰かを尋ねた。Abū Ayyūb Ansārī が進み出て、自分の家が最も近く、聖預言者が望むときには何でもお役に立ちたいと告げた。聖預言者は彼の家に一部屋を自分用に用意して欲しいと依頼した。Abū Ayyūb の家は二階建てであった。彼は2階を提供しようとしたが、聖預言者は訪問者の便宜を計って、一階を望んだ。

聖預言者に対するメディナの人々の献身は、この話からもおのずと明らかである。Abū Ayyūb は聖預言者が一階を使うことには同意したが、彼が暮らしている上の階で寝ることだけは拒否した。彼もその妻もそんなことをするのは失礼に当たると思ったのである。たまたま水差しが壊れ、床が水浸しになったことがあった。水が聖預言者の使っている部屋に漏れていくのを恐れた Abū Ayyūb は自分の掛布団で水を吸い取り、階下にこぼれないようにした。翌朝、彼は聖預言者の所へ行って、前の晩の出来事を話した。するとすぐに聖預言者は二階を使うことに同意をした。Abū Ayyūb は食事を用意しては二階へ運んだ。聖預言者は好きな物は何でも食べ、Abū Ayyūb は残り物は何でも食べた。2,3 日後、他の人々が、聖預言者をもてなす喜びを皆で分かち合いたいと要求してきた。聖預言者は自分自身の家に落ち着き、準備が全部整うまで、交代でメディナの人々のもてなしを受けた。ある未亡人には Anas という名の8歳か9歳位の一人息子がいた。彼女はこの子を聖預言者の所へ連れてきて、彼の個人的な用をその子にさせるように申し出た。この Anas は

イスラムの歴史に永遠に名を残すことになった。彼は教養の高い人間となり、また、金持ちにもなった。彼は100歳を越すまで生き、カリフ制度の時代でも位高く愛された。Anasは使い走りの少年として聖預言者に仕え、聖預言者が亡くなるまで、そばについていたけれども、聖預言者は一度たりとも彼に横柄な口の聞き方をしたり、説論したり、彼には無理な勤めを課したりはしなかったとAnas自身が語ったと言われている。聖預言者はメディナに滞在中、常に彼一人を伴っていた。Anasの証言は、メディナでの権力増大と繁栄の日々の中で培われた聖預言者の人格を明らかにしている。

後に聖預言者は、彼が自由にしてやったZaidをメッカへ送り、彼の家族と親族を呼び寄せた。メッカの人々は聖預言者とその信徒達が余りに突然にかつ入念に計画をたててメッカを出ていったことに呆然としていた。だから、しばらくの間は彼を苦しめるようなことは何もしなかった。聖預言者はAbū Bakrの家族がメッカを出て行くときでさえ、何の難題もふっかけなかった。二つの家族は何の危害を加えられることもなくメディナへ行き着いたのである。その間、聖預言者は最初の予定通り買った土地へモスクの基礎を築いていた。この後、彼は自分の家族と仲間の信徒たちのために家を建てた。七ヶ月後、ついにすべてが完成した。

メディナでの不安な生活

聖預言者がメディナに着いてほんの数日の内に、その地に住む異教徒達がイスラムに関心を抱き、そのほとんどが入信した。心から納得しきってはいないがとにかく入信した者も多かった。このようにして、一部の人々は内心はムスリムではない人々の集まっているイスラム教へ加わったのである。このような人たちはその後の歴史において非常に不吉な役割を果たすことになった。中には忠実なムスリムとなった人々もいる。他の者達は不忠実なまま、イスラムとムスリムに対して陰謀を企

てていた。一部の者は入信を真っ向から拒否した。それでも新しい信仰の勢力が増大するのに堪えきれず、メディナからメッカへ移住していった。メディナはムスリムの町になったのである。そこに、唯一神の信仰が確立された。その頃、はっきりそういえる第二の町というのは、この世界には存在していなかった。聖預言者とその友人達にとって、彼等が移住してきてからほんの数日しか経たないうちに、町中が偶像崇拜を捨て、目に見えない唯一なる神の信仰が確立されたということは大きな喜びであった。けれどもムスリム達にとっての本当の平和はまだ来ていなかった。メディナだけでも、アラブの一団は外面上はイスラムに入信しているが、内面では彼等は聖預言者にとって不倶戴天の敵であった。それにユダヤ教徒達がおり、彼等も聖預言者に対して常に陰謀をめぐらしていた。聖預言者はこのような危険を察知していた。彼は警戒心を怠らず、友人達や信徒たちにも常に用心をするように強く言っていた。彼は夜中起きていることもよくあった。(Bari, Vol. P. 60) 夜通しの警戒に疲れ、一度助けを求めて弱音をはいたことがあった。まもなく彼は甲冑の音を耳にした。「あれは何だ?」と彼は尋ねた。「Sa' d Bin Waqqas です、預言者さま! あなたのたれに見張りをしに来てくれたのです」(Bukhari&Muslim)。メディナの人々は非常に責任感が強かった。彼等が聖預言者を彼等の土地へ招き、彼等の中で暮らすように頼んだのであるから、今度は聖預言者を守るのが彼等の義務であった。各部族が集まって協議をし、聖預言者の家を交代で守ることに話しが決まった。

彼自身の身が危険にさらされており、彼の信徒たちにも平和が保てないという意味では、聖預言者の暮らしはメッカでもメディナでも同じことであった。唯一の違いは、メディナではムスリム達が神の名の下に自分達の手で建てたモスクで公の礼拝ができるという点であった。何の邪魔も妨害もなく、彼等は礼拝のために1日5度集まることができたのである。

2,3ヶ月が経過した。メッカの人々は当惑状態から目覚め、ムスリム

を苦しめる計略を練り始めた。彼等はまもなく、メッカの中や周辺にいるムスリム達を悩ますだけでは、彼等の目的を果たせないと言うことに気付いた。メディナにいる聖預言者とその信徒たちに攻撃をしかけ、彼等を新しい避難場所から追い出す必要があった。したがって彼等はメディナの指導者 Abdullah bin Ubayy bin Salul に手紙を送った。彼は、聖預言者がメディナに来る前はあらゆる人々からメディナの王として認められていた人物である。手紙の内容は、メッカの人々は聖預言者がメディナへ行ったことを聞いてショックを受けており、彼に避難場所を与えたのはメディナの人々の過ちであるというものであった。手紙の終りは、このような文で結んであった。

「あなたがたが、我等の敵をあなたがたの土地に受け入れた今、あなたがたメディナの人々が彼をメディナから追い出すか、我等とともに彼に戦いをいどむのでない限り、我等メディナの者は、神にかけてメディナ攻撃を行なうとここに宣言する。メディナ攻撃となった場合には、我等はあらゆる強壮な男を切り殺し、女達を奴隷とするであろう (Abū Dawud, Kitab al-Kharaj)。」

Abdullah bin Ubayy bin Salul はこの手紙を天の賜と考えた。彼はメディナの他の偽善者達と協議をし、もし、彼等が聖預言者をこのまま何事もなく彼等の中で暮らすのを許してしまったら、メッカの敵意を招くことになるかと彼等を説得した。そうすると、メッカの人々をなだめようと思えば、聖預言者に対して彼等が戦いを挑まざるを得なくなった。この結論は聖預言者の知るところとなった。彼は Abdullah bin Ubayy bin Salul のところへ行き、このようなことに踏み切ると、自滅を招くことになるかと彼にわからせようとした。メディナの人々の多くはムスリムになっており、イスラムのために命をなげうつ覚悟ができていた。もし Abdullah がムスリムに対して宣戦を布告すれば、メディナの大部分がムスリムの側について戦うことであろう。だから、そんな戦争は彼にとって高くつくだけでなく、彼自身の破滅を意味するものであった。

Abdullah はこの忠告に心を動かされ、自分の計画を断念した。

このときに、聖預言者はもう一つ大切な方策を講じた。彼はムスリム達を集め、彼等が二人ずつ組みを作って、兄弟のように手を組むことを提案したのである。この考えはみなの中に深く浸透した。メディナ人はメッカ人と兄弟として手を組んだ。この兄弟関係にしたがってメディナのムスリムたちは自分達の財産と所有物をメッカのムスリム達と分け合うことを申し出たのだ。あるメディナ人のムスリムは自分の二人の妻のうち、一人を離縁して、彼のメッカ人の兄弟と彼女を結婚させることを申し出た。メッカの人々はメディナのムスリム達が困ったときのことを考えて、彼等の申し出を断った。だがメディナのムスリム達は頑として譲らず、この問題は聖預言者の裁断を仰がなければならなくなった。メッカのムスリム達は自分達にとって兄弟である、とメディナのムスリム達は主張した。だから彼等の財産はお互いに分け合うべきだと言うのである。メッカのムスリム達は土地をどうしたらいいかわからなかった。だが土地自体はわけられなくてもその土地の生産物を分けることはできた。メッカのムスリム達はこの信じられないほど寛大な申し出を感謝の心をこめて辞退し、自分達の本来の交易の仕事に従事したいと主張した。そして多くのメッカのムスリム達は再び裕福になった。だがメディナのムスリム達はメッカのムスリム達と、自分達の財産を分け合いたいという申し出を決して忘れることがなかった。メディナ人のムスリムが一人死ぬと、その息子達がそれぞれのメッカの兄弟と遺産を分け合うと言うことが何度も起こった。この慣習は何年も続いたが、聖クルアーンの遺産分割に関する教えになって、ついに廃止された (Bukhari, Muslim)。

メディナの各部族間協定

メッカ人とメディナ人のムスリム達を兄弟という形で結束させたことに加え、聖預言者はメディナの住人達すべての間にある誓約を取り交わ

すことを定めた。この誓約により、アラブ人もユダヤ人もムスリムと共に一般市民として結束した。ムスリムが一つの集団としてメディナに発足する前はこの地には二つの集団しかなかったが、ムスリムが加わった今、集団の数は三つになったのだと、聖預言者はアラブ人とユダヤ人に説明をした。こうなれば彼等全部を一つにまとめ、彼等全部に一定の平和を保証してくれるような協定を結ぶのが妥当であった。こうして一つの協定ができ上がった。内容は次の通りである。

一方は、神から遣わされた預言者と敬虔な信徒たち、そしてもう一方は自らの意志により加入に同意するすべての人々、この両者の間に取り交わされるべし。もしメッカ人のムスリムの内、誰かが殺されるようなことがあった場合には、メッカ人のムスリム達全員が責任を取らなければならない。自分たちの捕虜を無事に釈放してやる責任も彼等にある。メディナのムスリム達も同様に、自分達の生命と捕虜に対して責任を持たなければならない。反乱を起こしたり、悪意や無秩序を助長するような者は誰でも共通の敵とみなされる。そのような人間と戦うのは、他の全員の義務である。例えその人間が息子であったり、身近な親族であったとしても、許してはいけない。もし不信仰者が信仰心の篤い者に殺されたとしても、その親族であるムスリムは復讐を考えてはいけない。また、信仰心の篤い者に逆らう不信仰者を援助してもいけない。この誓約に加わっているユダヤ人はムスリムの助けを受けられる。このユダヤ人たちに苦難を科してはいけない。彼等に逆らう彼等の敵を助けてもいけない。不信仰者はメッカから来ているものを決して助命しないであろう。そのような人はメッカ人の財産を決して管理してはくれないであらう。ムスリムと不信仰者達の間で戦争が起こっても、その人間はどちらにも加担しないであろう。もし信仰心の篤い者が理由なく虐待されるようなことがあったら、ムスリムにはその虐待者に対して戦いを挑む権利がある。もし共通の敵がメディナに攻撃を仕掛けたら、ユダヤ人はムスリムに味方し、軍事費を負担しなければならない。メディナの他の部族と誓

約を交わしているユダヤ部族には、ムスリム達と同等の権利がある。ユダヤ人は独自の信仰を守り、ムスリムも自分達の信仰を守ってよい。ユダヤ人に与えられている権利は、その信徒たちにも共通のものである。メディナの市民には預言者の許しなく、宣戦を布告する権利はない。しかし、これは個人の悪行に対して復讐をする個人の権利を侵害するものではない。ユダヤ人はユダヤ社会の、ムスリムはムスリム社会の経費をそれぞれ別個に負担すればよい。だが戦争の場合には、一致協力して事に当たらなければならない。メディナの町は、この誓約書に調印する人たちの手によって、神聖で侵されることのない町とみなされるようになるであろう。市民の保護の下に、この町に来る訪問者も市民としての待遇を受ける。しかし、メディナの人々は一人の女に、その女の親族の許可なく市民権を与えることは許されない。あらゆる紛争は、神と聖預言者の裁断にまかせなさい。この誓約書に調印した団体は、メッカ人や或いはその同盟者と協定を結ぶ権利を持たない。これはこの誓約書に調印した団体は、彼等の共通の敵と戦うことに同意したからである。この各団体は平和の時も戦争の時も常に結束を固めていなければならない。どの団体も、自分達だけの勝手な平和を保とうとしてはいけない。しかし、どの団体も戦争に参加する義務を負わない。しかし、過剰行為を犯した団体は罰を受けるに値する。本当に神は正しき者、信心深い者の守り主であり、聖預言者は神に遣わされた預言者である (Ibn Hishām)。

以上が歴史書に残る切り抜きからわかる誓約の概略である。メディナの団体間に紛争や意見の不一致が起こった場合には、その中心的な原則として誠意、真理、そして正義があることを明確に強調している。不行跡を働いた者はその不行跡に対して責任を取らされる。この誓約から、聖預言者が他のメディナの市民に対しては丁寧且つ親切に接し、彼等を同胞とみなして、そのようにふるまうよう決意していたことがよくわかる。もし争いや紛争が後に起これば、責任はユダヤ人にあるとされた。前に述べたように、メッカの人々がイスラムに対して新たに計画的敵意

をむき出しにしたのは2, 3ヶ月も過ぎてからのことであった。メディナの Aus 族の長、Sa'd Bin Mu'adh の例がある。彼はカーバ神殿巡回のためにメッカへやってきた。アブー・ジャフルが彼を見つけ、「この背教者、聖預言者に保護を与えておいて、おまえ達が無事にメッカへカーバ神殿巡回に来れるとでも思うのか。奴を保護し、助けてやれるとでも思っているのか。神に誓っていっておく。Abū Sufyān がいなかったらおまえたちは無事に家族のところへは戻れなかったのだぞ」。

Sa'd Bin Mu'adh は答えた。「私を信じなさい。もしあなたがたメッカの人々が私達のカーバ神殿巡回訪問を阻止するならば、あなたがたがシリアへ行くときには、道中無事には済まないでしょう」。その頃、メッカの長である Walid bin Mughira がかなりの重病にかかっていた。彼は死期が近いことを感じていた。他のメッカの長達が彼の回りに集まってきた。自制することができなくなって、Walid は泣き出した。メッカの長達はこれに戸惑い、何故泣いているのか彼に尋ねた。「私が死を恐れていると思っているのか。いいや、恐れているのは死ではない。聖預言者の信仰が益々広がり、メッカすら彼の支配下におかれてしまう日が来るのではないかと思うと恐ろしくなるのだ」。Abū Sufyān は彼等が生きている限りは命をかけて、その信仰が広まるのを抑えてみせると Walid に確約した (Khamīs, vol.1)。

メディナ攻撃計画を進めるメッカ人

このような出来事から考えていくと、メッカ人の敵意がおさまっていたのもほんの一時的にすぎなかったのは明らかである。メッカの指導者達はイスラム攻撃を改めて練り直し、着々と準備をすすめていた。死に挑んだ長達は残された者達に、聖預言者に対する敵意の誓いを託し、彼とその信徒への戦いを扇動した。メディナの人々も、ムスリムに対して武器を取って立ちあがるようあおられ、もし彼等が拒めばメッカとその

同盟部族がメディナを襲い、男を殺し、女を奴隷にしようという警告を受けた。もし、聖預言者が傍観的な態度をとって、メディナ防衛に何の力も尽くさなかったとしたら、大きな責任を負わなければならないのであろう。そこで彼は偵察隊を組織することにした。彼はメッカ周辺に何組かの男達を送って、戦いの準備の兆しを逐一報告させた。この偵察隊とメッカ人の間で時々小競り合いやけんかが起こった。ヨーロッパの作家達はこのような事件をとりあげて、こういったいざこざは聖預言者が始めたことであり、その後続いて起こった戦争においては、彼は侵略者である、などと書いている。しかし、その前に我々は13年にも渡るメッカの暴政、メディナの人々がムスリムに敵愾心を抱くよう仕向けた彼等の謀略、そしてメディナ自体への威嚇攻撃などにじっと堪えてきたのである。この状況すべてを記憶している人ならば、上記のような事件を引き起こしたという罪で聖預言者の責任を追及したりはできないはずである。もし彼が偵察の目的でムスリムの人達を何人か組みにして送り出していたとすれば、それは正に自己防衛である。13年間の暴政は、ムスリムが自己防衛の準備をするのに十分正当な理由になるはずだ。もしムスリムとメッカ人という敵との間で戦争が起こっても、その責任の所在はムスリムにはない。今日キリスト教国家がお互いに戦争をし合っているが、その根拠が乏しいことはよく知られている。今日、メッカの人々がムスリム達にしたことの半分でもヨーロッパの人々に仕向けられたならば、当然戦いに挑むべき正当な理由があると彼等は思うであろう。一国の人々が大規模に他の国の人々を殺戮する計画を進めたり、一民族が他の民族を故郷から追い出すようなことがあれば、その犠牲者達には当然戦う権利が与えられるべきではないのか。ムスリムたちがメディナへ移住した後は、彼等にとってメッカの人々に宣戦布告する理由はもうなかったのだ。だから、聖預言者は宣戦布告はしなかった。彼は忍耐を示し、防衛行動も偵察程度に抑えていた。それにもかかわらず、メッカの人々はムスリムを悩ませ苦しませ続けていたのである。メッ

カの人々はメディナの人々がムスリムに反発するよう扇動し、ムスリムの巡礼する権利にすら干渉した。彼等はいつもの隊商が通るルートを変更して、メディナの周辺にすむ部族たちの中を通るようにし、その各部族達にムスリムへの反発心を抱くよう、そそのかしたのである。メディナの平和は脅かされた。だからメッカの人々が14年もの間投げ続けた戦いの挑戦状をムスリムは明らかに受け取らざるを得なくなったのである。このような状況下にいる者であれば、ムスリムがこの挑戦を受けて立つ権利について何の疑問も抱くはずはない。

聖預言者はこの偵察活動に忙殺されてはいても、メディナの人々が必要としている一般的且つ精神的な支えを怠るようなことはしなかった。メディナの住民のほとんどがムスリムとなり、内面的な信仰を深めるばかりでなく、公然と自分の信仰を宣言するようになった。形だけ、入信している者もあった。そのため、聖預言者は彼の数少ない信徒の間でイスラムの政府を打ち立てることにした。その以前はアラブ人達は刀や、個人的暴力をもって紛争を解決していた。聖預言者は司法手続きを取り入れたのである。個人、或いは団体間で争いが生じたときには、その訴えを治めるために裁判官が任命された。裁判官がその訴えを公正且つ正当なものと宣告しない限り、その訴えは認められなかった。その昔、知的追求は軽蔑の目で見られていた。だが聖預言者は読み書きと学問の楽しさを奨励しようと行動を起こした。読み書きのできる者は、その能力を他の人々に教えるよう依頼された。不正と残酷の時代は終わった。女性達の権利も確立された。金持ちは貧しい者達の生活必需品やメディナの社会生活を改善するために、費用を負担するようになった。労働者が搾取されることもなくなった。弱く、能力のない遺産相続人がいる場合には、財産管理者を指名する体制も整った。金の貸借関係は書面に記録されるようになった。このあらゆる約束を守る大切さが人々の心の中に浸透し始めた。奴隷に対する暴力も廃止された。健康法や公衆衛生も注目を浴び始めた。人口調査も行なわれた。一般道路や街道の拡張命令がで

て、道路をきれいにする対策もとられた。簡単に言えば、理想的な家庭、及び社会生活を促進する上での法律が制定されたのである。アラブ人は歴史上最初の頃は野蛮な民族であったが、彼等にも丁重で、教養あふれる民族となるべき規範がもち込まれたのである。

バドルの戦い

その時代のアラブ人だけでなく、将来の全人類のためになる実践的法律を聖預言者が作っている間に、メッカの人々は戦争準備を推し進めていた。聖預言者の方は自国民のみならず、他のどの国民にも平和と尊厳と進歩をもたらすような法律をいろいろ練っていた。そして一方、その敵メッカ側はその法律を壊滅させる策を練っていたのである。その結果、メッカ側の策が奏功して、バドルの戦いが起こった。ヒジュラから数えて 18 ヶ月目のことであった。Abū Sufyān の率いる隊商がシリヤからメッカへ戻ろうとしていた。この隊商を守るという名目で、メッカ人達は大軍を組織し、そのままメディナへ向うことにした。聖預言者の耳にその計画が伝わった。彼はこのことについても神の啓示を受けており、敵が自らの破滅を招く時が来たのを知っていた。彼は従者を多勢連れてメディナから出て行った。その時、このイスラムの一団がシリアからの隊商とぶつかることになるのか、メッカからの軍隊とぶつかることになるのかわかっている者は誰もいなかった。ムスリムの一団は約 300 人を数えていた。当時の隊商には、商品を積んだらぐだけでなく、隊商を護衛し、旅の間無事に済むよう付き添っていく武装した男達もいた。メッカの人々とメディナのムスリム達の間には緊張が高まって以来、メッカの長達は、護衛隊に武装するよう、特別の指示をするようになっていた。歴史的記録によると、このほんの少し前に、他の二つの隊商が同じルートを通って行ったという事実がある。この内一つの隊商には付き添い護衛隊として 200 人の武装した男達が、そしてもう一つの隊商には 300 人

の武装した男達がいたと言う。キリスト教作家が言うように、聖預言者が300人の従者を引き連れて、無防備な隊商に攻撃を仕掛けたとするのは間違っている。このような考え方は嫌がらせであり、事実無根である。このシリアから来ている隊商は大規模なものであり、その規模と他の隊商に付けられている護衛隊の数を考えてみると、この隊商には約400から500の護衛隊が付き添っていたと考えてよかろう。たった300人の不完全な武装しかしていないムスリムの一団が聖預言者に率いられて、略奪目的でこのような完全武装の隊商を攻撃したと考えるのは全く不当である。このようなことを考えつくのは、イスラムに対するひどい偏見と凝り固まった悪意からにすぎない。もしムスリムの一団がこの隊商とぶつかるためだけに出て行ったのだとすれば、この彼等の思いきった行動は、戦争を開始するものであったと言える。だがあくまでも自衛戦だったのである。というのは、メディナからのイスラム軍は少数で不完全武装であり、メッカの隊商は多勢で完全武装だったからである。そして、また、メッカの人々は長い間、メディナのムスリムに対する敵意を起こさせる運動を展開してきたからである。

実は、この少数のイスラム軍がメディナを出た状況は、はるかに深刻なものだったのである。既に説明したように、彼等はぶつかる相手がシリアからの隊商だったのか、メッカからの軍隊だったのか知らなかった。ムスリムたちがこの不安に悩んでいたことは聖クルアーンの中にそれとなく示されている。そのためムスリムたちは両者に備えていた。ムスリムたちがメディナを出発した時の不安は彼等の信仰の深さと絶対的な忠誠を高めることとなった。彼等がメディナからかなり遠く離れた所についてから、やっと聖預言者は彼等がぶつかる敵はシリアからの少数の隊商ではなく、メッカの大軍であると知らせたのであった。

メッカ軍のおおよその規模がイスラム軍に伝えられた。控えめに見積もっても戦いの術に長けた鍛えぬかれた兵士達ばかりの1000人の軍隊であった。聖預言者に従う者はたったの313人であり、戦いの術も経験^{すべ}

もない者が多く、しかもほとんどが十分な武装をしていなかった。また大部分が徒歩か或いはらくだに乗っていた。全軍合わせても馬は二頭しかいなかったのである。この経験もなく、武器も十分にそろっていない一団が、3倍もの数の軍と戦わなくてはならなかったのである。しかも、その敵の大部分は熟練兵士達であった。歴史においてこれほど無謀なことがあったであろうか。賢明な聖預言者はしかるべき知識も意志も熱意もなくこの戦いに加わることは誰に対しても許さないと語った。彼はこの一国の人々に彼等が戦うのは最早、隊商ではなく、メッカ軍であると、はっきり伝えた。そして彼等に協議する場を設けさせた。メッカから彼に従って来た信徒達は、次から次へと立ちあがり、それぞれの忠誠と熱意、そしてメディナのムスリムたちを家まで脅かしに来るメッカ軍と戦う決意を聖預言者に確約した。聖預言者はメッカ人のムスリムが一人確約する毎に、もう一度協議を重ねるように頼み、さらに忠告を求めた。メディナのムスリムたちはただ沈黙を守っていた。メディナのムスリムたちはメッカ軍と戦おうという自分たちの熱意が、メッカの同朋たちの気持ちを傷つけることになるのではないかと恐れていたのだ。だが、聖預言者が更に盛んな協議をするよう求めた時、一人のメディナのムスリムが、立ち上がって発言した。「神から遣わされた預言者さま、必要な協議はもう十分致しました。それなのにあなたはもっと話し合えとおっしゃる。おそらく私たちメディナのムスリムのことを気にかけていらっしゃる。違いますか？」

「その通りである」と聖預言者は言った。

その男は続けて言った。「あなたが私たちに協議をお求めになるのは、あなたが私たちのところへおいでになった時、メッカから移住されたあなたやあなたについて来られた人々がメディナで攻撃を受けた場合のみ、私たちがあなたの側に味方して戦うと同意したと考えていらっしゃるからでしょう。でも、今は私たちはメディナを出てしまっており、私たちの合意には、今日、私たちがおかれている状況は、含まれていない

とあなたは思っていらっしゃる。ですが、神に遣わされた預言者さま、あの同意に踏み切った頃、私たちはあなたのことを今ほどよくわかってはいませんでした。今ではあなたがいかに高い精神性をお持ちの方がよくわかっています。あの同意の内容に関して、私たちは気にかけておりません。私たちは今はあなたの味方です。あなたがおっしゃることには何でも従います。私たちは、『あなたの神と共にあなたが行って敵と戦ってきなさい。私たちはここで待っていますから』と言ったモーゼに従った者たちのような態度はとりません。戦わなければならないのなら戦いましょう。そしてあなたの右にも左にも、そして前にも後にも出て戦います。きっと敵はあなたをねらって攻撃をかけるでしょう。でも、私たちの死体を踏み越えない限り、あなたの体に指一本触れさせはしません。神に遣わされた預言者さま、あなたが私たちに戦うよう言われました。私たちはそれ以上の覚悟が来ています。ここからそれ程遠くない所に海があります。もしあなたが海に飛び込めとおっしゃるなら、喜んで従いましょう」(Bukhari, Kitab al-Maghazi, Ibn Hishām)。

これこそ、最初の頃のムスリムが示した献身と犠牲の精神であり、これほどの精神は世界の歴史のどこを捜しても見つからないであろう。モーゼに従った者たちの例は既に述べた。イエスの弟子たちが、いざという時にイエスを見捨てたことは知られている。その弟子たちの一人はわずかな金のために、イエスを売り渡した。もう一人は彼を呪い、残りの10人は逃げた。メディナから聖預言者に従ったムスリムたちは、一緒になってほんの一年半しか経っていなかった。しかし彼等は、聖預言者がほんの一言命じさえすれば、何の疑問もなく、海に身を投げるほどの強い信仰を得ていたのである。聖預言者は協議の場を設けたが、彼に従う者たちの献身を全く疑ってはいなかった。意志の弱い者がいたら、去らせようと考えたのである。だが、メッカのムスリムもメディナのムスリムも自分達の献身を表そうとお互いに張り合っているのがよくわかった。たとえ敵が自分達の数の3倍で、準備も武装も経験も自分達よ

りはるかに優っていたとしても、決して敵に後ろは見せないという決意が、どちらのムスリムにもあふれていた。彼等は神との約束に自分たちの信仰を賭け、イスラムへの敬意を示し、防衛のために命を投げ出していたのである。

メッカとメディナの両方のムスリムたちの献身を確認し、聖預言者は進軍を開始した。バドルと呼ばれる場所についた時、彼は従者の一人の提案を聞き入れ、バドルの小川の近くで休むように皆に命じた。この川の水源を所有しているのはムスリムたちだが、彼等が実際に今、陣を張っている場所はすべて砂地であった。だから戦いを展開するにはふさわしくない場所であった。聖預言者の従者たちは、この不利な条件に当然の不安を示した。聖預言者自身も同じ不安を抱いており、夜を徹して祈り続けた。何度も何度も彼は言った。

神よ、この地上で、あなたに献身を誓い、あなたへの信仰を打ちたてようとしている者はほんの300人程しかおりません。神よ、もし、この300人がこの戦いで敵の手にかかって命を落としたら、この後、誰があなたの御名を称えるのでしょうか（Tabari）。

神はこの聖預言者の祈りを聞き入れられた。雨が夜中降り続いた。ムスリムが陣を張っていた砂地は湿って硬くなった。それに反し、敵が占拠していた乾燥地はぬかるみとなり、すべり易くなった。メッカ軍がこの乾燥地を選び、一方の砂地をイスラム軍に残しておいたのは、恐らく、彼等の経験を積んだ目が、彼等の兵士や騎兵の動きを楽にするには乾いた土地の方が有利だと見たからであろう。ところが、折りよい神の御業が形勢を逆転させてしまった。夜中降り続いた雨で、イスラム軍が占めていた砂地は固まり、メッカ軍の陣が張られた硬地はすべり易くなってしまったのだ。その夜の間に、聖預言者は敵の主力は死ぬことになるというはっきりした神の啓示を受け取っていた。神は彼にそのそれぞれの名前まで知らせていた。彼等がばったり倒れて死ぬ場所も明らかにされた。そしてその予告通り、指定された場所で名指しを受けた者達が倒れ

て死んだ。

この戦いにおいて、この小さな集団のムスリムが素晴らしい勇気と献身を示した。ある出来事がこれを証明している。イスラム軍の数少ない将軍の一人は Abd ul-Rahman bin Auf であり、彼はメッカの長の一人で経験を積んだ兵士であり、戦いはお手のものであった。戦いが始まると、彼は左右を眺めてどういった面々が彼を援助してくれるか見た。彼の心は沈み、独り言をつぶやいた。「どんな将軍だって両側に援助者が必要だ。今日の私にはもっと必要だというのに、未熟な少年がたった二人しかいない。彼等だけで、私に一体何ができるのだろう」。Abd ul-Rahman bin Auf がこの独り言を言い終わろうとしていた時に、この少年の一人が彼のわき腹を肘でつついた。彼がその少年の話を聞こうと身をかがめると、少年は「おじさん、アブー・ジャフルとかいう人の噂をよく耳にします。彼は預言者さまを苦しめ迫害していたそうですね。おじさん、彼と戦いたいのですが、彼はどこにいますか？」と言った。Abd ul-Rahman がまだこの若さあふれる質問に答えないうちに、彼のもう一方の側にいた少年が同じように彼の注意を惹いた。その少年の質問も同じであった。Abd ul-Rahman は、この二人の少年の勇気と決意に大変驚いた。熟練兵士の彼でも、敵の司令官と一対一で戦おうなんて考えもしなかった。Abd ul-Rahman ははっきりと Abd Jahl を指で指し示した。アブー・ジャフルは一部のすきもなく武装をして、戦列の後に立ち、抜き身の刀をさげた二人の老練な将軍達に守られていた。Abd ul-Rahman が彼の指をおろしきらないうちに、二人の少年は猛スピードで敵の戦列に駆け込み、ねらった敵に向かってわきめも降らず突進した。この突撃はあまりにも思いがけなかった。兵士も護衛も呆然として見ていた。とにかく彼等は少年達に襲いかかり、一人の少年は片腕を失った。それでもこの二人は勇気を失うこともなく、負けてはいなかった。彼等はアブー・ジャフルに攻撃をかけた。この攻撃があまりにも激しかったので、さすがの偉大なる司令官も致命傷を負って地面に倒れた。この二

人の少年の勇気ある決意から、聖預言者の従者達が老若を問わず、彼等と聖預言者が耐え忍んできた残虐な迫害に対して、いかに怒りを掻きたてられていたかがよく推察できる。我々は彼等について歴史で読むだけであるが、それでも怒りを感じずにはいられない。メディナの人々はこういった残虐行為について目撃者から直接聞いていたのだ。彼等が抱いた感情も想像に難くない。彼等は一方でその残虐行為を耳にし、もう一方で聖預言者の忍耐を聞いた。どうりで、聖預言者やメッカのムスリム達に科せられた不当行為に対して復讐をしようとするメディナの人々の決意が高まったわけである。彼等もしムスリムたちが仕返しをしなかったとしても、それは彼等が無力だったからではないのだということをメッカの迫害者たちに知らせる機会を求めていただけなのである。ムスリム達が仕返しをしなかったのは、神がそれを許さなかったからである。この少数のイスラム軍の命を賭けて戦う決意がいかに強かったかを判断するのによい出来事がもう一つある。まだ戦闘が開始される前に、アブー・ジャフルはベドウィンの長をイスラム軍に送って、その数を報告させた。この長は自分の軍に戻って、イスラム軍の勢力は300人かそこらであると報告した。アブー・ジャフルとその部下達は喜んだ。彼等はムスリムを餌食にするのはたやすいと考えたのだ。「ですが」とベドウィンの長は続けた。「ご忠告申し上げますが、彼等とは戦わない方がよろしいでしょう。彼等のひとりひとりが死ぬ気になっているようです。らくだに乗っているのが人間ではなく死に見えたのです」(Tabari & Ibn Hishām)。ベドウィンの長の言うことは正しかった。死を覚悟した人間はそう簡単には死なないものだ。

大預言成就

戦いの時間が近づくと、聖預言者は祈りを捧げていた小屋から外に出て、人々に告げた。“大軍は必ず総崩れとなり、背を向け、逃げ出すで

あろう “。

この言葉の啓示を受けたのは、ずっと以前のことで、彼がまだメッカにいた頃であった。これは明らかにこのバドルの戦いを指していた。メッカ人の残虐さが極限に達し、ムスリム達が安住の地を求めて移住をすすめていた頃に、聖預言者は次のような啓示を神から受けていた。

而して、ファラオの一族にも警告するものが確かに来たり。彼等は、われらの神兆^{しるし}をすべて虚偽とみなしたり。さればわれらは、威力なる全能の御方の捕え方で彼等を捕えたり。お前たちの（時代の）不信者どもは、あのものどもより優りたりや、それとも、お前たちのためには聖典の中に免除ありや？ 彼等は、「我等、報復する大群なり」と云うか？ この大群は必ず打ち破られ、背を向け去らん。否、定めの時こそ彼等に約束されたり。而して、その時こそ最も悲惨にして、最もむごきなり。げに罪人どもは、迷誤^{つみびと}と狂妄^{ごうか}の中にあらん。その日彼等は、業火の中にその顔を俯^{うつむ}きて引きずられ、（而して云われん）地獄の感触を味わえ（54:42-49）。

この箇所はアルカマル章から引用されており、当章の啓示を受けた場所はメッカであると、どの文献にも記録されている。ムスリムの権威筋は、この啓示を受けた日は聖預言者が神からの使命を帯びた日から数えて5年目から10年目の間、即ちヒジュラの前少なくとも3年位の頃であると見ている。ヒジュラの前8年位の頃だとする見方もあり、その方が有力である。ヨーロッパの権威筋はこの見方に同調している。ノルデケによれば、当章全体の啓示がなされたのは、聖預言者が神の使命を受けた日から数えて5年目以後であるという。Wherryはこの日付は少し早過ぎると考えている。彼の説では、ヒジュラの前6,7年目、或いは、預言者ムハンマドに神の使命が下った日から数えて6,7年目にこの章の啓示がなされたとなっている。要するに、ムスリムの権威者も、ムスリム以外の権威者も、共にこの章の啓示がなされたのは、聖預言者とその信徒達がメッカからメディナへ移住した時よりも何年も前のことだとい

う説で一致している。メッカ人に関する預言の価値には、全く議論の余地もない。この箇所にはバドルの戦いでメッカの人々を待ち構えているのは何かが、はっきりと示されている。彼等が直面しなければならない運命が明解に予告されているのである。聖預言者は小さな小屋から外に出て、このメッカの章に記されている預言の言葉を繰り返したのであった。その中の一節を復誦することによって、彼は従者達に、メッカの啓示に約束されている運命の時がついに来たのだということを思い出させたのである。

そしてその時が本当にやって来た。預言者イザヤはこの時を既に予告していた（イザヤ書 21:13-17）。たとえムスリムの側にその準備が出来ていなかったとしても、そしてムスリム以外の人々がその戦いには加わらないように忠告を受けていたとしても、とにかく戦いは始まったのだ。313 人から成るイスラム軍の大多数は経験もなかったし、戦争に慣れていなかった。又そのほとんどすべての者が十分な武装をしていなかった。それでも彼等は熟練兵士達から成る 3 倍の数の大軍に立ち向かって行った。2、3 時間後にはメッカ軍の名だたる長が大勢命を落としていた。正に預言者イザヤが予告した通り、ケダルの栄華は尽き果てていた。メッカ軍は、仲間の遺体も捕虜も打ち捨てて、一目散に逃げ出したのである。その捕虜の中に聖預言者の叔父アッバースがいた。アッバースは聖預言者がメッカにいた頃には大変彼の支援をしていてくれたが、無理やりメッカ軍に加わり聖預言者と戦わされていたのである。聖預言者の義理の息子にあたるアブル・アースも捕虜になった。メッカ軍の最高司令官であり、皆に言わせればイスラムの最大の敵でもあるアブー・ジャフルは、残された死体の中から見付かった。

勝利は得たが、複雑な思いが聖預言者の心に残った。過ぎ去りし 14 年間の間、何度も繰り返されて来た神の契約が成就した。喜びは大きかった。この契約はもっと以前の宗教書の中にも記録されているものである。だがこの喜びと同時に、メッカの人々の窮状を思うと悲しみが彼の心に

広がった。彼等はなんと哀れな結末を迎えることになってしまったのだろう。もし別の人間が聖預言者の立場にいたら、この勝利に跳び上がって喜んだであろう。しかし、縛られ手かせをはめられている捕虜の悲惨な光景を目の前にして、聖預言者とその忠実な友 Abū Bakr の目は涙で一杯になった。後に Abū Bakr の後を継いで2代目のイスラムのカリフになった Umar はこの時、この様子を見て理解に苦しんだ。勝利を得たというのに、何故聖預言者と Abū Bakr は泣くのだろうか。Umar は戸惑った。それで思い切って聖預言者に訳を尋ねることにした。「神から遣わされた預言者さま、神があなたにこのように素晴らしい大勝利をお与え下さったというのに、何故お嘆きになられるのですか。もし泣かなければならないのなら、私達もあなたと共に泣きましょう。少なくとも涙の顔を致しましょう」。聖預言者はメッカの捕虜達の惨状を指し示した。これこそ正に、神に背いた者の宿命であった。

預言者イザヤは何度もその預言者の公正さを語っていた。その公正さ故に預言者は命を懸けた戦いから勝利を生み出したのである。この状況を示す素晴らしい実例があった。メディナへ戻る途中、聖預言者は一夜のキャンプを張って休んだ。彼を警護するため起きていた献身的な従者達には、彼が何度も寝返りを打ち、寝つけないでいるのがわかった。戦争捕虜としてきつく縛られたまま、すぐ側に横になっている聖預言者の叔父アッバースのうめき声が聖預言者の耳に入るため、彼が眠れないのではないかと、まもなくして思いついた見張り番達がアッバースの縄目を緩めてやった。アッバースのうめき声がとまった。もう、うめき声に悩まされなくなって、聖預言者は眠りについた。しばらくして目が覚め、何故アッバースのうめき声が聞こえなくなったのか彼は不思議に思った。アッバースは気を失ってしまったのだろうか、などと思ったりした。だがアッバースを見張っている仲間達が、聖預言者の眠りが妨げられないよう、アッバースの縄目を緩めてやったのだと彼に語った。「いけない。それは間違っている」と聖預言者は言った。「不公正があってはいけない

い。もしアッバースが私の身内だから、というのなら、他の捕虜達も他の者達の身内なのです。全員の縄目をゆるめてやりなさい。そうでなければ、アッバースの縄目もきつくしなさい」。この訓戒を聞いた仲間達は、すべての捕虜の縄目を緩めることにし、自ら捕虜達を無事に保護する責任を負ったのであった。捕虜達の内読み書きの出来る者は、10人のメッカの少年達を読み書きが出来るようにすることを引き受ければ自由を約束された。これが彼等にとっての自由への身受け金であった。彼等の身受け金を払ってくれる人がいない者達は、捜す自由を与えられた。身受け金を払う余裕のある者達は、支払い次第自由になれた。このような方法で捕虜を自由にするにより、聖預言者は戦争捕虜を奴隷にするという残酷な慣習に終止符を打ったのである。

Uhud の戦い

メッカ軍はバドルから逃げ出した時、再びメディナを襲ってこの戦いで被ったメッカ軍の痛手をムスリム達に仕返ししてやると宣言した。そしてほんの一年後に、彼等は総力を挙げて再びメディナを攻撃したのである。彼等が敗北に感じた屈辱はあまりにも大きかったため、生存者が戦いで命を落とした親族を思って嘆き悲しむことを一切禁じてしまった。彼等は又、隊商が儲けた利益を戦争資金として献ずるように定めた。そうして完全な体制を整えて、Abū Sufyān 率いる 3,000 人の軍勢がメディナを攻撃したのであった。聖預言者は協議を開いて、敵をメディナで迎え撃つか、それともメディナの外にするか、信徒達に尋ねた。彼自身はメディナで迎え撃ちたかった。ムスリム達をメディナに居させ、自分達自身の土地で敵を迎え戦わせたかったのだ。こうすれば、敵に侵略と攻撃の責任を負わせることが出来るからであった。ところが協議に参加した者の中に、バドルの戦いに参加する機会のなかった者が多く、その者達が今度こそ、神のために戦いたがっていた。彼等は真っ向から公

然と立ち向かい、命を懸けて戦う機会を強く求めた。聖預言者は全体的な考えを受け入れた (Tabaqāt)。

この討議の最中に、聖預言者は彼の見た幻影の話を織り込んだ。彼は言った。「私は幻影を見た。一頭の牛を見、それから刃先の折れた私の刀を見た。そして牛が屠殺されるのを見、甲冑の上衣に私が手を入れているのを見た。又私自身が雄羊に乗っているのも見た」。仲間達はその幻影をどう解釈するのか彼に尋ねた。

聖預言者は答えた。「牛が屠殺されるのは、私の仲間達が何人か戦いで命を失うということである。私の刀の先が折れているのは、私の親族の中で何人かが命を落とすか、私自身が苦痛か負傷の類を被るということである。私の手を甲冑の上衣の中に入れているのは、私達がメディナにいた方がよいということのようだ。私が雄羊に乗っているのは私達が不信者達の司令官に打ち勝ち、彼は私達の手によって命を失うことになるという意味である」 (Bukhārī, Ibn Hishām & Tabaqāt)。

ムスリム達はメディナに留まっていた方が良いということは、この幻影とその解釈から明らかであった。だが聖預言者はこの考えを主張しようとはしなかった。この幻影の説明は、彼の勝手な解釈にすぎず、啓示された知識ではなかったからである。彼は大多数の意見を取り入れて、メディナの外で敵を迎え撃つことにした。出発してから、彼の従者の中でも熱心な者が自分達の誤りに気付く、聖預言者に歩み寄って、言った。「神から遣わされた預言者さま。あなたがおっしゃった方法の方がいいように思います。メディナに留まり、私達の町で敵と戦うべきです」。

「今は、もういけない」と聖預言者は言った。「神から遣わされた預言者はもう甲冑に身を固めてしまった。何が起ころうと、今や前進するのみである。もしあなたがたが毅然として確固たる意思を貫けば、神はあなたがたをお守り下さるであろう」 (Bukhārī & Tabaqāt)。そう言うと、彼は 1,000 人の軍勢と共に前進を続けた。メディナから少し離れた所で彼等はキャンプを張って夜を明かすことになった。敵と相対する前に戦

士達を休ませるのが聖預言者のやり方であった。朝の祈りの時に、彼は味方の軍を巡視した。幾人かのユダヤ人もムスリム達の間に混ざっていた。彼等はメディナの部族と同盟の契約を取り交わしているように見せかけていた。ユダヤ人の陰謀についてよく知っていたため、聖預言者は彼等を送り返した。彼がその処置をした途端、偽善者達の長 ‘Abdullāh bin Ubayy bin Salūl が300人の従者を率いてメディナへ引き返してしまった。彼の言い分によれば、イスラム軍はもうとても敵と太刀打ち出来るものではなかった。戦いに参加するということは、直接死を意味するものであった。聖預言者がユダヤ人という同盟者を送り返してしまったのは彼の大きな誤りであった。メディナを出てからたった11時間目に起こったこの300人の退去のため、聖預言者の司令下に残った人数はわずか700人のムスリム達であった。そしてこの700人が数では3倍、装備でははるかに何倍も優れた敵とぶつかることになったのである。メッカ軍の武装兵士は700人、それに対しイスラム軍はわずか100人であった。メッカ軍には200の騎馬兵、イスラム軍にはたった2騎という有様であった。聖預言者はUhudに到着した。彼はそこに到る迄の狭い山道に50人の警備兵を配置し、敵の攻撃、或いはそこを占拠しようという襲撃を撃退するよう命じた。聖預言者は彼等に果たすべき義務をはっきりと確認させた。それは配置された場所に拠を構え、イスラム軍に何が起ころうと、命令を受けない限り決してその場所を離れてはならないというものであった。残りの650人を率いて、聖預言者は5倍の大軍と戦うべく出かけて行った。そして神の助けを得て、650人のイスラム軍が3,000人の熟練したメッカ軍を追ひ散らしてしまったのである。イスラム軍は追いかけた。50人のイスラム軍が配置されていた山道はずっと後方にあった。警備兵が司令官に言った。「敵は敗退しました。今こそ私達が戦いに参加して、来るべき世界に賞讃を博す時です」。司令官は彼等を抑えて、聖預言者の命令を思い出すように言った。しかし部下達は聖預言者の命令は精神的に受け取るべきものであって、文字通

りに受け取ってはいけなと説明した。敵が命からがら逃げ出しているのにこの山道を警護し続ける意義が彼等にはわからなかったのである。

勝利転じて敗北

議論をした末、彼等は山道を離れて戦闘に参加した。逃走中のメッカ軍の中に Khālīd bin Walīd がいた。彼は後に偉大なるムスリムの将軍となった人物である。彼は手薄になった山道に鋭く目を付けた。そこには今では警備兵が数人しか残っていなかった。Khālīd はもう一人のメッカの将軍 Amr bin al-Ās に大声で呼びかけ、後方の山道に注意を促した。Amr も山道に目を向け、助かるチャンスだと考えた。両将軍は部下達を止めて、丘の方へと登らせた。彼等はまだ警備のため山道に残っていた数人のムスリム達を殺し、その高台から改めてイスラム軍に攻撃を開始した。彼等の雄叫びを耳にした途端、敗走していたメッカ軍は態勢を立て直し、戦場に引き返して来た。このムスリム攻撃は余りにも突然に始まった。メッカ軍を追い散らしていたイスラム軍はいつか戦場全体に散らばってしまっていたのである。この新しい攻撃に対抗する態勢を整える間はなかった。敵と戦っているムスリム兵士は皆、孤軍奮闘していた。そして彼等の多くが戦いに倒れていった。他の者は撤退した。わずかに残った者だけで、聖預言者の周りに円陣を作って敵に向かった。全部合わせても 20 人も残っていなかった。そしてこの小さな円陣に、メッカ軍は激しい攻撃を加えたのである。一人、又一人と円陣を作っていたムスリム兵士がメッカ軍兵士の一撃に切り殺されていった。高台からは、矢の一斉射撃が行なわれた。その時クライシュ族であり、Muhājirīn（メディナへ避難したメッカ人のムスリム）でもある Talha は敵の矢がすべて聖預言者の顔を目がけて射られているのに気がついた。彼は手を伸ばして、聖預言者の顔にかざしたのである。次から次へと矢が彼の手突き刺さった。どの矢も彼の手を突き抜けたのだが、彼は手を降ろそうと

はしなかった。ついには彼の手は完全にちぎられてしまった。Talha は手を失い、一生義手で過ごさなければならなくなった。イスラムのカリフが四代目を迎えた頃、内部分裂が頭をもたげて来た。そして Talha に異論を唱える者が彼のことを手なしの Talha と呼んで皮肉った。Talha の友人はそれに答えて、「確かに彼には手がない。だがあなたは彼がどこで手を失ったのかご存知か。Uhud の戦いで 彼は預言者さまの御顔を敵の矢から守る為に手をかざして盾にしたのだ」と反駁した。

Uhud の戦いが終ってかなり経った頃、Talha の友人は彼に尋ねた。「矢を浴びて君の手は相当痛かったのではないのか。そして余りに痛くて泣いたりしなかったのか?」。Talha は答えた。「ひどく痛かったし、泣きそうにもなった。だが、どちらも我慢したのだ。だって、もし手がわずかでも揺らいだら、預言者さまの御顔を敵の矢の雨にさらすことになってしまったからね」。聖預言者と共に残されたわずかな兵士達は直面する敵に立ち向かえる状況ではなくなっていた。敵の大軍は前進し、イスラム軍を押し返した。聖預言者はその時、ただ壁のように 1 人突っ立っていた。そしてまもなく一個の石が彼の額に当たり、彼は深手を負った。別の一撃が彼の兜のリングを突き抜けて頬に当たった。矢が深く次々に当たって聖預言者は傷ついた。その時彼は祈った。「主よ。我が人々をお許し下さい。彼等には自分達のしていることがわかっていないのです」(Muslim)。聖預言者は仲間たちの死体の上に倒れた。それら死体は彼を守ろうとして命を投げ出した人々であった。他のムスリム達が更に続く攻撃から聖預言者を守ろうと進み寄って来た。そして彼等も倒れて死んだ。聖預言者はこれらの死体の中で気を失って倒れていた。敵はこの状況を見て、聖預言者は死んだものと考えた。彼等は大勝利を確信して、再び整列して引き返して行った。聖預言者を守ろうとしていたが、敵のなだれの如き攻撃によって押し返されてしまっていたムスリム達の中に Umar がいた。戦場は今ではもうきれいに片がついていた。この様子を見て Umar は聖預言者は死んでしまったに違いないと思った。

Umar は勇敢な男であった。その勇敢さを証明するような行為が彼には何度もあった。その一番よい例がローマとイランの二つの大帝国と同時に戦った時であった。彼が困難に出会ってひるむなどということは一度もなかったのだ。その Umar が気落ちして石の上に座り込み、子供のように泣き出していた。しばらくして Anas bin Nadr という名のもう一人のムスリムがイスラム軍の勝利を信じてぶらぶらと近づいて来た。彼は味方の軍が敵を圧倒しているのを見ており、その前の晩から何も食べていなかったのもので戦場を退いてしまっていたのだ。彼の手にはナツメヤシの実があった。彼は Umar が泣いているのを見て、驚いて訳を尋ねた。「Umar、イスラム軍の大勝利を祝うべき時に泣いているなんて一体どうしたのだ」。

Umar は答えた。「Anas、君には何が起こったかわからないだろう。君は戦いの最初の段階しか見ていなかったのだから。敵が丘の上の戦略的要所を押さえて、私達に猛攻撃をかけたなんて知らないだろうね。勝利を確信していたイスラム軍は散り散りになってしまった。この敵の攻撃に対して対抗する力なんて皆無だったのだ。預言者さまだけがほんの一握りの警護兵と共に全敵と立ち向かわれ、全員が戦いに倒れてしまったのだ」。

「もしこれが事実なら、こんな所で座って泣いていたって何になるのだ」と Anas は言った。「私達の愛する御主人様のいらっしゃる所へ、私達も行かなければ」。

Anas の手には最後のナツメヤシの実が一粒残っていた。これを口の中に放り込もうとしていたが、急にそれを投げ捨てて、「おお、ナツメヤシよ、おまえ以外に、私と樂園を結ぶものが他にあるだろうか」と言った。

そう言うなり Anas は刀を抜いて、敵の軍勢の中へ身を躍らせて行った。1 対 3,000 の戦いであった。彼には余り多くのことは出来なかったが、一人の確固たる信念は多勢に優っていた。勇敢に戦っていた Anas

もついに傷ついて倒れた。それでもまだ彼は戦い続けた。これを受けて、敵の大軍が残酷にもたった一人の彼に襲いかかった。戦いが終って、遺体の身許を確認していったが、Anas の遺体は確認出来なかったと言う。彼の体は 70 もの数にばらばらに切り刻まれていたのだ。ついに Anas の妹が切り取られた指を見つけて「これが私の兄の遺体です」と言って確認をした (Bukhārī)。

聖預言者の周りに円陣を組んでいたが押し返されていたムスリム達は、敵が退くのを見ると再び前進した。彼等は死体の山の中から聖預言者の体を引っ張り出した。Abū Ubaida bin al-Jarrāh は、聖預言者の頬にくい込んでいたリングを自分の歯でくわえて引っ張った。その時彼は歯を 2 本失ってしまった。

しばらくして、聖預言者は意識を取り戻した。彼を取り囲んでいた警備兵が伝令を飛ばして、ムスリム達にもう一度集まるように伝えた。ばらばらになっていた各兵士が再び集結し始めた。彼等は聖預言者を丘の麓迄運んで行った。敵の司令官 Abū Sufyān はこのイスラム軍の残兵を見て、「我等はついにムハンマドを殺したぞ」と大声で叫んだ。この誇らしげな叫びは聖預言者の耳にも届いたが、彼はムスリム達に返事をしないように言った。敵が事実を知って再攻撃をかけ、疲れ切って重傷を負っているムスリム達が再びこの残忍な大軍と戦うはめに陥るのを恐れたからである。イスラム軍から何の応答もないのを見て、Abū Sufyān は聖預言者が死んだのだと確信した。そして最初の叫びに続いて第二弾の叫び声をあげた。「我等は Abū Bakr も殺してやったぞ」。聖預言者は Abū Bakr にも何の応答もしないように命じた。Abū Sufyān は三度目の叫び声をあげた。「Umar も殺してやったぞ」。預言者ムハンマドは Umar にも答えてはならないと命じた。こうして Abū Sufyān は 3 人共殺してやったと叫んだのだ。もう忍耐の限界が来た Umar はついに叫び返した。「我々は三人共生きている。神の御慈悲を受けて、いつでもおまえ達と戦いおまえ達の頭をうち割ってやる」。Abū Sufyān は愛

国的叫びをあげた。「Hubal に栄えあれ。Hubal に栄えあれ。Hubal の神がイスラムにとどめを刺されたのだから」。(Hubal とは、メッカ市民の偶像のことであった) 聖預言者は、唯一なる神であるアッラーに対する敵の傲慢さには耐えられなかった。というのも、彼とムスリム達はアッラーのために自らを犠牲にする覚悟でいたからである。彼は自分自身の死の宣言に対して、訂正しようとはしなかった。彼は Abū Bakr や Umar の死の宣言を訂正することも、戦略的理由で拒否していた。彼の軍勢はもともと数が少なかったが今ではほんのわずかな生存者が残っているだけであった。敵は活気づいた大軍であった。だが今度は違う。敵はアッラーを侮辱したのだ。聖預言者はこのような侮辱には耐えられなかった。彼の心の中が怒りに燃えた。彼は自分を取り囲んでいるムスリム達を怒りに燃えた目で睨みつけ言った。「唯一なる神であるアッラーがこのような侮辱されているというのに、何故言い返しもしせず黙っているのか！」。

「預言者さま、何と言ってやればよいのでしょうか？」とムスリム達は尋ねた。

「言ってやりなさい。アッラーこそが偉大なる全能の神である。アッラーこそが偉大なる全能の神である。誉れ高きは彼のみである。誉れ高きは彼のみである」。

それに従ってムスリム達は叫んだ。この叫び声を聞いて敵は大変驚いた。メッカ軍は結局聖預言者は死んでいなかったのだと思うと悔しさで立ちつくしていた。彼等の目の前にいるのは、傷つき疲れ果てたほんの一握りのムスリムだけであった。このムスリムの息の根を止めるのは容易だった。だが敢えて再攻撃をしかけるのはやめた。今日のこの勝利に満足して、大喜びをしながら戻って行ったのであった。

Uhud の戦いでは、ムスリムの勝利は一瞬にして敗北に変わってしまった。それでも、この戦いによって聖預言者の真理が更に明らかになっている。戦いに突入する前に、聖預言者が語った預言がこの戦いで成就

したからである。イスラム軍は最初の内は勝っていた。聖預言者の愛する叔父 Hamza が戦いで命を落とした。敵の司令官が早い段階で殺された、聖預言者自身も傷つき、イスラム軍で命を落とした者が多かった。聖預言者が幻影で予告された通りのことがすべて起こったのである。

予告通りのことが起こったのに加え、この戦いでムスリムの忠誠と献身が大いに明らかにされた。その代表的ともいべきものが、歴史に比類なき彼等の態度である。もう既にこれを証明するような話を数々あげて来た。だがもう一つ伝えておくべきエピソードがある。この話こそ正に聖預言者の仲間達が如何に確固たる信念と献身に満ちていたかを示すものである。ほんのわずかなムスリム兵と共に丘の麓へ引き返した時、聖預言者は幾人かの仲間の者達を送り出して、傷ついて戦場に倒れている者達の世話をさせた。一人の仲間が長い間捜しまわって、傷ついたメディナのムスリムを発見した。彼は死にかけていた。その仲間は彼の方にかがみ込み、「あなたに安らぎを」と言った。深手を負ったムスリムは震える手を差し延べ、かけつけてくれた者の手を握り、言った。「誰かが来てくれるのを待っていました」。

「かなり深手を負っているね」とかけつけた者はその兵士に言った。

「何か身内に伝えて欲しいことはないか？」。

「はい、あります」と、死を間近に控えた兵士は言った。「私の身内に安らぎあれと伝えて下さい。そして私はここで死にますが、私の身内達にも守って欲しい大切な預かり物をここに残していきます。その預かり物とは預言者さまのことです。私の身内が命を懸けて彼をお守り申し上げてくれることを望んでいます。そしてこれだけが私のいまわの際の願いだと覚えていて欲しい」(Mu'atta' & Zurqānī)。

死を迎えた人間には、親族に言い残すべきことが沢山あるものだ。だがこの最初の頃のムスリム達は、臨終の時にでも、親族、息子、娘、妻などや財産などについては全く考えが及ばず、心の中にあるのは預言者だけなのであった。彼等は死に臨んでも、聖預言者がこの世の救世主で

あると確信していた。彼等の子供達は、生き残れば何かを成し遂げるであろうが、それは大したことではない。だがもし聖預言者自身を守って自分が死ぬことになっても、彼等は神と人間の両方のために尽くしたことになる。彼等は家族を犠牲にすることは、人類の為に尽くし神に仕えることだと信じていたのであった。自ら死を招き入れることによって、彼等は広い意味で人類の永遠の命を救ったのである。

聖預言者は負傷者、死者、すべてを集めた。負傷者は応急手当を受け、死者は埋葬された。その時に始めて聖預言者は、敵が如何に残虐な仕打ちをムスリムにしたかを知った。彼等はムスリム達の遺体を切り刻み、鼻や耳が切り刻まれている遺体までであったのである。切り刻まれている遺体の中に聖預言者の叔父である Hamza がいた。聖預言者は心を痛め、そして言った。「不信仰者達の行為は、私達が今まで不当だと思って来た扱いを正当化するものである」。彼がこのように言ったのは、不信仰者達を好きなようにさせておき、彼等に哀れみの情をかけてやれという神の命令を受けていたからである。

聖預言者の死の噂、メディナへ

イスラム軍の残兵がまだ町へ戻らないうちに、聖預言者が死にイスラム軍が離散してしまったという噂の方が先にメディナに届いてしまった。女性も子供も狂ったように Uhud へ向かって駆け出した。その多くは戻って来る兵士に出会い、真実を聞かされて引き返した。Banū Dīnār 族の 1 人の女性はそのまま Uhud へ行った。彼女は今度の戦いで夫と父と兄を失ってしまったのだ。一部の人の話によると、彼女は息子まで失ったという。或る帰還兵が彼女と出会い、彼女の父親が死んだことを告げた。彼女はそれに答えて、「父のことは構いません。それより預言者さまのことを教えて下さい」と言った。兵士は聖預言者が生きていることを知っていたので、彼女の質問にすぐには答えず、やはり命を

落とした彼女の兄と夫のことを伝えた。どちらの報告を聞いても彼女は動揺せず、何度も何度も「神から遣わされた預言者さまはどうしていらっしゃるのですか？」と尋ね続けた。これはおかしい言い方であるが、この言葉を言ったのが女性であるということを考慮すれば、それ程おかしい表現には聞こえない。一般に女性は強い感情を持っている。そして女性はよく、死んだ人を表わすのにあたかもまだその人が生きているような表現を使う。もしその人が近い血縁関係にあれば、その人に不平不満をぶつけ、どうして彼が自分を見捨て、面倒も世話もしてくれる人が他にいないままに自分を残していったかと思ってしまう傾向にある。女性がこのような形で愛する人を失った悲しみを表現するのはよくあることである。だからこの女性が使った表現は、聖預言者の死を悲しむ女性にはふさわしいものである。この女性は聖預言者を愛しており、彼が死んだと聞かされた後ですら彼の死を信じようとはしなかったのである。同時に彼女はその知らせを否定もせず、正に女性らしい悲しみにくれて、「神の預言者さまはどうしていらっしゃるのですか？」と尋ね続けたのである。これを言うことによって、彼女は聖預言者が生きているとの確信を主張し、彼のような忠実な指導者が私たちに別離の苦しみを与えるわけがないと述べた。

帰還兵はこの女性が父や兄や夫の死を気にかけていないのを見て、彼女の聖預言者に対する深い愛を悟り、彼女に「預言者さまはあなたの願い通り、無事に生きていらっしゃる」と伝えた。女性は兵士に聖預言者に会わせて欲しいと頼んだ。彼は野原の一角を指で指し示した。女性はそこへ駆けて行って、聖預言者の所へ着くなり彼の上着を手にとってキスをした。そして言った。「私の父も母もあなたのためなら犠牲にもなりましょう。おお、神から遣わされた預言者さま。あなたが生きていらっしゃる限り、私は他の誰を失っても構いません」(Ibn Hishām)。

このように、ムスリム達が男も女も如何に強い不屈の精神と献身的な

心をこの戦いで示していたかがよくわかる。キリスト教作家達は、マグダラのマリアとその仲間達の話の自慢げに語り、彼等の献身と勇気について我々に教えてくれる。マリアとその仲間達は、深夜にユダヤ人達の中をこっそり抜け出てイエスの墓へ出かけて行ったと言う。だが、ここで語られる献身在 Dīnār 族のこのムスリムの女性の献身と比較になるであろうか。

もう一つの別の例えが歴史に残っている。死者の埋葬を済ませ聖預言者がメディナへ戻ると、女性や子供達が彼を迎えにメディナから出て来ていた。聖預言者を乗せたらくだの手綱を引いていたのは、メディナの長である Sa'd bin Mu'adh であった。Sa'd は誇らしげにそのらくだを引っ張っていた。彼の様子はムスリムが結局元気なままの聖預言者を、首尾よくメディナに連れ帰ったことを世界に公然と示しているようであった。Sa'd が進んで行くと、イスラム軍の帰還を出迎えに歩み寄って来る彼の年老いた母の姿が見えた。この老女は視力が非常に弱かった。Sa'd は彼女に気付く、聖預言者の方を振り向いて、「預言者さま、ここに私の母が来ております」と声をかけた。

「彼女をここへ呼びなさい」と聖預言者は答えた。

老女は前へ進み出て、空ろな眼差しで聖預言者の顔を捕らえようとした。ついに聖預言者の顔を見つけ、喜んだ。聖預言者は彼女を見て、「女性よ、あなたの息子 (Sa'd 以外の息子) の死を私は心から悲しんでいる」と言った。

献身的な老女は答えて言った。「ですが、あなた様が生きておいでなのを見ましたから私はすべての不運に耐えられます」。彼女が使ったアラビア語の文字通りの意味は、「私は自分の不運を焼いて、飲み込んでしまいました」ということである (Halbiyyah, vol.2, p.210)。何と深い情愛がこの言葉の中に溢れていることだろう。普通は悲しみが人間を飲み込んでしまうものだ。ましてやここにいるのは、その老いた身の支えとなるべき息子を失った女なのだ。しかし彼女は、悲しみに飲まれること

もなく、彼女自身の方が悲しみを飲み込んでしまったと言ったのだ。聖預言者を守るために息子が死んだという事実を支えにして、彼女は残りの人生を送ったのであろう。

聖預言者はメディナに着いた。この戦いで殺されたムスリムが多く、且つ傷ついた者も多かった。だがまだこの戦いがムスリムの敗北に終わったとは言えない。これまで我々が述べて来た出来事が、逆だと証明している。そしてこれ以上の出来事から Uhud の戦いも他の戦と同様に、ムスリムにとっての大勝利であったことが証明されている。昔のムスリムの歴史をひもとくムスリムであれば、この Uhud の戦いから支えや示唆を得られるであろう。

メディナへ帰還して後、聖預言者は彼の使命遂行の任に戻り、再び信徒達の教育に従事した。しかし、彼の仕事は以前のように何の妨害もなくという訳にはいかなかった。Uhud の後、ユダヤ人の動きはもっと大胆になり、偽善者達の集団も頭を持ち上げて来た。彼等はイスラムを壊滅させるのも、やり方と能力次第であると考え始めたのである。ただ両者は一致団結して努力をすればよかったのである。従って、ユダヤ人は新しく悩ませる方法を取り入れることにした。彼等は悪口雑言を詩にして広め、この方法で聖預言者とその家族を侮辱した。一度、紛争を鎮めるためという口実で、聖預言者がユダヤ人の要塞へ呼び出されたことがあった。ユダヤ人達は彼に石の厚板を落として彼の命を奪うつもりだったのである。聖預言者はこのことについては、前もって神からの警告を受けていた。このように警告を受けるのは聖預言者の常であった。彼は何も言わずに座席を立った。ユダヤ人は後になって、自分達のたくらみを認めた。又別の時にはユダヤ人がムスリムの少女に石を投げつけたことがあり、彼女はひどく苦しみながら死んだ。このようなユダヤ人の態度がムスリムとの関係に緊張を生み、ついにムスリムはユダヤ人と対決せざるを得なくなってしまった。だがムスリムは、ただ彼等をメディナから追い出したいだけであった。二つのユダヤ部族の内、一方はシリア

へ移住した。もう一方の部族に関しては、一部はシリアにそして、一部はメディナの北方にある防備を固めたユダヤの要塞である Khaibar にそれぞれ住みついた。

Uhud と次の戦いまでの平和な時期に、イスラムが信徒に与える影響力の顕著な例が世界に示されることとなった。禁酒のことである。イスラム以前のアラブ社会の状況を説明した時に、アラブ人は的に酔っ払う者である点を指摘した。一日に五回は飲むというのがアラブ人家庭において習慣になっていた。酔って自己を見失うということはアラブ人にはよくあることで、彼等はそれを少しも恥だとは思っていなかった。むしろ美德だと考えていたのである。客の訪問を受ける度に、酒をついで回るのがその家の主婦の勤めであった。このように深く根ざした習慣を人々にやめさせるのは至難の技とも思えた。だがヒジュラの後四年目にして聖預言者は神から禁酒命令を受けた。そしてこの命令が発表されると、ムスリム社会から飲酒の習慣が姿を消したのであった。記録によると飲酒を法律違反とせよ、という啓示を受けると、聖預言者は一人の仲間を呼びにやり、メディナの街中に新しい命令を公布してくるよう命じた。或る Ansārī (メディナのムスリム) の家では、酒宴が催されている最中であった。沢山の人々が招待され、ワインのもてなしを受けていた。大きな瓶が一本空になり、二本目に手がつけられるところであった。酩酊している者が多く、それより多くの数の人々が酩酊一歩手前であった。このような状態でいる時に、神の明利に従い、聖預言者が飲酒を禁止したという誰かの声が彼等の耳に響いて来たのである。酒宴に参加していた者達の内一人が立ち上がり、「禁酒命令が布告されたようだ。本当にそうかどうか調べよう」と言った。もう一人が立ち上がり、持っていた杖でワインが一杯入っていた焼き物の瓶を叩き割り、粉々にしてしまった。そして言った。「まず従おう。それから調べよう。このような布告を耳にすれば充分である。調べている間も飲み続けるのはよいことではない。ワインを道に流し、それから調べてみるのが私達の勤めであ

ある」(Bukhārī & Muslim, Kitāb al - Ashribah)。このムスリムの言葉は正しかった。もし飲酒が禁止されていたのにも関わらずそのまま飲み続けていたとしたら、彼等は罪の意識に苛まれることになったであろう。一方、もし禁酒命令でなかった場合、一度は瓶一杯のワインを道に流してしまったとしても、彼等にとって失うものはそれほど多くはなかったはずである。この布告の後、飲酒の習慣は全ムスリム社会から姿を消した。この革命的ともいえる変化を起こさせるのに、何の特別な努力も運動も要らなかった。この命令を耳にし、いつでもそれに従う覚悟が出来ていることを証明したムスリムは、70 才か 80 才迄長生きした。この禁止令を耳にしながら、その命令に違反するような弱さを見せたムスリムは 1 人としていなかった。もしそのような者がいたとしたら、きっと聖預言者の影響を直接受ける機会がなかった者であろう。アメリカの禁酒法施行運動やヨーロッパで何年にも渡って行なわれている禁酒促進の努力と比較してみるといい。一方では、聖預言者がただ禁酒令を公布しただけで、アラブ人社会に深く根差していた社会悪が根絶してしまった。そしてもう一方では、禁酒が特別の法律でもって施行された。警察や軍隊、税関員や税務官など全員がチームを組んで飲酒の悪習慣をやめさせようと懸命な努力をしたが失敗し、又その失敗を自ら認めざるを得なかった。酔っ払いが勝ち、飲酒の悪習慣はなくならなかったのである。現代のムスリム社会は社会進歩の時代に入っていると言われている。だがこの現在の我々の時代と昔のムスリムの時代とを比較してみると、どちらがこのタイトルにふさわしいと言えるであろうか。我々の時代であろうか。それとも、イスラムがこの偉大なる社会革命をもたらした時代であろうか。

Uhud での出来事は簡単に忘れられるものではなかった。メッカの人々は Uhud を彼等のイスラムに対する初勝利であると考えていた。彼等はこの知らせをアラビア中に公表し、アラブ民族をイスラムに対して奮い立たせる手として利用し、ムスリムは無敵ではないと説得をした。

もしムスリムが繁栄を続けるとしたら、それは彼等自身の強さではなく、アラブ正統派の弱さ故であるとした。アラブの偶像崇拜者の弱さのせいである。もしアラブの偶像崇拜者が一致団結した努力をすれば、ムスリムを征服するのは難しいことでも何でもない。このような宣伝が効を奏して、ムスリムに対する敵意が力を持ち始めた。そしてムスリムを苦しめるという意味では、他のアラブ民族の方がメッカの人々の上に行くようになって来た。ムスリムを公然と攻撃する者まで現れた。一部には不正な手段でもってムスリムに損害を与えようとする動きも始まった。ヒジュラから四年目を迎えた頃、'Adl 族と Qāra 族の二つの部族が代表者を聖預言者の所へ送り、彼等の部族の中にイスラムに傾倒している者が多いことを伝えた。そしてイスラムの教えに熟知した者を彼等の許へ送り、彼等と共に住んで新しい宗教を教えて欲しいと聖預言者に依頼した。実はこの依頼は、イスラムの大敵である Banū Lahyān 族が企てた陰謀であった。二つの部族は大きな報酬の見返りとして、聖預言者にこのような使節を送ったのであった。聖預言者は何の疑いも抱かずこの依頼を引き受けて十人のムスリムを送ってイスラムの教義と信条を指導させることにした。この十人の一行が Banū Lahyān 族の領地に足を踏み入れると、彼等の随行員達はその他の部族民に伝令を送り、彼等が出て来て一行を逮捕するか、或いは殺すように仕向けた。この悪意溢れる提案に二百人の武装した Banū Lahyān 族の男達がムスリムの一行を追跡し、ついに Rajī と呼ばれる場所で彼等に追いついた。この出会いは十人のムスリムに対し、二百人の敵という組み合わせであった。ムスリム達には強い信仰心があった。敵側にはそのようなものは何もなかった。十人のムスリム達は高台に登り、二百人の敵に挑んだ。敵は陰謀を企ててムスリムを征服しようとした。彼等もしムスリム達が降りて来れば命を助けてやると申し出たのだ。しかしその一行の長は、不信仰者達とこの類の約束をして結果がどうなったか充分経験していると答えた。そう言うってから彼等は神の方を向いて祈った。神は、彼等の誓いをよく御

存知であった。神は聖預言者にこのことを予告されてもよかったのではないか。不信仰者達は、ムスリムのこのわずかな集団が譲ろうとしないのを見て取ると、攻撃を開始した。ムスリム達は敗北など考えもせず、必死に戦った。十人中七人が倒れた。残された三人に対して再び不信仰者達は、三人が高台から降りて来さえすれば命を助けてやるという約束を申し出た。この三人は彼等の言葉を信じて降伏した。三人が降伏するが早いか、彼等は三人を縛り上げた。三人の内の一人が、「これがあなたがたの最初の約束違反である。あなたがたが次に何をするかは、神だけが御存知である」と言って、彼等に同行するのを拒否した。不信仰者達はこの犠牲者をあざけり、彼を引きずって行った。しかし彼等はこのたった一人の男が示す抵抗と断固たる態度に余りにも威圧されてしまったので、その場で彼を殺してしまった。残りの二人は彼等に連れて行かれ、メッカのクライシュ族の奴隷として売り飛ばされてしまった。その二人とは Khubaib と Zaid であった。Khubaib を買った者は、彼を殺してバドルの戦いで殺された父親の仇を討ちたいと思っていた。或る日、Khubaib は身支度を整えるためにかみそりを頼んだ。Khubaib がかみそりを持っている所へ、その家の子供が好奇心から彼に近づいて来た。彼はその子を抱き上げ、膝に座らせた。子供の母親はこれを見て恐ろしくなった。彼女の心は罪の意識で一杯になった。二、三日後には殺そうと思っている男が、今ここに危険にもかみそりを持って自分達の子供のすぐ側にいるのである。彼女はきっと Khubaib が子供を殺そうとしているに違いないと思ったのだ。彼女の狼狽した表情に気付いた Khubaib は言った。「私があなたの子供を殺そうとしているとでも思っているのですか。一瞬たりとも、そのような考えは持たないで下さい。そのような悪事を働くなんて私には出来ません。ムスリムは人を騙したりもしません」。女性は Khubaib の正直で真直ぐな態度、振舞いに感銘を受けた。彼女はその後、ずっとこの時のことを覚えていて、Khubaib のような捕虜は見たことがないとよく言っていた。ついにメッカ人達が Khubaib

を広場に引きずり出して公衆の面前で彼を殺す儀式をする日がやって来た。指定の時刻が来た時に、Khubaib は祈りの 2 ラクアを唱える許しを求めた。クライシュ族が許しを与えると Khubaib は公衆が見つめる中で、この世で最後の神への祈りを唱えた。彼が祈りを唱え終った時、彼は祈りを続けたいが、彼が死を恐れていると思われても困るのもう続けなと言った。そして首切り役人の方へ静かに首を差し出した。そうしながら、彼は詩を口ずさんでいた。

私がムスリムとして死ぬ限り、私の首のない死体が右へ倒れようと左へ倒れようと構わない。どうして気にする必要があるろう。

私の死は 神の決められた道である。神がお望みになるならば、バラバラになった私の体はどの部分も神からの祝福を受けられる (Bukhārī)。

Khubaib がこの詩を殆ど言い終えた頃に首切り役人の刀が彼の首に振り降ろされ、彼の首は一方に落ちた。この公開処刑の儀式を見に集まった人々の中に 後にムスリムになった Saeed bin Aamir がいた、Saeed のいる場所で Khubaib の処刑の話が出る度に、いつも彼は発作を起こしたと言われている (Ibn Hishām)。

もう一人の捕虜となった Zaid も処刑のために引きずり出された。集まった見物人の中にメッカの長である Abū Sufyān がいた。Abū Sufyān は Zaid に向かって、「今おまえが置かれている立場をムハンマドに代わってもらえたらいいと思わないか。ムハンマドが我々の手に捕らえられており、おまえが無事に家に居る方がいいと思わないか」と尋ねた。

Zaid は誇らしげに答えた。「何ですって、Abū Sufyān ! あなたは何を言っているのですか。神に誓って申し上げます。預言者さまにメディナの町で絶えず不安におののかせるような日々を送らせる位ならば私は死んだ方がましです」。Abū Sufyān はこのような献身的態度に心動かされずにはいられなかった。彼は驚いた表情で Zaid を見つめ、何の

ためらいもなく、だが慎重な話し方で言った。「神がすべて御存知である。私は聖預言者の仲間が聖預言者に示す愛程、強い愛を他に知らない」(Ibn Hishām, vol. 2)。

ちょうどその頃、Najdの人々が幾人か聖預言者の所へ来て、イスラムを教えてくれるムスリム達を彼等のもとへ送ってくれるように頼んでいた。聖預言者はこの人達を信じてはいなかった。だがその時、偶然にも Āmir 族の長である Abū Barā がメディナの町に来ていた。彼は部族の保証人となり、彼等に何の騒動も起こさせないと聖預言者に請け合った。それで聖預言者は心から聖クルアーンを暗記しているムスリムを70人選び出した。70人の一行が Bi'r Ma'unah に到着すると、その中の一人 Harām bin Malhān が Āmir 族の長 (Barā の甥) を訪ねて、イスラムの伝言を彼に伝えた。表面的にはその部族の者達は Harām を歓迎しているようだった。ところが彼が長と話している間に、一人の男が後ろから忍び寄り、Harām を槍で一突きにした。Harām はその場で息絶えた。槍が彼の首を突き抜ける時、彼は次のように言ったという。「神は偉大なり。カーバ神殿の主は私のすべてを御存知である。私は目的地に達した」(Bukhārī)。このような残酷なやり方で Harām を殺した後、部族の指導者達は部族民を挑発してこの残りのムスリムの伝道者達を攻撃させようとした。「ですが、私達の長である Abū Barā が保証人となって騒動を起こさせないと申し出られたのです。私達にはこの一行を攻撃することは出来ません」と部族民達は答えた。やむを得ず、Āmir 族の長達は、ムスリムの伝道者を頼みに聖預言者の所へ行ってきた二つの部族とその他の部族の助けを借りて、ムスリムの一行を襲撃した。「私達は説教と伝道のために来たのであって、戦いに来たのではない」という偽りのない訴えは何の効果もなかった。彼等はムスリム達を殺戮し始めた。70人が殆ど殺されてしまい、生き残ったのはほんの三人しかいなかった。その三人の内一人は足が不自由で、遭遇戦が始まる前に丘に登っていた。残りの二人はらくだに餌を食べさせる為に森へ行っていた。

森から戻った途端彼等が見たものは、戦場に横たわっている彼等の仲間 66 人の死体であった。二人はお互いに相談をした。そして一人が言った、「とにかく戻って、このことを聖預言者に報告しなければ」。

「私達の預言者さまが私達の指導者にと御指名下さった、団長が殺された場所を去るなんてことは、私には出来ない」。もう一人の方はそう言うのとたった一人で不信仰者達の中へ跳び込んで行き、戦って死んだ。残された者は捕虜となったが部族の長が立てた誓いに従って、後に釈放された。殺されたムスリム一行の中に Abū Bakr が自由にしてやった元奴隷の Āmir bin Fuhaira がいた。彼を殺したのは Jabbār という者であったが、彼も後に改宗してムスリムになった。Jabbār はこのムスリム大虐殺で目覚め、改宗したのであった。

Jabbār は語った。「私が Āmir を殺そうとすると、彼が『神にかけて、私は目的地に達した』と言うのが聞こえた。私は Āmir に、何故ムスリムは死に遭遇すると、そのようなことを言うのかと尋ねた。‘Āmir は、ムスリムは神が定められた死を祝福と勝利だと考えるのだと説明してくれた」。Jabbār はこの答えに非常に感動したのでイスラムを系統だてて研究することにし、ついにムスリムになったのであった (Hishām & Usud al-Ghābbah)。

悪意溢れる陰謀の結果、約 80 人のムスリムが命を失ったという、二つの悲しい事件の知らせが同時にメディナに届いた。殺されたのは普通の人達ではなかった。彼等は聖クルアーンの教えを伝道する人々だった。罪を犯したり、人を傷つけたりするような人々ではなかったのである。彼等は戦いに参加していたのではなかった。神と宗教の名を騙った嘘によって敵の手におびき寄せられてしまったのである。このような事実からイスラムに対する憎悪は絶対的且つ深いものであるということが証明された。一方イスラムに対するムスリムの熱意も、同様に絶対的且つ深いものであった。

Banū Mustaliq との遭遇戦

Uhud の戦いの後、メッカはひどい飢饉に襲われた。聖預言者自身に向けられたメッカの人々のあらゆる憎悪にもかかわらず、又彼に対する敵意を国中に広めようとして彼等が図ったあらゆる陰謀をも無視して、聖預言者は悲惨な状況にあるメッカの貧しい人々を助けようと基金を集めていた。メッカの人々はこのような善意の表現にも、全く心を動かされることもなかった。彼等の敵意は衰えを見せなかったのだ。事実、更に悪くなっていた。今まではムスリムに対して同情的だった部族までが敵意を抱き始めた。このような部族の中に Banū Mustaliq 族がいた。彼等とムスリムの間には良い関係が出来上がっていたのだ。それなのに今ではメディナ攻撃の準備を進めている。聖預言者は彼等の戦闘準備の噂を聞いて、事実を知ろうと人を送った。この男達は戻って来て、その報告には間違いないと確信した。聖預言者は出て行って、この新しい攻撃に立ち向かうことにした。それから彼は軍隊を結成して Banū Mustaliq 族の領地へと率いて行った。イスラム軍が敵軍と出会った時に、聖預言者は戦わず撤退するよう説得しようとした。彼等は拒否した。交戦が始まり、数時間後に敵軍は敗走した。

メッカの不信仰者達は嫌がらせに熱中し、友好的であった部族は敵対視するようになったため、ムスリムの中の偽善者達も思い切ってこの機会にムスリム側について戦いに参加することにした。彼等は恐らく何か嫌がらせをするチャンスがあるに違いないと考えたのであろう。Banū Mustaliq 族との遭遇戦は数時間で終わった。そのため、偽善者達はこの戦いの最中に何も嫌がらせをする機会がなかった。しかし、聖預言者は数日の間 Banū Mustaliq の町に留まることにした。彼の滞在中、井戸から水を引く問題を巡って、メッカ人のムスリムとメディナ人のムスリムとの間に喧嘩が起こった。そのメッカ人は以前奴隷であった者であった。

彼はその相手のメディナ人を殴った。メディナ人は危機感を抱いて、アンサー（Ansār）或いは援助者として知られている仲間のメディナ人に助けを求めて叫んだ。メッカ人の方も危機感を抱き、ムハージールン（Muhājirīn）或いは移住者として知られている仲間のメッカ人に助けを求めて叫んだ。興奮が広がった。何が起こったのか尋ねる者は誰もいなかった。両側の若者達が刀を抜いた。Abdullāh bin Ubayy bin Salūl はこれを天の賜と受け取り、火に油を注ぐことにした。「あなたがたは移住者達を甘やかしすぎたのだ。彼等を厚遇しすぎたから、彼等はうぬぼれてしまったのだ。今や彼等はあらゆる面であなたがたを支配しようとしているのだぞ」。この言葉は正に Abdullah が望んだ通りの結果をもたらしてもよかった。この喧嘩は、かなりの規模に膨らんでしまったかも知れなかった。ところが、そうはならなかったのである。Abdullah は彼の悪意ある言葉の効果を評価する上で間違いを犯してしまった。でも援助者達は彼の説得に応じたのだと思い込んで、彼は言いすぎてしまった。

「メディナへ戻ろう。そうして、市民の中で最も栄誉ある者が最も軽蔑すべき者を追い払うであろう（Bukhārī）」。

最も栄誉ある市民とは彼自身を指し、最も軽蔑すべき者とは聖預言者のことであった。彼がこの言葉を使った途端に、信仰心のあるムスリム達はこのたくらみを見抜くことが出来た。

彼等が聞いたのは無邪気な演説ではなく、彼等を墮落させる悪魔の演説だと彼等は言った。一人の若者が立ち上がり、彼の叔父を通して聖預言者にこの一件を報告した。聖預言者は Abdullah bin Ubayy bin Salūl とその友人を呼んで何が起こったのかを尋ねた。Abdullah とその友人は、この事件において彼等にかぶせられた責任を負うべきようなことは何もしていないと断言した。聖預言者は何も言わなかった。だが事実は段々、人々の知るところとなった。やがてこの話は Abdullah bin Ubayy bin Salūl 自身の息子である Abdullah の耳にも入った。若い

Abdullah はすぐに聖預言者に会い、「預言者さま、私の父はあなた様に屈辱を与えました。罰として彼に死をお命じ下さい。もし、そうお決めになるのなら、私の手で父を処刑するよう私にお命じいただきたいのです。もし、あなたが誰か他の者にお命じになって父を処刑させてしまわれるならば、私はその人を殺して父の仇を討つことになってしまおうでしょう。恐らく私はこのようにして神の御不興を招いてしまおうでしょう」と訴えた。

「だが、私にはそのつもりはない」と預言者ムハンマドは答えた。「私はあなたの父親に哀れみと思いやりをもって接するつもりだ」。若き Abdullah は父親の不誠実さと無礼さを聖預言者の哀れみと思いやりとに比較して、父親に対するうっ積した怒りではちきれんばかりになってメディナへ向けて父親を追った。彼は途中で父親を呼びとめ、父親が聖預言者を非難して言った言葉を撤回しない限り、もうこれ以上メディナへの街道を進ませないと言った。「『預言者は軽蔑すべき者で あなたが榮譽ある者だ』と言ったその口で『預言者さまが榮譽あるお方で、あなたが軽蔑すべき者だ。』と言い直して下さい。あなたがそうおっしゃるまで、私はあなたを行かせません」Abdullah bin Ubayy bin Salūl は驚き、恐ろしくなって、「息子よ、聖預言者様が榮譽あるお方で、私が軽蔑すべき者だという事を認めよう」と言った。それで、若き Abdullāh は父親を許した (Ibn Hishām, vol.12)。

悪意溢れる陰謀と殺人計画のためにメディナを追放された二つのユダヤ部族の話は前に述べた。その二つの内、Banū Nadīr 族の一部はシリアに、そして一部はメディナの北方にある Khaibar という町に移住した。Khaibar はアラビアにある堅固な要塞で固められたユダヤ人の中心地であった。その地に移住したユダヤ人達はムスリムに対するアラブ人の反感をあおり始めた。メッカ人は既にイスラムの大敵であった。ムスリムに対するアラブ人の敵意をあおるのに何の新しい挑発も要らなかった。同じように、メッカ人と友好関係を結んでいる Najd の Ghatfān 族

も、ムスリムに対して敵意を抱いていた。十分な時間をかけて計略を練った末、ムスリムと戦うためにアラブ部族の連合体が組織された。この連合体に加わっていたのは、メッカ人、メッカ周辺に住んでいる諸部族、Najd の諸部族、そしてメディナの北方の領土に住んでいる諸部族であった。

濠の戦い

ヒジュラから五年目の年、大軍が結成された。歴史家の推定によれば、この大軍の規模は一万から二万四千人だと言われている。だがアラブの様々な部族から結成された連合軍が一万人ということはありません。二万四千という数字の方が真実に近いと思われる。この大軍の攻撃目標となっているメディナの町は小さく、アラビア中から一斉攻撃を受けたらひとたまりもなかった。その当時の人口は、男性が（老人、若者、子供の全部を含めて）3,000 人強しかいなかった。この人口に対して、敵は戦いに熟練した屈強の者を二万人から二万四千人軍勢に加えていたのである。そして（国中の各地から集められたとは言え）彼等は充分に選り抜かれた人材を揃えた軍隊なのであった。一方、この巨大な軍勢に立ち向かうために召集出来るメディナの軍勢には、あらゆる年代の男達が入っていた。メディナのイスラム軍勢が如何に強敵と戦わなければならないかよくわかるであろう。これ程不公平な遭遇戦はなかった。二万から二万四千の敵に対して、かろうじてイスラム軍は 3,000 人なのだ。然も、前にも述べたようにその中には町中の男達が老いも若きも入っているのだった。聖預言者は巨大な敵の軍備を聞いて、会議を開き皆に意見を求めた。この相談を受けた者の中に、ペルシャ人の Salmān がいた。彼はペルシャからムスリムに改宗した最初の人物であった。聖預言者は Salmān に、もしペルシャ人が巨大な敵から町を守らなければならないのなら、どうするかを尋ねた。「もし町が要塞でがっちり固められて

いないとしたら、その町の力は非常に弱いものになります」と Salmān は言った。「私達の国の習慣からいきますと、町の周囲に濠を掘って内側から守るように致します」。預言者ムハンマドはその考えを取り入れた。メディナの片側には丘陵が続いている。この丘陵でそちらの側の守りは自然に出来ている。もう一方の側は道路が何本も交差している所で、人口の密集地である。町のこの方面から気付かない内に敵から攻撃を受けるとは考えられなかった。三番目の側には家々とヤシの林があり、少し離れた所には Banū Quraizah 族というユダヤ部族の要塞があった。Banū Quraizah 族はムスリムと平和協定を結んでいた。だから、こちらの側も敵の攻撃からは安全であると考えられた。四番目の側は広い平原となっており、敵が攻撃をしかけて来る恐れや可能性が一番高いのはこちらの側であった。そのため、聖預言者はこの開けた無防備な側に濠を掘り、敵からの不意打ちを受けないようにすることを決定した。この作業はムスリム達が分担をした。十人の男が十ヤードずつの濠を掘るのであった。十分な深さと幅のある、全長一マイルの濠を掘らなければならなかった。

濠を掘る作業中、ムスリムの土木工兵は大きな岩に突き当たった。その岩は硬くてびくともしなかった。この岩のことを聖預言者に報告すると、彼はすぐにその場へ向かった。聖預言者はつるはしを取って、思い切り岩を叩いた。火花が散り、彼は大声で「Allāhu Akubar !」と叫んだ。もう一度岩を打った。再び火花が散り、又も聖預言者は「Allāhu Akubar !」と叫んだ。三度目を打った。再び火花が散って、聖預言者は「Allāhu Akubar !」と叫んだ。するとその岩は粉々になってしまった。仲間の者達はこれは一体どういうことなのか、聖預言者に尋ねた。何故彼は何度も何度も「Allāhu Akubar !」と言ったのであろうか。

「私がこのつるはしでこの岩を三度打ったら、三度ともイスラムの未来の栄光の光景が啓示されるのを見たのだ。最初の火花が散った時には、私はローマ帝国のシリアの宮殿の数々を見た。そして私にその宮殿の鍵

が渡されたのである。二度目に私が見たものは、Madāin にある燈火の灯されたペルシャの宮殿であった。そして私はペルシャ帝国の鍵をも渡された。三番目は San‘ā の門で、イエメン王国の鍵が私に渡された。これらは神との契約であるから、あなたがたもこの契約を信頼してくれると私は信じている。敵はあなたがたに何の危害をも加えられないであろう」(Zurqānī, vol.2 & Barī, vol.7)。ムスリム達の限られた労働力では、掘り上げた壕も戦略的見地から見れば、完全なものとは言えなかった。だが少なくとも、敵が突然町中へ侵入するのだけは防げるように思えた。この壕が越せないものではないということは、戦いにおいて次々に起こった出来事が十分に証明した。他のどの方角も、敵が町を攻撃するには不適當であった。

だから、アラビアの諸部族から結成された巨大な軍隊は、やはり壕の側からメディナ侵略を開始した。これを知った聖預言者は 1,200 人の軍勢を率いて防御態勢に入った。そして残りの兵達を町の他の部分を警備するために配置した。

この壕の守りについての推定人員数は、歴史家によって意見が異なっている。3,000 人だと言う者もいれば、1,200 人から 1,300 人だと言う者もいる。又 700 人だという意見もある。このように推定数に余りにも大きな格差があるため、妥協線を決めるのは中々困難である。だが証拠の重要性から考えて得た我々の結論は、壕を守るのに専念したムスリムの推定数は、三つとも正しいということである。この三つの数は、この戦いの進行状況において、それぞれ別の段階を指しているのである。

メディナ襲われる

既に述べたように、Uhud で偽善者達が撤退した後、戦場に残されたムスリムの数は 700 人であった。壕の戦いは、Uhud の戦いから数えてまだ二年しか経っていない時期に起こった。この二年間で大勢の者がム

スリムに加入したという歴史史料は何も残っていない。この間にムスリムの戦闘員の数が700から3,000に増加したということは考えられない。同時にUhudの戦いと壕の戦いとの間に、ムスリムの戦闘員の数がかく増加しなかったというの、やはり理屈に合わない。イスラムは常に信徒の数を増し続けていたのだから、Uhudの戦いと壕の戦いとの間にも、少しの増加は見られたとすべきである。このような二面を考慮してみると、壕の戦いにおけるムスリムの戦闘員数は推定、1,200人であると見なすのが正しい。それでは何故一部の権威者は3,000人と言ひ、又別の権威者は700人だと言ったのであろうか。恐らくこの二つの数字は戦いにおいて、別々の二つの段階を示しているのであろう。壕の戦いは三段階に分かれて行なわれた。最初の段階は、敵がまだメディナに近づいておらず、ムスリム達が懸命に壕を掘っていた頃であつた。この時期には、掘り出した土を遠くへ捨てるために子供達も、そしてある程度までは女達までが手伝いに加つたと仮定してもよいと思われる。だから壕を掘っていた時には、全部で3,000人のムスリムが働いていたと思われる。その数には子供も女も含まれるのだ。子供達は土運びの手伝いが出来たし、あらゆるムスリムの布教活動において常に男達と競い合つていた女達は、壕を掘ることに関わる色々な補助的仕事で役に立っていたに違ひない。この想定を裏付ける証拠がある。壕の掘削が始まつた時、子供達まで集まるように言われた。実質的には全住人が壕の掘削に参加したのである。だが敵がやつて来て戦いが始まるとすぐ、聖預言者は15才未満の少年達に、作業場から姿を隠すように命じた。15才以上の少年は彼等が強く望むならば、戦いに参加することを許された(Halbiyyah, vol. 2)。このことから、壕の掘削段階におけるムスリムの数は戦闘開始時よりもずっと多かつたことが明らかになる。戦闘時にはまだ幼く弱い少年達は皆、後へ引き下がっていたのだ。戦いに参加したムスリムの数を3,000とする見方は、壕の掘削段階を示しており、1,200とする見方は大人の男だけが参加した実際の戦闘の段階を示しているの

である。この数を 700 とする見方についてだけは、まだ説明が済んでいないが、この推定数もやはり正しいものと我々は見ている。この数字を出しているのは Ibn Is'hāq という非常に権威のある人物であり、彼のこの推定は他ならぬ Ibn Hazm の支持を得ているのである。この推定に異議を申し立てるのも難しい。幸いなことにこの戦いのその他の詳細部分に目を向けると、この推定も正しいことがわかる。Banū Quraizah 族が約束を破って敵軍に味方し、メディナを後方から攻撃すると決定した時、彼等の悪意の知らせを受けた聖預言者が Banū Quraizah 族の攻撃にさらされる側の町の各部所に警備兵を配備したことを示す証拠が残っている。Banū Quraizah 族はムスリムと同盟関係にあったのだから、最初はメディナのその辺りは無防備の状態のままになっていた。そして Banū Quraizah 族が自分達のいる側からは敵に攻撃をさせないことになっていたのだ。Banū Quraizah 族の背信が聖預言者に報告され、同盟があるから町のこの辺りなら安全だと思われていたムスリムの女達に身の危険が迫っていることが明らかになった時、聖預言者は 200 人と 300 人の二つの軍を送って、新しく危険にさらされた町のこの辺り二ヶ所の警備をさせることにしたことは知られている。聖預言者は時々「Allāh Akbar！」と叫ぶように彼等に命じた。そうすればムスリム本軍の者達に、ムスリムの女達は無事だということがわかるからであった。だから壕の戦いにおけるムスリムの戦闘員の数は 700 人だとする Ibn Is'hāq の推定は正しいことになる。もし 1,200 人中 500 人が町の後方の警備として配置されたとすれば、残るのは 700 人である。この結果、壕の戦いにおけるイスラム軍の数に関しては、三つの推定がそれぞれ全部正しいということがわかった。

従って、聖預言者が壕の警備においた数は 700 人であった。確かに壕は掘られていた。だがこれ程大きな敵軍と対決し追い払うのは、壕の助けを得ても殆ど不可能であった。それでもムスリム達は神を信じ、神の助けがあると確信していた。ムスリムの少数の軍勢は敵の大軍を待ち受

け、一方女や子供達は町の安全そうな所二箇所に分れて送られていた。敵は濠に近づいて驚いた。アラブ人の戦いにおいて、今までにこのような戦略が用いられたことはなかったからである。それで彼等は濠の自分達の側に陣を張り、メディナ攻略及び侵入の方法を検討することにした。一方は濠で守られていた。二番目の側面は丘陵地であり、自然の防壁になっていた。三番目の側面にあるのは石の家々と林である。町のどの箇所からも急襲を仕掛けることは無理であった。敵の司令官達はお互いに協議をして、今でもメディナに住んでいるユダヤ部族の Banū Quraizah 族にムスリムとの同盟の手を切らせ、アラブ連合軍のメディナ猛攻撃に加わるよう頼んでみる必要があるという決定を下した。Banū Quraizah 族の助けがなければ、彼等のメディナ攻略への道は閉ざされることになってしまうのであった。最終的に Abū Sufyān は、追放された Banū Nadir 族の長であり、アラブ部族の反メディナ感情を中心となって扇動して来た Huyai bin Akhtab を選び出し、後方からメディナ攻略のための便宜を図ってくれるよう Banū Quraizah 族に交渉する役を命じた。Huyai bin Akhtab は Banū Quraizah 族の指導者に会うため、ユダヤの要塞へ出かけて行った。最初、彼等は面会を拒んだ。だが彼が、これはムスリムを打ち負かす絶好の時であると説明すると、この言葉が Quraizah 族の一人、Kab の心を捉えた。彼は、アラビア中がムスリムを攻撃し、破壊するために立ち上がったのだと説明した。濠の反対側に駐留している軍隊は、軍隊というものではなく、果てしなく広がる屈強の男達の海であり、イスラム軍が抵抗してもとても歯が立たないように思えた。最終的に合意に到り、不信仰者達の軍勢が濠を強行突破したらすぐに、Banū Quraizah 族は、聖預言者が安全のために女性と子供を送り込んだメディナのその場所の攻撃を仕掛けることになった。この計画でいけば、イスラム軍の抵抗も打ち砕かれ、男性も女性も子供もメディナのムスリム達全員が死の罠にはめられることになると思われた。もし、この計画がほんの部分的にでも成功していたら、イスラム軍は大きな犠

牲を払わされ、彼等にとってすべてが困難になっていたであろう。この死の罠から逃れる道はなかったであろう。

Banū Quraizah 族の裏切り

前にも述べた通り、Banū Quraiza 族は、ムスリムと同盟を結んでいた。たとえ彼等がムスリム側に味方にして戦いに参加しなかったとしても、少なくともムスリム側について、敵の行く手をはばんでくれたであろう。だから、ムスリムは町のその方面だけは、無防備のままにしておいたのであった。Banū Quraiza 族は、ムスリムが自分達の忠誠を信じていることを知っていた。そのため、アラブ連合軍に味方すると決めた時には、イスラム軍が警戒心を強めて、Banū Quraiza 族側がいる方面の市中警備を固めるのを恐れて、表向きはアラブ側に味方しているようには見せないという点で合意を得た。正に危険極まりない謀略であった。

イスラム軍を二方面から攻撃することで話がつき、アラブ軍は濠への攻撃を開始した。数日が経過したが、何も起こらなかった。それで、彼等は高台に射手を配置して、濠を守っているムスリム達に矢を浴びせかけるよう命ずることを思いついた。射手は短い間隔をおいて高台に並んだ。ムスリムの防衛態勢が少しでも崩れるきざしを見せたら、すぐに不信仰者達は、第一級の騎馬兵の助けを借りて、濠を渡ろうと思っていた。この攻撃を繰り返せば、濠のムスリム側の岸を一角でも占領出来るようになる。そこを拠点として、充分訓練をつんだ兵隊がメディナの総攻撃を試みた。ムスリム防衛軍の方は、休む間もなく戦いを続けねばならなかった。ある日、彼等は敵を撃退しようと余りにも必死になっていたため、定められた時間にすべき毎日の祈りが一部出来ないことがあった。聖預言者は、これを大いに嘆き、「神よ、異教徒達を罰して下さい。彼等のために、私達の祈りが乱されてしまいました」と言った。この出来事から、如何に敵の攻撃が激しかったかがわかる。又、聖預言者の首尾

一貫した関心事は常に神への崇拜だけであることもよくわかる。メディナは、四方八方を包囲されていた。男性だけではなく、女性も子供も死と隣り合わせであった。町中が不安にとりつかれていた。ところが聖預言者は、依然として、定められた時間に日々の祈りを奉げることを考えていた。ムスリムはキリスト教徒やヒンドゥー教徒のように、週に一度だけ、神に祈りを奉げるのではない。一日に五回礼拝をする義務があるのだ。戦いの最中には、一日に一度公けの礼拝をすることすら困難である。まして、一日に五回礼拝のために集うことがいかに困難かは言うまでもない。それでも聖預言者は、戦闘中でも一日五回の礼拝集会を呼びかけたのである。このような礼拝集会が一度でも敵の攻撃のため乱されたりすると、彼の心は痛んだ。

戦いの話に戻ろう。敵が前面からの攻撃を仕掛けている間、Banū Quraiza 族は、後方からの攻撃計画を練っていた。しかもムスリムの人々に警戒心を抱かせない方法を考えていたのである。彼等は後方から町へ侵入し、そこに避難している女性や子供を殺してしまおうと思っていた。Banū Quraiza 族は、スパイを送って、女性や子供を守るための警備兵が配置されているかどうか、そして、もし配置されているとしたら、その数はどれ位かを調べさせた。敵が特別目標と定めていたのは家族用に用意された特別区域であった。スパイがやって来てこの防御区域をうろつき、探るような目つきであたりを見まわし始めた。スパイ活動中のこの男を聖預言者の叔母 Safiyyah が見咎めた。その時、警備についていた男性はたった一人しかおらず、しかも彼は気分が優れなかった。Safiyyah は、彼女が見たことを彼に報告し、町のこの地域にいる女性や子供が何如に無防備な状態にいるかを敵に報告される前にこのスパイを捕まえるように提案した。この病気のムスリムが拒否したため、彼女は杖を手にとって、この招かれざる訪問者と戦い始めた。他の女性達の助けを得て首尾よくこのスパイを捕り押え、殺すことが出来た。後になって、この男が Banū Quraiza 族から送られた本物のスパイである

ことが判明した。イスラム軍は神経質になり、今まで全く安全だと思っていた方面から別の攻撃があるのではないかと不安になり出した。だが、前面からの攻撃が余りにも激しいため、これに対抗するにはムスリム全軍の力が必要であった。それにもかかわらず、聖預言者は軍勢の一部を裂いて、女や子供の警護にあたらせることにした。この戦いにおけるイスラム軍の数について検討した箇所ですすでに述べたように、聖預言者は、1200 人中の 500 人を町の中の女性達を警護する任につかせたのであった。そのため、一万八千から二万の敵軍と戦うために、濠の守りに残った兵士は 700 人しかいなかったのである。ムスリムの中には、戦わなければならない相手が余りにも強大であるために、恐怖を覚える者も多かった。彼等は聖預言者の所へ行行って、この状況が何如に厳しいものであるか、そして町を救うのが何如に不可能に思えるかを訴えた。彼等は聖預言者に祈ってくれるよう頼んだ。彼等は、又、聖預言者にこのような場合に奉げるべき特別の祈りを教えて欲しいと懇願した。聖預言者は答えた。「恐れてはいけない。ただ、神に祈りなさい。そうすれば、神はあなたがたが気弱にならないよう守り、あなたがたの心を強くし、あなたがたの不安を救って下さるであろう」。聖預言者自身も次のような言葉で祈った。

主よ！汝は私に聖クルアーンを啓示して下さいました。汝は、誰にも弁明をお求めになりません。今、これ程の大軍が私達を攻撃しに来ております。彼等を打ち負かして下さい。主よ！もう一度お願い致します。彼等を打ち負かして下さい。私達に彼等を支配させて下さい。そして、彼等の悪の意図をくつがえさせて下さい (Bukhari)。

更に続けて、

主よ！悲惨さと苦悩の中で汝に向かって叫び続ける者達の声をお聞き届けて下さい。そして、不安に打ちひしがれた者達にお答え下さい。苦痛と不安と恐れから私をお救い下さい。汝は私や私の仲間

がどれほどの強敵と戦っているかよく御存知のはずです (Zurqāni)。

イスラム軍の中でも、偽善者達のいらだちは、他の者より更に大きかった。味方の榮譽、そして自分達の町や女性や子供の安全に対する関心は、すべて彼等の心の中から消え去ってしまった。だが味方の前で屈辱を味わうのだけは嫌であった。だから、一人又一人とあてにならない言い訳をしながらイスラム軍を去って行った。聖クルアーン (33:14) に次のように書かれている。

またその時、彼等の中の一団は云えり「ヤスリブの衆よ、お前たちは留まるべからず、されば引き返せ」。而して、彼等の一団は「我等の家は無防備なり」と云い、預言者に許可を求めんとしたり。そは無防備に非ざりしにもかかわらず。彼等はただ逃走を望みたるに外ならず。

この時の戦況とムスリムが立たされていた立場は、聖クルアーンの中では次のような言葉で表現されている。

彼等が、お前達^のの上方からも、またお前達^のの下方からもお前たちに（襲って）来たりし時、而して眼が凝然し、心臓は喉もとまでのぼりし時（を思え）。されば、お前たちはアッラーについてさまざまなる憶測をなしたるなり。かくて信徒達は試みられ、激しく揺さぶられたり。而してその時、偽信者ども並びにその心に病のある者どもは云えり、「アッラーとその使徒が我等に約束したるは惑わしに外ならず」。またその時、彼等の中の一団は云えり「ヤスリブの衆よ、お前たちは留まるべからず、されば引き返せ」。而して、彼等の一団は「我等の家は無防備なり」と云い、預言者に許可を求めんとしたり。そは無防備に非ざりしにもかかわらず。彼等はただ逃走を望みたるに外ならず (33:11-14)。

この時、ムスリムは前面からはアラブ部族の連合軍に、そして後方からは、ユダヤ部族に攻撃されているかを思い出した。彼等はその時に、如何に悲惨な状況にいるかを思い知ったのだ。彼等の目は落ちつかず、心臓は口許まで上って来たかのように感じた。彼等は大きなゆさぶりを

かけられていた。偽善者達や精神的な病気を持っている者達は、「神とその使徒の言う偽の約束に踊らされていたのだ」などと言い出した。彼等は、イスラム軍の氣力をくじけされるような言葉迄言い出した。「もう戦いは沢山だ。逃げるより他に手はない」。

この時に、本当に信心深い者達が如何にふるまったかも、聖クルアーンの中に書かれている。

而して、信徒たちが連合軍を見たるや、彼等は云えり「こはアッラー並びにその使徒が我等に約束せしものなり。されば、アッラー並びにその使徒は眞實を語れり」と。而して、そは彼等をして信仰と帰依の念において深めたるに外ならず。信徒たちの中にはアッラーと結びしその約束を実現せし者あり。されば、彼等の中その誓いを全うせし者在りて、また彼等の中まだ待機する者も在り。而して彼等はいささかも変身せざりき(33:23,24)。

つまり、本当に信心深い者は偽善者や弱い者とは全く違っていたのである。彼等が巨大な敵軍を目の前にした時に思い出したのは、もっと前に神とその預言者が彼等に伝えた内容であった。このアラビアの部族達による一斉攻撃も、彼等にとっては神とその預言者の眞理を証明する証でしかなかったのである。本当に信心深い者達は揺るがなかった。むしろ、服従心と忠誠心を強めたのである。本当に信心深い者達は、神との契約を守っていた。既に死という形でもって、人生の目標地に達していたものもいれば、神に定められた死を待ち、目標を達成しようとしているものもいた。

敵は、激しく且つ間断なく濠への攻撃を繰り返した。時として濠を渡るのに成功する場合もあった。ある日、敵の中心的存在である將軍達が数人濠を渡るのに成功した。だが、非常に勇敢なムスリムの反撃に遭って、引き返さざるを得なくなってしまった。この遭遇戦において、不信仰者達の大指導者、Naufal が命を落とした。この指導者はあまりに偉大な人物であったので、不信仰者達は、彼の遺体に何かの形で恥辱を与

えられては我慢ができないと思った。そのため、彼等は聖預言者に手紙を送り、もし聖預言者が、この長の遺体を返してくれるならば、一万ディルハムを支払うと伝えた。遺体返却を求める見返り金としては、高額であった。この申し出は罪の意識から出たものであった。不信仰者達は Uhud の戦いでムスリムの遺体を切り刻んだりしていたため、イスラム軍も同じことをするに違いないと思ったのである。だが、イスラムの教えは違っていた。イスラムでは、遺体を傷つけるのは、はっきりと禁じられている。聖預言者は、この手紙の申し出を受けた時に言った。「どうして、私達にこの遺体が必要でしょうか。これをお返しするからと言って、替わりにいただきたいと思うものは何もありません。お望みとあらば、どうぞこの遺体をお引き取り下さい」(Zurqānī, Vol.2, p.114)。

ミュアー著「聖預言者の生涯」(ロンドンー 1978 年、p.322)にムスリムの攻撃の激しさについて、有弁に物語ってある箇所がある。ここに引用してもさしつかえないだろう。

次の日の朝、聖預言者は敵が全軍をあげて、彼に向かって攻めて来るのに気がついた。敵の作戦をくじけさせるには、ムスリム側の最大の活動と休まない警戒心が必要であった。今度は、総攻撃をしかけて来るだろう。その後は、分隊毎に別れて、猛烈な勢いで、狂ったように、様々な箇所を襲い続けるであろう。そして、ついには、ムスリム側の最も手薄な場所に軍勢を集めて、とっておきの矢の雨を降らせて援護射撃をし、濠の強行突破を計るであろう。Khālid や、Amru といった名高い指揮者に率いられて、何度も何度も激しい突撃が町に、そして、聖預言者のテントに向けて繰り返された。だが、こういった突撃も絶え間ない反撃と弱まることのない矢の雨を受けて退かざるを得ないのであった。この状態が終日続いた。聖預言者の軍は、長く広がる戦線を防禦するのが精一杯であり、ほっとする間もなかった。夜になっても Khālid が強力な騎馬隊を使って警戒体制をゆるめる隙を与えず、必要となれば時々間を置きながら、防衛戦線を脅かし、部隊を繰り出して来た。だが、敵のあ

らゆる努力は何も報われなかった。濠を渡ることはできなかったのである。

戦いは二日間続いた。それでも、まだ接近戦やひどい流血戦は起こらなかった。24時間の戦闘の結果、両者の損害は敵側死者3名、ムスリム側死者5名だけであった。Aus族の長であり、聖預言者の敬虔な信者でもあるSad bin Mu'ādhが負傷した。しかし濠への攻撃が繰り返されて、受けたムスリム側の損害は大きかった。そして、この損害が敵側の今後の攻撃を更に楽なものにさせてしまった。勇気と忠誠を示す素晴らしい光景が見られた。寒い夜のことであった。恐らくアラビアで一番寒い夜だったであろう。聖預言者の奥方、アーイシャを伝える次のような話しがある。聖預言者は眠りから起き上がって、何度も濠の損害を受けた箇所を見回りに行った。彼は、ひどく疲れを感じて寢床に戻った。だが、少し体を暖めると又濠の見回りに出かけた。ある日、動けないと思われる程疲れてしまった。それで、誰か献身的なムスリムが来て、夜の寒さの中で濠の見回りをするという肉体労働から自分を解放してくれるといいのだが、と言った。間もなく、誰かの声が聞こえた。Sad bin waqqāsであった。

聖預言者は、彼に何故来たのか尋ねた。

「聖預言者をお守りするためです」とSadは答えた。

「私個人を警護する必要はない」と聖預言者は言った。「濠の一部が破壊されている。ムスリム達の安全のためにそこを守りに行きなさい」。Sadが出かけて行っただので、聖預言者は眠ることができた。（ここに偶然の一致がある。聖預言者がメディナに到着し、彼の身に危険が迫っていた時に、自ら、彼の警護を申し出たのもSadであった。）この苦難の二日間の内、別の場合には、聖預言者は武器の音を聞いた。「誰か？」と彼は尋ねた。「Ibād bin Bishrです」と答えが返って来た。

「他に誰かいるのか？」と聖預言者は尋ねた。

「はい、仲間達がおります。私達であなたのテントをお守りします」

と 'Ibād は答えた。

「私のテントは構わなくてよろしい。不信仰者達が濠を渡ろうと試みている。行って彼等と戦って来なさい」(Halbiyyah, Vol. 2)。

前にも述べた通り、ユダヤ人達はこっそりと町に侵入しようとしていた。ユダヤ人のスパイは活動中に命を落とした。彼等は自分達の陰謀が発覚したのを知ると、公然とアラブ連合軍の援助を開始した。だが、後方からの一斉攻撃はなされなかった。こちら側の平原は幅が狭く、ムスリムの警備兵が配置されていたため、大規模な攻撃は不可能だったのである。しかし数日後、ユダヤ人と異教徒の連合軍は、ムスリムに対して同時急襲することを決定した。

連合軍、四散

しかし、この危険極まりない計画も奇跡的に神によって阻止された。それはこのようにして起こった。Ghatfan 族の Nu'aim という男は、イスラムに傾倒するようになった。彼は異教徒の軍勢と共にやって来てはいたが、ムスリムを助ける機会を捜していた。たった一人では、大したことは出来なかった。しかし、ユダヤ人がアラブ人と一致協力することになり、ムスリムに死や破滅が迫っているのを見て、Nu'aim はムスリムを救うために、出来るだけのことをしようと決心した。彼は、Banū Quraiza 族の所へ行って長達に話しかけた。もしアラブ軍が逃げ出したら、ムスリムはどうすると思うか。ユダヤ人はムスリムと同盟関係にあるのだから、同盟の誓いを破った者に与えられる罰を受ける覚悟をしておくべきではないのか。この質問にユダヤ人の指導者は、ふるえ上がった。彼等は、Nu'aim にどうしたらいいのか尋ねた。Nu'aim はユダヤ人に 70 人の異教徒達を人質として求めるように忠告した。もし異教徒達が一斉攻撃を本気になって考えているのならば、この要求を蹴ることはないであろう。ユダヤ人側は、自分達が後方からイスラム軍を攻撃して

いる間に、この70人に彼等の戦略的要所を守ってもらいたいと言えばよい。ユダヤ人との話し合いが済むと Nu`aim は今度は異教徒の指導者達の所へ行った。そして、もしユダヤ人が彼等の同盟を裏切ったらどうするつもりか、彼等に尋ねた。つまり、ムスリム達を宥めるためには、異教徒の人質が必要だとユダヤ人が要求し、そしてそのままムスリムの手に彼等を引き渡してしまったらどうするつもりか。ユダヤ人の誠実さを試し、それから、すぐにもう行われている戦闘に参加するよう要請することが大切ではないか。異教徒の指導者達はこの忠告に強く印象づけられた。すぐに、行動を起こし、連合軍側に攻撃計画実施態勢が整った今、ユダヤ人側は後方からのメディナ攻撃をする気があるかどうか、ユダヤ人に尋ねる使者を送った。ユダヤ人側からの返答は「まず翌日は彼等の安息日であるから、その日には戦えないというものであった。そして次に彼等自身はメディナの住人であり、アラブ連合軍はすべて他の地の者である。もし、アラブ人が戦闘から逃げ出したら、ユダヤ人は一体どうなるのか。だからアラブは70人を人質として差し出すべきである。そうすれば、ユダヤ人は攻撃計画実施態勢に入ろう」であった。疑惑の念がすでに浮かび上がった。アラブ側はユダヤ側の要求を断った。もしユダヤ側がアラブ側との同盟に誠意を持っているのならば、このような申し入れをするはずがなかった。疑惑が勇気をくじけさせ、アラブ軍は熱意を失い、夜になると疑いと難題に頭を悩ませながら、眠りについた。上官も部下も意気消沈した様子でそれぞれのテントに集まった。またムスリム側にとっては天の助けか、奇跡が起こった。激しい風が吹き始めたのである。天幕が吹きとばされ、料理用の鍋が火の上でひっくり返し、方々のたき火の火が消えてしまった。異教徒達は、夜中火を消してはいけないと信じていた。赤々と燃えるたき火は吉兆であり、火が消えるのは凶兆であった。テントの前のたき火が消え始めた時、それを凶兆だと見る者達は、今日のところはひとまず撤退し、又改めて集まればよいと思うようになった。異教徒の指導者達はすでに疑惑の念にとり

つかれていた。一部の部下が急いで立ち上がると、他の者達はムスリムが夜襲を仕掛けて来たのだと思った。憶測はあっという間に広がった。彼等は身の回りの物を持って、我先に戦場から退いて行った。その頃 Abū Sufyān は彼専用のテントの中で眠っていたと言われている。異教徒の各分隊が突然に撤退してしまったという知らせが彼のもとに届けられた。彼は、激昂して、起き上がり、つながれているらくだに飛び乗った。拍車をかけても、らくだは動こうとしない。彼の友人が彼のしていることを指摘し、繋がれたままだったらくだの綱を解いた。そして、Abū Sufyān は友人達と共に戦場を立ち去ることができたのであった。

明け方近く、戦場にはすでに誰もいなくなっていた。2万から2万5千の軍勢は、兵士も従者もすべて姿を消し、残されたのは、ただ無人の広野のみであった。丁度その頃、聖預言者は、神の思し召しによって敵は逃げ去ったという啓示を受けた。何事が起こったのかを調べるため、聖預言者は誰か部下に戦場の様子を見て報告をしてもらいたいと考えた。氷りつきそうに寒い日であった。衣服も粗末なムスリム達が寒さに震えているのも無理はなかった。夜に聖預言者が呼ぶ声を聞いた者も何人かいた。答えようとしたが出来なかった。寒さのために声が出なかったのだ。大きな声で、「はい、預言者さま、何か御用でしょうか？」と答えられたのは Hudhaifa だけであった。

聖預言者はもう1度大声で呼んだ。今度も寒さのために誰も答えられなかった。答えたのは、やはり Hudhaifa だけであった。それで、神から敵は逃げ去ったというお告げを受けたので、戦場へ行って調べて来て欲しいと、聖預言者は、Hudhaifa に依頼した。Hudhaifa が濠へ行ってみると、そこから見えるのは、敵がいなくなった無人広野だけであった。兵士も人も誰もいなかった。Hudhaifa は聖預言者の所へ戻り、カリマ・シャハーダを唱え、敵は逃げ去ったと告げた。翌日イスラム軍もテントを畳んで、町へ引き返し始めた。約20日間続いた厳しい試練もやっと終わった。

罰せられる Banu Quraiza 族

ムスリム達は再び、何事もなく休むことができた。だが、彼等にはまだ解決しなければならない Banū Quraiza 族の問題が残っていた。Banū Quraiza 族はムスリムとの同盟を破ったのであり、このまま見過ごすことは出来なかった。聖預言者は、疲れ切った兵士を集め、まだ休んではいられないと言った。そして、陽が沈まない内に Banū Quraiza 族の要塞を襲撃しなければならないと言った。それから、Ali を Banū Quraiza 族に使者として送り、何故彼等が厳粛な誓いを破ったのか、その訳を尋ねさせた。だが、Banū Quraiza 族には、何の反省の態度も許しを請う様子も見られなかった。それどころか、彼等は Ali やその他のムスリムの使者達を侮辱し、揚句に聖預言者とその一族の女性達に対する悪口雑言を浴びせかけたのである。彼等は聖預言者のことなど、眼中になかったし、彼と何の協定を結んだ覚えもないと言った。Ali がユダヤ人の返答を報告しに帰った時には、既に聖預言者とその仲間がユダヤの要塞に向けて進んでいた。ユダヤ人達は聖預言者とその妻や娘達の悪口を言っていた。このような言葉が聖預言者を傷つけるのではないかと心配した Ali は、我々だけで、ユダヤ人のことは片をつけますので、聖預言者まで参加する必要はない、と彼に助言した。聖預言者は Ali の心を悟って言った。「Ali, あなたは彼等の悪口雑言を私の耳にいれたくないのだね」。「その通りです」と Ali は答えた。

「でも、それは何故か？」と聖預言者は続けた。「モーゼは彼等と血を分けた者である。だが彼等は私に対する以上にモーゼを苦しめた」。そして聖預言者はそのまま進み続けた。ユダヤ人達は防衛態勢を固め、戦闘を始めた。ユダヤの女性達も戦いに加わった。数人のムスリム達が城壁の真下に座っていた。一人のユダヤの女性がこれを見付け石を彼等の上に落とし、Khallad という名のムスリムを殺した。要塞の包囲攻撃は

数日間続けられた。この期間の終り頃、ユダヤ人達は、このままで長くは持ちこたえられないのではないかと感じた。それで、彼等の長達は聖預言者に手紙を送り、ユダヤ人に友好的な部族である Aus 族のアンサーの長 (Ansāri), Abū Lubaba を彼等の許へ送ってくれるように依頼した。彼等はどうかこの場を納められるか、彼に相談したかったのである。聖預言者が Abū Lubaba をユダヤ人達の所へ送ると、彼等は武器を捨てて、聖預言者の裁定を仰ぐべきかどうか、彼に尋ねた。Abū Lubaba は、そうすべきであると言った。だが、その時彼は指で首を切る恰好をし、死を暗示した。聖預言者は、この問題については誰にも、何も言っていなかったのである。それなのに Abū Lubaba は、ユダヤ人の犯した罪は、正に死に値するものだと思い込み、無意識にこの合図をしてしまった。これがユダヤ人の運命を決定づけた。ユダヤ人達は、Abū Lubaba の忠告をはねつけ、聖預言者の裁定を仰ぐことを拒否した。もし、彼等が裁定を受け入れていたならば、彼等が受ける罰はせいぜいメディナ追放ぐらいのものであっただろう。だが不幸なことに、彼等は聖預言者の裁定に従おうとはしなかった。聖預言者の裁定ではなく、ユダヤと同盟を結んでいる Aus 族の長、Sad bin Mu'adh の裁定を仰ぐと彼等は言った。彼に申し渡される罰ならば、どんな罰でもそれに従おうと考えた。ユダヤ人同志の間でも紛争が起こった。その中にユダヤ人は現実にムスリムとの協定を破ってしまったのだという者もいた。それにひきかえ、ムスリムの態度には、彼等が真実で誠実であり、又彼等の信じる宗教も真実であるということがよく現れていた。このように考える者達はイスラムに入信した。ユダヤの長達の一人、Amr bin Sa'di は部族民を次のような言葉で叱責した。「あなたがたのしたことは信仰に対する背信行為であり、あなたがたは誓いを破ったのだ。あなたがたに残された道は2つしかない。イスラムに加わるか、ジズヤ（人頭税）を支払うかのどちらかだ」。部族民達は答えた。「私達はイスラムに入信も、ジズヤを支払うことも致しません。ジズヤを支払う位ならば死んだ方が

ましますから」。「それならば、私は除外していただこう」。こう言うと Amr は要塞を出て行った。イスラム軍の司令官である Muhammad bin Maslama が彼の姿を見つけ、何者か尋ねた。Amr の身分を知ると彼は無事に立ち去るように Amr に言い、彼自身は大きな声で祈りを奉げた。

「神よ、良識ある者達の間違いを選別する力を私にお与え下さい」。

彼の言った言葉には、このユダヤ人が自分の部族民達の行為に対し、深い後悔と自責の念を感じていることが示されていた。だから、このユダヤ人のような人々を許すのは、ムスリムにとっての道徳的義務であった。そのユダヤ人をそのまま行かせたのは、正しい行為であった。そして彼は、神がこのような善行を何度も繰り返せるようなチャンスを彼に与えてくれるように祈ったのであった。聖預言者がこの Muhammad bin Maslama の行為を知った時、聖預言者は彼がユダヤ人の指導者を黙って見逃したという罪で叱責するようなことはしなかった。むしろ彼の善行を賞賛したのである。

上記に述べた通り、少数の、聖預言者の裁定を仰ぐ者も中にはいたが、民族全体としては依然として断固譲らぬ姿勢を見せ、聖預言者の裁定を拒み、その代わりに Sad bin Maadh の裁定を求めたのであった (Bukhari, Tabari & Khamees)。聖預言者は彼等の要求を飲み、負傷して休んでいる Sad を呼び、ユダヤ人達の背信行為に対する裁定を下すように求めた。聖預言者の決定が知らされるや否や、Banū Quraiza 族と長い間同盟関係にあった Aus 部族民は Sad の許へ駆けつけ Banū Quraiza 族に有利となるような裁定を下すよう迫った。Khazraj 族は、自分達と同盟関係にあるユダヤ人をいつも救おうとしてきたではないか、というのが、駆けつけた人々の言い分であった。自分の部族と同盟関係にあるユダヤ人を救うか否かは、彼の決断次第であった。Sad は馬に乗って、Banū Quraiza 族の所へ出かけて行った。彼の両側を彼の部族の男達も一緒について走り、Banū Quraiza 族を罰しないように彼に強く要求した。裁定を下さなければならない人間には責任があるとしか Sad は答えなかつ

た。彼は誠意をもってその責任を果たさなければならなかった。「だから、あらゆることを考慮して、恐れもえこひいきもない裁定を下すことになるだろう」と彼は言った。Sad がユダヤの要塞に着くと、Banū Quraiza 族は要塞の城壁を背にして彼を待ち受けていた。反対側にはムスリム達 が並んでいた。ムスリム達に近づいて「私の裁定を受け入れてくれますか？」と彼は尋ねた。「受け入れましょう」とムスリム達は答えた。

聖書の教えに従った Sad の裁定

Sad は Banū Quraiza 族に向かっても同じ質問をした。そして、彼等も同じ答えを返した。それから、彼は恐る恐る聖預言者が座っている方向を指して、そちらの側にいる人間も彼の裁定に従ってくれるかどうかを尋ねた。そして次のようなバイブルの戒律に従って、彼自身の裁定を伝えた。バイブルにはこのように書かれている。

一つの町へ進んで行って、それを攻めようとする時は、まず穏やかに降服を勧めなければならない。もしその町が穏やかに降服すると答えて門を開くならば、そこにいるすべての民に貢物を納めさせ、あなたに仕えさせなければならない。もし、穏やかに降伏せず、戦おうとするならば、あなたはそれを攻めなければならない。そしてあなたの神、主がそれをあなたの手に渡される時、剣をもってそのうちの男をみな撃ち殺さなければならない。ただし女、子供、家畜およびすべて町のうちにあるもの、すなわち略奪した品々は皆、戦利品として取ることができる。また敵から奪った物はあなたの神、主が賜ったものだから、あなたはそれを用いることができる。遠く離れている町々、すなわちこれらの国々に属さない町々には、すべてこのようにしなければならない。ただし、あなたの神、主が嗣業として与えられるこれらの民の町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない。すなわちヘテ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、み

な滅ぼして、あなたの神、主が命じられたとおりにしなければならない。

これは彼等が、その神々を拜んでおこなったすべての憎むべきことを、

あなたがたに教えて、それを行わせ、あなたがたの神、主に対して罪

を犯せることのないためである。(申命記 20:10-18)

このバイブルの教えに従うと、もしユダヤ人が勝ち、聖預言者側が敗ければ、あらゆるムスリムは男性も女性もそして子供達までが、死刑になっていたであろう。歴史の流れから見れば、これこそ明らかにユダヤ人の意図する所だったのである。その場合、ユダヤ人の決定は軽くても、男性は死刑、女性と子供は奴隷に、そしてムスリムの所有物はすべて没収となったはずである。このような処置を世界中の遠く離れた所にある敵国に対して取るように申命記では定めてあった。Sad は Banū Quraiza 族に対して好意的であった。Sad の部族は彼等とは同盟関係にあった。ユダヤ人達は聖預言者の裁定を仰ぐことを断り、それによってこのような背信行為に対して規定されているイスラム社会のもっと軽い処罰を拒否した。このユダヤ人達の気持ちを見て取った Sad は、モーゼの定めた処罰をユダヤ人に与えることに決めたのであった。この裁定に対する責任の所在は、聖預言者でもムスリムでもなく、モーゼとその教えにあり、且つ、ムスリムをそれ程残虐に扱ったユダヤ人達にあった。ユダヤ人達は、もっと恩情あふれる裁定が受けられたのである。ところが彼等はそれを断り、Sad の裁定を強く求めたのであった。Sad は、モーゼの戒律に従ってユダヤ人を罰することにした。だが、今でもキリスト教徒達は、聖預言者を非難し続け、彼がユダヤ教徒に対して残酷な仕打ちをしたと言っている。もし、本当に聖預言者がユダヤ人に対して残酷であったとしたら、何故彼は他の人々に、或る場合は残酷ではなかったのか。聖預言者の敵が彼の情にすぎた例は沢山あった。そして、彼の許しを求めて、許されなかった例はない。今度の場合には、敵は、聖預言者ではなく他の人物に裁定を委ねることを主張したのである。ユダヤ人とムスリムの間に立つ審判として、ユダヤ人が指名した人物は、ユダ

ヤ人にもムスリムにもはっきりと、彼等が彼の下す裁定に従うかどうか尋ねた。両者が同意したからこそ、彼は裁定をしたのだ。それでは、彼の下した裁定はどういうものであったのか。これは正に、ユダヤ人の犯した罪にモーゼの戒律を適用したものであった。何故彼等がその裁定に従わなくてもよかったなどと言うのか。彼等が自分達自身をモーゼの教えに従う者ではないと思っていたとでも言うのか。もし残虐行為が続いていたとすれば、それはユダヤ人が、ユダヤ人自身に科したものであった。ユダヤ人は聖預言者の裁定を拒み、代わりに、自分達の犯した罪に対して、自分達自身の宗教的戒律を適用した。もし残虐行為が続いていたとすれば、それはモーゼの教えによるものであった。モーゼがこの罰を包囲された敵に科したのであり、彼自身が神の命令の下にこの内容を本の中に書き記したからである。キリスト教作家達は、自分達の怒りはけ口をイスラムの預言者に求めるべきではないと言っている。彼等が非難すべき相手は、この残酷な罰を規定したモーゼか、モーゼの神なのだ。彼がモーゼにそう命じられたからである。

濠の戦いは終わった。聖預言者はこの後、異教徒がムスリムを攻撃するようなことはもうないであろうと宣言した。その逆にムスリムが異教徒を攻撃することになるであろう。潮の流れが変わりつつあった。これまでいわれなく彼等を攻め、苦しめて来た部族や集団に対して、ムスリム達が今度は攻撃をしようとしていた。聖預言者の言葉には、無意味な威嚇はなかった。濠の戦いにおいて、アラブ連合軍側が被った損害は決して大きなものではなかった。わずか数人の死者を出しただけである。一年もしない内に、更に万全な準備を整えて、改めてメディナを攻撃することもできたであろう。二万の軍勢ではなく、新しい攻撃にそなえて四万でも、五万でも軍勢を集めることだってできたであろう。十万か十万五千の軍勢を揃えることだって決して不可能ではなかったであろう。だが、これまでの21年間、イスラムの敵はイスラムとムスリムを根絶させようと、最大限の努力を尽くして来たのだ。たび重なる計画の

失敗に彼等の自信はゆらいでしまった。聖預言者の教えは真理なのではないか。自分達の国家的偶像や神は間違っているのではないか。創造主は聖預言者が教えている目に見えない唯一の神なのではないか。そんな恐れを彼等は抱くようになった。聖預言者が正しく、自分達は間違っているのではないかという不安が彼等の心に広がり始めた。しかしこのような不安は、決して表面には現れなかった。日常的には、彼等はいつもして来た通りのことを行い続けた。彼等の仰ぐ偶像の所へ行って、国家的習慣に従って偶像に祈りを奉げた。だが、彼等の心は大いに乱れていた。表面的には異教徒であり、且つ不信仰者としての生活を営んでいた。ところが内面的には、彼等の心は「アッラー以外に神はいない」というムスリムのスローガンを反復しているようであった。

既に述べたように、濠の戦いの後、聖預言者は今後不信仰者達はもうムスリムを攻撃することはなくなり、代わりにムスリムが不信仰者達を攻撃するようになるであろうと明言した。ムスリムの忍耐にもついに限界が来たのである。潮の流れが向きを変えつつあった（Bukhari, kitab ul-Maghazi）。

聖預言者は戦闘続行を求めたか？

これまでの戦いは不信仰者達の侵略を防ぐために、メディナに留まるか、メディナから少し離れた所で行われた。ムスリム達がこのような遭遇戦を始めることはなかったし、始まった後でも、その戦いを続けようという意図を示すようなことも全くなかった。戦争というものは一端始まると、終結の形はたいてい2通りしかない。和平が成立するか、或いは一方がもう一方に降服するかである。今までのムスリムと不信者達の間の遭遇戦を見てみると、和平の兆が見えたこともなければ、一方が降服を申し入れたこともなかった。確かに各戦いの間に中休みはあったが、ムスリムと不信仰者達の間の戦いが終わったと言う者は誰一人としてい

なかった。一般的な基準から言えば、ムスリムは敵の諸部隊を攻撃して降服させることも出来たはずである。だがムスリムはこれをしなかった。敵が戦うのをやめたら、ムスリムも戦いをやめた。ムスリムがやめたのは、和平の話し合いが出来るかもしれないと思ったからである。だが疑い深い者達には、和平の話し合いを持つ様子も、降服の意味もないとわかった時、ムハンマドは和平か、或いはどちらか一方の降服によって戦争を終らせるべき時が来たと考えた。和平にするなら、戦争を終えなければならなかった。だから、壕の戦いの後、ムハンマドは和平か降服かのどちらかを確実にする決心をしたようであった。ムスリムが疑い深い者達に降服することはあり得なかった。迫害者に対するイスラムの勝利は、神から約束されていたのだ。ムハンマドはメッカにいた時に、既にこの旨を宣言していた。その当時、ムスリム達に平和を請い願うことが出来ただろうか。和平への動きが進められるのは、強者か弱者のどちらか一方によってである。弱者側が和平を望めば、それが一時的しろ、永久にしろ、領土の一部か、収益の一部を放棄しなければならなくなる。或いは敵方の条件を呑まなければならなくなる。強者側が和平を申し出れば、それは弱者側の完全破滅を目指すものではなく、ある条件と引き替えに、弱者側に全面的、或いは部分的独立を維持させようとしていると、一般的には理解されている。ムスリムと疑い深い者達との間の戦いは、これ迄のところ疑い深い者達の敗北に継ぐ敗北であった。だからといって、彼等の力が崩壊した訳ではなかった。彼等はただ、ムスリムを破滅させようという試みに失敗したにすぎない。他者を破滅させる計画が失敗したからといって、彼等が敗北したということにはならない。侵略にまだ成功していないというだけのことである。失敗しても攻撃は繰り返されるのであろう。だから、メッカ人はまだ敗北した訳ではなかった。ただムスリムへの侵略が不首尾に終わったというだけである。軍事的に言えば、イスラム軍は明らかに弱者であった。彼等の防衛は、確かに依然として続いていたが、その軍勢は惨めな程少数であった。だから大

軍の侵略に対して抵抗することは出来ても攻撃態勢を取る事は出来ず、まだイスラムは自立しているとは言えなかった。もしムスリムが和平を求めていたならば、彼等の防衛力が崩壊したということになり、今頃は疑い深い者達の条件を受け入れることになっていただろう。彼等の側から和平を申し出ていたら、イスラムにとって壊滅的な結果となっていたであろう。それでは自滅を招いたことになったはずである。相次ぐ敗北に意気消沈していた敵に、精気を取り戻させることになっていたであろう。せっかく敗北感が高まっていたのに、新しく期待と野望を抱かせてしまったであろう。イスラム軍はメディナを救ったけれども、自分達に対する決定的勝利についてはまだ悲観的な見方をしているのだと不信者達は考えたであろう。だから、ムスリムの側から、和平を提唱することはあり得なかったはずである。メッカ軍、或いは、もし第3者が見つかったとすれば、その第3者からの和平の提唱ならば、あってもよかったはずである。しかし、第3者は見つからなかった。この紛争においては、メディナは全アラビアを敵にまわしていた。だから、ムスリムに和平を求め得たのは不信仰者達の方であったが、その様子はどこにも見当たらなかった。こうしてイスラム軍とアラブ軍との戦争は永遠に続きそうに見えた。イスラム軍は和平を求めることは出来なかったし、アラブ軍にはその気もなかった。そのため、アラビアの内戦は果てしなく続きそうに見えた。少なくとも今後 100 年は続きそうであった。

もし、ムスリム達が本当にこの紛争に終止符を打ちたいなら、残された道はたった一つだけであった。ムスリム達には、自分達の良心をアラブ人達に売るつもりはなかった。つまり彼等の思うままを明言し、実行し、説教する権利を放棄することはできなかった。又、不信仰者達の側からも和平への動きは見られなかった。ムスリム達は繰り返される侵略をはねつけることはできた。だから、ムスリムの側からアラブ達を降服させるか、又は和平を受け入れさせなければならなかったのである。聖預言者は、そうする決意を固めた。

聖預言者が求めていたのは戦争であったのだろうか。否、彼が望んでいたのは戦争ではなく平和であった。もし、彼がこの時に何もしなかったならば、アラビアは内戦の状態がずっと続いていたであろう。彼が踏み出したのは、和平への唯一の道であった。歴史上、長く続いた戦争が色々とあった。100年も続いた戦争もあれば、30年程続いたものもあった。戦争が長く続くのは、必ず、どちらかの側も断固たる行動を取らないからである。前にも述べたように、断固たる行動には、二つの内の一つを選ぶしか道はない。全面降伏か、和平交渉である。

聖預言者は、受身のままでいてよかったのか。彼自身もわずかなムスリムの軍勢と一緒にメディナの防壁の中に引きこもって、すべてを成り行きにまかせてしまっていたらよかったのか。これは不可能なことであった。不信者達は、侵略を開始していた。消極性は戦争の終結を意味せず、戦争を続けさせるだけであっただろう。不信仰者達はいつでも、好きな時にメディナ攻撃が出来たであろう。彼等は好きな時にやめ、又好きな時に攻撃出来たはずだ。戦時中の休戦は戦争の終結を意味しなかった。ただ戦略的行動にすぎなかった。

戦争についてのユダヤ教とキリスト教の教え

だが、ここで疑問が生じる。信仰のために戦うのは一体正しいと言えるのか？従って、この問題に目を向けてみよう。

戦争に関しては、宗教によって教え方が異なる。旧約聖書の教えについては、既に前の項で述べた。モーゼは神の命令を受けてカナンの地に入り、力で人々を打ち負かし、モーゼ自身の同邦人達をその地に住まわせた（甲命記 20:10-18）。モーゼの律法書に見られる彼の教えにもかかわらず、又ヨシュア、ダビデ、その他の預言者による実践的模範による教えの強化にもかかわらず、ユダヤ人やキリスト教徒は、彼等にとっての預言者達を敬い、彼等の書を神の啓示書だとみなし続けている。

モーゼの戒律の最後の所に、イエスの教えが書いてある。

しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、誰かがあなたの右の頬を打つならば、ほかの頬をも向けてやりなさい（マタイによる福音書 5:39）。

キリスト教徒はよくイエスのこの教えを取り上げて、イエスは戦争反対の説諭をしていると主張している。だが、新約聖書には、全く反対の教えを意味する箇所がある。例えばこのような箇所がある。

地上に平和をもたらすために、わたしが来たと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むために来たのである（マタイによる福音書 10:34）。

又、別の箇所には、このように書かれている。

そこで彼等に言われた、「しかし今は、財布のある者は、それを持って行け。袋も同様に持っていけ。また、つるぎのない者は、自分の上着を売って、それを買うがよい」（ルカによる福音書 22:36）。

以上 3 つの箇所の内 2 番目と 3 番目の内容は最初の内容と矛盾している。もし、イエスが戦いのために来たのならば、何故彼は、もう一方の頬をさし出すように教えたのか。新約聖書の中に矛盾があるという事実を認めるか、或るいは、矛盾した教えの内の一つを納得のいく方法で説明するか、どちらか一方を選ばなければならないようだ。もう一方の頬を差し出すという行為が実際に出来るかどうかの問題は、ここでは大したことではない。ここで指摘しておきたいのは、キリスト教の長い歴史において、戦争をすることにためらいを見せたキリスト教徒は一人もいなかったという事実である。キリスト教徒がローマで初めて権力を獲得した時に行った戦争は、防衛戦争でもあり、侵略戦争でもあった。今日彼等は世界中で支配的な力を持っているが、今でもまだ、侵略戦争にも防衛戦争にも加担している。だが、今では、勝者だけがその他のキリスト教世界の人々からの賞讃を受けている。彼等の勝利はキリスト教文明の勝利であると言われている。支配力があり、成功を納めればそれは何

でもキリスト教文明だと言う程にまでなってしまった。キリスト教の権力を持つ二つの派が戦争を起こす場合には、両者とも、キリスト教の理想を守っているのは自分達だとそれぞれに主張する。勝利を納める権利者が真実のキリスト教の力だと賞讃されている。しかしイエスの時代から現在に至るまで、キリスト教徒が絶えず戦争に巻き込まれていたのは事実である。しかも今後も戦争にかかわっていくだろうと思われる。だから、キリスト教徒達の実践判断によれば、戦争は新約聖書の教えに従ったものである。もう一方の頬を差し出すということは、最初の頃のキリスト教徒達の無力さに押し付けられた楽観主義者の教えであるか、或いは個人レベルにのみ適応されるもので、国家とか国民レベルには適応されないということになる。

次に、例えイエスが戦争ではなく平和を説いていると仮定しても、この教えに従って行動しない者は、聖人でもなければ尊敬できる人でもないということにはならない。何故ならば、キリスト教徒は、モーゼ、ヨシュア、ダビデ等の戦争主唱者達を常に崇拜して来ているからである。それだけではない。教会自体も戦争で殉教した国家的英雄を讃美している。その殉教者達は歴代の法皇によって聖者と見なされてしまった。

聖クルアーン・戦争と平和についての教え

イスラムの教えは、以上のような二つの教えとは異なっている。両者の中間に行くものである。イスラムは、モーゼが勧めたような侵略を教えてはいない。又、現在の（そして腐敗しているともいえるような）キリスト教のような、矛盾したことも説いてはいない。我々にもう一方の頬を差し出せとか、衣服を売ってその金で刀を買えというようなことも求めてはいない。イスラムの教えは、人間の自然の本能に合うようにできており、唯一の可能な方法で平和を奨励しているのである。

イスラムは侵略を禁じているが、戦わなければ平和が脅やかされ、戦

争を促進してしまうような場合には、我々に戦うよう命じている。戦わなければ自由な信仰と真理の探求が絶滅してしまう場合には、戦うのが我々の義務である。この教えを基盤として、平和が最終的には建設され得るのであり、聖預言者自身の方針と実践の基盤となっているのもこの教えなのである。聖預言者はメッカでは常に苦しめられ続けてきたが、彼自身が潔白な犠牲者とされてしまった攻撃に対しては、戦わなかった。彼がメディナへ移住すると、敵はイスラムを根絶しようと出かけて来た。だから、その時は、真理と信仰の自由を守るために、敵と戦う必要があったのである。

以上に戦争の問題にふれている箇所を聖クルアーンから引用する。

(1) 22:40-42 にこのように書かれている。

戦^{いくさ}を仕掛けられたる人々には戦^{いくさ}いが許可^{ゆる}されたり、彼等が不正に遇せられたるが故に。されば、アッラーは確かに彼等を助けることに全能にまします。(つまり)只「我等の主はアッラーなり」と云いしのみが故に不当にもその家から逐^おわれたる人々。而して、もしアッラーが人々の一部を他の一部によって護らざりしなば、修道院も、教会堂も、ユダヤ教堂も、並びにそこで頻繁にアッラーの御名が念誦^{マスジド}される礼拝堂も、必ずや打ち壊されたり。さればアッラーは必ずや、御自分に手伝う者を助け給う。げにアッラーは強大にして、偉力にまします。かかる人々は、もしわれらが彼等を地上に強固たらしめるや、彼等は礼拝を遵守し、喜捨をなし、善事を命じ、悪事を禁ずるなり。而して、万事の結末はアッラー次第なり。

この箇所は、侵略の犠牲者には戦うことが許されているということを意味する。神には、犠牲者を助ける力が充分にある。その犠牲者とは信仰故に故郷を追い出されてしまった人々である。この許しは、賢明なものである。もし、神が正義の力で残虐行為を退けようとされなければ、この世には、信仰や崇拝の自由がなくなってしまうからである。神は、崇拝の自由確立に手助けする人々を助けて下さる。だから、不当な侵略

に長く苦しんでいる人々に戦いが許されているのだ。そのような場合は、侵略者は何の理由もなく侵略してくるのであり、その犠牲者の宗教に干渉しようとしているのである。犠牲者が権力を握る暁には、宗教の自由を確立し、あらゆる宗教、及び宗教関連施設を保護するのが、その犠牲者の勧めである。彼の権力を自分自身の栄光のために用いてはならない。それは貧しき者の世話をし、国の発展をはかり、全体の平和を促進するために使われるべき権力なのである。この教えは、明解且つ、的確で、全く非の打ちどころがない。この教えから、最初の頃のムスリム達が、戦わざるを得ずして戦いに出たという事実がよくわかる。侵略戦争は、イスラムの教えにより禁じられていた。ムスリムには政治的権力が約束されているが、同時に次のような警告も受けているのである。即ち、この権力を自己の権力増大のために用いてはならず、貧しき者達の生活改善及び平和と発展の奨励に用いなければならない。

(2) 聖クルアーンより (2:191-194)

お前たちに対して戦いを挑む者たちと、アッラーの道にかけて戦え。されど正義を逸脱するなかれ。げにアッラーは不義者を愛さず。彼等（挑戦者）とどこでも出遭わば（戦争中）、彼らを殺せ。^{であ}而して彼らがお前たちを追放せしところから彼等を追い出せ。迫害は殺害よりも悪し。但し、相手が聖なるモスクの中まで戦いを仕掛けてこないかぎり、その内部や近くで戦うなかれ。されど相手がもし戦いを挑まば、之と戦え。^{これ}そは不信者どもへの応報なり。されど、彼等が思いとどめなば、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。迫害がなくなり、信仰がアッラーのために（自由に）なるまで、彼らと戦え。されど彼等が思いとどめなば、不義者に対して以外は敵意を抱かざるべし。

神の道にかけて戦うのであって、決して我々自身のためであったり、怒りや自己権力増大の野心からであってはならない。然も不行跡から逃れるための戦いでなければならない。不行跡は神が

忌み嫌われるものだからである。戦いは戦士同士のものでなければならぬ。個人的殺戮は禁じられている。宗教に対する侵略には、積極的に抵抗しなければならない。このような侵略は流血沙汰よりも罪深いものだからである。敵側から攻撃を仕掛けられない限り、ムスリムは聖なるモスクの近辺で戦いをしてはならない。聖なるモスクの近辺で戦うと、一般の人々の巡礼をする権利を侵害してしまうことになるからである。しかしもし、敵の攻撃を受けた場合には、ムスリムは思うままに応戦をしても構わない。これは侵略者が受けるべき当然の報いだからである。敵が戦いを止めた場合には、ムスリムも戦いを止め、彼等を許し過去のこととしてすべてを水に流さなければならない。宗教的迫害が続く限り、そして宗教の自由が確立されない限り、戦い続けなければならない。宗教は神に奉げるものだからである。宗教に対して武力や圧力を駆使するのは間違っている。カーフィル（不信仰者）が戦いを止め、宗教の自由解放をするならば、ムスリムもカーフィルとの戦いを止めなければならない。不行跡を働く者達に対してのみ、武器を取って戦えばよいのである。不行跡がなくなれば、戦いも終わらなければならない。

この教えを分類すると、次のような規則に別れる。

- (i) 戦争に訴えることが許されるのは、神のためだけである。利己的な動機や自己権力増大の野心や、他の利己私欲を増進されるためであってはならない。
- (ii) 最初に攻撃を仕掛けて来た相手に対してのみ、我々も戦ってよい。
- (iii) 戦いを挑んで来る者とは戦ってもよいが、戦争に加担していない者と戦ってはならない。
- (iv) 敵が攻撃を始めた後でも、その戦いを最小限にくい止めるのが我々の義務である。領土面においても使用武器の面においても、

戦争を拡大するのは間違っている。

- (v) 我々が戦う相手は、敵側について敵側から戦うよう使命を受けて来ている正規軍だけである。例え敵側と言えども、他の者に対して戦いを挑んではならない。
- (vi) 戦いの最中であっても、あらゆる宗教的儀礼、及び慣例に関しては、保護を与えなければならない。もし敵が、宗教的儀式を行う場所を確保している場合には、ムスリムもそのような場所で戦闘行為を行うことは控えなければならない。
- (vii) もし敵が、礼拝を奉げる場所を攻撃の基地と定めて使用している場合には、ムスリムも反撃しても構わない。ムスリムが反撃したからといって、とめられるべき筋合いではない。宗教関連施設近辺での戦いは、許されてはいない。宗教関連施設を攻撃して、そこを破壊したり、損害を与えたりすることは、全面的に禁じられている。だが、司令基地として使用されている宗教関連施設であれば、反撃を招くのは当然である。その場所に何らかの損害を被ったとしても、その責任は敵側にあり、ムスリムにはない。
- (viii) もし敵が危機を悟り、宗教関連施設を基地として選んだことの誤りに気付いて戦線を変更しようとする場合には、ムスリムもその変更に従わなければならない。敵が宗教関連施設から攻撃を開始したからと言って、その事実がその宗教関連施設を攻撃する口実にはならない。敵が戦線を変更し次第、ムスリムもそれに敬意を払って、変更しなければならない。
- (ix) 宗教と宗教の自由に対する干渉が続く限りは、戦い続けなければならない。宗教の自由が保障され、もはや、干渉が許されなくなり、敵がこれを認める宣言をして、従うようになれば、戦争を終結しなければならない。たとえ戦争を始めたのが、敵の方であったとしてもである。

- (3) 聖クルアーン 8:39-41 には、このように書かれている。

不信せし者どもに云え、「もし彼等止めるなば、彼等は過ぎたる
ことが赦されん。されど、もし彼等（罪を）繰り返すなば、確かに往古の人々が遭いたる先例あり」。また、迫害がなくなり、信仰が悉くアッラーのために（自由に）なるまで彼らと戦え。されど、
彼等もし止めるなば、まことにアッラーは彼等が行うことを監視し給う。されどもし彼等背を向けるなば、アッラーはお前たちの守護者にましますことを知れ。なんと素晴らしい守護者なり、またなんと素晴らしい佑助者なり！

つまり戦争は、常にムスリムに強要されたものであった。だが、もし敵が戦いを止めるのならば、ムスリムの勧めとして、彼等も戦いを止め、過去のことを許さなければならないのである。しかし敵が戦いを止めず、繰り返しムスリムを襲うのであれば、敵は、昔の預言者達の敵がとった運命を自分達も辿る羽目になることを知らなければならない。宗教的迫害がなくなるまで、且つ宗教のことが完全に神に委ねられるまで、即ち、宗教上の諸問題への干渉がなくなる限り、ムスリムは戦い続けなければならない。侵略者が侵略を止めれば、ムスリムも反撃を止めなければならない。敵が間違った宗教を信じているからと言って、ムスリムが戦争を続けることは許されない。信仰や行動の価値は神がよく御存知である。神はお好きなように報いて下さるであろう。例えある宗教が自分達には間違っているように思えても、ムスリムには、その宗教を信じている人々に干渉する権利はない。もし和平の提唱の後で、敵が戦いを再開したならば、ムスリムは例え、味方の軍勢がわずかでも勝利を確信してもよいであろう。何故ならば、神が彼等を助けて下さるからである。神以外に頼りになる援軍が他にいるであろうか。

この箇所は、バドルの戦いに関連して啓示されたものである。このバドルの戦いは、ムスリムと不信者達との間で行われた最初の本格的な戦いであった。この戦いにおいては、ムスリムは、いわれない侵略による犠牲者であった。メディナとその近辺の領土を脅かすことを選んだのは

敵側である。それにもかかわらず、勝利の女神はムスリム側に微笑み、敵側の中心的指導者は殺されてしまった。このようないわれなき侵略に対する報復は、当然であり、正当且つ必要なものと思われる。それでも、敵が戦いを止めれば、ムスリムの側もすぐに戦いを止めなければならないと教えられていた。敵が、信仰と崇拝の自由を認めてさえくれば、それで充分だからである。

(4) 8:62-63 には、このように書かれている。

されど、もし彼等和平に傾かば、汝もまたそれに傾け、而してアッラーを信頼せよ。彼こそは確かにすべてを聴き、すべてを知り給う御方にまします。されば彼等もし汝を欺かんとするも、アッラーが汝には万全なり。彼こそはその助けにより、且つ信者たちによって汝を佑助せし御方なり。

つまり、もし戦いの最中に不信者達が和平へ傾くようであればいつでもムスリムは、すぐにその申し出を受け、平和を取り戻すようにしなければならない。ムスリムは、たとえ騙される恐れがあったとしても、平和への努力をしなければならない。彼等は神にすべてを委ねているからである。神の助けに信頼を置いているムスリムには、ごまかしは通じないであろう。ムスリムの勝利は、彼等の力ではなく、神のおかげなのである。暗黒の最も困難な時期ですら神は、聖預言者と信徒達を助けて下さった。神は彼等の側に立って、ごまかしなどは見抜いて下さるであろう。和平の申し出は受け入れるべきである。陣をたて直し、再攻撃を仕掛けるための敵の謀略かもしれないという口実で、その和平の申し出を断るべきではないのだ。

この箇所では和平を強調するのは、それなりに意味がある。つまり、聖預言者は Hudaibiyah で調印する和平条約を予告しているのである。聖預言者は敵が和平を求めて来る時が訪れることを警告していた。敵が侵略者であり、不行跡を働いたからとか、敵は信用のおけない者だからという理由で、その申し出を断ってはいけないのだ。イスラムの教えに従っ

た正しい生き方により、ムスリムは和平の申し出を受け入れなければならない。敬虔さと政策の両方に従えば、受け入れが望ましいのである。

(5) 4:95 節には次のように書かれている。

汝等信じた人々よ、お前たちアッラーの道^いにかけて出で立つ時は、よく調べよ。而して平和を求めてお前たちに挨拶する者に向って、「汝は信徒に非ず」と云うなかれ。お前たちは現世の財貨を求めるが、アッラーの許^{もと}には莫大なる良きものあり。以前お前たちはこのようでありしが、アッラーはお前たちに恩恵を垂れ^{ちしつ}給えり。さればよく調べよ。げにアッラーはお前たちの所業を知悉し給う。

言い換えれば、ムスリムは戦いに出かけた際、次の点を確認しなければならないのである。戦争の不合理さが、敵には充分わかっているのかどうか、そしてその上でなお、敵は戦いを望んでいるのか、という点を。例えそうだとしても、個人或いは団体が和平を提唱して来た場合には、本心からではないという理由で、その提案を断ることはムスリムには許されない。もしムスリムが和平の提唱を拒絶するならば、彼等はもはや、神のために戦っているとは言えない。己の権力増大のため、そして世俗的利益のために戦っているにすぎないのだ。宗教が神から生まれているように、世俗的利益も栄光も、神から生まれている。殺しは、目的とはなり得ない。今日我々が殺したいと思う人も、明日には、導きを受けているかもしれない。今のムスリム達も、もし命を助けられていなかったら、ムスリムになれたであろうか。ムスリムが殺しを禁じられているのは、助けられた命が導かれる命になるかもしれないからである。人間が何をし、何の目的でどのような動機でその行動をとるのか、神は、何もかもよくご存知である。この箇所^{この箇所}の教えは、例え戦争が始まった後でも、敵は全力を投じて侵略攻撃をしようとしているかということを検討する義務がムスリムには科せられているということを示している。攻撃の意志はないのに、興奮と恐怖から敵が戦争の準備を開始したという

ことはよくあるからである。ムスリムは、敵が侵略攻撃を目論んでいるのを得心しない内は、戦いに応じてはならない。もし、敵の戦争準備の目的が自己防衛にあるのだとわかった場合、或いは、敵がそのように主張した場合には、ムスリムは敵の主張を認めて、戦いをやめなければならない。敵の戦争準備は侵略のため以外の何者でもないなど断言してはならない。敵の目論みが最初は侵略攻撃にあったかもしれないが、途中で意図を変えたということもあるからである。意図とか動機というものは、常に変化するものではないのか。イスラムの敵でさえ後に、友となったのではないのか。

(6) 条約神聖について、聖クルアーンは明確に述べている。

但しお前たちが協定を結びし多信教徒でその後彼等はお前達と破約せず、またお前たちに対して何人をも援助せざりし人々は除く。されば、その期限が満了するまで彼等との協定を全うせよ。

げにアッラーは畏敬者を愛し給う (9:4)。

ムスリムと協定を結び、その協定を守り、ムスリムの敵を助けたりしない人々は、異教徒といえども、ムスリムからそれ相応の待遇を受けて然るべきである。ムスリムが協定における自分達の義務を文字通り、且つ精神面でも墨守するのが本当の正義である。

(7) 例えムスリムと戦争中であっても、敵の中にイスラムの神の言葉を学びたいという者が現れたならば、その扱いについて聖クルアーンは、次のように命じている。

もし多神教徒たちのうち誰かが汝に保護を請わば、彼がアッラーの御言葉を聞くまで、彼を保護せよ。しかる後に彼をその安全な場所に送り届けよ。そは彼等が無知の民なるが故なり (9:6)。

つまり、ムスリムと戦っている者達の中から、ムスリムに庇護を求め、イスラムを学び、神の言葉について考えたいという者が現れたならば、この目的を満たすに必要な期間は、ムスリムはこの者達を保護してやらなければならない。

(8) 戦争捕虜に関するムスリムの教えは、次の通りである。

地上で流血の戦いをなさざる限り、捕虜を捕えることは預言者には相応しからず。お前たちは現世の幸せを望めども、アッラーは来世を欲す。而して、アッラーは偉力にして、賢哲にまします(8:68)。

言い換えれば、激しい流血戦をしながら、戦争捕虜を生かしてとおこうとする態度は、預言者にはふさわしくない。戦争や流血沙汰もなく敵の部族民を捕虜として捕まえる制度が実施されたのは、イスラムが出現する迄である。勿論、イスラム出現後ですら残ってはいたが。だがこの制度はここでは、法に反するものとされている。捕虜に出来るのは戦闘員だけであり、戦いの後である。

(9) 捕虜釈放の規則も定められている。次の通りである。

されば、情を施して放免するか、それとも身代金を取るべし。

戦いがその荷をおろすまで、かくなるべし (47:5)。

イスラムの教えでは、身代金を求めずに捕虜を解放してやるのが最も望ましい。これは必ずしも可能とは言えないので、身代金と引き替えに釈放することも許されている。

(10) 捕虜の中には、自分自身の身代金支払いの能力がなく、又自分達のために身代金を支払ってくれる人もいないために、自由の身になれない者達もいる。

そのような捕虜のための規定もある。親族に支払い能力があるにもかかわらず、その親族に、捕虜となった者がそのまま拘留される方が都合がよいなどの理由があって、身代金を支払わないなどの場合である。恐らく捕虜となった者が家を留守にしている間に、その財産を使い込んでしまおうという親族の腹づもりであろう。

このような場合につき、聖クルアーンは以下のように規定している。

また、お前たちの右手の所有にかかる者達^{うち}の中、代金を払って解放証書を求める者あらば、お前達彼等に善良さを認めるならば、

彼等を証書を書いて解放せよ。而して、アッラーがお前たちに賜える富の中から彼等にも与えよ (24:34)。

即ち、身代金無しで釈放するには値しないが、その者のために身代金を払ってくれる者もない捕虜に関しては、彼等があくまで自由を求める場合に、自由を保障してやることもができる。但し、彼等が、今後働いてお金を儲け、自分の身代金を自ら支払うという承諾書にサインをするという条件付である。しかし彼等に働いてお金を儲ける能力が充分にあると確認されなければ、その許可はおりない。彼等の能力が証明されれば、労働と賃金稼ぎの成果に応じて、ムスリムから財政援助を受けられるであろう。財政援助の出来る余裕のあるムスリムは、個人レベルで金を支払ってやればよい。このような恵まれない者達が自立できるように、公共の基金を貯えることもするべきである。

上記に紹介した聖クルアーンからの引用文には、戦争と平和に関するイスラムの教えが含まれている。以上の個所から、イスラムの教えに従えば、どのような状況になったら戦いに応じてよいのか、そして戦争になったら、ムスリムが守るべき限界はどこまでかを、我々は学ばなければならない。

戦争についての預言者の戒め

しかしながら、ムスリムの教えは聖クルアーンに定められている戒めだけに留まらない。聖預言者の戒めと模範も含まれるのである。具体的な状況における彼の行動と教えも、イスラムの教えの中で、重要な部分を占める。戦争と平和についての聖預言者の言葉をここに引用する。

- (i) ムスリムが遺体を切り刻むことを全面的に禁じる (Muslim)。
- (ii) ムスリムは人を騙すことを禁じる (Muslim)。
- (iii) 子供や女を殺してはならない (Muslim)。
- (iv) 聖職者、宗教的仕事に関わる殺人、及び宗教的指導者の役割に

干渉してはならない (Tahawi)。

(V) 年老いて弱った者、女、そして、子供を殺してはならない。

平和の可能性を常に心に留めておかなければならない (Abū Dāwūd)。

(vi) ムスリムは、敵の領地に侵入しても、一般市民に恐怖を抱かせてはならない。ムスリムは、平民を虐待することは許されない (Muslim)。

(vii) イスラム軍は、一般市民に不都合を生じさせるような場所に、陣を張ってはいけない。進軍の際には、街道の通行を妨げたり、他の旅人に不快感を与えたりしないように気を付けなければならない。

(viii) 顔を傷つけることは、何如なる場合にも許されない (Bukhari & Muslim)。

(ix) 敵に与える損害も、最小限に留めなければならない (Abū Dāwūd)。

(x) 戦争捕虜を警護下に置く場合には、身近な親族は、一緒にさせておかなければならない。 (Abū Dāwūd)

(xi) 捕虜が快適に暮らせるようにしてあげなければならない。ムスリムは自分達自身よりも、捕虜が快適に暮らせるように気を使わなければならない (Tirmidhī)。

(xii) 他国からの使者及び使節国に対しては、丁寧なもてなしをしなければならない。彼等が如何に間違いを犯したり、礼儀に欠けていたとしても、気にしてはならない (Abū Dāwūd, キターブル・ジハード)。

(xiii) ムスリムが戦争捕虜を虐待する罪を犯した場合には、身代金無しで、その捕虜を釈放してやらなければならない。

(xiv) ムスリムが戦争捕虜を監督する責任を負った場合には、ムスリム自身と同様の衣食を捕虜に対しても、与えなければならない

(Bukhari)。

聖預言者は、以上のような規則を戦闘軍に課しており、これらの規則を破る者は、神のために戦っているのではなく、私利私欲のために戦っているのだと断言するほどであった。

イスラムの初代カリフである Abū Bakr は、聖預言者のこれらの教えに、更に自分自身の言葉で補足を付けた。ここに引用された以上の教えの一つ一つがムスリムの教えとなっている。

(xv) 公共の建物や実を結ぶ木々及び食料となる穀物に損害を与えてはならない (ムアッター)。

聖預言者の言葉と、イスラムの初代カリフの教えから、イスラムが戦争を防止したり、止めさせたり、戦争による必要悪を減少させるのに効果的な基盤を作り出したことが明らかである。前にも述べたように、イスラムが説いている行動指針は、ただ単に純潔なる戒めというだけではない。その指針は聖預言者や最初の頃のイスラムのカリフ達の模範的行動の中で、実践的に役立つ説明がなされているのである。世界中に知られているように聖預言者は、この行動指針を説いただけではなく、実際に実行して見せ、この指針を守るように強く主張したのである。

今の時代に目を向けてみると、戦争と平和の問題を解決出来そうな教えは他に見つかりそうもないと言わざるを得ない。モーゼの教えは、正義と公正の概念からはほど遠い。又、その教えに従って行動することは、今日では不可能である。イエスの教えも実践向きではないし、今までもそうであった。キリスト教徒自身も、今までにこの教えを実行したことは1度としてなかった。実践可能なのは、イスラムの教えだけである。イスラムの教えだけは、その主唱者により、説かれ、且つ実践されたものである。そして、その教えを実践すれば、世界に平和をもたらし、維持することができるのである。

現代では、ガンジー氏が、たとえ戦いを挑まれても、我々はその戦いに応じてはならないと教えているようである。我々は、戦争をしてはい

けない。だが、この教えは、世界史上、一度も実践されたことがない。一度も試練にかけられたこともなければ、試されたこともないのだ。だから、戦争と平和についてのこの教えがどのような価値を持っているか、全くわからない。ガンジー氏は、長生きをして、インド議会が政治的独立を勝ちとるのを見た。だが議会政治は、インドの軍隊及び、その他の武力集団を解散させなかった。ただ政府はインド化を計画しているだけである。又、同時に、第二次世界大戦の終盤に日本がビルマとインドを攻撃している間に、インド国民軍を構成していた（そしてイギリス当局から解任されていた）インド人将校を集めて復職させる計画を練っている。ガンジー氏自身は、多くの場面で、声を上げて暴力犯罪の情状酌量を求め、このような犯罪を犯した者達の釈放を要求していた。このことから、少なくともガンジー氏の教えを実践に移すことは無理であり、そのことは、ガンジー氏自身も、その教えに従う人々もよく分かっているということがわかる。民族と民族、国と国との間で、武力闘争が起こっている時に、非暴力をどう取り入れたらよいのか、或いは、非暴力でもって、どのように、戦争を防ぎ、止められるかということを世界に示すために、少なくとも模範が提示されたことはなかったのである。戦争を止めさせる方法を口で説くことはするが、その方法の実践的説明をすることが出来ないということは、その方法は実践には向かないということである。人間の経験と英知は両方一緒になって初めて、戦争を防止するか止めさせるかの方法を教えてくれるのである。そして、その方法を教え、実践したのが聖預言者であった。

不信仰者達の散発的攻撃

アラブ連合軍は、バドルの戦いに大敗し、意気消沈して戻って来た。そして彼等は、彼等には最早ムスリム達を苦しめるだけの力はない、という現実に関心していなかった。敗北は喫したけれども、自分達は

依然として支配的力を持つ大民族だと思っていた。個人レベルでムスリムを虐待し、打ち据え、殺すことさえ簡単に出来た。個人を殺すことによって、自分達の敗北感を拭い去ろうとしていた。そのため、バトルの戦い後それほど時も経たない内に、彼等はもうメディナ近辺のムスリムの攻撃を再開した。らくだに乗った Fazārah 族の者達が、メディナの近くに住むムスリムを襲った。彼等は、その近辺で見付けたらくだを奪い、女を一人捕虜として捕まえ、戦利品を取って逃げ去った。その女はうまく逃げる事が出来たが、Fuzara 族の一団は沢山のらくだを奪うのには成功した。1ヶ月後には、今度は Ghatfān 族の一団がムスリムかららくだの群を強奪しようと北方からの攻撃を仕掛けた。ムハンマドは、ムスリムの家畜を保護するために Muhammad bin Maslama と十人の馬に乗った仲間達を偵察に出した。だが、敵はムスリムの一団を待ち伏せし、激しい攻撃を仕掛けて皆殺しを計った。幸いにも Muhammad bin Maslama は、意識を失っただけであった。彼は意識を取り戻すと、気を取り直してメディナに戻り報告をした。2、3日後には、ムハンマドの使者がローマ帝国の首都へ出かける途中、Jurham 族の攻撃を受け、略奪された。その1ヶ月後、Banu Fazārah 族がムスリムの隊商を襲い、略奪品を沢山持って逃げ去った。この攻撃が宗教的反目に誘発されたものではないと考えることも可能である。Banu Fuzara 族は、略奪と殺人を専門にする強盗集団であったからである。壕の戦いで中心的存在となったユダヤ系 Khaibar 族も、その戦いで喫した壊滅的敗北の恨みを晴らそうと決意していた。彼等は諸部族の村落やローマ帝国国境にいる帝国の役人達を訪れては扇動してまわった。だから、メディナへの直接攻撃が出来ないアラブの指導者は、ムスリムを壊滅させるために、ユダヤ部族と共謀を計った。しかしムハンマドの方は、まだ決定的な戦いをする決断を下してはいなかった。アラブの指導者達が和平を提唱して来るかもしれないし、そうなれば内乱も終わると考えていたからである。

聖預言者と 1500 人の仲間達：メディナへの旅立ち

この間に聖預言者は幻影を見た。その内容は聖クルアーンの中で次のように述べられている。

げにアッラーは真理を以て、己が使徒のために（その）夢を實現せしめたり。「もしアッラー欲しなば、お前たちは必ず平安に聖なる礼拝堂マスジドに入るなり、己が頭を剃り、髪を短く刈りながら、お前達は恐れざるべし」。されば彼はお前たちが知らざることを知りたれば、彼はこの外にも、手近な勝利を定めたり（48:28）。

即ち、神は、ムスリム達が頭を剃って、或いは髪を短く切って（これは、カーバ神殿巡礼の際の外面的証である）、無事にカーバ神殿内へ入れるようにもう決めて下さっていたのである。しかしムスリム達には、神がどのようにこれを実現して下さるのかはわからなかった。更に、ムスリム達が無事に巡礼を済ませる前に、もう一つの勝利を得ることが約束されていた。つまり、幻影の中に、勝利の前兆が見られたのであった。この幻影の中で、ムスリムの最終的な勝利、メッカへの平和の行進、そして武力を使わずしてのメッカ征服を神は予告された。しかし、聖預言者はこの意味を取り違え、神がムスリムにすぐにでもカーバ神殿巡礼を行なえと命じられたのだと解釈した。聖預言者の幻影解釈における間違いは、幻影の中で約束された手近な勝利が誘因となった。だから、この解釈の結果、聖預言者はカーバ神殿への行進を計画した。彼は、ムスリム達にこの幻影と解釈について語り、行進の準備をするように依頼した。「あなたがたは、カーバ神殿巡礼のみを目指して出かけるのです」と彼は言った。「ですから、敵に対しての示威行動であってはいけない」。628年2月末に、聖預言者の率いる1500人の巡礼団が、メッカに向けて出発した。敵が攻撃をする素振りを見せたら、ムスリム達に警告するために、少し距離を隔てて20人の騎馬警備隊が先行した。

まもなく、この一隊の知らせがメッカの人々に伝えられた。カーバ神殿巡礼は普通的な権利として認められるという伝統が既に確立されていた。だから、ムスリムに対してだけ拒否することは出来なかった。ムスリム達は明解な言葉で、自分達の行進目的は巡礼であって、決して他の意図は何もないと告げた。聖預言者は示威行動はどのようなものであろうと禁じていた。闘争、疑惑、要求といったものは決して許さなかった。それにもかかわらず、メッカの人々は、武力衝突の準備を整え始めた。彼等はあらゆる側面に防衛体勢を敷き、周辺部族に援助を呼びかけ、戦いの決意を固めたようであった。聖預言者がメッカに近づくと、クライシュ族はいつでも戦える体勢にあるという知らせが彼に届いた。クライシュ族は虎の皮に身をおおい、女も子供も一緒になって断固としてムスリムの一行を通過させまいと誓っていた。虎の皮は、戦おうとする激しい決意の現れである。まもなくして、軍勢を先導するメッカの縦列隊がムスリムの一行とぶつかった。ムスリム達は刀を抜かない限り、前へは進めなくなってしまった。だが、聖預言者は、このような戦闘的行動は決してしないと心に決めていた。彼は道案内を雇い、ムスリム隊が砂漠を抜けられる別の道を教えてくれるように頼んだ。この道案内に従って、聖預言者とその仲間達はメッカに非常に近い地点にある Hudaibiyah にたどり着いた。聖預言者の乗ったらくだは、立ち止まり、もうこれ以上進もうとはしなかった。

「駱駝が疲れているようです。神から遣わされた預言者さま。乗り物を変えられた方がよろしいでしょう」と一人の仲間が言った。

「いいや、そうではない」と聖預言者は答えた。「駱駝は疲れているのではない。神が私達にここに留まり、もうこれ以上前進しないことを望んでおられるのだと考えた方がよいであろう。だから、ここで陣を張ろう。そしてメッカの人々に私達が巡礼をさせてもらえるよう頼んでみよう。自分は、彼等が示す条件は、どのようなものでも受けるつもりでいる」(Halbiyyah, Vol.2, p.13)。

この時、メッカ軍はメッカにはいなかった。ムスリム隊を待ち構えようと、メディナへの幹線街道をかなりの距離まで進んでいたのである。聖預言者がその気にさえなれば、1500 人の仲間を連れてメッカへ乗り込み、何の抵抗を受けることもなく、町を征服することは出来た。だが、彼の心はカーバ神殿巡礼を目指すことにしかなく、しかもメッカの人々の許可を得て、行なうつもりだったのである。メッカの人々が最初に攻撃を仕掛けて来た場合にのみ、メッカ軍に抵抗して戦ったであろう。だからこそ、彼は幹線街道を諦めて、Hudaibiyah で陣を張ったのである。まもなくその知らせがメッカ軍の司令官に届き、彼は部下に引き返してメッカの近くで配置につくよう命じた。それからメッカ軍は Budail という名の長を使者として送り、聖預言者と話し合いをさせた。聖預言者は Budail に彼とムスリム達の望みは、ただカーバ神殿巡礼だけであると説明した。しかし、もしメッカ側が戦いを望むのならば、やむを得ずムスリム側も戦いに応じると述べた。すると、メッカ軍の司令官 Abū Sufyān の義理の息子 Urwa が聖預言者の所へやって来た。Urwa の態度は、この上なく横柄なものであった。彼は、ムスリム達を宿無しとか社会のくず呼ばわりし、メッカ軍は絶対にムスリムをメッカには入らせないと断った。次から次へとメッカの人々が彼等と話をしにやって来た。メッカ側の最後の言葉は、少なくともこの年内にこの巡礼を許したら、メッカの人々にとっての屈辱となるであろう。翌年になったら、許可をあたえてもよいというものであった。

メッカ軍と同盟を結んでいる部族の中には、メッカの指導者達にムスリムの巡礼実行を許してやるように要請する者達もいた。「結局、ムスリムが望んでいるのは、巡礼の権利ではないか。何故ムスリム達にこの巡礼すら止めさせられなければならないのか」と。だが、メッカの人々は断固として主張を曲げなかった。その態度を見て、これら部族の指導者達は言った。「メッカの人々は平和を望まず、自分達部族との関係も自ら断とうとしているのだ」。それを聞いたメッカ人達は不安を感じて

彼等の説得に応じ、ムスリムとの和解に入る気になった。このことを知った聖預言者はすぐに Uthmān（後にイスラムの第3代目カリフとなる）をメッカの人々の所へ送った。Uthmān にはメッカに住んでいる親族が多かった。親族達が出て来て彼を囲み、巡礼をさせてやると申し出た。だが、聖預言者にだけは年が明けるまで巡礼を許さないと断言した。「それでは、私の御主人さまと一緒になければ私も巡礼を致しません」と Uthmān は答えた。Uthmān とメッカの長との話し合いは、長引いた。そして、Uthmān が殺されたという噂が広まった。この噂は聖預言者の耳にも届いた。この噂について聖預言者は仲間達を集め、言った。「あらゆる民族のために、一人の使者の命が奉げられている。メッカ人が Uthmān を殺したらしい。もし、これが真実ならば、結果はどうなるうとも、我々はメッカへ入らなければならない」。

状況の変化に伴い、メッカへ穏やかに入ろうとしていた聖預言者の最初の意図も、変わらざるを得なくなってしまった。聖預言者は更に言った。「このまま突き進まなければならないのなら、生きて勝利者として戻る気はないと真剣に約束出来る者は前へ出て、私の手に誓いを立てて欲しい」。聖預言者が完全に言い終わらない内に 1500 人の仲間全員が立ち上がり、我先にと聖預言者の手に跳びついて誓いをたてた。この誓いは草創期の頃のイスラムの歴史のうえで重要な意味を持つ。これは「樹下の誓い」と呼ばれている。誓いが取り交された時、聖預言者が、一本の樹の下に座っていたからである。この誓いをたてた誰もが死ぬまで、この誓いを誇りにしていた。この場に居合わせた 1500 人の内、一人として、ためらうものはいなかった。もしムスリムの使者が殺されたのならば、彼等も生きては帰らないと全員が約束したのである。日暮れ前にメッカを占領するか全員打ち死にするかのどちらかであった。誓いがまだ完全に終わらない内に Uthmān が戻って来た。彼の報告は、メッカの人々は、年が明ける迄はムスリムの巡礼を認めないというものであった。メッカの人々は、ムスリムとの和解に調印するために使者を任命し

たということであった。

まもなくして、メッカの長である Suhail が聖預言者の許へやって来た。和解は成立し、記録に留められた。

Hudaibiyah (フダイビア) の和議

以下の通りである。

アッラーの御名の下に誓う。以下は ‘アブドゥッラーの息子ムハンマドとメッカの使者 Suhail bin Amr との間に取り交わされる和平の条件’ である。今後10年間はお互いに戦争をしない。聖預言者の仲間に加わり、彼と行動を共にしたい者は、そうすればよい。クライシュ族の仲間に加わり、彼等と行動を共にしたい者は、そうすればよい。若者、特に父親が存命中の若者が父親或いは、保護者の許可なく聖預言者に従う場合には、彼を父親或いは保護者の許につれ戻す。だがクライシュ族の方に従う者は、誰であろうと連れ戻されることはない。今年は、聖預言者はメッカに入らず引き返す。だが、翌年にメッカに入る際には、武装はしない。但し、アラビアの旅人が常に携帯する鞘に納めた刀だけは、例外として携帯を認める (Bukhari)。

この和平調印の際に、興味ある出来事が2件起こった。諸条件が定められて後、聖預言者が、その協定内容を記録させるために口述し始め、「寛大で慈悲深き神、アッラーの御名の下に誓う」と言った。

Suhail がこれを聞き、そして言った。「アッラーは私達も知っているし、信じてもいる。だが『寛大で慈悲深い神』というのとは何か。この協定は二者の間で取り交わされるものである。それ故に、両者の信仰をお互いに尊敬しなければならないだろう」。

聖預言者はすぐに同意し、記述者に「『アッラーの御名の下に誓う』とだけ書きなさい」と言った。それから聖預言者は和平の条件を記録するために口述を続けた。最初の文章は「以下はメッカの人々と神から遣

わされた預言者、聖預言者との間に取り交わされる和平の条件である」であった。Suhail は、再び異議を唱え、「私達があなたを神から遣わされた預言者だと思っているのならば、私達はあなたがたと戦いはしなक्तただろう」と言った。聖預言者は、この異議も認めた。神から遣わされた預言者、聖預言者の代わりに、アブドゥッラーの息子、ムハンマドとすることを彼は提案した。聖預言者がメッカ人の要求をことごとく受け入れたため、彼の仲間達は屈辱の余り、激しく怒った。彼等は憤激し、彼等の中で一番血の気が激しかった Umar は聖預言者の所へ行行って、彼に尋ねた。「神から遣わされた預言者さま、私達の言い分の方が正しいのではありませんか？」

「その通りである」と聖預言者が言った。

「それなのに、どうしてこのような協定を結ばなければならないのですか。何故このような屈辱的条件を受け入れなければならないのですか？」

聖預言者は答えた。「確かに神は、私達が平和に巡礼を行うであろうという予告を下さった。だが、それがいつであるかはおっしゃらなかった。私はその日が年内に来るかのように判断してしまった。でも、私が間違っていたのかもしれない。あるいは今年中かもしれない」

Umar は黙ってしまった。

今度は別の仲間達が、別の異議を投げかけた。ムスリムに改宗した若者は、父親或いは保護者の許に連れ戻されなければならないのに対し、考え方を変えてメッカ側に付いた若者は連れ戻されることはない。このように前者が後者と同じ条件を得られないような条項に何故ムスリム達が同意を示さなければならないのかというのが彼等の疑問であった。これには、何の害もないと、聖預言者は説明した。

「イスラムの教えに従って信仰と習慣を受け入れる限り、ムスリムになる者は、誰でもムスリムである。その者はムスリムと行動を共にし、その習慣を取り入れるためにムスリムになるのではない。その者はど

こへ行こうとイスラムの神の言葉を人々に広め、イスラム普及の尖兵となってくれるであろう。だが、イスラムを棄てるような者は、私達には用がない。

もし、その者が私達の信じるものを心から信じられなくなっているのならば、もはや、その者は私達の仲間ではない。どこか他の所へ行った方が良いでしょう」。聖預言者が選んだ賢明なる道に疑問を抱いていた者達は、以上のような聖預言者の答えに大いに納得した。この答えで今日、イスラムにおいて背教に対する罰は死であるとする人々にも、納得していただけるであろう。もし、本当に背教に対する罰が死であったならば、聖預言者はイスラムを棄てた者の返還と処罰を強く主張したであろう。

和議の書類が作成され、両者が署名を済ませてから、まもなく両者の信仰の深さを試すような事件が持ち上がった。メッカ側の全権大使である Suhail の息子が縛られ、傷つき、疲れ果てた様子で聖預言者の前に現れた。彼は、聖預言者の足下に崩れるように倒れ、そして言った。「神から遣わされた預言者さま、私は心からムスリムになっています。そして私の信仰のために、父の手でひどいめにあわされ苦しまなければなりません。父があなたを訪れていますので、私はなんとか逃れてあなたに会いに参りました」。聖預言者が一言も言わない内に Suhail は聖預言者をさえぎり、「協定が調印された今、私は父親と共に戻って行かなければならない」と言った。この若者 Abū Jandal はムスリム達の前に立ち上がった。このムスリムの兄弟ともいべき若者は、父親からの虐待のために絶望に陥っていた。ムスリム達は、この若者を送り返さなければならぬという義務には堪えられなかった。彼等は刀を抜き、命をかけてこの兄弟を救おうと決意を固めたようであった。Abū Jandal 自身は聖預言者にこのまま留まらせてくれるように懇願した。聖預言者はやっと暴君の手中を抜け出して来たばかりのこの若者を再び暴君の許へ送り返すのだろうか。聖預言者は心を決めていた。彼は Abū Jandal に

向かって言った。「預言者は前言を取り消すようなことはしない。たった今、協定に調印をしてしまったのだ。じっと忍耐をして、神にすべてをおまかせするかどうかはあなた次第である。神はきっとあなたを自由にし、あなたのような他の若者達に自由を与えるであろう」。和議は調印され、聖預言者はメディナへ帰った。まもなくメッカから改宗したもう一人の若者 Abū Basīr がメディナへやってきた。だが、和議の条項に基づいて、やはり、彼も聖預言者によってメッカへ送り返された。メッカへの帰途、彼と彼の後衛達の間で戦いが始まり、この戦いで彼は、護衛を一人殺し、逃げのびてしまった。メッカ側は聖預言者の所へ押しかけ、不満を訴えた。それに答えて、「だが、私達はあなたがたの若者をあなたがたにお渡しした。彼はあなたがたの手から逃げたのである。だから、彼を見つけ、再びあなたがたに引き渡す義務はもう私達にはない」と聖預言者は言った。2、3日が過ぎて、今度は一人の女がメディナへ逃げて来た。彼女の親族が彼女の後を追って来て、彼女の引渡しを要求した。和議には男に関する特例は定めてあるが、女については定めていないと聖預言者は説明し、この女を引き渡すことを拒否した。

諸王への預言者の手紙

Hudaibiyah から帰ってメディナに落ちついた後、預言者ムハンマドは、神の言葉を広めるための別の計画を立てた。この計画を仲間達に述べた時、宮廷内に見られる習慣や形式をよく知っている者達から、送り主の印璽いんじのない手紙に対しては王が好意を抱かないということを教えられた。そこで預言者ムハンマドは印璽いんじを作らせた。そこには、ムハンマド・ラスール・アッラーと刻まれていた。

尊敬の意味からアッラーを最初に、その下にラスール、最後にムハンマドと印した。

628 年イスラム暦第 1 月（Muharram）各統治者にイスラム受け入れ

を勧誘する預言者ムハンマドの手紙を携えた使者達が諸都市に派遣された。使者達の行き先は、ローマ皇帝ヘラクリウス、及びイラン、エジプト（当時のエジプト王はローマ皇帝の支配下にあった）そして、アビシニアの各王であった。使者はその他の王や統治者の許へも送られた。ローマ皇帝宛ての手紙は、Dihya Kalbi（ダヒヤ・カルビ）が持って行ったのであるが、彼は、まず最初に Busra の総督を訪ねるように命じられていた。Dihya が総督に会った時、ローマ皇帝は帝国視察の最中で、シリアに居た。総督はすぐに Dihya を皇帝に取り次いだ。Dihya が宮廷に入る時、皇帝に対面を許される者は、誰もが皇帝の前にひれ伏さなければならぬと告げられた。Dihya は、ムスリムはいかなる人間の前でも頭を下げないと言って、これを拒絶した。Dihya は上記の礼をせず、皇帝の前に座った。皇帝はその手紙を通訳を介して読み終わり、アラブの隊商がこの町に来ているかどうか尋ねた。皇帝は、彼にイスラムを受け入れるよう勧誘しているこのアラビアの者についてアラブ人に質問してみたいと言った。偶然その頃、Abū Sufyān が隊商を率いてこの町に来ていた。宮廷の役人が彼を皇帝の許へ連れて来た。Abū Sufyān は他の何人かのアラブ人の前に立つように命じられた。このアラブ人達は、Abū Sufyān が嘘を言ったり、或いは間違ったことを言ったりした場合には、それを訂正するように命じられていたのである。皇帝ヘラクリウスは、Abū Sufyān への質問へと移った。その会話は次のように歴史的記録に残されている。

H：預言者と称して、余に手紙を送ったこの男を知っているのか？
どのような家系の出であるかわかるか？

AS：彼は貴族の出であり、私には縁戚にあたります。

H：彼以前に、彼と同じような主張をしたアラブ人がいたか？

AS：いいえ、おりません。

H：彼が、その主張を宣言する前に、嘘をついたということで、お前の国の人々から責任を問われるというようなことがあった

か？

AS：いいえ、ありません。

H：彼の祖先の中に、王、或いは、統治者になった者があるか？

AS：いいえ、ありません。

H：彼の全体的能力及び判断における力量について、お前達はどう判断するか？

AS：彼の能力及び判断における力量について欠陥を見出したことはありません。

H：彼の従者とは、どのような者達であるか。大きく力強い者達であるか、それとも貧しく謙虚であるか？

AS：大部分は、貧しく謙虚な若者達であります。

H：従う者達の数が増加する傾向にあるか、それとも減少傾向にあるか？

AS：増えております。

H：彼に従う者達が昔、持っていた信仰へと戻っていくようなことがあるか？

AS：いいえ、ありません。

H：彼自身が、一度でも誓約を破ったことがあるか？

AS：今までのところでは、一度もありません。ですが、私達は最近彼と新しい和議を結びました。彼が今後どうするか、見守ろうではありませんか。

H：今までに、彼と戦ったことがあるか？

AS：はい、あります。

H：結果はどうであったか？

AS：車井戸の二つのつるべのように、私達と彼との間に、勝ったり負けたりが繰り返されました。例えば、バドルの戦いには私は参加しませんでした。彼の方が私達よりも優勢を保つことが出来ました。Uhud の戦いでは、私が、我が軍を指揮して彼の

側に苦杯をなめさせました。私達は彼等の胃を裂き、彼等の耳や鼻を削いでやりました。

H：だが、彼は何を教えるのか？

AS：唯一の神を崇拝すること、そして、同じような神を他に認めないことです。彼は、私達の祖先が崇拝した偶像を否定します。その代わりに、彼は、唯一の神を崇拝し、真実のみを語り、常に邪悪な腐敗した慣習をすべて棄て去ることを私達に望んでいます。彼は私達に、お互いに善意を持って、誓約を守り、責任を果たすようにと説くのです。

この興味ある会話はここで終わりとなり、続いて皇帝は語った。

余がお前に最初に彼の家族について尋ねると、お前は彼が貴族の出身であると答えた。事実、預言者というものは必ず貴族出である。次にお前に、彼以前に誰か同じような主張をした者がいたかどうかをお前に尋ねたら、「いいえ」と答えた。余がお前にこの質問をしたのは、もしも近い過去に誰かがそのような主張をしたのであれば、この預言者がその主張を真似た可能性があると考えたからである。更に、余はお前に彼がその主張を発表する以前に、嘘をついたことで、責められたことがあるかどうかを尋ね、お前は「いいえ」と答えた。このことから余は、人間について嘘をつかない人間は、神についても嘘をつかないということを推論した。次に余は、彼の祖先の中に王になった者があったかどうかを尋ね、お前は「いいえ」と言った。このことから、余は、彼の主張が王国を再興するための陰險な謀略ではありえないと理解した。次いで余はお前に、彼の許への入門者は大部分、大きく裕福で、力強い者達であるか、或いは貧しくて弱い者達であるかを尋ねた。お前は答えて、彼等は一般に貧しくて弱く、決して誉れ高く大きな者達ではないと言った。預言者という者に従う人々は最初は、貧しく弱いものなのだ。それから、余は、その信徒の数が増加傾向にあるかを尋ね、お前は増加していると言った。ここに到って余は、預言者という者の信徒の数は、その預言者

が目的を達成する迄増え続けるものだということを思い出した。それから、余は、お前に彼の信徒が嫌気、或いは、失望から彼の許を離れる可能性について尋ねた。お前は「ない」と答えた。ここで余は、預言者に従う者は、大抵は不動であるということを思い出した。他の理由によって離れ去ることはあっても、信仰に対する嫌気から離れることはないであろう。それから余は、お前と彼との間に戦いがあったかどうか、もしあったのならば、結果はどうであったかを尋ねた。そしたらお前は、お前と彼の信徒達は車井戸の2つのつるべのようなものだと言った。預言者とは、そういったものだ。預言者に従う者達は、最初の内は敗北を喫し、不運に遭遇するが、最後には勝利を得るのだ。それから、余は彼が何を教えているかを尋ね、お前は、唯一の神を崇拝すること、真実を語ること、徳、そして、誓約を守り、責任を果たすことの重要性を説くのが彼の教えであると言った。余は、又お前に彼が、悪行を働いたことがあるとそうかを尋ね、お前は「いいえ」と言った。これこそ有徳の人の歩む道である。だから、余には、預言者であるという彼の主張は、正しいと思われる。余は、我々の時代に彼の現れることを半分期待していたが、その人がアラブ人であろうとは思わなかった。もし、お前が余に告げたことが真実ならば、彼の影響及び支配力は、きっとこれらの国々にひろがるであろう (Bukhari)。

この王の言葉は廷臣達を動揺させた。彼等は、別の社会の伝道者を賞賛する王を非難し始めたのである。抗議の声が上がった。それで、宮廷の役人達は Abū Sufyān 及びその友人達を外へ送り出した。預言者ムハンマドがローマ皇帝宛てに書いた手紙の内容が、歴史上の記録に残っている。それは、次の通りである。

アッラーの僕であり、彼の使徒たる預言者ムハンマドより、ローマの長たるヘラクリウスへ。神の導きの道を歩む者には、誰であろうと平安あれ。王よ、これから私はあなたをイスラムにお誘いしよう。ムスリムになりなさい。神があなたをあらゆる災難から守り、あなたに2倍も報

いて下さるだろう。しかし、もしあなたがこの神の言葉を否定し、受け入れを拒絶なさるならば、あなた自身の不同意みならず、あなたの家来の不同意の罪があなたの頭上にふりかかるであろう。そしてこのように言いなさい。「啓示された書に従う人々よ。あなたがたと我々の間の共通の教えに従って下さい。私達が崇拜するのは、アッラーだけである。私達はアッラーに匹敵する仲間などは認めない。そして、私達の中には、アッラー以外を主と仰ぐ者は誰もいないという約束の下に。人々が歓迎しないようならば言ってやりなさい。「私達は神に服従したことの証人たるべし」と。」(Zurqāni より)

イスラムへの勧めは、神は唯一であり、預言者ムハンマドはその使徒であるという信仰への勧めであった。手紙の中の、もしヘラクリウスがムスリムになれば、彼は2倍も報われるようになるであろうという箇所が表しているのは、イスラムがイエス及び預言者ムハンマドの両者への信仰を教えているという事実である。

手紙が皇帝に差出された時、何人かの廷臣は、その手紙を破って棄ててしまうように勧めたと言われている。彼等の言い分は、その手紙は皇帝に対する侮辱であるというものであった。その手紙には皇帝を皇帝として記述せず、Sahib-al-Rum 即ち、ローマの長としか書かれていなかったからである。しかし皇帝は、読まないで手紙を破ってしまうのは賢明ではないと言った。又「ローマの長」という宛名は、間違っていないとも言った。要するに、すべてのものの主人は神であった。皇帝は単なる主権者にすぎなかったのだある。

預言者ムハンマドは、その手紙がヘリクリウス皇帝に受け取られた時の状況を聞いて、満足気であり、喜んでいるようであった。そして彼は、ローマ皇帝がその手紙に敬意を払ったため、ローマ皇帝は永く続いて全帝国を統治するであろうと言った。そして事実そうだったのである。イスラムの預言者ムハンマドの別の預言通りに、後に発生した数々の戦争のためにローマ帝国は領土の大部分の所有権を失った。それでも、この

後 600 年の間、ヘリクリウス王朝はコンスタンチノーブルに確立され、そのまま残ったのである。預言者ムハンマドの手紙は、その帝国の国家公文書保管所に長い間保管されていた。ムスリムの王 Mansur Qalāwūn がローマの宮廷を訪ねた時、箱の中に納められていたその手紙を見せてもらった。その時のローマ皇帝は、その手紙を見せながら、それは彼の祖先が、ムスリムの預言者から受け取った手紙であり、大切に保存されて来たものであると語った。

イラン王への手紙

イラン王への手紙は Abdullah bin Hudhāfa により届けられた。
この手紙の内容は次の通りである。

寛大で慈悲深き神アッラーの御名において。この手紙は神の使徒預言者ムハンマドよりイランの長である皇帝へ宛てたものである。完全なる導きに従い、アッラーを信じ、更にアッラーは唯一の存在であり、それと並ぶものなく、預言者ムハンマドがその僕であり、使徒であることを証言する者は、誰であろうと、その者に平安あれ。王よ、神の命じられるままに、私はあなたをイスラムにお招きしよう。すべての生ある者達に警告を与え、すべての不信者達に神の言葉を成就させるように、私が神からその使徒として、全人類のために送られて来たからである。イスラムを受け入れ、あなた自身をすべての災難から護りなさい。もしあなたがこの勧めを拒絶するならば、あなたの国民すべての拒絶した罪が、あなたの頭上にふりかかることになるであろう (Zurqāni & Khamis)。

Abdullah bin Hudhāfa の話しによると、彼がイラン皇帝の宮廷に着いた時、彼は、王の前面まで進み出る許可を要請した。彼が皇帝にその手紙を手渡すと、皇帝は通訳にそれを読ませ、内容を説明するように命じた。その内容を聞いた途端、皇帝は憤り、手紙を取り返すとバラバラに引き裂いた。Abdullah bin Hudhāfa はこの出来事を聖預言者ムハン

マドに報告した。その報告を聞いて、預言者ムハンマドは言った。

イランの皇帝が私達の手紙に対してしたことと正に同じことを神は彼の帝国に対してなされるだろう（即ち、バラバラに引き裂かれるだろう）。イラン皇帝がこの時に示したことは、ローマ領土からイランに移住して来たユダヤ人によってなされたイスラムに対する有害な宣伝の結果であった。これらのユダヤ人避難民達はイランで支持されている反ローマの陰謀において中心的役割を果たすことになり、従って彼等はイランの宮廷においてお気に入りになっていた。皇帝は、預言者ムハンマドに対して怒りに燃えた。ユダヤ人が預言者ムハンマドに関してもたらして来た報告は、すべて正しいとこの手紙によって確認されたように彼には思えた。預言者ムハンマドはイランに野心を抱く、侵略的山師に違いないと思った。皇帝は、すぐ後でイエメンの総督に手紙を書き、アラビアのクライシュ族の男が自分は預言者であると表明したと伝えた。皇帝の主張は極端になった。

イエメンの総督 Badhan は、軍の責任者に騎馬兵一人を付けて預言者ムハンマドの所へ送った。彼は、二人に預言者ムハンマド宛の手紙も持たせた。その手紙には、預言者ムハンマドがこの手紙を受け取ったならば、直ちに二人に同行して、イランの宮廷へ出向くようにと書かれてあった。二人はまず、メッカへ行こうと計画した。Taif の近くへ来た時に、預言者ムハンマドはメディナに住んでいると教えられた。そこでメディナへ行った。到着するなり、軍の責任者は預言者ムハンマドに、イエメンの総督 Badhan が預言者ムハンマドの逮捕、並びにイランへの護送を皇帝に命じられたのだと語った。もし、預言者ムハンマドが断れば、預言者ムハンマドもその信徒達も殺され、彼等の国は荒廃の浮き目を見なければならなくなる。預言者ムハンマドへの同情心から、このイエメンからの使者は、預言者ムハンマドに命令に服従してイランへ同行するように強く勧めた。この言葉に耳を傾けた後、預言者ムハンマドは、使者達に翌日もう一度会うことを提案した。夜を徹して預言者ムハンマド

は神に祈った。彼は神から、イランの皇帝の傲慢さは死に値するものであると告げられた。「我等は彼の息子が彼にそむくようにした。そして、この息子は今年のイスラム暦5月（Jumāda al-ūla）10日月曜日に、父親を殺害するであろう」。或る報告書によれば、この神の啓示は「この息子がまさにこの夜に父親を殺害した」と告げたとするものもある。まさにこの夜なるものが、イスラム暦5月の10日であることは可能である。朝になって預言者ムハンマドはイエメンの使者に使いを送り、彼等にその夜を通じてそのような啓示を受け取ったことを告げた。それから、彼は Badhan 宛てに手紙を用意した。その中に現イラン皇帝は一定の月の一定の日に殺されなければならない運命であると書き記した。イエメンの総督はこの手紙を受け取った時に言った。「もし、この人が真の預言者ならば彼の言う通りになるであろう。もし彼が本物でなかったならば、神が彼と彼に従う者達をお助け下さいますように」。程無く、イランからの船がイエメンの港に錨を降ろした。その船は、イランの皇帝からイエメンの総督宛ての手紙を持参していた。その手紙には、新しい印章が押してあった。この印章から、総督はアラビアの預言者の預言が正しいことが証明されたと結論づけた。新しい印章は新しい王を意味するものだったからである。彼は、手紙を開いた。内容は次の通りであった。イラン国王 Siroes より、イエメンの総督 Badhan へ。余は、余の父の治政が腐敗し、不公平となったため、父を殺した。父は貴族を殺し、巨下を虐待したのである。この手紙を受け取り次第、すべての公務員を集め、余に対する彼等の忠誠を確認されたい。アラビアの預言者に関する父の逮捕命令はなかったものと考えてもらいたい（Tabarī Vol. 3, pp. 1572-1574&Hisham, p46）。

Badhan がこれらの事件で受けた感銘は余りにも深く、彼及びその友人の多くは、直ちにイスラムへの信仰を宣言し、その旨を預言者ムハンマドに知らせた。

アビシニア皇帝への手紙

アビシニアの王たる皇帝への手紙は Amr bin Umayya Dami によって届けられた。内容は次の通りであった。

寛大で、慈悲深い神、アッラーの御名の下に。神の使徒預言者ムハンマドより、アビシニア皇帝に寄せる。王よ。神の平和があなたの上に与えられますように。あなたの前で、唯一の神を称えます。崇拜に値するものは他にはありません。この神は、王の王であり、あらゆる優れたものの源泉であって、欠けた所は何一つありません。神は、神に仕えるすべての僕に平和を恵み、神の創られたすべてのものをお譲り下さる。私は、マリアの息子イエスが、神によってマリアになされた約束を成就するために遣わされた神の使徒であることを保証します。マリアは、神に命を捧げたのであります。あなたが、私と共に唯一の神に帰依し、その神に従うよう、ここにお勧めします。又、私に従い、私を使徒として遣わされた神を信仰することをお勧めします。私は、神に遣わされた使徒であります。あなたとあなたの軍勢が全能の神への信仰に加わるようお招きします。これによって私は、自分に与えられた義務を果たすことになります。私は誠意を尽くしてあなたに神の言葉を伝え、この神の言葉の意味を明らかにしました。そして、この神の言葉を伝えようとしたこの誠意をあなたがたが正しく評価してくれるものと信じます。神のお導きに従う者は、神の祝福を受け継ぐ者となるでしょう（Zurqāni）。

この手紙がアビシニア皇帝に届いた時、彼はそれに対して非常に大きな配慮と敬意を示した。彼は、手紙を目の高さに捧げ、王座から降り、この手紙のために象牙の箱を用意させた。それから、手紙を箱の中に納めて言った。「この手紙が無事である限り、我が王国は安泰である」。彼の言葉は現実となった。

1000 年の間、ムスリムの軍勢は、征服の経歴を積み重ねていった。

彼等は、あらゆる方面に出向いて行き、アビシニアのあらゆる側を通り過ぎて行ったが、このアビシニア皇帝が治める小さな王国には指一本触れようとはしなかった。初期の頃のムスリム難民によせられた保護、そして、預言者ムハンマドの手紙に対して示された敬意という、皇帝のこの2つの記憶すべき行為に配慮して、イスラム軍はアビシニアを攻撃しなかったのであった。ローマ帝国は領土を分断された。イラン皇帝は統治権を失った。中国とインドの王朝は姿を消した。しかしこの小さなアビシニアの王朝だけは、侵されることもなく、残ったのである。その理由は、この王朝の統治者が初期の頃のムスリムの難民を受け入れ、保護したこと、及び預言者ムハンマドの手紙に対して大いに尊敬の念を示したことにある。

ムスリムは、アビシニア皇帝の寛大さに対してこのような形で報いた。このムスリムの行動と、キリスト教徒達が、この文明の時代にアビシニア皇帝の許にあるキリスト教王国に対して取った処置とを比較してみるとよい。キリスト教徒達は、空からアビシニアの非武装都市を爆撃し、破壊したのである。王家の人々は他の場所へ避難し、数年間自国へ帰ることが出来なかった。同じ人々が二つの別々の人々によって、二つの異なった扱いを受けた。ムスリムはアビシニアの統治者の一人が示した寛大さ故に、その王国を神聖にして、侵すべからざるものとして保った。或るキリスト教国は、文明という名の下にこの王国を攻撃し、略奪を働いた。預言者ムハンマドの教えと模範が如何に健全且つ永続的なものであるかが、このようなムスリムの行動によく現れている。或るキリスト教国に対するムスリムの感謝の念は、その王国をムスリムにとって神聖なものとした。それとは、対照的にキリスト教徒は欲のために、同じその王国を、それが彼等と同じキリスト教国であるということには一切構わず、攻撃したのである。

エジプトの統治者への手紙

エジプト皇帝への手紙は Hatib bin Balta'a が持参した。この手紙の内容は、ローマ皇帝へのものと同じであった。ローマ皇帝への手紙には、ローマ人民の拒絶の罪は皇帝自身の頭上に降りかかると記されていた。エジプト皇帝への手紙には、コプト（古代エジプト人の子孫）の拒絶の罪は、統治者の頭上に降りかかると記されていた。内容は、次の通りであった。

寛大で慈悲深き神、アッラーの御名の下に。この手紙は、アッラーの使徒ムハンマドより、コプト人の長であるエジプト皇帝に宛てたものである。公正の道を歩む者に平和あれ。私は、あなたにイスラムの神の言葉を受け入れるようにお勧めする。信じなさい。さすれば、あなたは救われ、二倍の報酬をあたえられるであろう。信じなければ、コプト人の拒絶の罪も又あなたの頭上に降りかかるであろう。このように言いなさい。

「啓示された書に従う人々よ。あなたがたと私達が平等になれる一つの約束の許に來たれ。私達が崇拜するのは、アッラーだけである。私達は、アッラーに匹敵する仲間などは認めない。私達の中には、アッラー以外を主と仰ぐ者は、誰もいないという約束のもとに。だが、もし、人々が歓迎しないようならば言ってやりなさい。「私達が、神に服従したことの証人となれ」と (Halbiyyah, Vol, 3 p275)。

Hatib がエジプトに到着した時、エジプト皇帝は首都にはいなかった。Hatib は、皇帝の後を追ってアレクサンドリアへ向かった。皇帝は、この海の近くに宮殿を構えていたのである。Hatib は船に乗って行った。宮廷の警備は嚴重であった。そこで、Hatib は、遠く離れた所から手紙を見せて、大声で話し始めた。皇帝は Hatib を彼の許へ連れて来るよう

に命じ、手紙を読んだ。そして「もしこの人が本物の預言者ならば、何故彼は、敵の破滅を祈らなかったのか？」と言った。王は Hatib に賛辞を送り、Hatib を賢明な人の賢明な使者であると言った。Hatib は、尋ねられた質問に見事に答えたのであった。そして Hatib は更に語った。「あなた以前に、傲慢で横柄で残酷な王様がいました。モーゼを迫害したエジプト王のことです。最後に彼は神の罰を受けるはめに陥りました。だから、傲慢に振舞ってははいけません。この神から遣わされた預言者を信じなさい。モーゼはイエスについて予言はしたけれども、イエスが預言者ムハンマドについて預言した程はっきりとした予言ではありませんでした。丁度あなた方キリスト教徒がユダヤ人をイエスの教えに招いたように、私達はあなた方を預言者ムハンマドの教えにお招き致します。どの預言者にも信徒はいるものです。信徒はそれぞれの預言者に従うのが義務であります。私達の宗教があなたにイエスを否定させたり、背かせたりするものではないことを御記憶下さい。私達の宗教は誰もがイエスに信仰を持つよう要求しています」これを聞いて、エジプト皇帝は、この預言者の教えについて聞いたことがあり、預言者は悪いことを教えたりもしなければ、善い事を禁じたりもしないと感じた。皇帝は、更に質問を重ねて、その結果、預言者ムハンマドが魔法使いでも占い師でもないということがわかった。皇帝はその預言者の預言が真実となって現れたという話をいくつか聞き知っていた。それで、象牙の箱を持って来させ、預言者ムハンマドの手紙をその中に納め、封印をして、安全に保管すべく召使の少女に手渡した。彼は又、聖預言者ムハンマド宛の返書をしたためた。その手紙の内容は、歴史書に記されている。次の通りである。

寛大で慈悲深き神、アッラーの御名の下に。コプト人の王たるエジプト皇帝より、アブドゥッラーの息子預言者ムハンマドへ。あなたに平安あれ。次に申し上げるが、私はあなたの手紙を読み、その内容について、又あなたが勧めて下さる信仰についてよく考えてみました。私は、ヘブ

ル人の預言者達が、私達の時代に一人の預言者が現れると預言したことを知っております。ですが、私は、その預言者はシリアに現れると思っていました。私はあなたの使者を歓待し、1000 ディナールと5 キルアト (khil'at) を彼に贈りました。そして又あなたへの贈り物として二人のエジプト人の少女を送ります。

我々コプト人はこれら二人の少女を非常に大切にしております。一人はマリアといい、もう一人はスィーリーンといいます。更に、上質のエジプト亜麻布で作った衣服を 20 着あなたに進呈致します。又乗馬用のらば 1 頭をも贈ります。終わりに臨んで、あなたに神から平和がさずかりますように再びお祈り致します (Zurqāni, Tabari)。

この手紙から明らかなように、エジプト皇帝は、敬意を込めて手紙を扱ったけれども、イスラムを受け入れたわけではなかった。

バーレーンの長への手紙

預言者ムハンマドはバーレーンの長^{おさ}、Mundhir Taimī にも手紙を送った。この手紙は Alā bin Hadrami が持参した。この手紙の原文は失われ、残っていない。この手紙がこの長の許に届けられると、この長はこの手紙を信じて、聖預言者ムハンマドに返書を送った。そこには、長及び、彼の友人の多く、そして、従者達がイスラムに入信することにしたと書いてあった。しかし入信しないと決心した者もいた。長は又、彼の許にはユダヤ教徒やゾロアスター教徒もいるとも言った。彼等をどうすべきであろうか？

聖預言者ムハンマドは、この長宛てに再び次のように書いた。

イスラムを受け入れて下さって嬉しい。あなたの義務は私が送る使徒達に従うことである。彼等に従う者は、私に従う者である。私の手紙をあなたに持参した使者は、あなたのことを褒めて私に報告した。それで、あなたの信仰が、誠実なものであることがわかった。私は、あなた

の国の人々のために神に祈った。だから、イスラムの行き方と慣習とを彼等に教えるよう勧めなさい。彼等の財産を守ってやりなさい。誰であろうと4人以上の妻を持たせてはならない。過去の罰は許されている。あなたが、善良で高潔である限り、あなたは、あなたの国の人々を統治し続けるであろう。ユダヤ教徒とゾロアスター教徒は、税を払うだけでよい。その他の要求を何一つ出してはならない。一般大衆に関しては、自分達の生活を支えていくのに十分な土地を持っていない者には、それぞれに4ディルハムと身にまとうべき布をいくらかずつ与えなさい(Zurqāni&khamis)。

預言者ムハンマドは、Uman の王、Yamamah の長、Ghassān の王、Bani Nahd の長、イエメンの1部族、Hamdan の長、イエメンの別の部族、Bani Alīm の長と Hadrami 族の長などへも手紙を出したのである。彼等のうちの大部分はムスリムになった。

これらの手紙は預言者ムハンマドの神に対する信仰が何如に完全なものであったかを示している。これらの手紙から、預言者ムハンマドが最初から、神によって一定の民族或いは、一定の領土に限らず、世界中のすべての人類のために遣わされた者だということがよくわかる。これらの手紙の受け取られ方が、宛先によって異なっていたことは事実である。直ちにイスラムを受け入れた者もあった。よく配慮して手紙を受け取ったが、イスラムを受け入れることはしなかった者もあった。通常の礼儀に従って受け取った者もあれば、侮辱と傲慢を示した者もあった。これらの手紙の受取人、或いはその国民が、それぞれの手紙の取り扱いに応じた運命に遭遇したことは、事実である。そのことは、歴史が明らかに証明している。

カイバル陥落

上に述べたように、ユダヤ人及びその他の反イスラムの人達は今やム

スリムに逆らうよう各部族を扇動するのに一生懸命であった。今や、アラビアはイスラムの日の出の勢いには最早逆らえないこと、及びアラブ部族はメディナを攻撃できないことが彼等にはよくわかった。そのため、ユダヤ人は、ローマ帝国の南の国境地方に住みついたキリスト教部族と陰謀を企て始めた。同時に彼等は、イラクに住む同じ宗教を持つ人々に預言者ムハンマドを非難する手紙を書き始めた。通信という手段を使った悪意あふれる宣伝活動によって、彼等はイラン皇帝を扇動し、反イスラム活動を起こさせるように仕向けた。ユダヤ人の陰謀の結果、イラン皇帝は反イスラムに転じ、イエメンの総督に聖預言者ムハンマドを捕まえるように命令を出すまでに至った。預言者ムハンマドが無事のままで終わり、イラン皇帝の不正な計画が水泡に帰したのは、特別な神の介在及び神の恩恵によるものであった。預言者ムハンマドの生涯を通じて、神の助けがなかったならば、初期イスラムの穏やかな動きは、ローマ及びイランの皇帝達の敵意と反発の下に、つばみのうちに摘み取られてしまったであろうことは確実である。イラン皇帝は預言者ムハンマドの逮捕を命じたが、その命令が遂行されない内に、彼は皇帝の位を奪われ、彼自身の息子によって殺され、預言者ムハンマド逮捕命令は新しい統治者によって取り消されるという具合に事態は進んだ。イエメンの役人達は、この奇跡に感銘を受けた。そして、イエメンの地区は、早々にしてムスリム帝国の一部になった。ユダヤ人は、ムスリムとその町メディナに対してたくらみ続けた陰謀のために、彼等自身が、メディナからずっと遠くへ追いやられるはめに陥ってしまった。もし彼等が、近くに住み続けることを許されていたならば、恐らく益々激しい流血、並びに暴力へと発展しただろう。Hudaibiyah から戻って5ヶ月間待った後、預言者ムハンマドは、ユダヤ人をカイバルから追放する決心をした。カイバルは、メディナからほんの少し離れているだけであって、ここからなら陰謀を進めるのが非常に簡単であると、ユダヤ人は考えていたのであった。追放の意向をもって（紀元628年8月）預言者ムハンマドは、カイ

バルへ進軍した。彼には 1600 人の部下が従っていた。前に述べたようにカイバルは、堅固な防備の町であった。すべての側面が岩で取りまかれ、その上に小さな要塞が立っていた。このような場所を少数の軍勢で征服するのは決して易しい仕事ではなかった。カイバルの周辺にあった小さな衛兵所は小競合程度で落ちた。しかし、ユダヤ人が町の中心の城砦に集合した時には、この城砦に対するあらゆる攻撃、あらゆる形の戦略も失敗に終わるように思えた。ある日預言者ムハンマドは、カイバルは Ali の手で陥落されるだろうという啓示を受けた。次の日の朝、預言者ムハンマドは、従者達にこのことを伝え、「今日私は、神、その預言者、そしてすべてのムスリム達に愛される者に、イスラムの黒い旗を手渡そう。私達のカイバルでの勝利は、彼の手により、得られると神が定められたのである」と言った。その日の内に彼は、Ali を呼びにやり、彼に旗を手渡した。Ali は辞退しなかった。彼は部下を率いて中央の城砦を攻撃した。ユダヤ人がこの城砦の中に戦力を集中させていたのにもかかわらず、Ali とその部下達は、暗くなる前にこの城砦を征服した。和平が調印された。その条件は、全ユダヤ人及びその妻子がカイバルを立ち退き、メディナからずっと遠く離れたところに落ち着くというものであった。彼等の財産及び所有物は、ムスリムの手に引渡されなければならない。財産或いは、所有物を隠匿しようとしたり、偽りの申告をしようとした者は、この平和協定の下での保護を受けることは出来ず、忠誠の違反に対して定められた罰を支払わなければならない。

このカイバル包囲攻撃において興味ある事件が三つ起こった。その一つは、神の証を示すものであり、残りの二つは、預言者ムハンマドの崇高な徳目を証言するものであった。

カイバルの長、Kinānah の未亡人は、預言者ムハンマドと結婚をしていた。預言者ムハンマドは、彼女の顔に手形のようなあざが出来ているのを見た。「safiyyah, お前の顔のそれはどうしたのだ」と預言者ムハンマドは尋ねた。

「このようなことがあったのです」と Safiyyah は答えた。「私は、夢の中で月が私の膝に落ちるのを見ました。私は夫にその夢の話しをしました。その夢を物語るや否や、夫は私の顔に激しい平手打ちを喰わせ、『お前はアラビアの王と結婚したがっている』（Hisham より）月 はアラビアの国家の象徴であった。膝の上の月は、アラビアの王との親密な関係を表していた。割れた月、或いは落ちて来る月は、アラブ国家内の紛争或いは、その崩壊を意味するものであった。

Safiyyah の夢は、預言者ムハンマドの真理の証である。その夢は又、神が夢を通して神の僕達に将来のことを明らかにしてくださるという事実の証でもある。信仰心の篤い者は、不信仰者よりこの恩恵に浴することが多い。Safiyyah がこの夢を見た頃、彼女はユダヤの女であった。なんと、彼女の夫は、カイバルの包囲攻撃において殺されてしまったのだ。この包囲攻撃は、ユダヤ人が忠誠に違反したことに対する罰であった。Safiyyah は、捕虜として捕まえられ、捕虜を割り当てる段になって、一人のムスリムの仲間の許に預けられた。彼女が長の未亡人であると判明したのはその時であった。だから、もし、彼女が預言者ムハンマドと共に暮らすことになれば、その方が、彼女の身分にはふさわしいように思われたのであった。しかし預言者ムハンマドの選んだ道は、彼女に妻の座を与えることであった。そして、彼女も承諾した。このような運びで、彼女の夢は成就されたのだある。

他にも二つ事件があった。一つは、長の羊の番をしていた羊飼に関するものである。この羊飼いはイスラムに改宗した。改宗後、彼は預言者ムハンマドに言った。「神から遣わされた預言者様、私は、もう今まで一緒に暮らして来た人々の所へは戻れません。私の昔の主人の羊や山羊をどうしたらいいのでしょうか?」「動物達の顔をカイバルに向けて押し出してやりなさい。神が彼等をその主人の許へ導いて下さるだろう」と預言者ムハンマドは答えた。羊飼いが言われた通りにすると、その動物達の群は、ユダヤ人たちのところへ辿り着いた。そして、警備の兵隊

がその動物等を受け入れた。(Hisham, Vol. 2, p. 191) 預言者ムハンマドが個人の権利という問題について何如に真剣に考えていたか、そして彼の見解において、責任を果たすことが受託者にとって何如に重要であるかが、この事件によって、よく示されている。戦争に於いては、敗者の財産及び所有物を、勝者が取得することは正当なこととみなされている。我々の今の時代は文明文化の時代であるが、我々にこの事件に等しいような何かを示すことが出来るであろうか。退却する敵が後へ残していった物を、勝者が持主へと送り返してくれるなどということが今までにあったであろうか。この場合には、山羊は敵側の兵士の一人の持ち物であった。山羊を返すということは、敵に食糧を与えるということであり、敵側を数ヶ月間永らえさせることになるであろう。その食糧によって敵は、長い間包囲攻撃に抵抗出来るということになる。それでも、預言者ムハンマドは山羊を返した。これは、新しい改宗者に責任を果たすことの重要性を印象づけるためであった。

第三の事件は、預言者ムハンマドを毒殺しようとしたユダヤ人の女に関わるものである。彼女は、ムスリムの仲間に、預言者ムハンマドが動物のどの部分を好んで皿に取るのか、と尋ねた。彼女は、預言者ムハンマドが羊か或いは、山羊の肩肉を好むと教えられた。その女は、山羊を殺して焼石の上でカツレツを作った。そして、それに死量的の毒を混ぜた。預言者ムハンマドが選ぶことを信じて、肩から切り取った肉に特に入念に毒を盛った。

夕方の祈りを済ませ、預言者ムハンマドは、自分のテントに戻って来た。テントの近くでこの女が彼を待っているのを見て、「女よ。私に何か用か」と尋ねた。

「はい、アブル・カーシム様よ！あなたに贈り物をしたいのですが」。預言者ムハンマドは、仲間の一人にその女が持って来た物を運ぶように依頼した。彼が食事の席につくと、この贈り物の焼肉も彼の目の前に並べられた。預言者ムハンマドが一切れを食べた。仲間の Bishr bin al-

Bara bin al-Marur も一切れ取って食べた。同席をしていた他の仲間達も肉を食べようと手を延ばした。しかし預言者ムハンマドは彼等を制して、肉に毒が入っていると思うと言った。これを受けて Bishr も同じように思うと言った。Bishr は、肉を投げ捨てたかったが、そんなことをすれば預言者ムハンマドの心を乱す恐れがあると考えた。彼は、言った。「あなたが一切れ食べるのを見て、私も一切れを食べました。でも、すぐにあなたが全然食べなかったらよかったのにとはいじめました」。ある記録によれば、Bishr は、その後間もなくして気分が悪くなり、その場で息を引き取った。別の記録によれば、しばらく病んだ後に死亡したという。それで預言者ムハンマドはその女を呼びにやり、彼女が肉に毒を盛ったのかどうか尋ねた。女は、預言者ムハンマドにどうしてそれがわかったのか聞き返した。預言者ムハンマドは手に一切れの肉を持っており、「私の手がこの事を教えてくれたのだ」と言った。即ち、味から判断することが、出来たという意味であった。女は自分がしたことであると認めた。

「何故このようなことをしたのか？」と預言者ムハンマドは尋ねた。

「私の国の人々が、あなたと戦争をし、私の親族がこの戦いで殺されました。私は、あなたを毒殺しようと決意をしました。もし、あなたが詐欺師であるならば、あなたは死に、私達は安全になれるでしょう。そしてもし、あなたが預言者であるならば、神があなたをお護り下さると信じてしたことです」。

この説明を聞いて、この女が死刑にも値する程の罪を犯したにもかかわらず、預言者ムハンマドは彼女を許した。預言者ムハンマドは、常に許そうという心を抱いていた。そして彼は、罪が必要だと思われる時にしか罰しなかった。それは、罪を犯した者が、誤りを犯し続ける恐れのある場合だけであった。

預言者ムハンマドの幻夢の成就

ヒジュラ

遷都後7年目、正確には、629年2月に、預言者ムハンマドはカーバ神殿巡礼のため、メッカへ出かけることになっていた。これは、メッカの指導者達の同意を得ていることであった。預言者ムハンマドの出発の時が来て、彼は2000人の従者を集め、メッカに向けて出発した。メッカの近くにある中継点、Marr al-Zahrānに着いた時、彼は、従者に武装を解くように命じた。そして彼等は1ヵ所に集められた。Hudaibiyahで調印された和議の条項を厳守して、預言者ムハンマドと従者は鞘に納めた剣だけを身につけて、聖なる地区に入って行った。7年間離れていて今やっとメッカに戻るのだが、2000人の人々にとって、メッカに入ることは、決して極普通のことではなかった。彼等は、かつてメッカに住んでいた頃に負わされた苦悩の数々を思い出していた。同時に彼等を昔の地に帰らせ、平和裏にカーバ神殿での巡礼をさせてくれた神が何如に寛大であったかを知ったのである。ムスリムの怒りは大きかったが、喜びとに勝るものではなかった。ムスリムは、熱意、熱狂、そして誇りに満ちていた。神が、彼等に約束して下さったことが、すべて実現したのだとムスリムはメッカの人々に言いたかったのである。Abdullah bin Rawahaが戦争の歌を歌い始めた。しかし聖預言者ムハンマドは、彼を制して「戦争の歌はいけない」ただ唯一の神以外に崇拜すべきものはないとだけ言いなさい。預言者を助け、信仰心の篤い者を墜落から威厳へと高め、敵を追い払って下さったのは神なのである」と言った。

カーバ神殿を巡回し、Safaの丘とMarwahの丘の間を走破した後、預言者ムハンマドとその仲間達は、3日間メッカに泊まった。Abbāsの許^{もと}には、未亡人になった義理の妹Maimunahがいた。そして彼は、預言者ムハンマドに彼女と結婚してはどうかと勧めた。預言者ムハンマドは承諾した。4日目を迎えると、メッカの人々はムスリムの退去を要

求した。預言者ムハンマドは、退去命令を出し、従者達にメディナへの帰途につくよう要請した。預言者ムハンマドは協定遂行を余りにも良心的に考えており、又メッカの人々の感情を尊重することに細心の注意を払っていたため、彼は新妻をメッカに残して行くことにした。彼は、巡礼団の個人的身の回り品を運ぶ隊商と共に彼女がついて来て、彼に合流するように取り計らった。預言者ムハンマドは、らくだに乗り、間もなく聖なる地区の境界線の外に出た。その後の過ごす場所として Sarif とよばれる地に陣を張り、そこの彼のテントの中で、Maimunah は彼と結ばれたのである。

預言者ムハンマドの生涯について語るこの簡潔な説明に於いて、このような些細な出来事を詳しく語る必要はなかったかもしれない。だが、この出来事は、ある重要性を帯びている。つまり、こういうことである。預言者ムハンマドは、妻が数人居るという理由で、ヨーロッパの作家達から攻撃を受けた。彼等に言わせれば、複数の妻を持つということは、人間的だらしなさと淫樂的情欲の証拠なのである。しかし預言者ムハンマドの結婚についてこのような印象付けをしようとしても、彼の妻達が見せた献身、且つ自己犠牲的な愛を考えてみれば、すぐに嘘であるとばれてしまう。彼女達の献身と愛から、預言者ムハンマドの結婚生活が何如に純粹で無欲で、精神的なものであったかがよくわかる。この点に関しては、彼の結婚生活は全く比類無きものであり、一般の人はその一人の妻にさえそれほど善く接することはできないのに、聖預言者はその複数の妻達を善く接したのは類のないことである。そのたった一人の妻を、預言者ムハンマドが多数の妻を遇したよりもよく遇したと言える人は、一人もいない程である。もし預言者ムハンマドの結婚生活が淫樂に基いたものであったならば、きっと妻達は、彼に対して無関心になるか、彼に対して敵対心を抱いたであろう。だが事實は、全く違っていた。預言者ムハンマドのすべての妻は、彼に献身的であった。彼女達が献身的になれたのも、彼が無欲で高潔で、模範的な人物であったからである。

彼の無欲さに対し、彼女達は、骨身を惜しまない献身で応えたのであった。これは、歴史に記録された数多くの出来事によって証明されている。一つは、Maimunah 自身に関するものである。彼女が初めて預言者ムハンマドに会ったのは、砂漠の中のテントである。もし、彼等の夫婦関係が粗雑なものであったならば、そしてもし、預言者ムハンマドが妻達の性的魅力故に、彼女達を選んだならば、Maimunah は、預言者ムハンマドとの最初の出会いを大切な思い出としたりはしなかったであろう。もし、預言者ムハンマドとの結婚生活が不愉快な、或いは冷淡な記憶と結びつくものであったならば、彼女はその生活について何もかも忘れてしまったことであろう。Maimunah は、預言者ムハンマドの死後も長く生きた。彼女は長寿を全うしたのであるが、預言者ムハンマドとの結婚が、彼女にとってどんな意味を持ったかを決して忘れなかった。肉体の喜びが忘れ去られ、永遠の価値及び美德を持つ物のみが心を打つようになった 80 才の時に、彼女は死を迎えた。死の前夜、彼女は、メッカから 1 日の道程の場所に埋葬してくれるように頼んだ。そこは、預言者ムハンマドがメディナへの帰途、陣を張った所、そして彼との結婚後、彼女が初めて彼に会った場所であった。世界には、真実や空想の愛の物語が沢山あるが、これ程感動的なものは他にはない。

この歴史的なカーバ神殿巡礼の後ほどなくして、二人の有名な敵の将軍がイスラムに改宗した。そして彼等は、有名なイスラムの将軍となったのである。一人は Khalid bin Walid であり、その才能と勇気は、ローマ帝国を根底からゆさぶった。そして、この将軍の指揮の下に、ムスリムは、次から次へと諸国をイスラム帝国の下に加えて行ったのである。もう一人は、Amr bin Ās であり、エジプトの征服者であった。

Mūtah の戦い

カーバ神殿からの帰途、預言者ムハンマドはシリア国境において、ユ

ダヤ教徒および多神教徒にそそのかされたキリスト教徒の諸部族が、メディナに攻撃を仕掛けようとしているという報告を受け取った。そこで彼は 15 人の一団を派遣し、真相を探らせた。彼等は、シリア国境に軍隊が集結しているのを見た。すぐにその報告を持って帰ることをせず、彼等はそこに留まった。イスラムを説明しようという熱意が抑えられなかったのである。ところが、善意の熱意が持たらしめた結果は、彼等が期待していたものとは全く反対になってしまった。

今事件を振り返ってみると、敵対心に燃えて預言者ムハンマドの故国を攻撃しようと計画していた者達に別の行動を取らせようとするのは、無理だったのである。説明に耳を傾ける代わりに、彼等は弓を取って、15 人の一行に矢を降らせたのであった。しかしながら一行は、議論の返答として矢を受けたが、それでも後退も降参もせず、15 対 1000 で戦い、全員戦死してしまった。

この馬鹿げたほど残忍なシリア人を罰しようと、預言者ムハンマドは遠征を計画したが、その内に国境に集っていた軍隊が解散したという報告を得たため、計画を延期した。そして預言者ムハンマドは、ローマ皇帝に（或いは、ローマの名の下に Busra を統治していた Ghassān 族の長宛てに）手紙を書いた。恐らく、この手紙の中で預言者ムハンマドは、シリア国境の軍備について苦情を述べ、且つ、国境の状況を報告させるために送った 15 人のムスリム達が、不正且つ、全く無法にも虐殺された事件について不満の意を訴えたのである。この手紙を持参したのは、預言者ムハンマドの仲間である al-Harth であった。彼は途中 Mūtah に立ち寄り、ローマの官史として働いていた Ghassān 族の長、Shurahbīl に会った。「お前は、預言者ムハンマドの使者か」と長は尋ねた。「はい」という返事を受けた途端、彼は al-Harth を捕まえ、縛り上げ殴り殺してしまった。説教を試みただけの 15 人のムスリム殺害に関わった軍隊の指揮者がこの Ghassān 族の長であったと推測しても決して不合理ではあるまい。彼が al-Harth に「恐らくお前は預言者ムハンマドか

らの手紙を持っているであろう」と言ったという事実から、ローマ皇帝の支配下にある部族の男達がムスリムを攻撃したことについての預言者ムハンマドの不満が、ローマ皇帝に届かないようにと彼が心配していたことがよくわかる。彼は起こった事についての弁解をしなければならなくなるのを恐れていたのである。預言者ムハンマドの使者を殺害した方が安全だと彼は言った。だが、期待通りにはならなかった。預言者ムハンマドがこの殺害を知ってしまったのだ。この殺害及び先の殺害事件に対する報復処置として、預言者ムハンマドは3000人の部隊を結成し、Zaid bin Harithaの指揮の下にシリアへ急派した。このZaidは、預言者ムハンマドのおかげで自由になったもと奴隷である。彼については、メッカでの彼の生活に関する話の箇所ですでに述べた。預言者ムハンマドは、Zaidが死んだ場合の後継者としてJafar bin Abi Talibを、Jafarが死んだ場合の後継者としては、Abdullah bin Rawahaを指名した。もし、Abdullah bin Rawahaも死んだ場合には、ムスリム達が自分達の指揮者を選ぶことになっていた。これを聞いた1人のユダヤ人が大声で叫んだ。「Abūl Qasim よ。神は、預言者たる者との約束を成就なさる」。そして、Zaidに向かって、「もし、預言者ムハンマドが本物の預言者ならば、本当にお前は生きては帰れないのだぞ」と言った。心からの信仰者であったZaidは、それに答えて言った。「私が生きて帰ろうと死んでしまおうと、預言者ムハンマド様は、本物の預言者である」(Halbiyyah, Vol.3p75)。

次の日の朝、イスラム軍は、長距離となる進軍を開始した。預言者ムハンマドとその仲間達もしばらくの間、その進軍に同行した。このように大規模で大切な遠征を預言者ムハンマド自身の指揮によらないで行うのは、今だかつてないことであった。遠征隊を送り出すために同行する道すがら、預言者ムハンマドは、相談にのったり、指示を与えたりした。メディナの人々が一般に、シリアへ行く友人や親族に別れを告げる場所へ来ると、預言者ムハンマドは部隊を停めて、次のように訓辞した。

あなた方に強く言うておく。神を畏れなさい。そして、あなたがたと同行するムスリム達に公平にふるまいなさい。アッラーの御名の下に戦いにおもむき、シリアの敵と戦いなさい。彼等は、あなたがたの敵でもあり、アッラーの敵でもあるのだ。シリアに入れば、礼拝所において神を念ずる人々に会うであろう。その人々といざこざを引き起こしたり、迷惑をかけるようなことがあってはならない。敵国において女、子供を殺してはならない。目の見えない者や老人を殺してもいけない。木を切り倒したり建物を打ち壊したりしてもいけない (Halbiyyah, Vol,3)。

こう言って、預言者ムハンマドは引き返し、イスラム軍は前進した。キリスト教徒と戦うためにイスラム軍が派遣されたのは、これが初めてであった。イスラム軍がシリア国境に着いた時、ローマ皇帝自ら 10 万人の自分の兵と共に、そして更にアラビアのキリスト教部族からかり出された 10 万の兵を集めて行動を開始したという噂が耳に入った。このような大軍を目の前にし、ムスリム兵士の大半は進軍を途中でやめて、メディナにいる預言者ムハンマドの許へ報告をしたいと考えた。そうすれば預言者ムハンマドが軍勢の補強をしてくれるか、或いは新しい指図を送ってくるかもしれないからであった。軍の指導者達が協議の場を設けると Abdullah bin Rawaha が興奮して立ち上がり、言った。「諸君、あなたがたは、神の道において殉教者として死ぬ覚悟で家を出て来た。それなのに、殉教が目の前に迫った今、怯え出したようだ。私達は今まで、人数においても物量においても敵よりも装備がよかったから戦って来た訳ではない。私達を支えて来たのは、私達の信仰であった。たとえ敵の方が数において、或いは装備において、私達よりも何倍も優っているからといって、それが何だ。2 つある報償の中から、どちらか一方を選ばなければいけない。私達が勝利を収めるか、或いは、神の道に殉教するかのどちらかである」。将兵達は、Ibn Rawaha の言葉を聞き、大いに感動した。全員が口を揃えて、彼の言う通りだと言った。軍勢は進軍を続けた。行進をしていくと、ローマの軍勢が彼等の方に向かって来るの

が見えた。そこで、彼等は、Mūtah に陣を構え、戦闘が始まった。まもなくイスラム軍の司令官 Zaid が殺され、預言者ムハンマドの従弟である Jafar bin Abi Talib が軍旗と指揮権を受け継いだ。Jafar は、敵の威圧が増大しつつあり、一方イスラム軍は全くの物的劣勢のために自分を見失いそうになっているのを見て、馬から降り、その馬の脚を切った。この行動は、少なくとも自分は、逃亡を考えてはいないということの意味している。彼は、敗走よりは、討ち死にを選ぼうとしたのである。

自分が乗っていた馬の脚を切るというのは、総崩れや狼狽を防ぐためのアラブの習慣であった。Jafar は右手を失ったが、左手で軍旗を掲げていた。ところが、左手も失ってしまったので、残っている両腕の部分に胸に押し付けて、その間に軍旗を支えていた。約束通り、彼は戦いながら倒れた。そして預言者ムハンマドの命令に従い、Abdullah bin Rawaha が軍旗を握り、全体の指揮を執った。彼も又、戦死した。この場合の預言者ムハンマドの命令は、ムスリム達が互いに協議して、司令官を選び出すことであった。だが、選挙をしている暇などなかった。イスラム軍は、数において圧倒的優位にある敵に屈することになってもおかしくない状態にあった。しかし、Khalid bin Walid が一人の友人の意見を聞き入れて軍旗を握り、夕方まで戦い続けた。翌日 Khalid は、傷つき疲れ切った軍勢を率いて再び戦いを開始したが、今度は計略を巡らすことにした。彼は兵士の配置を変えた。前線に出ていた者を後部にいた者と、そして右手の方で戦っていた者を左手の方の者と、それぞれに交換させたのである。彼等は又闘の声をあげた。敵は夜の内にイスラム軍に援軍が加わったのだと思い込み、恐れをなして退却した。Khalid は残兵の命を救い、帰国した。預言者ムハンマドは、これらの成り行きについては啓示により、既に知っていた。彼は、ムスリム達をモスクに集めた。彼が話をしようと立ち上がった時、彼の目は涙に濡れていた。彼は言った。

シリア国境に向かってここを発った軍隊について語りたい。Zaid が、

次に Jafar が、更に次に、Abdullah bin Rawaha が軍旗を掲げた。この三人ともみな、勇敢に戦って倒れた。彼等のために祈ろう。彼等の後軍旗を預かったのは、Khalid bin Walid であった。彼は自らその立場をひき受けたのである。彼は神の剣の中の剣である。かくて彼はイスラム軍を救い、帰還したのである (Zad al-Maad, Vol.1 & Zurqāni)。

預言者の Khalid に対する描写は有名になった。以来 Khalid は、神の剣として知られるようになった。改宗するのが遅かった Khalid は、他のムスリムからからかわれたりすることがよくあった。或る時、彼と Abd ul-Rahman bin Auf が何かの問題をめぐって喧嘩をした。Abd ul-Rahman bin Auf は、預言者ムハンマドに Khalid の非を訴えた。預言者ムハンマドは、Khalid をたしなめて言った。「Khalid お前は、バドルの時代からイスラムに仕えている者を悩ますのか？たとえお前がウフド山程の重さがある金をイスラムへ奉げたとしても、Abd ul-Rahman が、受けられる位の神の恵みを受けるに値する程にはなれないであろう」「ですが、彼等が私を嘲るのです。だから、私としてもお返しをしなければ」と Khalid は、答えた。これを聞くと、預言者ムハンマドは、他の者達に向かって言った。「あなたがたは、Khalid を嘲ってはいけない。彼は、神の剣の一振りである。この剣は、不信者達をこらしめるために、鞘から抜かれたままなのである。」

預言者ムハンマドの言った言葉は、数年後に文字通り、事実となって現れた。

Khalid がイスラム軍と共に帰還した時、メディナのムスリム達は、帰還兵達を敗北者と呼び、気力に欠けていたのだと言った。彼等は、全員討ち死にするべきだったというのが一般的な批評だったのである。預言者ムハンマドは、このように批判をする者達をたしなめた。Khalid もその兵士達も、敗北者でもなければ、気力に欠けていたわけでもない、と彼は言った。彼等は、何度も帰還しては、次の戦いに出ていく兵士達なのである。預言者ムハンマドの言葉には、表面に現れている以上の深

い意味が含まれていた。この言葉は、ムスリム達がシリアと戦うことになる戦争を予告するものであった。

預言者ムハンマドと 1 万の従者、メッカへ行進

ヒジュラ
遷都から数えて 8 年目のラマダン（断食）の月（紀元 629 年 12 月）に預言者ムハンマドは、アラビアにイスラムを絶対的に確立するための最後の遠征に出発した。

Hudaibiyah において、ムスリムとアラビア部族の不信仰者達の間に和議が成立していた。更に、どちらか一方の軍が和議を破って他方を攻撃しない限り、10 年間両軍はお互いに戦争をしないという和議も同意を得ていた。この和議の下、Banū Bakr 族はメッカ軍と手を結び、一方 khuza'a 族は、ムスリムと同盟を結ぶに至った。ところがアラブの不信仰者達は、条約というものにはほとんど敬意を払ってはいなかった。特にムスリムとの条約などは問題外であった。そのため Banū Bakr 族と khuza'a 族との間には、目立った差がいくつか生じるようになって来た。Banū Bakr 族は、khuza'a 族との昔年の恨みを晴らすことについてメッカ軍に相談を持ちかけた。彼等は、Hudaibiyah で和議が調印された事実を主張した。預言者ムハンマドとの協定があるために Khuza'a 族は安全だと感じていた。だからこそ、Banū Bakr 族にとって今こそ Khuza'a 族を攻撃するチャンスであった。メッカ軍は同意した。メッカ軍と Banū Bakr 族は一緒になって Khuza'a 族に夜襲をかけ、多くの人々を殺した。Khuza'a 族は、40 人の者達を足の速いらくだに寄せ、預言者ムハンマドの所へ送り、この和議違反について報告させた。彼らは、今やイスラム軍がこの攻撃の復讐のため、メッカへ進軍するべきであると言った。この使節団が預言者ムハンマドに会見すると、預言者ムハンマドは、彼等の不幸は彼自身の不幸として受け取っていると彼等にはっきりと告げた。彼は空に立ち昇る雲を指して言った。「向こうに見える

雨滴のように、ムスリムの兵士があなたがたの援軍として降り下るであろう」。Khuza'a 族の使節団がメディナへ報告に行ったという知らせに、メッカ軍は動揺した。彼等は、大急ぎで Abū Sufyān をメディナへ送り、ムスリムの攻撃を迎えようとした。

Abū Sufyān はメディナに着き、自分が Hudaibiyah で同席していなかったという理由で、ムスリム側が新しい和平条約に調印しなければならないと力説した。預言者ムハンマドは、この願いに答えるのは、賢明ではないと考えた。Abū Sufyān は興奮しモスクへ行って宣言した。「諸君、私はメッカの人々を代表して、改めて平和をあなたがたに保証する」(Zurqāni)。

メディナの人々には、この演説の意味が分からなかった。それで彼等は、ただ笑うだけであった。預言者ムハンマドは、Abū Sufyān に向かい「あなたの言うことは一方的であり、私達には、とても同意できない」と言った。その間に預言者ムハンマドは、全部族に通知を出していた。彼等の準備が整い、進軍を開始したことを確認した上で、預言者ムハンマドは、メディナのムスリム達に武装して準備を整えるよう要請した。1月1日、イスラム軍は進軍を開始した。彼等の行く道のあちこちで他のムスリムの部族が加わった。軍隊が Faran の荒野に入った時は、わずか数日間の行程を経ただけであった。現に預言者ソロモンがずっと以前に予告したように、その軍隊は今や1万人に膨れあがっていた。この軍勢がメッカへ向かって進軍するにつれ、周囲の静けさが、メッカの人々には嫌が上にも不吉なものに感じられて来た。メッカの人々は、Abū Sufyān がメッカを発って1日の行程もすぎない内に、彼は夜の荒野全体がキャンプファイヤーで輝いているのを見た。預言者ムハンマドは、すべてのキャンプの前面にかがり火を焚くように命じておいたのである。夜の静けさと闇の中で、これらのほえるような勢いで燃える火の示した効果はすさまじいものであった。「これは一体どうしたことだ」。Abū Sufyān は、同行者に尋ねた。「軍隊が天から降って来たのであろう

か。アラブの軍隊にこれ程大きなものがあるなんて聞いたことも見たこともない」。彼の仲間達は、いくつかの部族の名前を挙げたが、どの名前に対しても Abū Sufyān は、「アラブの部族や人々は、どれをとってもこれ程大きな軍隊が持てるはずがない」と言った。Abū Sufyān とその友人達は、まだ考え込んでいたが、その時、暗闇から Abū Hanzala、(Hanzala は、Abū Sufyān の息子である) と呼ぶ声が聞こえて来た。

「Abbās、そこにいるのか？」と Abū Sufyān は言った。

「そうだ。預言者ムハンマドの軍勢が近くまで来ている。急いで行動を起こさないと、屈辱と敗北を喫することになるぞ」と Abbās は答えた。Abbās と Abū Sufyān とは、古くからの友達であった。Abbās と Abū Sufyān が彼と共に同じらばに乗って、預言者ムハンマドの所へいくべきであると主張した。彼は、Abū Sufyān の手を掴んで引き上げらばに乗せた。らばに拍車をかけると、間もなく二人は預言者ムハンマドの陣に着いた。Abbās は、預言者ムハンマドのテントを護衛している Umar が Abū Sufyān に跳びかかり、彼を殺してしまうのではないかと恐れていた。しかし預言者ムハンマドは、予め Abū Sufyān に出会った者は、誰であろうと彼を殺そうとしてはならないと通告してあった。この会合は、Abū Sufyān に深い感銘を与えた。彼はイスラムの運命とその隆盛に心を打たれた。そこには、たった一人の友人だけを連れて、メッカ人によってメッカから追放された者、預言者ムハンマドがいたのである。あれから7年しか経ってないというのに、今や預言者ムハンマドは熱心な信徒を1万人も連れて、メッカの門を叩いている。立場は完全に逆転していた。7年前には、生命の危険を感じてメッカから逃げ出した放浪の預言者が今はメッカに戻って来た。そして一方のメッカは、彼に抵抗するすべさえなかったのである。

メッカ陥落

Abū Sufyān は、怒りに燃えていたに違いない。信じ難い大きな変化が7年の間に起こったなど、あり得ないのではないか。そして、今メッカの指導者として、自分は何をしようとしているのか、まさか降服しようとしているのだろうか？このような思いに悩まされ、彼の様子は傍観者にはまるで感覚が麻酔した状態にあるように見えた。預言者ムハンマドは、この動揺したメッカの指導者を見た。彼は、Abbās に Abū Sufyān を連れて行って夜のもてなしをするように言い、Abū Sufyān とは翌朝に会うことを約束した。Abū Sufyān が見た陣中の騒がしさと活気は、彼が今までに経験したことがない異常とも言えるものであった。彼は、知らなかったのである。いや彼だけではない。イスラムの規律の下にムスリム達がこの様に早起きになっていたとは、メッカの人間は誰も知らなかったのだ。彼はムスリムの陳営の人々全員が祈りに出掛けるのを見た。或る者は、洗い清めの水を求めて往き来し、また或る者は、礼拝に参加する人々の列を整理する勤めに出た。朝早くのこの活気を理解することができなかった。彼は恐ろしくなった。彼を威圧する新しい計画が進行していたのだろうか？

「彼等は、皆一体何をしているのか？」と彼は、全く当惑した状態で尋ねた。

「恐れることは何もない。彼等は、朝の祈りの準備をしているだけだ」と Abbās は、答えた。

それから Abū Sufyān は、何千人ものムスリムが預言者ムハンマドの後に整列して、預言者ムハンマドの命令に従い、規定の動作及び礼拝を行うのを見た。立礼、叩頭、再び起立などの動作が続いた。Abbās の任務は警備であったため、彼は自由に Abū Sufyān と会話をすることができた。

「今度は、彼等は一切何をしようとしているのだろうか？」と Abū Sufyān が尋ねた。

「預言者のする通りに、ことごとく他の者達に従っています」

「何を考えているのだ、Abū Sufyān よ。ムスリムの祈りに過ぎないというのに。ムスリムは預言者さまの命令なら何だってするだろう。例えば断食、断飲だってするのだ」

「なるほど」と Abū Sufyān は言った。「私は偉大なる宮廷を色々見て来た。イラン皇帝の宮廷も見だし、ローマ皇帝の宮廷も見た。だが、ムスリムが、彼等の預言者に対して示す程、深い献身をその統治者に対して示している人々を他に見たことがない」(Halbiyyah、Vol・2,p.90)。恐れと罪におののいた Abū Sufyān は、もし、自分が自国の人々、つまりメッカの人々を許してくれるように懇願しなかったらどうなるかと何度も何度も Abbās に尋ねた。

朝の祈りが終わり、Abbās は Abū Sufyān を預言者ムハンマドの所へ連れて行った。

預言者ムハンマドは、Abū Sufyān に向かって言った。「アッラー以外には、崇拝に値するものはないということがあなたにはまだわからないのか」

「誓って言う。(私の両親をあなたにいけにえとして差し出してもよい)あなたは、あなたの親族縁者に対して、常に親切で優しく思いやりがあった。もし、誰か、他に崇拝に値する人が居たら、きっと今ごろは、私はその人の助けを得て、あなたに立ち向かっていただろう」

「私がアッラーの使徒であるということが、あなたには何故分らないのか」

「誓って言うが、このことについては、私は、まだ疑いを抱いている」Abū Sufyān が預言者ムハンマドを神の使徒として認めることを躊躇している間に、メッカ軍のために偵察の任務を果たすべく、彼に従ってメッカから進軍して来ていた彼の仲間の内の二人が、ムスリムに改宗して

しまった。その二人の内の一人は、Hakim bin Hizām であった。少し遅れて Abū Sufyān も改宗したが、彼の心からの改宗は、メッカ征服の後になるまで待たなければならなかったようである。Hakim bin Hizām が預言者ムハンマドにムスリムは自分達の親類縁者をも滅ばすつもりかどうかを尋ねた。

預言者ムハンマドは答えて言った。「これらの人々は非常に残忍であった。彼等は不行跡を働き、彼等自身で彼等の信仰が誤っていることを実証した。彼等は、自ら Hudaibiya で調印した和議に逆らって、Khuza`a 族に野蛮な攻撃を仕掛けた。彼等は、神によって侵すべからざる所と定められた場所で戦争を引き起こしたのである」。

「正にその通りです。神から遣わされた預言者さま。私達の国の人々はあなたのおっしゃる通りの行為をしました。しかし、メッカへ進軍するのではなく、Hawāzin 族を攻撃すべきだったではありませんか」と Hakim が提案した。

「Hawāzin 族も残忍、且つ野蛮であった。神が私に三つの目的を全部達成させて下さることを望む。三つの目的とは、メッカ征服、イスラムの隆盛、そして Hawāzin 族の敗北である。

耳を傾けて聞いていた Abū Sufyān が預言者ムハンマドに尋ねた。「もしメッカ軍が剣を抜かなければ彼等に平和が来るのか？」

「その通りである」と預言者ムハンマドは答えた。「家の中に留まっているものは、誰でもが安泰である」

「ですが、預言者さま」と Abbās が口をはさんだ。「Abū Sufyān が気にしているのは自分自身のことなのです。彼の身分や地位がメッカの人々の中で敬意を払ってもらえるのか？」

「それは大丈夫である」と預言者ムハンマドは言った。「Abū Sufyān の家に避難する者は誰であろうと安泰である。聖なるモスクに入るのは、誰でも安泰である。武器を置く者は、誰でも安泰である。扉を閉めて中に居る者は安泰である。Hakim bin Hizām の家に留まる者は安泰である」

こう言ってから、預言者ムハンマドは、Abū Ruwaiha を呼び、彼にイスラムの軍旗を手渡した。Abū Ruwaiha は、黒人の奴隷 Bilāl と兄弟の約束を結んでいた。軍旗を手渡ししながら、預言者ムハンマドは言った。「この軍旗の下に立つ者は、誰でも安泰である」。同時に彼は Bilāl に命じて Abū Ruwaiha の目の前を歩かせ、Abū Ruwaiha の持つ軍旗の下に平和があるのだということを関係者すべてに向かって宣言させた。

聖預言者ムハンマド、メッカに入る

英知あふれる采配がなされた。ムスリムがメッカで迫害を受けていた頃、彼等の標的の一人であった Bilāl は脚にロープを巻きつけられ、街を引きずりまわされた。メッカが彼に与えたのは、ひとかけらの平和すらなく、肉体的苦痛、恥辱、屈辱のみであった。この日開放されて、Bilāl はさぞかし復讐心を感じていたことだろう。メッカにおいて苦しめられた残虐行為に対して彼に報復させる必要があった。だが、その報復はイスラムによって定められた範囲でなければならなかった。従って預言者ムハンマドは、Bilāl が剣を抜いて、以前彼を迫害した者達の首をはねることは許さなかった。そのようなことをすればイスラムの教えに反したことになる。その代わり預言者ムハンマドは、Bilāl の兄にイスラムの軍旗を手渡し、Bilāl には彼の兄が掲げる軍旗の下に以前の迫害者達に平和を与える役目を負わせたのであった。この報復には美しさと訴えるものとがあった。兄の前を行進、敵を平和へと招き入れている Bilāl の姿を思い描いてみるといい。彼の復讐心が長続きしたはずがない。兄の高く掲げる軍旗の下に、メッカの人々を平和へ誘いながら行進をしていく内に、その激情は次第に融けていったに違いない。

ムスリムがメッカへ向けて行進する間、預言者ムハンマドは Abbās に、Abū Sufyān 及びその友人達を、ムスリムの軍隊、その行動、そして態度がよく見える場所に連れて行くよう命じておいた。Abbās は命

じられた通りにし、Abū Sufyān とその友人達は、眺望のきく地点からアラブの部族達が通り過ぎていくのを眺めた。その勢力は、イスラムに対する陰謀のために、メッカの人々がこの7年間ずっと頼りにしていたはずのものであった。この日の彼等の行進は、不信心の兵士としてではなく、信仰を持つ兵士としてのものであった。彼等は、今や彼等の異教徒時代のスローガンではなく、イスラムのスローガンを掲げているのだった。彼等は、預言者ムハンマドの命にとどめを刺すためではなく、彼の命を守るための隊形をとって行進した。預言者ムハンマドの血を流すのではなく、彼のために彼等自身の血を流す隊形であった。その日の彼等の大望は、預言者ムハンマドが伝える神の言葉に抵抗することでもなければ、彼等自身の仲間の表面的な団結を助けようというものでもなかった。彼等がこれまで抱いていなかったそれは人間の一致団結を確立することであった。一隊、又一隊と行進が続き、やがて Ashja 族が Abū Sufyān の目に入った。彼等のイスラムへの献身、並びに自己犠牲の熱意が彼等の表情に表れ、彼等の歌ならびにスローガンから響いて来た。

「彼等はどこの部族だろう？」と Abū Sufyān は尋ねた。

「Ashja 族だよ」と返事がった。Abū Sufyān は、驚いた顔をして言った。「アラア中のどの部族よりも激しい敵意を聖預言者ムハンマドに対して抱いていたのに」

「神の恩恵のおかげだ。神は、ふさわしいと思われるとすぐに、イスラムの敵の心を変えてしまわれるのだ」と Abbās は答えた。

最後に Ansār と Muhājirin に囲まれて預言者ムハンマドがやって来た。

武装した屈強の兵士が2000人程もいたであろうか。勇敢な Umar が行進の指揮をとっていた。その光景は、非常に印象的であった。ムスリム達の献身、決意、熱意が溢れ出ているようであった。Abū Sufyān の目が彼等に注がれた時、彼は完全に威圧されていた。

「彼等は何者だろう」と彼は尋ねた。

「預言者さまを取り囲んでいる Ansār と Muhajirin だ」と Abbās は答えた。

「地上のいかなる勢力もこの軍隊には太刀打ち出来ないだろう」と Abū Sufyān は言った。それからもっとはっきりと ‘Abbās に向かって言った。「お前の甥は世界中で最強の王となったわけだ」

「まだ事実がよくわかっていないようだな、Abū Sufyān。彼は王ではない。預言者なのだ。神から遣わされた使徒なのだ」と、Abbās は答えた。「はい、はい、君の言う通りにしよう。預言者だ。王ではないのだ」と Abū Sufyān は言った。

イスラム軍が Abū Sufyān の前を進軍通過する時、Ansār の司令官 Sad bin Ubada が Abū Sufyān をまじまじと見るという場面があった。Sad bin Ubada は我慢し切れなくなって、彼等が武力をもってメッカに入っても教えにはふれないと神がお許し下さったのだと言った。そして又、クライシュ族は屈辱を味わうことになるだろう、とも言った。

預言者ムハンマドが通り過ぎようとした時、Abū Sufyān は声を高くして預言者ムハンマドに向かって言った。「あなたさまは、自分自身の民の殺害を許したのか？ Ansār 族の司令官、Sad とその仲間達がそう言っているのを聞いた。彼等はこの日が皆殺しの日になると言っていた。メッカの神聖さが流血を避け得ず、クライシュ族は、屈辱を味わうであろう。神から遣わされた預言者、あなたは人間の中の最も優れ、最も寛大で最も思慮深い人である。あなたは、あなた自身につながる人々がした事すべてを許し、忘れようとは思わないのか？」

Abū Sufyān の訴えは、胸にこたえるものがあつた。常に侮辱され、メッカの街中で打ち据えられ、また略奪され、家から追われた当のムスリム達がかつての迫害者に対して慈悲の感情を持ち始めた。彼等は言った。

「神から遣わされた聖預言者さま、私達に対してメッカ人が行った不行跡や残虐行為のためについて聞いた話しから、Ansār の者達は、報復

を考えるようになっているかもしれません。彼等が何をしだすか、私達にはわかりません」

聖預言者ムハンマドは、これを理解した。Abū Sufyānの方を向いて彼は言った。「Sadが言ったことは、全くの間違いである。この日は、皆殺しの日ではない。許しの日となるのだ。クライシュ族もカーバ神殿も神の栄光を受けるであろう」。

それから、彼はSadを呼びにやり、彼にAnsārの旗を彼の息子Qaisに譲り渡すように命じた(Hisham, Vol.2)。こうしてAnsārの支配者はSadからQaisに移った。これは賢明な処置であった。メッカ人をなだめ、Ansārの失望を救うことにもなったからである。Qaisという若者は、預言者ムハンマドからの信頼を充分に得ていた。彼の晩年の或る出来事が、彼の人柄その信心深さをよく表している。死の床について、彼は友人達の訪問を受けた。来る者もあれば来ない者もあった。彼にはこの事が理解出来ず、何故友人の中に、来てくれない者がいるのだろうと尋ねた。「君は慈悲の心にあふれた人だ」と一人の友人が説明した。「君は自ら借金をしてまで、金に困っている人を助けて来た。だから、君に借金を請求されるかと思ひ、来るのをためらっている者もいるだろう」。「それでは、私が友人を近寄らせないという原因であったわけだ。どうか、Qaisに借りがある人なんて誰もいないと皆に知らせて欲しい」。このことが伝えられてからは、Qaisは息を引き取るまで、余りにも多くの人々の来訪を受けたので、彼の家に行く踏み段が崩れてしまった程である。ムスリムの軍隊が通り過ぎた時、AbbāsはAbū Sufyānにメッカへ急ぎ、メッカの人々に預言者ムハンマドが来たことを知らせ、どうしたらすべてが安泰に納まるのかを彼等に説明すべきであると言った。Abū Sufyānは、町の人々にこの平和の伝言を持ってメッカに到着したが、ムスリムに対する敵意が余りにも激しいことで悪名高い彼の妻Hindが彼を出迎えた。凝り固まった疑い深い人間ではあったが、気の強い女でもあった。彼女はAbū Sufyānのあごひげを掴み、メッカの人々に、外

へ出て来て、自分の臆病な夫を殺すように頼んだ。Abū Sufyān が町の防衛と名誉の為とはいえ、町の住人達の命を犠牲にしたりするよりも、人々を平和へと招こうとしていたからである。

だが、Abū Sufyān は、Hind が愚かな行動をとっているのを見抜くことができた。

「そんな時代は、終わったのだ」と彼は言った。「お前は、家へ帰って閉じこもっていたお方がいい。私はムスリムの軍勢を見たのだ。今や全アラビアを挙げて彼等にたち向かうことは出来ないだろう」

それから彼は、預言者ムハンマドがメッカの人々に平和を約束した条件を説明した。これらの条件を聞いて、メッカの人々は、保身のために預言者ムハンマドの宣言の中にある指定された場所へと走って行った。男11人と女4人だけは、この宣言から除外されていた。この者達が犯した罪が余りにも重かったからである。彼等の罪は、彼等が信心をしなかったからでもなけれど、彼等がイスラムとの戦いに参加したからでもない。彼等が見過ごしには出来ない程の非人道的行為を行ったからである。だが、現実には死刑となったのは4人だけであった。

預言者ムハンマドは、戦わざるを得ない時、並びにメッカの人々の方が先に戦いを挑んだ時以外には、何如なる戦いをも許さないようにKhalid bin Walid に命じていた。Khalid が入った町のその地域には、まだ平和の宣言の噂が届いてはいなかった。その地域に配置されていたメッカ人は、Khalid を戦いに誘い込もうとした。遭遇戦が続いて起こり、12人か13人の死者が出た（Hisham, Vol.2, p.217）。Khalid は激昂し易い性質の男であった。この出来事に危険を感じた一人の男が預言者ムハンマドの所へ走り、Khalid に戦いを止めさせるように頼んだ。もし、Khalid が戦いをやめなければ、メッカ中の人々が皆殺しになってしまう、とその男は言った。

預言者ムハンマドは、すぐに Khalid を呼びにやり、「私はあなたに、戦いをやめるように言ったはずではなかったか」と言った。

「はい。そうおっしゃいました。神から遣わされた預言者さま。ですが、これらの者達が最初に私達に攻撃をしかけ、私達に矢を射掛け始めたのです。しばらく私達は、何もしてませんでした。そして私達は、戦いたくないと彼等に告げました。でも、彼等は耳を貸そうとモーゼず、戦いをやめなかったのです。そこで私は彼等に応戦して、彼等を分散させたのです」

これは、この場合に起こった唯一の不運な出来事であった。メッカの征服はこのようにして事実上無血で行われたのである。

預言者ムハンマドは、メッカに入った。人々は彼にどこに留まるつもりか尋ねた。

「Aqīl は、私に住む家を残しておいてくれたか」と預言者ムハンマドは尋ねた。Aqīl は、預言者ムハンマドの従弟、つまり彼の叔父の息子であった。預言者ムハンマドがメディナへ避難している間に、彼の親族は、彼の財産をすべて売り払ってしまっていた。預言者ムハンマドが自分の物といえるような家は、何も残されてはいなかった。従って、預言者ムハンマドは、「私は Khīf Banī Kinānah に留まることにしよう」と言った。ここは、空き地になっていた。クライシュ族と Kināna 族がかつてそこで集まって誓いをたてたことがあった。その内容は、この両部族は、Banu Hashim 族と Banu Abd al-Muttalib 族が預言者ムハンマドを彼等に引渡し、彼等が好きなように彼を扱えるようにしない限りは、これら後者の二部族とは何の取引もしないというものであった。前者2部族は、後者2部族に対して何も売らないし、何も買わないと誓ったのである。預言者ムハンマド、その伯父であるアブー・ターリブ、聖預言者ムハンマドの家族、そして信徒達がアブー・ターリブの谷に避難し、三年間に渡って過酷な封鎖と排斥に苦しまなければならなくなったのは、この重要な宣言がなされてからであった。

だから、聖預言者ムハンマドが滞在すると決めた場所には深い意味があった。この場所で、かつてメッカの人々が集まって、聖預言者ムハン

マドが彼等の手に落ちない限り、聖預言者ムハンマドの部族達に対して、彼等の心が休まることはないという誓いをたてた。今や聖預言者ムハンマドは、正にその同じ場所へやって来たのである。それはまるで、彼がメッカの人々に次の事を言うために来たかのである。「あなたがたが、私にここへ来ることを望んだのだ。だから、私はここに来た。だがあなたがたが望んでいた形式ではない。あなたがたが、望んでいたのは、私をあなたがたの犠牲者として、即ち、あなたがたが完全に思い通りにできる者として、迎えることであった。しかし、私は今ここで力を持つ存在である。私に従って来る者達だけでなく、今やアラビア全土が私の味方である。あなたがたは私に従って来る者達に対して、私を引き渡すよう望んだ。代わりに彼等は、あなたがたを私に引渡したのである」聖預言者ムハンマドと Abū Bakr が Thaur の洞穴を出て、メディナへ旅立ったその日も、月曜日であった。その日 Thaur の丘に立って預言者ムハンマドは、メッカの方を向いて、言ったのであった。「メッカよ、お前は他のどの場所よりも私には愛しい。だが、お前の地に住む人々が、私をここに住まわせてはくれないのだ」

預言者ムハンマドがらくだに乗ってメッカへ入った時、Abū Bakr はあぶみを持って彼について歩いた。歩きながら、Abū Bakr は、アルファトフ章の節を読誦していた。その箇所には、何年か前にメッカの征服が予告されているのであった。

カーバ神殿、偶像排除

聖預言者ムハンマドはカーバ神殿へまっすぐに進み、らくだに乗って聖なる地区を7回巡回した。そして、彼等の祖先アブラハムとその息子イシュマエルによって建てられた建物の中を、杖を片手に歩き回った。その建物は、唯一神のために建てられたのにもかかわらず、その子孫達が道を誤ったために偶像崇拜の場所となっていた。預言者ムハンマドは、

その建物の中に納められている 360 体の偶像を一つ一つ叩きつぶしてした。一体ずつ偶像が倒れる度に、預言者ムハンマドは、次のような言葉を唱えていた。

「真理が来たれり、虚偽は消滅せり。げに虚偽は消滅する定めなり」
この言葉はバニー・イスラーイール章に記されていて、預言者ムハンマドがメディナへ向けて、メッカを去る時に、啓示されたものであった。この章には、預言者ムハンマドの逃避とメッカ征服が予告されていた。この章は、「メッカ人の章」であり、この事実は、ヨーロッパの作家達にも認められている。預言者ムハンマドのメッカ逃避及び、メッカ征服を内容とするこの箇所は、次のように啓示されている。

而して云え、「我が主よ、我に正しい入り方で入らせ、正しい出
方^{しか}で出し給え。而して、我に汝の御許から強い援助者を授け給え。
而^{しか}して云え、「真理が来たれり、虚偽は消滅せり。げに虚偽は消滅
する定めなり」(17:81-82)。

ここで聖預言者は祈りにおいて、メッカ征服を預言されている。神の庇護のもとに、メッカに入りメッカを去るために祈るように教えられている。そして、偽りに対する真理の勝利を確信するために、神に助けを求めて祈るように教えられているのだ。預言は、文字通り成就した。Abū Bakr がこの節を唱えたのは適切であった。それはムスリムの心を引き締めることになり、又メッカの人々に対しては、神に逆らって戦うことの無益さ、そして神が預言者になされた約束の真理について思い起こさせることになったのである。

メッカ征服に伴い、カーバ神殿は何千年も昔に、先祖アブラハムによって神聖視されていた本来の姿に立ち戻ることが出来た。その神殿は再び唯一神の崇拜場所としてあがめられるようになった。偶像は破壊された。その中の一体は、Hubal であった。預言者ムハンマドがその像を杖で叩き、それが粉々に散らばった時、Zubair は、Abū Sufyān を見つめ、半笑いを浮かべながら、彼に Uhud の戦いのことを思い出させた。「傷つ

き疲れ果てたムスリム達があなたのそばに立ち、あなたが『Hubal に栄光あれ、Hubal に栄光あれ』と呼びながら、彼等を更に痛めつけた時のことを覚えているか。あの日、あなたに勝利をもたらしてくれたのは、Hubal だったのか。もし、Hubal であったならば、今日その Hubal の末路が見られたというものだ」

Abū Sufyān は感動した。そして、もし預言者ムハンマドの伝える神以外に神がいたとしたら、メッカの人々は、今日、この日に出会った恥辱と敗北を味わわずに済んだはずだというのは全くの真実であると彼は認めた。

それから、預言者ムハンマドは、カーバ神殿の壁に描かれている絵を拭き取るように命じた。これを命じてから、預言者ムハンマドは神への感謝として祈りを2度唱えた。それから、外の庭へ出て再び祈りを2度唱えた。絵を拭き去る仕事は Umar に依頼されていた。彼は、アブラハムの絵を残して他を全部消し取った。預言者ムハンマドは、検査のために戻って来て、この絵がそっくり残されているのを見つけ、Umar に何故この絵を残したのか尋ねた。

アブラハムはユダヤ教徒に非ず、またキリスト教徒にも非ざりき。彼は常に神に帰依服従し、従順にして、多神教徒に非ざりきと証言している聖クルアーン (3:68) のことを Umar は忘れたのか。

アブラハムの絵をカーバ神殿の壁に残すということは、神の唯一性を主張する偉大なる主唱者たる彼の思い出に侮辱を与えるものであった。それはあたかもアブラハムが神と等しく崇拜をされてもよいということになってしまうからであった。

その日は、神の証に満ちた記念すべき日であった。聖預言者ムハンマドと神が交わされた約束は、一時は達成不可能と思われても、ついに成就されたのである。聖預言者ムハンマドは、献身と信仰の中心的存在であった。聖預言者ムハンマドの人柄の中に、そしてその人柄を通して、神は御自分を示された。言わば御自分の顔を再び表わされたのであった。

聖預言者ムハンマドは、Zamzam の水を取って来させた。彼はその水を少し飲み、残りを洗い清めのために使った。聖預言者ムハンマドに非常に献身的なムスリム達は、この水を一滴すら地にこぼすまいとした。彼等は手のくぼみに水を受け、それで身体を濡らした。このように尊敬の念を抱いて彼等は水を手にしたのであった。このような献身の光景を見た異教徒達は、この世の王にして、かくも献身的な臣下を持つ王は見たことがないと再三繰り返して言った (Halbiyyah, vol.3, p99)。

敵を許す聖預言者ムハンマド

すべての儀式と任務を果たした後、聖預言者ムハンマドは、メッカの人々に向かって言った。

「あなたがたは、神の約束が何如に真実であるかが証明されるのを見た。今や私が知りたいのは、あなたがたを唯一神への礼拝へと誘ったというだけの理由で、その人々を苦しめ、彼等に対してあなたがたが犯した残忍さと極悪について、どのような罰をうけると思っているかということである」

これに対してメッカの人々が答えた。「ヨセフが罪を犯した自分の兄弟を遇したように、私達を取り扱っていただきたい」

意味深長な偶然の一致ともいうべきであろうが、メッカ征服の 10 年前に啓示されたユースフ章において、神が使われた言葉そのままをメッカの人々は許しを求める嘆願の言葉として用いたのであった。この啓示において預言者ムハンマドは、ヨセフが彼の兄弟に対して執った処置と同様に彼もメッカの迫害者を処するであろうと伝えられていたのであった。ヨセフが彼の兄弟に与えた扱いがどのようなものであったかを尋ねた上で、メッカの人々はイスラムの預言者は、ヨセフの預言者に似たものであり、ヨセフが兄弟に対して勝利を得たように、預言者ムハンマドもメッカの人々に対して勝利者となったのだと認めた。メッカ人の願を

聞いて、預言者ムハンマドは、直ちに宣言をした。「神に誓って、今日あなたがたは、何の罪も非難も受けることはない」(Hishām)。

聖預言者ムハンマドがカーバ神殿において神への感謝の気持ちを表し、その他の祈りを奉げ、そして又メッカの人々に対して、すべてを許し忘れるという彼の決意を伝えている間に、メディナのムスリムである Ansār 族の心の中に疑惑の念が生じた。彼等の中には、メッカのムスリム達がメッカに戻り、帰郷と和解の感情を抱いているのを見て、動揺する者が現れた。預言者ムハンマドは、彼等メディナのムスリム達、即ち、逆境においてイスラムに最初の安住の地を与えた彼の友人達に、別れを告げようとしているのではないか。預言者ムハンマドは、かつて命を守るために逃げ出した町、メッカに落ち着いてしまおうとしているのか。メッカが征服され、預言者ムハンマド自身の部族の者達がイスラムに帰依した今、このような恐れは決してあり得ないことではなかった。預言者ムハンマドは、このままメッカに落ちつきたいのであろう。だが神は、預言者ムハンマドに Ansār のこういった疑惑の念について知らせた。預言者ムハンマドは頭をあげて、Ansār を見つめて言った。「あなたがたは、預言者ムハンマドが自分の町に対する愛情と、自分と部族の絆によって、心を乱していると思っているようだが?」「その通りです」と Ansār は答えた。

「私達は、確かにそのことを考えておりました」

「あなたがたは、私が誰であるかわかっていますか?」聖預言者ムハンマドは言った。「私は神の僕であり、神から遣わされた使徒である。その私に、どうしてあなたがたを見棄てることができようか。神の信仰がこの地上において何の助けも得られなかった時に、あなたがたは、私を支持し、あなたがたの命を犠牲にしてくれた。それなのにどうして私が、あなたがたを見捨てて、他の地に住むことができるだろう。いいや、Ansār の皆さん、そんなことは出来ない。私は神のためにメッカを出たのだから、ここへ戻ることは出来ない。私はあなたがたと共に生き、共

に死のう」

Ansār は、この異常とも思える愛と誠実さに感動した。彼等は、神とその聖預言者に対して抱いた不信の念を悔やみ、泣いて許しを請うた。彼等は、もし聖預言者ムハンマドが彼等の町を出て、どこかへ行ってしまったならば、もう何如なる平和も彼等には訪れないだろうと釈明した。聖預言者ムハンマドは、彼等の恐れはよくわかると答え、更に彼等の釈明の後に、神とその預言者と、彼等の純粹さに満足し、彼等の忠誠心は確かに受けとったと伝えた。

この時、メッカの人々はどう感じていただろうか。確かに彼等は信心の涙を流しはしなかったが、彼等の心は後悔と自責の念で一杯になったはずだ。彼等は彼等自身の町で見い出された宝石を、彼等自身の手で投げだしてしまったのではなかったか。彼等が後悔するもっと大きな理由があった。それは、メッカへ帰って来た聖預言者ムハンマドが再びメッカを出て、メディナへ戻って行く決心をしたからであった。

Ikrima ムスリムに改宗

一般的な大赦から除外されていた者達の中にも、ムスリムの仲間達からの口添えがあって、許された者達がいた。こうして許された者達の1人、アブー・ジャフルの息子 Ikrima の妻は、心底はムスリムであった。彼女は、聖預言者ムハンマドに彼を許してくれるようお願い出た。聖預言者ムハンマドは、彼を許した。その時 Ikrima はアビシニアへ逃げ出そうとしていた。彼の妻は彼を追いかけて、彼が正に乗船しようとしているところを見つけた。彼女は、彼を叱責した。「あなたは、聖預言者のような優しく穏やかな方から逃げようというのですか」と彼女は言った。

Ikrima は驚いて、おまえは本当に聖預言者ムハンマドが自分を許すとも思っているのかと、尋ねた。彼女は、聖預言者ムハンマドは、あなたですら許してくれるような人だと彼に請け合った。事実彼女は、既

に聖預言者ムハンマドから許しの言葉を聞かされていたのであった。Ikrima はアビシニアへの逃亡計画を断念し、聖預言者ムハンマドに会いに戻って来た。「私は妻から、あなたが私のような者でも許して下さいと知りました」と言った。

「あなたの妻の言う通りである。私は本当にあなたを許している」と聖預言者ムハンマドは言った。

Ikrima は、最も許し難い敵を許すことのできる人物は偽りの人ではあり得ないと判断した。それで彼は、イスラムへの信仰を誓った。「私の神は、唯一にして、他に並び得るものはないことを証言致します。そして又、あなたが神の僕であり、神から遣わされた使徒であることを証言致します」。そう言うと、Ikrima は、恥ずかしさに頭を垂れた。聖預言者ムハンマドは、彼を慰めて言った。「Ikrima、私はあなたを許しただけでなく、あなたに対して敬意を払っている証として、私が与え得るものならば何でもあなたの望みに応じて与えたいと思っている」。「私のために神に祈って下さい。そして私があなたに逆らって犯したあらゆる不行跡、及び極悪行為に対しての神の許しを請うていただきたいのです。これが最高の望みで、それに優るものではありません」と Ikrima は答えた。この嘆願を聞き入れ、聖預言者ムハンマドは直ちに神に祈った。「我が神よ、Ikrima が私に対して抱いて来た敵意をお許し下さい。彼の口から命じられた悪業について彼をお許し下さい」

それから聖預言者ムハンマドは、立ち上がり、自分のマントを取って Ikrima に着せかけながら言った。「神を信じて私の所へ来る者は、誰であろうと私と共にある。私の家は私のものであると同様にその者の家でもあるのだ」。

Ikrima の改宗は、何年も前に聖預言者ムハンマドが伝えた預言を実現させた。聖預言者ムハンマドは、かつて仲間の者達に話したことがあった。「私は、ある幻影を見た。その幻影の中の私は楽園にいた。そして、そこで1房のぶどうを見つけた。私が誰のために用意されたぶどうかと

尋ねた所、『アブー・ジャフルのためである』という返事が返ってきた」。この幻影をこの度 Ikrima の改宗と照らし合わせながら、聖預言者ムハンマドは、その時には、その幻影の意味がわからなかったと言った。信心深い者達の敵であるアブー・ジャフルが何故、樂園に入ることが出来、何故一房のぶどうを供えてもらえるのか。「だが、今では私の見た幻影の意味が理解できる。そのぶどうは Ikrima のために用意されていたのだ。ただ息子の代わりに父親が現れただけなのだ。幻影や夢には変わりの者が現れることがよくある」(Halbiyyah, Vol.3,p104)。

一般的な特赦は許されず、処刑を命じられていた者達の中に、Habbār がいた。彼は、聖預言者ムハンマドの娘、Zainab を残虐にも殺したという責任を問われていた。彼が Zainab の乗ったらくだの腹帯を切ったため、彼女は地面にころげ落ち、身重だったために流産のうき目を見たのであった。その後間もなくして、彼女は死んだ。これは、彼が犯した非人道的行為の一つであった。その行為故に彼は死刑を宣告されるに値したのである。この男が今になって聖預言者ムハンマドの所へやって来て、言った。「神から遣わされた聖預言者、私はあなたから逃れてイランへ行きました。でも、神が異教徒の信仰を私達から取り除き、精神的な死から私達を救って下さったのだという思いが私の心に生じました。他の者達の所へ行って彼等に避難場所を求めたりするのではなく、聖預言者の所へ行って、私自身の過ちと罪を認め、聖預言者の許しを求めてはどうかと思うようになりました」

聖預言者ムハンマドは心を動かされて、言った。「Habbār よ、神があなたの心にイスラムの愛を植えつけられたというのに、どうして私にあなたを許さずにおくことができるだろう。あなたが、これ以前に行った一切のことを許そう」

これらの人々が、イスラムに対して犯した極悪行為の数々を詳細に描くことは不可能である。だが、なんと簡単に聖預言者ムハンマドは、彼等を許したことか。この許しの心こそが最も頑固な敵さえも、聖預言者

ムハンマドの敬虔な信者に変えてしまったのである。

Hunain の戦い

聖預言者ムハンマドのメッカ入場は余りにも突然のことであった。メッカ周辺に住む部族、特に南部に住む者達が、この出来事に気付いたのは、それからしばらくしてのことであった。この噂を耳にした途端、彼等は軍勢を集めて、ムスリムとの戦いの準備を開始した。このような部族の中に、Hawāzin 族と Thaqīf 族という二つのアラブ系部族がいた。彼等は伝統的に勇敢さを異常な迄に誇る部族であった。この両者がお互いに協議をし、入念なる検討の結果、指導者として Mālik を選出した。それから彼等は、周辺の部族に彼等に加わるよう呼びかけた。招きを受けた者達の中に Banū Sa'd 族がいた。聖預言者ムハンマドの乳母、Halimah は、この部族の者で、聖預言者ムハンマドは、子供の頃彼等の中で暮らしていたのであった。この部族の男達は、武力を結集してメッカに向けて出発をしたが、その時、彼等の家族や身の回り品をも伴って行った。何故そうするのかという問に対し、もし彼等が退却し、逃げたりしたら、彼等の妻や子供は、捕まえられ、身の回り品は略奪されてしまうだろうという思いに兵士達がとらわれるであろうから、この処置が適切なのだというのが彼等の答であった。それ程ムスリムと戦って全滅させようという彼等の決意は、固かったのである。この軍勢は Autās の谷を降りて行った。この谷には自然の防壁があり、飼い葉や水も豊富で、騎馬兵の動きに向いており、最も適した戦闘地といえたのである。聖預言者ムハンマドはこの動きを知ると、Abdullah bin Abī Hadrād を偵察に送った。Abdullah は、この地には軍隊が結集しており、決死の闘いをしようという決意がみなぎっていると報告した。この部族は弓矢の腕前が優れていることで知られており、彼等が選んだ場所は、彼等にとって非常に有利な地形をなしていた。聖預言者ムハンマドは、メッ

カの裕福な長 Safwān に、甲冑や武器を貸してくれるよう交渉した。Safwān は言った。「あなたは、私に圧力を加え、増大する権力にもの言わせてあなたの望む物は何でも私に譲り渡させようとでも思っておられるようだ」。「私達は何も取り上げようなどと考えてはいない。私達は、ただ戦闘用具をお借りしたいだけなのだから、それに相当する担保となるものをお届けしようと思っている」と聖預言者ムハンマドは答えた。Safwān は、この答に満足し、道具を貸すことに同意した。全部で 100 組の甲冑と必要量の武器を彼は用意してくれた。聖預言者ムハンマドは、自分の従弟である Naufal bin Harith から 3000 デイルハムと、Abdullah bin Rabī'a から 3 万デイルハムの金を借りた (Muatta, Musnad&Halbiyyah)。イスラム軍が Hawāzin に向けて出発する時、メッカの人々は、イスラム軍に味方して参戦したいと訴えた。彼等はムスリムではなかったが、ムスリム支配の下に暮らすことを承諾していたのであった。従って 2000 人のメッカ人がイスラム軍に加わった。途中、彼等は、有名なアラブの神殿である Dhāt Anwāt の所迄来た。

ここには、アラブ人にとって神聖なナツメの古木が立っていた。アラブ人は武器を購入すると、まず Dhāt Anwāt へ行って神殿に飾り、その武器に祝福を授かるようにしていたのであった。イスラム軍がこの神殿を通り過ぎようとする、一部の兵士達が「神から遣わされた聖預言者、私達にも Dhāt Anwāt のお守りがあってもいいのではないのでしょうか」と言った。

聖預言者ムハンマドは、不満の意を表して言った。

「あなたがたは、モーゼに従った者達と同じようなことを言う。モーゼがカナンへ行く途中、人々が偶像礼拝をしているのを見て、彼に従う者達は、モーゼに『モーゼよ、彼等には多くの神々あり、我等にも一柱の神を作れ』と言ったのである」(7:139)。

使徒があなたを呼んでいる

アッラーが偉大であることを常に忘れず、昔の人々の迷信から彼等をお守り下さるように神に祈ることを聖預言者ムハンマドは彼等に強く説いた。イスラム軍がまだ Hunain に到着しない内に、Hawāzin 族とその同盟軍は、イスラム軍を攻撃しようと、塹壕を掘ったり、近代戦によく見られる射撃隊の伏兵配置の用意を整えていた。そして、彼等の周囲に防壁を張り巡らしていた。防壁の陰には、イスラム軍を待ち伏せする兵士が潜んでいた。イスラム軍がそこを通過するには、本当に狭い間を通るより他に道がなかった。軍勢の大部分は、待ち伏せ兵として配置されており、らくだの前に整列している兵士達の数はずかなものであった。目に見える物だけが敵の総数だと思い込んだムスリムは、そのまま前進し攻撃を仕掛けた。イスラム軍がかなり深く前進した頃、隠れていた敵は、いまこそ攻撃するべき時と見計らって行動を開始した。兵士達は、らくだの前に一例に並んで、イスラム軍の中央めがけて攻撃をした。一方隠れていた射手達は側面から一斉に矢を浴びせかけた。武勇を示すチャンスを求めて戦いに加わっていたメッカ軍は、この敵からの二重攻撃に耐えられず、メッカに向かって逃げ出した。イスラム軍は困難な状況には慣れていたとは言え、馬やらくだに乗った 2000 人の兵にイスラム軍全体が突き抜けられると、イスラム軍の動物達もおびえてしまった。軍全体にパニックが起こった。三方から圧力が加わり、その結果総崩れとなってしまった。この状況下で微動だにしなかったのは、12 人の仲間を従えた聖預言者ムハンマドだけであった。仲間達すべてが戦場から逃げ出したわけではなかった。100 人位の仲間は、まだ踏み留まっていたのであるが、彼等の位置は聖預言者ムハンマドからは遠かったのである。聖預言者ムハンマドをとり囲んでいたのは 12 人の仲間のみであった。一人のムスリムの報告によれば、彼もその友人達も何とかして動物

達を戦場に向かって進ませようとしたのであるが、メッカ軍の動物達が総崩れとなって逃げ出したために、仲間達の乗った動物達もそれにつられて敗走しようという動きになってしまった。何如なる努力も効を奏さなかったのである。彼等がどんなに手綱を引いても、動物達は向きを変えようとはしなかった。時には、顔が尾に触れてしまう程に、動物の頭を引っ張ったこともあった。そしてまた、いかに拍車をかけても、動物達は、進もうとはしなかった。むしろ、更に後退しようとした。「心配で、心配で、聖預言者が御無事かどうか、心臓が激しく鼓動を打ちましたが、私達にはどうすることもできなかったのです」とこの仲間は語った。仲間達はこのような状況にあったのである。聖預言者ムハンマドは三方から矢の一斉射撃を受けて、一握りの部下と共に立ちつくしていた。彼等の背後に一本だけ細い道があったが、一度にほんの2,3人しか通れない程の道であった。その瞬間 Abū Bakr が馬を降り、聖預言者ムハンマドのラバの手綱を掴んでいた。「神から遣わされた預言者、しばらくの間退却し、イスラム軍をたて直しましょう」

「私のラバの手綱を放しなさい、Abū Bakr」と聖預言者ムハンマドは言った。すると、彼は、両側に敵が待ち伏せしており、矢の雨が降って来る狭い山間をラバを進めて行った。聖預言者ムハンマドは、ラバに拍車をかけながら言った。「我は預言者である。決して詐称者ではない。我はアブドゥル・ムッタリブの息子である」(Bukhari)。自分自身の身に極度の危険が迫っている時に語られたこの言葉に含まれる意義は大きかった。この言葉は、聖預言者ムハンマドは確実に預言者であり、確かに神の使徒であるという事実を強く示した。この事実を強調することにより、彼は死も、彼の信条が打ち碎かれることも恐れてはいないのだと言いたかったのである。だからと言って、もし圧倒的な矢の攻撃にもかかわらず、彼が無事だったとしてもムスリムは 何らかの神の如き資質が聖預言者ムハンマドにそなわっていると思うべきではない。何故なら、彼は人間だからである。アブドゥル・ムッタリブの息子なのである。聖

預言者ムハンマドは信仰と迷信の違いを信徒達に印象づけるため今までどれ程注意を払っていたことか。このような心に残る言葉を口にした後、聖預言者ムハンマドは Abbās を呼びにやった。Abbās は力強い声の持ち主であった。聖預言者ムハンマドは Abbās に言った。「Abbās、大声をあげて、ムスリム達に、Hudaibiyah の樹の下で取り交わした誓いとバカラ章の啓示の時に教えられたことを思い出させてやりなさい。彼等に言ってみなさい。『神から遣わされた預言者があなたを呼んでいる』と」。

Abbās は力強い声を張り上げた。聖預言者ムハンマドの伝言は雷のように響き渡り 聞かぬふりをしている耳ではなく、聞きたくてうずうずしている人々の耳に届いた。これは電気のような効果をもたらした。乗っていた馬やらくだを戦場に向かわせようと必死に空しい努力を続けていたその仲間達は、最早自分達はこの世に居るのではなく、次の世に居り、最後の審判の日を迎えて、神と対面しているかのような気持ちになった。Abbās の声には彼の声とは思えない響きがあり、まるで天使が彼等のしていることを釈明するよう、彼等を招いているように聞こえた。そうなれば、彼等が戦場へ駆け戻るのを遮る物は何もなかった。多くの者は乗り物を降り、剣と楯だけを持って戦場へ駆け戻って行き、彼等の乗っていた馬やらくだは好きな所へ行けとばかり、その場で放り出された。乗っていた動物から降りてその首を切り落とし、聖預言者ムハンマドの許へ走って戻って行った者もいた。その日、母駱駝や母牛が子供の泣き声を聞きつけ、子供の許へ駆けつけるように、Ansār がものすごい勢いで聖預言者ムハンマドの許へ駆けつけたと言われている。まもなく聖預言者ムハンマドは仲間の大軍に囲まれた。その大部分は Ansār の率いる軍勢であった。そして敵は又しても敗北を味わったのである。

この日聖預言者ムハンマドの側についた Abū Sufyān の存在は全能の神の証であった。一方では 神の力を示し、もう一方では聖預言者ムハンマドの純粹さの模範を示す証であった。ほんの数日前には、Abū

Sufyān は 聖預言者ムハンマドの血に飢えた敵であり、ムスリムを壊滅させようと決意していた血に飢えた軍勢の司令官だったのである。ところがこの日、この場所では Abū Sufyān は聖預言者ムハンマドの味方となり、友であり、信徒であり、仲間であった。敵のらくだが総崩れとなって敗走した時、賢明且つ熟練した將軍である Abū Sufyān は自分が乗っている馬が手に負えなくなるのを見るとすぐに馬を降り、聖預言者ムハンマドの乗ったラバのあぶみを掴み、徒歩で進んで行った。彼は手に剣を持ち、聖預言者ムハンマドの横について歩きながら、まず彼自身を攻撃し殺さない限り、誰一人聖預言者ムハンマドの身邊には近づけるまいと身構えた。聖預言者ムハンマドは喜びと驚きの気持ちを抱きながら、この Abū Sufyān の変化を眺めていた。彼は神の力を示すこの真新しい証拠について考えた。ほんの 10 日か 15 日前には この男はイスラムの台頭に終止符を打とうと軍勢すら編成したのである。ところが変化が起こった。かつての敵の司令官が、今や聖預言者ムハンマドの味方となり弟子として傍につき、主人の乗ったラバのあぶみを掴んで、主人のために命を投げ出す覚悟でいるのだ。Abbās は聖預言者ムハンマドの顔に驚きの表情が現れているのを見て、言った。「神から遣わされた預言者、ここにいるのはあなたの叔父の息子であり、あなたの兄弟とも言うべき Abū Sufyān です。私がお気に召しませんか？」

「とんでもない。喜んでいるのだ」と聖預言者ムハンマドは言った。「そして私は神に祈っているのだ。神が彼の起こしたあらゆる悪事をすべてお許し下さいますように」と。それから Abū Sufyān の方を向いて「兄弟よ」と呼びかけた。Abū Sufyān は込み上げて来る感情を抑えることが出来なくなった。彼は身をかがめ、手に持っていたあぶみの中の聖預言者ムハンマドの足にキスをした (Halbiyyah)。

Hunain の戦いが済んでから、聖預言者ムハンマドは借りていた戦闘用具を返却した。その返却に伴い、彼は貸し主に対して何倍ものお礼を支払った。物資を貸していた者達は、その物資の返却と貸し主に対する

お礼の支払いに際して、聖預言者ムハンマドが示した心遣いと思いやり
に大きな感銘を受けた。彼等は、聖預言者ムハンマドは並みの人間では
なく、その道徳的模範が人々の上に高くそびえ立つような人間であると
感じた。Sufyān がすぐにイスラムに帰依したのも不思議ではない。

不倶戴天の敵、敬虔な信者となる

Hunain の戦いというと、今でも歴史家ならば思い起こす一つの興味
深い出来事がある。それは Hunain の戦いが進行している最中に起こっ
た事であった。メッカの住人であり、カーバ神殿での任務にあたってい
た Shaiba は敵方に味方して遭遇戦に参加していた。彼の話によると、
彼のこの戦いにおける目的はただ1つだけであった。つまり両軍がぶつ
かれば、聖預言者ムハンマドを殺す機会が見つかるかもしれないと踏ん
で、彼はその機会を窺っていたのだ。たとえ（アラビア全土はいうま
でもなく）全世界が聖預言者ムハンマドの側に味方しようとも、彼は頑強
に抵抗し聖預言者ムハンマドと対立し続けようと決意を固めていた。戦
いが激しくなって来たころ、Shaiba は剣を抜いて、聖預言者ムハンマ
ド目掛けて突進し始めた。すぐ側まで近づいた時、彼は氣力がくじけて
しまった。彼の決意がゆらぎ始めたのである。「聖預言者の間近に行っ
たら、私を焼き尽くしてしまいそうな勢いの炎が見えたように思った
のです」と Shaiba は言った。「すると 聖預言者が『Shaiba、私の側
に来なさい』とおっしゃる声が聞こえました。私が近づくと 聖預言者
は大きな愛情を込めて、私の胸を手でさすられました。そして こう言
われたのです。『神よ、あらゆる悪魔的な考えから Shaiba をお救い下さ
い』」。このほんのわずかの愛情に触れただけで Shaiba は変わった。彼
の敵意も憎悪も消え去り、その瞬間から Shaiba にとって聖預言者ムハ
ンマドは世界中の何よりも大切なものとなったのである。Shaiba に変
化が起こった時に 聖預言者ムハンマドは彼に前へ進み出て戦うように

勧めた。「その瞬間私が心に思ったことはただ一つ、聖預言者のために死のう、ということでした。たとえ私の父が私の前に立ちふさがろうとも、私は何のためらいもなく父の胸を私の剣で突き刺したでしょう」と Shaiba は語った (Halbiyyah)。

聖預言者ムハンマドは それから Tāif の町へと進軍して行った。この町は彼に対して石を投げつけ、彼を追い払った所であった。聖預言者ムハンマドはその町を包囲したが、友人達の助言を受け入れて囲みを解いた。後に Tāif の人々は自らすすんでイスラムに帰依したのであった。

聖預言者ムハンマド、戦利品を分配

メッカ征服及び Hunain の勝利の後に聖預言者ムハンマドが取り組んだ仕事は、身代金や敵が戦場に放棄していった金や財産の分配であった。慣習に従えば、この金品はこの遭遇戦に加わったムスリム兵士達の間で分配されるべきものであった。しかしこの場合には、ムスリム達の間で分配する代わりに、聖預言者ムハンマドはメッカの人々とメッカ近隣に住む人々に金品を分配した。これらの人々は、まだ信仰に傾いた様子を見せてはいなかった。多くは はっきり否定していたのであった。信仰を誓った者達でも、まだ信仰に不慣れであった。彼等にはイスラムを受け入れた後でも、人々が如何に自生出来るようになれるのかわかってはいなかったのである。だから、彼等が目にした自生や自己犠牲の模範から学びとったり、彼等がムスリムから受けた素晴らしい待遇に報いたりするよりも、彼等は今迄以上に益々強欲且つ貪欲になっていった。彼等の欲求は大きくなりつつあった。彼等は聖預言者ムハンマドの所へ群集となって押し寄せ、彼を木の下へまで追い詰め、彼のマントは肩から引き裂かれてしまった。聖預言者ムハンマドは、ついに群集に向かって叫んだ。「私には他にはもう与えるものは何もない。もしあれば、あなたがたに与えたであろう。私は欲張りでもなければ、けちでもない」

(Bukhārī, Chap. on Fard al-Khums)。そして彼のヒトコブラクダに近づき、毛を1本引き抜いて、群集に向かって言った。「これらの金品から 私は全く何ももらおうとは思っていない。毛1本程ももらう気はない。ただ この1/5の財だけはいただかなければならない。それも国家のためです。それは アラブの慣習に従っても正当なものだと認められている分け前である。その1/5だって私個人のために使うものではない。あなたがたのために、あなたがたが必要とするもののために使うのである。公共の金を悪用したり 乱用したりする者は、最後の審判の日 に神の目で屈辱を受けることになるであろうということを覚えておきなさい」

悪意のある批評家によれば、聖預言者ムハンマドは王となって王国を持つことを熱望していたそうであるが、群集に立ちはだかられている聖預言者ムハンマドを想像してごらんなさい。もし彼が王となって王国を所有する望みを持っていたのならば、このメッカの群集に対して与えた待遇と同じ待遇を乞食のような群集に与えたであろうか。彼が実際に行なったようなやり方で、群集に押し寄せられるようなことを許したであろうか。彼が議論をし、説得をしたであろうか。このような模範的行動を示せるのは、神の預言者や使徒しかいないはずだ。分配すべき戦利品、金、そして価値ある品々は、すべて受けるに値する人々や貧しき人々の間に分配されたのである。それでもまだ満足できず、聖預言者ムハンマドの所へ群をなして押し寄せ、分配に対して抗議をし、彼が不正を働いたと非難する人々がいた。

Dhu'l Khuwaisira の一人が聖預言者ムハンマドのすぐ近くまでやって来て、こう言った。「預言者ムハンマドよ、私はあなたがしていることを全部知っているぞ」

「それでは 私が何をしているというのか？」と聖預言者ムハンマドは尋ねた。

「あなたは不正を働いている」と彼は言った。「あなたは災いなるかな」

と聖預言者ムハンマドは言った。「もし私が不正を働いているというならば、この世界に 正義を守る者は誰もいない」(Muslim, Kitāb al-Zakāt)。

心から信仰心の篤い者達に 怒りがこみあげて来た。この男が この集まりから出て行く時に、信心深い者達の内何人かが尋ねた。「この男は死に値します。彼を殺してもよろしいですか?」「それはいけない」と聖預言者ムハンマドは言った。「彼が私達の決まりを守り、目に見える罪を何も犯していないのに、どうして私達に彼を殺せるだろうか」「ですが、或る人間の言動と、考えや欲求とが一致していない場合には、その人間はそれに応じた扱いを受けても当然ではありませんか」と信心深い者達は言った。「人々が心の中に抱いているものに応じてその人々を扱うなどということは私には出来ない。神はこのような義務を私に課してはおられない。私に出来るのは人々の言動に応じて彼等を扱うことだけである」

聖預言者ムハンマドは更に話を続け、いつかこの男とその親族達とがイスラムに対して反逆を企てるであろうと信心深い者達に語った。聖預言者ムハンマドの言葉は真実となった。イスラムの第4代目の Khalīfa、‘Alī の時代になって、この男とその友人達が Alī に対して謀反を起こし、一般的に非難を受けたイスラムの分派、Khawārij 族の指導者となったのであった。

Hawāzin 族の処理が終ると、聖預言者ムハンマドはメディナに戻った。メディナの人々にとって それはもう1つの大切な日となった。先の大切な日は、聖預言者ムハンマドがメッカの人々の虐待を逃れてメディナへ辿り着いた日であった。この度の大切な日に、聖預言者ムハンマドは喜びに満ち、メディナを彼の故郷とする決意と約束を固めて、メディナへ再び入ったのであった。

Abū Āmir の陰謀

今度は Abū ‘Āmir Madanī という人間の行動に目を向けてみる必要がある。彼は Khazraj 族の一人であった。ユダヤ教徒やキリスト教徒との長い付き合いを通して、彼には沈黙の瞑想と神の名を反復する習慣が身についていた。この習慣のために彼は一般には、世捨て人の Abū Āmir として知られていた。しかし彼はキリスト教徒としての信仰を持っている訳ではなかった。聖預言者ムハンマドが遷都^{ビジュラ}の後、メディナへ行った頃に、彼はメディナを逃れてメッカへ行った。ついにメッカもイスラムの増大する力に屈した時、彼はイスラムに対する陰謀を企て始めた。彼は名前を変え、習慣として着なれた衣服も変えて、メディナの近くにある Qubā’ という村に落ち付いた。彼はずい分長い間人々から遠ざかっており、彼の外見も衣服も変わっていたため、メディナの人々には彼がわからなかった。彼だと気付いていたのは、彼と内密な接触を続けていた偽善者達だけであった。彼はメディナの偽善者達に彼の秘密の計画を打ち明け、彼等の同意を得てシリアへ行き、キリスト教国の統治者やキリスト教徒であるアラブ人達をけしかけ、メディナを攻撃させるように挑発する計画をたてた。北方地区で悪意あふれる使命に従事する一方、メディナにおける敵意を広める計画をも進めていた。彼と行動を共にしている偽善者達は、メディナがシリア軍に攻撃されようとしているという噂を流すことになっていた。この二重作戦がうまくいけば、ムスリムとシリアのキリスト教徒が戦争を起こすであろうと Abū Āmir は期待していたのだ。もし彼の陰謀が思い通りにならなかったとしても、イスラム軍はシリア攻撃をする気になるだろうと考えていたのである。こうしておけばイスラム軍とシリア軍との間に戦いが始まるであろうし、Abū Āmir 自身にとっても喜ぶべき成果が得られることとなる。彼は計画を十分に練り終ると、シリアへ行った。彼が留守の間に、メディナの

偽善者達は計画通り、メディナを攻撃しに来る部隊を見たという噂を流した。部隊が現れないとなると、彼等はいろいろな釈明をした。

Tabūk 遠征

このような噂が中々消えないため、聖預言者ムハンマドは自らイスラム軍を率いてシリアへ出向く必要があると考えた。当時状況は厳しかった。アラビアは飢饉に見舞われていた。前年度の収穫は乏しく、穀物も果物も供給不足であった。次の収穫期はまだ先であった。聖預言者ムハンマドがこの使命に着手したのは9月の末か10月の始めであった。偽善者達にはこの噂は自分達自身が作り上げたものだということはわかっていて、彼等の目論みは、たとえシリア軍がムスリムに攻撃を仕掛けなくても、イスラム軍がシリア軍に攻撃を仕掛けるよう仕向けることであった。どちらにせよ、大ローマ帝国と対立することになれば、ムスリムの壊滅は避けられなくなるはずであった。彼等には Mūta での教訓があった。Mūta でイスラム軍は巨大な軍勢に直面し、何とか退却することは出来たけれども、それには大変な困難が伴った。偽善者達は第二の Mūta のお膳立てをすることを期待していた。そうすれば聖預言者ムハンマド自身が命を落とす可能性があったからである。偽善者達はシリア軍がムスリムを攻撃するという噂を流すことに精出す一方、ムスリム達の心の中に恐怖心を植えつけようとあらゆる手を尽くした。シリア軍はイスラム軍には太刀打ち出来そうもない程の大軍を結集して来るであろう。偽善者達はムスリム達に、シリア軍とは対決しないよう強く説いた。彼等の計画は、一方ではイスラム軍にシリアを攻撃するよう挑発し、もう一方ではイスラム軍が大軍を編成して出かけさせないようにすることであった。彼等は、イスラム軍がシリアと戦争になり、確実な敗北を喫して欲しかったのである。だが聖預言者ムハンマドがこの新しい遠征隊を率いて行く意志を伝えるや否や、ムスリム達の間に熱狂が高まった。

彼等は前に進み出て、信仰のために命を奉げることを申し出たのであった。ムスリム達はこの規模の戦争に参加出来る程の軍備を備えてはいなかった。彼等の財産も底を尽いていた。比較的裕福なムスリムだけが、その戦いのために支払える財力があった。一人一人のムスリムが互いに競い合って、信仰のための犠牲心を発揮した。遠征計画が進行して、聖預言者ムハンマドが基金を集めようと訴えた時、Uthmān は彼の財産の大部分を寄進したと言われている。彼の寄進額は 25,000 ルピーに相当するディナール金貨 1,000 個だった。他のムスリム達も各自の財力に応じて寄進をした。貧しいムスリム達までが 乗り物用の動物や刀や槍を提供したのであった。熱狂が広まった。その頃メディナにはイエメンから移住して来たムスリムの一団がいた。彼等は非常に貧しかった。彼等の中から何人かは聖預言者ムハンマドの所へ行き、遠征への奉仕を申し出た。彼等は言った。「神から遣わされた聖預言者、私達をどうかお連れ下さい。共に行くことそれ以上の望みは、私達にはありません」

聖クルアーンではこれらのムスリム達やその申し出に関して 次のような言葉で表わされている。

また汝のところへ来て、汝に乗るものを求めたる者にも（罪なし）。汝が「我はお前たちに乗せてやるものを都合出来ず」と云えし時、彼等はその目から涙をこぼして、自分たちが（アッラーのために）費やすものを持たざるを悲しみて戻るなり（9:92）。

即ち、財力がないために戦いに参加出来ず、又聖預言者ムハンマドに戦場へ行くための乗り物を提供して欲しいと申し出た者達を咎めてはいけない。聖預言者ムハンマドが乗り物を供給することが出来なかったのも、彼等は自分達が貧しいからムスリムとシリアとの戦いにも参加出来ないのだと感じて落胆して去って行ったのであった。この一団の指導者は Abū Mūsā であった。彼等は何を求めていたのかと尋ねられた時、彼は「私達は馬やらくだを求めたわけではありません。私達には履き物もないので、長旅をするのに裸足では堪えられないと言っただけなので

す。履き物さえあれば徒歩で出かけて行って、私達の兄弟達と共に戦いに加わったでしょう」。この度の軍隊はシリアへ行くことになっており、ムスリム達は Mūta での苦い経験をまだ忘れてはいなかったのも、どのムスリムも聖預言者ムハンマドの身の安全を心配していた。メディナの女達も自分達の役割を果たしていた。彼女達は夫や息子達を戦いに行く気にさせようと一生懸命であった。聖預言者ムハンマドが軍隊を率いて出発した頃、メディナを留守にしていた一人の仲間が帰って来た。彼は家に入り、妻が久し振りに会う夫を出迎える女としての愛情や情感で自分を迎えてくれるものだと思っていた。中庭に座っている妻を見つけ、彼女を抱き締めキスをしようと彼女の方へ歩み寄って行った。ところが、妻は両手をあげて、彼を押し返したのである。驚いた夫は妻を見て、「これが久し振りに帰って来た者に対する仕打ちなのか」と言った。

「あなたは恥ずかしくないのですか」と妻は言った。「神から遣わされた聖預言者が危険な遠征にお出かけになっているというのに、あなたは妻を抱こうとなさるのですか。あなたがまずすべき事は戦場へ行くことです。他の人のことを考えなければいけません」。その仲間は直に家を飛び出して馬の腹帯を締め、聖預言者ムハンマドの後を追いかけた。三日間程追いかけた後、彼はイスラム軍に追いついた。不信仰者達や偽善者達は、聖預言者ムハンマドは彼等が作り出し広めた噂に振りまわされており、深く考えもしないでシリア軍に襲いかかるであろうと思っていた。聖預言者ムハンマドがこれから後の世代の信徒達に模範例を残そうと考えていることを、彼等は忘れていたのである。シリアへ近づくと、聖預言者ムハンマドは部隊を止めて、状況を報告させるためにあらゆる方向へ部下達を偵察に出した。部下達は戻って来て、どこにもシリア軍が集結している気配は見られないと報告した。聖預言者ムハンマドは引き返す決心をしたが、二、三日はそこに留まり、国境地区にいるいくつかの部族と協定を取り交わした。戦争も小競合いも何も起こらなかった。聖預言者ムハンマドがこの旅に費やしたのは、約2ヶ月半であった。イ

スラム軍とシリア軍との間に戦いを引き起こそうとした陰謀が失敗に終り、聖預言者ムハンマドが無事に戻って来ると知ったメディナの偽善者達は、自分達の陰謀が発覚したのではないかという不安にかられ始めた。彼等は今や、自分達が受けるべき罰が恐ろしくなった。それでも彼等は自分達の悪意に満ちた企てをやめようとはしなかった。彼等は一団の男達に武装をさせ、メディナから少し離れた所にある一本の細い道の両側に配備した。その道は非常に狭く、一列縦隊で人がやっと通り抜けられる程であった。聖預言者ムハンマドとイスラム軍がその地点に近づいた時、彼はその狭い道の両側に敵が待ち伏せをしているという警告の啓示を受けた。聖預言者ムハンマドは仲間達に偵察を命じた。彼等がその地点に行くと、明らかに攻撃をしかけようと男達が隠れているのが見えた。しかしこの男達は、この偵察隊を見た途端に逃げ出してしまった。聖預言者ムハンマドはこの男達を追わないことにした。

聖預言者ムハンマドがメディナに着くと、この戦いに参加しようとしなかった偽善者達はごちない弁解をし始めた。だが聖預言者ムハンマドは、彼等を受け入れた。その時、彼は彼等の偽善を暴露すべき時が来たと感じた。偽善者達が自分達の秘密の会合が出来るようにと建設したQubā のモスクを取り壊すようにという命令を聖預言者ムハンマドは神から受けたのであった。偽善者達は他のムスリム達と共に祈りの言葉を言うことを余儀なくされた。他の罰は何も与えられなかったのである。

Tabūk から戻って、聖預言者ムハンマドは Tā'if の人々も又、降服したことを知った。この後、他のアラビアの部族がいくつか、イスラムの許しを求めて来た。短期間の内に、アラビア全土がイスラムの支配下に入ったのであった。

最後の巡礼

ヒジュラ

遷都から数えて9年目、聖預言者ムハンマドはメッカ巡礼に出かけた。

その巡礼の日、彼はよく知られている聖クルアーンの次のような言葉を含む啓示を受けた。

今日わしはお前たちの宗教をお前達のために完成し、お前たちの上にわが恩恵を全うし、お前たちの宗教としてイスラムを選ばたり (5:4)。

この言葉の本質的な意味は、聖預言者ムハンマドが神から授かり、この年月すべてをかけて、言動を通して詳しく説いて来た神の言葉が成就されたということである。この神の言葉一語一語に祝福が託されている。今や、成就された神の言葉は人間が神から受けられる最高の祝福を示していた。その神の言葉は、服従を意味する「al-Islām」という名のもとに要約されている。服従とは ムスリムの宗教、即ち人類の宗教となるものであった。聖預言者ムハンマドは Muzdalifah の谷で上記の言葉を唱えた。そこには巡礼者たちが集まっていた。Muzdalifah から戻る道、聖預言者ムハンマドは Minā に立ち寄った。Dull Hijjah の月の 11 日目のことであった。聖預言者ムハンマドはムスリムの大衆の前に立ち、演説をした。これは聖預言者の別れの言葉として歴史上よく知られている。この演説の中で 彼は次のように語った。

皆さん、よく聞いていただきたい。この谷で再びあなたがたの前に立って今こうしてお話ししているようにあなたがたに話す機会があるかどうか、私にはわからないから。神のおかげで、最後の審判の日が来るまで、あなたがたの命と所有物はお互いに攻撃されることもなくなった。神が遺産という形で取り分を受け継いでいけるように、それぞれの者に約束して下さったのである。正当な権利を持つ相続人の利益に不利となるような遺言は認められない。如何なる家に生まれた子供であろうとも、その子はその家の父の子とみなされるであろう。この子供の親権を主張する者は誰であろうとイスラムの掟の下に罰せられるであろう。その子の誕生は誰か別の父親によるものだと言ったり、その子の主人とな

るように誰かに要求する者は誰であろうと、神、御使い、そして全人類から呪われるであろう。

皆さん、あなたがたには自分の妻に対する権利があるが、あなたがたの妻の方にも、あなたがたに対する権利があるのだ。あなたがたの妻に対する権利というのは、妻達が貞淑な暮らしをし、世間的にもその夫に恥辱を与えるような生き方を採り入れさせないようにするものである。もしあなたがたの妻達がこのような貞淑な生き方をしないようならば、あなたがたには彼女達に罰を与える権利がある。あなたがたが彼女達を罰することが出来るのは合法的な権威者が然るべき調査をした後のことであり、その時になって、あなたがたの処罰の権利が確立されるのである。例えそうだったとしても、このような場合の処罰は決して厳しいものであってはならない。だがもし、あなたがたの妻にこのようなことをする様子もなく、又夫に恥辱を与えるような行動が見られないのであれば、あなたがたは彼女達にそれぞれの生活水準に見合った衣食住を与えなければならない。覚えておきなさい。あなたがたは妻達に良い待遇を与えなければならない。神が、彼女達の面倒を見る義務をあなたがたに課せられたのである。女は弱く、自分達自身の権利を守ることが出来ない。あなた方が結婚した時に、神はあなたがたを女達に与えられた権利の保護者として指名されたのである。神の掟の下に、あなたがたは妻を家へ迎え入れたのだ。それ故に、あなたがたは神があなたがたの手に委託された責任を侮辱してはいけない。

皆さん、あなたがたの手には、まだ戦争の捕虜達が残されている。だから、あなたがたが衣食を満たしているのと同じやり方で彼等に衣食を満たしてやりなさい。もし彼等が許せないような悪事を働くようならば、彼等の身柄を誰か他の者に渡しなさい。彼等も神が創られた者である。彼等に苦痛や難題をふっかけるのは決し

て正当なことではない。

皆さん、私があなたがたに言うことをよく聞き、覚えておきなさい。ムスリムはすべてお互いに兄弟である。あなたがたはすべて平等である。国や部族が違っても、又どのような身分であろうとも、すべて人間は平等である。

聖預言者ムハンマドはこのように話しながら、両手の指と指を絡み合わせ、さらに話を続けた。

二つの手の指と指が等しいように、人間はすべてお互いに平等なのである。別の人間に対して要求をする権利、即ち優先権を持つ人間は誰もいない。あなたがたは兄弟なのであるから。

続けて聖預言者ムハンマドは語った。

今月が何の月かわかりか？私達はどのような地域にいるのか？

そして今日は何日か？

ムスリム達は、今月は聖なる月で、聖なる地に居り、メッカ巡礼の聖なる日だと了解していると答えた。それで 聖預言者ムハンマドは語った。

今月が聖なる月であり、この地が聖なる地であり、この日が聖なる日であるように、神はあらゆる聖なる人間の生命、財産そして栄光を作り上げて下さったのである。いかなる人間にしる、その人の生命、或いは財産を取り上げたり、その栄光を傷つけることは、正にこの日、この月、そしてこの地の神聖さを侵すことと同様に不当で間違ったことなのである。今日私があなたがたに命じることが今日だけに限ったものではない。いつの時にも守らなければならないものである。あなたがたがこの世を去り、あなたがたの創造主に会いに来世へ行く時迄、私の命令を覚えていて、これに従い行動することをあなたがたに期待する。

最後に彼は言った。

私が語ったことを、この世の終わりまで語り継いで行きなさい。

私の口から直接聞いたことがない者達も、直接聞いた者達以上の恩恵が この内容から得られるようになるであろう。(Sihāh Sittah, Tabarī, Hishām & Khamīs)。

聖預言者ムハンマドの演説は正にイスラムの全教えと精神を要約したものであった。人間の福祉と世界の平和にかけける聖預言者ムハンマドの懸念が、如何に深いものであったかがよくわかる。又女や他の弱い立場の人々の権利を守ろうとする思いやりが、如何に深いものであったかも現れている。聖預言者ムハンマドは自分の命の終りが間近いことを感じとっていた。彼は神から死の暗示を受けていたのである。彼が示した心遣いと不安の中に男達から受ける女達の待遇についての心遣いと不安が含まれていた。彼は、女達に正当なる権限によって彼女達の立場を確信させない内は、この世から来世へ旅立つ訳にはいかないのだと氣遣っていたのである。人類の誕生以来、女は男の奴隷や小間使いのように見なされて来た。彼女達が奴隷として見なされ、扱われ、あらゆる種類の残虐行為や不行跡に甘んじなければならなかったのは間違っていたのだ。聖預言者ムハンマドは戦争捕虜に関しても、神の面前においては、彼等にも正当なものとして認められるべき権利があることを確信させる迄は、この世を去るべきではないと感じていた。人と人との間にある不平等が存在するのも、聖預言者ムハンマドには心の重荷であった。時には、その人と人との差が堪えられない程にまで強調されることもあった。空高く称え上げられる者もいれば、地の底まで蔑まれる者もいた。このような不平等を生み出す状況は、民族と民族、或いは国と国との間の敵意と戦争を生み出す状況であった。聖預言者ムハンマドはこのような難問についても考えた。不平等の精神が撲滅されない限り、そして、或る人々をそそのかして、他の人々の権利を侵害し、命を狙い、所有物を略奪させるような状況がなくならない限り、世界の平和と進歩を確約することは出来ないのである。だがそのような状況は道徳が腐敗していた時代に、はびこってしまっているのだ。彼の教えによれば、人間の生命も所有物

も、聖なる日、聖なる月、そして聖なる地と同じ神聖さを持っているのである。女への福祉、弱者の権利、そして民族間の平和に関し、イスラムの聖預言者が示した程の懸念や心遣いを示した人物は他にはいなかった。人類の平等促進に関しても、聖預言者ムハンマド程力を尽くした人間は他にはいなかった。彼程人間の善を切望した者はいなかった。どうりでイスラムは、女が財産を持ち、受け継ぐ権利を支持して来た訳である。ヨーロッパの国々がこの権利を思いついたのは、イスラムの出現後1,300年の歳月を経てからのことであった。社会的身分がどんなに低かろうとも、イスラムに入信した者は誰でも、他の者と平等の人間になるのである。自由と平等（という概念の創造）は、イスラムが世界の文化に対して果たした特筆すべき貢献であった。他の宗教が自由と平等について描く概念は、イスラムが説き、実行している自由と平等の概念に比べれば、はるかに遅れている。ムスリムのモスクでは、王も宗教的指導者も平民もすべて同じ立場である。彼等の間に身分の差は何もないのだ。イスラムが自由と平等のために力を注いでいる以上に、他の宗教や民族も努力をしていると主張しているが、彼等の礼拝の場には、今日でも依然としてこのような差別が存在している。

聖預言者ムハンマド、死の暗示を受ける

メッカからの帰途、聖預言者ムハンマドは再び彼の仲間達に彼自身の死期が近づいていることを告げた。彼は言った。「皆さん、私もあなたがたと全く同じ人間である。神からのお召しが来ればいつでも応じるし、行かなければならないだろう。私の親切で且つ用心深い主が、聖預言者たる者はその前の聖預言者の寿命の半分迄生きることになっていると、私に教えて下さっている。間もなく神からのお召しを受け、私はこの世を去ることになると思う。仲間の皆さん、私は神にお答えしなければならいだろうし、あなたがたも神にお答えしなければならいだろう。

その時にあなたがたは何と言うつもりか？」

この問を受けて、仲間達は答えた。「あなたがイスラムの神の言葉をよく伝えて下さり、あなたは生涯をかけて信仰の礼拝に尽くされましたと、私達は答えるでしょう。あなたには人間の善を求める完全とも言えるべき情熱がありました。私達はこう言うつもりです。アッラーよ、彼に最高の讃美をお与え下さい」。

それで、聖預言者ムハンマドは次のように尋ねた。「神は唯一である。聖預言者ムハンマドは神の僕であり、預言者である。天国と地獄は確かに存在する。死は必ず訪れる。死の後には神の御許で暮らす生がある。最後の審判の日は必ず来る。あらゆる死者がいつか墓から呼び起こされ、生命を復活され、甦られる。あなたがたは以上のことが真理であることの証人となるか？」「はい。私達はこれらがすべて真理であることの証人となります」と仲間達は言った。神の方に向き直って、聖預言者ムハンマドは言った。「私は、彼等にイスラムを説きました。神よ、あなたもこの事実の証人となって下さい」

このメッカ巡礼の後、聖預言者ムハンマドは彼の信徒達を教え、教育し、彼等の道徳的基準を引き上げ、彼等の振舞いを正し、洗練させるのに懸命であった。彼自身の死は度々話題となり、彼はその時のためにムスリム達に準備させていた。

ある日、信徒達に演説をしようと立ち上がり、彼は言った。「今日、私は啓示を受けた」

アッラーの援助と勝利が来る時、而して汝、人々が次々に群れをなしてアッラーの宗教に入ることを見ん、されば汝、己が主の栄光を讃えて、彼に宥恕を請え。げに彼は大いに悔悟を受け入れる御方なり (110:2-4)。

言い換えれば、神の助けを得て、イスラムの信仰に大勢の人々が入信する時が来ていたのである。その時こそ、聖預言者ムハンマドとその信徒達が神を讃え、神に祈り、信仰確立のためにあらゆる障害となってい

るものを取り除かなければならなかった。

聖預言者ムハンマドはこの場合に一つの例え話を用いた。神が或る人にこのように言われた。「もし望むのならば、私の所へ戻って来てもよいし、或いはもうしばらく世の中の改革のために働いてもよい」。その人は主のもとへ戻りたいと言った。

聴衆の中に Abū Bakr がいた。彼は熱情と不安の気持ちを抱きながら聖預言者ムハンマドの最後の演説を聞いていた。熱情は非常に信心深い者として感じるものであり、不安は友人として、又彼に従う者としてこの演説の中に聖預言者ムハンマドの死の前兆が現れているのを感じるためであった。そのたとえ話を聞いた途端、Abū Bakr は最早、自分自身を抑え切れなくなり、わっと泣き崩れてしまった。その他の仲間達は耳にしている内容の表面的な意味しか取っていなかったため、Abū Bakr が激しく泣き出したことに驚いた。Abū Bakr は一体どうしたのか、と彼等は尋ねた。聖預言者ムハンマドがイスラムの近づきつつある勝利について語っているのに、Abū Bakr は泣いている。特に Umar は Abū Bakr の態度にいら立った。聖預言者ムハンマドが喜びの知らせを告げてくれているのに、この老人は泣いている。だが聖預言者ムハンマドにだけは、この場の出来事の意味がわかっていた。Abū Bakr だけが自分の話の意味を理解してくれているのだ、と聖預言者ムハンマドは思った。勝利を約束する言葉が聖預言者ムハンマドの死期が近づいていることを暗示しているのだと感じ取ったのは、Abū Bakr だけであった。

聖預言者ムハンマドは続けて言った。「Abū Bakr は私にとって非常に大切な存在である。もし依怙最賈が許されるならば、私は Abū Bakr を非常に愛したであろう。だがそのような愛が許されるのは神だけである。皆さん、モスクへと開かれたドアを今日からすべて閉ざそう。ただし Abū Bakr のドアだけは開けたままにしよう」。

この最後の教えの中に、聖預言者ムハンマドの後 Abū Bakr が初代のカリフとなるであろうという預言が暗示されているのは明らかであっ

た。祈りにおいて信者を導くために Abū Bakr は、1 日に 5 回モスクへ出かけなければならなかった。そしてこのために彼は自分の家のドアを開けたままにして、モスクに通じるようにしておかなければならなかった。何年も過ぎ、Umar がカリフになった時、彼は参列者達に「神の助けが来て 勝利を得る時」と言う言葉の意味を尋ねた。明らかに彼は、聖預言者ムハンマドがムスリム達にこの言葉とそれに続く文のことを教えた状況をよく覚えていた。その時、Abū Bakr だけがこれらの言葉の意味を理解していたということも 彼は覚えていたに違いない。Umar はこれらの言葉について、ムスリム達が知っているかどうかを試そうとしていた。彼等は、この啓示がなされた時にはその意味がわかっていなかった。今はわかっているのだろうか。啓示がなされた頃は 10 才か 11 才の子供であったが、今は 17 才か 18 才になっている Ibn Abbās が、答えをかって出た。彼は言った。「信者達の指導者様、これらの言葉には聖預言者の死についての預言が含まれていました。預言者という立場におられる人物は、なすべき仕事を終えられると、最早、世の中に生き続ける希望はありません。その言葉にはイスラムの勝利が間近であると言われていました。この勝利の陰には悲しい事実が隠されており、それは聖預言者がこの世を旅立たれる日が間近に迫っているということだったのです」Umar は Ibn Abbās を誉め讃え、この啓示がなされた時、その意味を理解していたのは Abū Bakr だけだったのであると語った。

聖預言者ムハンマド、最後の日々

ついに、誰もが直面しなければならない日が近づいて来た。聖預言者ムハンマドのなすべき仕事は終った。神が人々に啓示すべきことは彼を通してすべて啓示された。聖預言者ムハンマドの精神は、彼に従う人々の心の中に新しい生命を吹き込んだ。それは人生に対する新しい展望、そして新しい組織を持った国家であった。簡単に言えば 新しい天地の

誕生であった。新しい秩序を築き上げる基礎が固められた。その地は耕され、水が撒かれ、新しい収穫を夢見て種が蒔かれた。そして今や収穫の時期が来たのである。しかしその他は聖預言者ムハンマドが収穫を刈りとるためにあるのではなかった。耕し、種を蒔き、水をやるためのみ彼は存在したのである。彼は労働者としてやって来て、労働者のままで生涯を過ごし、労働者として、今や去ろうとしていた。聖預言者ムハンマドは、彼の関心はこの世の中の物にはなく、彼の作り主であり主人である神の喜びと賛同にあると知った。収穫時が来た時、彼は刈り入れを他の者達にまかせ、神の許へ行くことを望んだのであった。

聖預言者ムハンマドは病に倒れた。数日間はモスクを訪れ、祈りを先導し続けた。その後、あまりに体が弱ったため、それが出来なくなってしまった。仲間の者達は、聖預言者ムハンマドと毎日一緒にいることに慣れていたため、彼が死ぬなんてことはほとんど信じられなかった。しかし聖預言者ムハンマドは彼等に自分の死を何度も何度も伝えていたのだ。或る日、彼は正にこの問題に触れて、こう語った。「もし過ちを犯したならば、その者は正にこの世にいる内にその過ちを正しておいた方がいい。そうすれば来世に悔いを残さずに済むであろう。だから言うておく。もし私があなたがたの内の誰かに対して過ちを犯したことがあったら、それが無意識にしたものであったとしても、その者に前へ進み出て、私に訂正をするように言わせなさい。例え、知らない内であったとしても、私があなたがたの内の誰かを傷つけたことがあったなら、彼に前へ進み出て仕返しをさせなさい。来世において神に顔を合わせる時、恥ずかしい思いをしたくはない」。仲間達は感動した。彼等の目に涙があふれた。聖預言者ムハンマドは彼等のためにどれ程骨折り、彼等のためにどれ程の苦痛を堪え忍んで来たことか。他の人々に充分な食べ物や飲み物を与えるために、彼自らは飢えと乾きに堪えて来た。他の者達に充分な衣類を与えるために、彼自ら自分の衣服を繕い、自分の履き物を補修した。それでも尚、彼はそこで人々に彼が犯したかもしれないとい

う想像上の悪事をも正そうと必死になっているのである。それ程迄に彼は他の人々の権利を尊重していたのであった。

仲間達誰もが厳肅に沈黙を守ったまま、聖預言者ムハンマドの申し出を受けていた。だが一人の男が進み出て、言った。「神から遣わされた預言者よ！私は一度だけ、預言者に傷つけられたことがあります。私達は戦いに備えて一列に並んでいました。預言者が私達の列を通り過ぎた時、私のわき腹を肘で小突いたのです。すべて無意識の内に起こったことなのですが、何の意図もなく犯した間違いに対しても仕返しをしてよいと預言者はおっしゃいました。だからこの間違いに対して私はお返しをしたいのです」。聖預言者ムハンマドの申し出を厳肅に黙って聞いていた仲間達に 怒りがこみ上げて来た。聖預言者ムハンマドがこのような申し出をしたその心持ちとこの場の厳肅さが全く理解出来ていないこの男の横柄さと愚かさに対し、彼等は激怒した。しかしこの男は頑で、聖預言者ムハンマドの言葉を真に受けているようであった。

聖預言者ムハンマドは「喜んで あなたの仕返しを受けよう」と言った。

彼はこの男に自分の背を向けて、「さあ、私があなたを打ったように私を打ちなさい」と言った。「ですが、預言者が私を打った時、私はシャツを着ていなかったので、私のわき腹はむき出しでした」とこの男は説明した。「私のシャツを巻き上げ、彼に私のわき腹を肘で小突かせなさい」と聖預言者ムハンマドは言った。皆がその指示に従ったところ、この男は聖預言者ムハンマドのむき出しのわき腹を小突く代わりに、目に涙を浮かべて前かがみになり、聖預言者ムハンマドのむき出しの体にキスをした。「これは どういうことか？」と聖預言者ムハンマドは尋ねた。「預言者は、預言者の余命が幾ばくもないとおっしゃったのではありませんか。だとしたら預言者の体に直接触れ、預言者に対する私達の愛情と情感を表わす機会が私達にどれ程残されているでしょうか。確かに預言者は私を肘で小突かれましたが、そのようなことの仕返しをしようなどと

考える者がどこにいますでしょう。私はこの考えをたった今、この場で思いついたのです。心の中でこう言っていたのです。仕返しという言葉に隠れて預言者にキスをさせて下さい、と」

その時迄怒りで一杯になっていた仲間達は、どうして自分達もこの考えを思いつかなかったのだろうと、残念に思った。

聖預言者・逝く

しかし聖預言者ムハンマドの容態は優れず、病状は悪化しているようであった。死期が益々近づいて来るようで、落胆と陰うつな気分が仲間達の心に重くのしかかっていた。メディナに照りつける太陽はいつもと変わりなく輝いているというのに、仲間達にはその太陽すらもどんどん青ざめていくように思えた。いつものように夜明けが来たにもかかわらず、まるでその日は光ではなく闇をひきつれて来たかのようにであった。聖預言者ムハンマドの魂がその肉体という殻を抜け出し、その創り主のもとへ会いに出かける日がやって来た。彼の息使いが益々苦しうになって来た。最後の日々をアーイシャの部屋で過ごしていた聖預言者ムハンマドは彼女に語りかけた。「私の頭を少し起こしておまえの体にもたれさせておくれ。息が苦しいのだ」。アーイシャは彼の言葉に従い、きちんと座って彼の頭を支えた。死期を迎えた苦痛が目に見えていた。とりつかれたように聖預言者ムハンマドはあちらこちらを見回した。そして何度も繰り返して言った。「ユダヤ教徒とキリスト教徒は災いなるかな。彼等は自分達の預言者の墓をあがめるように奨励した」。これは、信徒に贈った聖預言者ムハンマドの死の言葉であったと言ってもよいであろう。彼は死の床についてから、信徒達にこのように言っているようであった。「あなたがたは私が他の預言者達よりも高い地位につき、その誰よりも成功した預言者であるとわかるようになるであろう。だが気を付けなければいけない。私の墓を礼拝の対象にしてはいけない。私の

墓はたんなる墓としておきなさい。他の者達は、自分達の預言者の墓に礼拝を奉げ、その墓を巡礼の中心地、即ち自分達が通い、苦行をし供え物をし、感謝を奉げる場所にしてしまうかもしれない。他の者達はこのようなするかもしれないが、あなたがたはそんなことをしてはいけない。あなたがたの唯一の礼拝すべき対象は、唯一神以外にはないことをよく覚えておきなさい」

唯一神及び神と人間との差について、やっとの思いで勝ちえた概念を守り抜く義務をムスリム達にこのように警告し終ると、聖預言者ムハンマドのまぶたが重くなり始め、彼の目は閉ざされがちになった。その時に彼が言った言葉は「我が友、限りなく高貴な主へ。我が友、限りなく高貴な主へ」であった。これは明らかに彼が神のもとへ身罷ることを示していた。彼はこの言葉をつぶやくと、死出の旅路に発っていった。

その知らせがモスクに伝えられた。そこには個人的な仕事はすべて打ち捨てて集まって来ていた仲間達が大勢いた。彼等はもっとよい知らせを期待していたのだが、彼等が受け取ったのは聖預言者ムハンマドの死の知らせであった。それは正に青天の霹靂であった。Abū Bakr はそこには居なかった。Umar はモスクに居り、悲しみの余り茫然としていた。誰かが聖預言者ムハンマドが死んだなどと言うのが、彼の耳に入ろうものなら、彼は腹を立てた。彼は剣を抜いて聖預言者ムハンマドが死んだなどと口走る者達を殺すと、脅しさえした。聖預言者にはまだなすべき事が沢山あるのだから、彼が死ぬはずがない。確かに彼の魂は彼の肉体から抜け出したとしても、ただその創り主に会いに行っただけなのだ。丁度モーゼがしばらくその創り主に会いに行ってすぐ戻って来たように、聖預言者もまだやり残した仕事をするために戻って来るに違いない。例えばまだ彼等が対処しなければならない偽善者達がいるではないか。Umar はまるで気がふれたかのように刀を手にして歩きまわった。彼は歩きながら、「聖預言者が死んだなどと言う奴は誰であろうと、この Umar が手にかけて殺してやる」などと口走っていた。仲間達は刺激

され、Umar が言うことを半ば信じるような気持ちになって来た。聖預言者が死ぬはずがない。何かの間違いに違いない。そうこうする内に、何人かの仲間達が Abū Bakr を捜しに出かけ、彼を見つけ、何が起こったかを伝えた。Abū Bakr は真直ぐにメディナのモスクへ行き、誰に対しても一言も口をきかず、アーイシャの部屋へ入って行き、彼女に「聖預言者は亡くなられたのか？」と尋ねた。

「はい」とアーイシャは答えた。Abū Bakr は直接聖預言者ムハンマドの遺体が安置してある所へ行き、彼の顔にかけてあった覆いを取り、身をかめ額にキスをした。愛と悲しみの涙が 彼の目から流れ落ちた。そして彼は言った。「神に誓って言う、死が二度とあなたにふりかかることはないでしょう」

この言葉には深い意味が含まれていた。それは Umar が深い悲しみから口走っていた事柄に対する Abū Bakr の答えでもあった。聖預言者ムハンマドは一度死んでしまった。それは彼の肉体的死であり、誰もが死ななければならない死であった。だが聖預言者ムハンマドに二度目の死が訪れることはない。即ち、精神的死が来ることはない。聖預言者ムハンマドが非常に苦勞をして信徒達の中に確立した信仰には、死は来ないのである。彼が教えた信仰の中でも大切な事柄の一つは、預言者といえども人間であり、彼等も死ぬ運命にあるのだ、ということであった。ムスリム達が聖預言者ムハンマド自身の死後、それ程早くこの教えを忘れるはずもなかった。この意味深い言葉を告げた後、Abū Bakr は外へ出て信者達の居並ぶ中を通り抜け、黙って説教壇へ向かって進んで行った。彼が壇上に立つと Umar も彼の側に立った。Umar は依然として剣を抜き身のまま手に持ち、Abū Bakr が聖預言者が死んだなどと言おうものならばその者の首をはねてやろうと意気込んでいた。Abū Bakr が話し始めると、Umar は彼のシャツを引っ張り彼の話をやめさせようとしたが、Abū Bakr は Umar の手を振り払い、話をやめようとはしなかった。

それから Abū Bakr は聖クルアーンからの一節を唱えた。

而して、ムハンマドは一人の使徒に過ぎず。彼以前の使徒たちは皆逝けり。もし彼も死すか、或いは殺害されなば、お前たち踵^{きびす}を返さんとするか？ (3:145)。

即ち、聖預言者ムハンマドは神からの言葉を預かって来た人間であった。他にも神からの言葉を預かって来た人々がいたが、その人々はすべて死んでしまったのである。もし聖預言者ムハンマドが死ぬようなことになったら、人々は今まで教えられ、学んで来たすべての事柄についてすべて逆戻りしてしまうというのか。この一説は Uhud の戦いの時に受けた啓示であった。当時、聖預言者ムハンマドが敵に殺されたという噂が飛びかった。多くのムスリム達が気落ちし、戦場から退却した。この節は彼等を勇気付けるために天から届けられたものであった。この節は今回の場合にも同じ効果をもたらした。この節を唱えた後、Abū Bakr はそれに自分自身の言葉を付け加えた。彼は言った。「あなたがたの中で神を崇拝する者達よ、神は今でも生きておられ、永遠に生き続けられるということをよく知っておきなさい。だが 聖預言者ムハンマド様を崇拝する者達よ、聖預言者ムハンマド様が亡くなられたという事実を私の口から確信しなさい」。この時を得た演説に、仲間達は落ち着きを取り戻した。Umar 自身も Abū Bakr が上述の聖クルアーンの節を唱えるのを聞いて変わった。彼は我に返り、失っていた判断力を取り戻し始めた。Abū Bakr がこの節を唱え終わる頃には、Umar もすっかり目覚めた。彼にも 聖預言者ムハンマドが死んだのだということが理解できた。だが 彼はそれに気付いた途端、足が震え出し立っていられなくなった。彼は疲れ果てたように崩れ落ちた。手にした抜き身の剣で Abū Bakr を血祭りに上げようとしていたこの男が、Abū Bakr の説得によって改心したのである。仲間達が、この節はその日に始めて啓示されたのではないかと感じる程、その節の訴えは強く新鮮であった。あまりにも深い悲しみのために、彼等はその節が聖クルアーンの中に収められているものだということを忘れてしまっていたのである。

聖預言者ムハンマドの死を巡って ムスリム達の心を襲った深い悲しみを表現した者達が沢山いた。だが イスラム史における初期の頃の詩人 Hassān がその二行連句に託して表わした簡潔、且つ意味深い言葉が今日でも最高で最も不朽といえる名作として残っている。彼はこのように謡った。

あなたは私の瞳でした。あなたがいなくなった今、もう私の目は見えない。今では他に誰が死のうと構わない。あなたの死だけが恐かったのだから。

この二行連句は、すべてのムスリムの気持ちをうたい上げていた。メディナの町では何ヶ月もの間、男も女も、そして子供達迄が Hassān bin Thābit のこの二行連句を唱える声があちこちで響いていた。

聖預言者ムハンマドの人柄と性格

これまで、聖預言者ムハンマドの生涯における主な出来事について簡単に述べて来たが、ここで、彼の性格を描写してみよう。これに関しては、聖預言者ムハンマドが聖預言者であると宣言する以前に、彼の周囲の人々が彼の性格について述べた証言をまとめたものを参照しよう。その頃彼は人々の間で「信頼出来る人」とか「正直な人」として知られていた (Hishām)。いつの世にも不誠実という罪が全くあてはまらない人間というのは大勢いるものである。又厳しい裁判や試練に全くさらされることもなく、日常の事柄や問題において正直に且つ誠実にこなしている人々も多い。だからと言って彼等がその態度故に特別の榮譽を博するには値しない。目立って優れた道徳性が人生に表われている人への特別な榮譽が与えられるのである。戦争に赴く兵士達は誰もが命を危険にさらす訳であるが、だからといってすべての英国兵士がビクトリア勲章に値するわけでもないし、このようなすべてのドイツ兵士が鉄十字勲章を受けられるとは限らない。フランスで言えば、知的職業に従事して

いる人が何十万というが、その人達が皆 レジオンドヌール勲章を受けられる訳ではない。従って、ただある人物が「信頼出来る」「正直な人」と呼ばれるだけでは、この面で卓越した人物であるということにはならないのである。しかしあらゆる人々すべてが集まって、ある人に「信頼出来る人」とか「正直な人」とかいう称号を与えるという場合には、その人は明らかに並はずれた資質を持つ人物だということになる。もしアラブの人々に、各世代において、或る個人にこのような栄誉を与える慣習があったのならば、その栄光を受ける人物は高い徳を持つ者と見なされたであろう。だが、メッカやアラビアの歴史には、アラブの人々が各世代において、或る抜きん出た個人にこのような、或いはこれに似た称号を与える慣習があった事を示す物は何も残っていない。その逆に人々が「信頼出来る人」とか「正直な人」とかいう称号を贈った人物は、何世紀にも渡るアラブの歴史上、イスラムの聖預言者以外誰もいないということがわかった。この事は、聖預言者が持っていた資質が余りにも優れていたために、その時の人々が知り、且つ覚えている限り、このような面で彼と肩を並べる程の人物は他にいなかったという事実を証明している。アラブ人が鋭い知性の持ち主であることは衆知の事実であり、そのアラブ人が稀であるとして選んだものは、真実稀で唯一のものであったに違いない。

聖預言者ムハンマドが神に呼び出され、預言者としての負担と責任を請け負った時、妻の Khadijah は彼の高い道徳性について証言した。この入門書の伝記についての箇所ですでに述べたことである。ここでは更に彼の高い道徳性を示す例を説明しよう。そうすれば、読者の方々にも一般には知られていない彼の人格についてもわかっていただけるであろう。

聖預言者ムハンマドの精神的純潔と身体的清潔さ

聖預言者ムハンマドの話は常に純粹で、(彼と同時代のほとんどの人々とは違って) やたらに神の名を使ったりはしなかったと言われている(Tirmidhī)。これはアラブ人としては例を見ないことであった。勿論 聖預言者ムハンマドの時代のアラブ人達がいつも汚い言葉を使っていたと言っている訳ではない。だが明らかに彼等には、神の名をみだりに使用して彼等の話を強調するという習慣があった。この習慣は現在でも 彼等の中に根強く残っている。しかし聖預言者ムハンマドは、神の名に絶対的な崇拜の念を抱いていたため、正当な理由なくその名を口にすることは決してしなかったのである。

身体的清潔さに関しては、彼は特別で几帳面すぎる程であった。彼は1日に何度も歯を磨き、その慣行を厳しく守っていた。それで彼は、もしその習慣が煩わしいものでなかったら、1日5度の祈りの毎にその直前に歯を磨く励行をすべてのムスリムに義務づけるだろうとよく言っていた。彼は食前食後に必ず手を洗い、各食事の後、そして何か料理された物を食べた後には、必ず口をすすいだ。そして何か料理された物を食べた者は、すべてお祈りに参加する前に口をすすぐことが望ましいと考えていた (Bukhārī)。

イスラム国家では、モスクがムスリムに定められた唯一の集会所である。そのため、聖預言者ムハンマドはモスクの清潔さを特に心がけ、人々がそこに集まる場合には特別に注意を払った。又そのような場合にはモスクの空気を清めるために香をたくように指示をしていた (Abū Dāwūd)。更に、不快な口臭を残すようなものを食べた後には、モスクでの集会や会合に参加してはいけないと人々に指示をしていた (Bukhārī)。

彼は、街路は常にきれいになっており、小枝や石、又通行の妨害になっ

たり不快感を与えるような物が落ちていてはいけない、という点も強調した。通りに落ちている物を見つけた場合には、彼自らそれを取りのけた。そして街路や通りをきれいに、且つ清潔にしようと心掛ける者は神の面前において、精神面で良い評価を受けることになるであろうとよく言った。通行妨害を起こすようなことに、公共の街路を使用してはならない。不潔なものや、有害なものを公共の街路に投げ捨ててはならない。とにかく街路を汚すようなことをしてはならない。このような行為はすべて神の御心にかなわないからである、ということも彼は主張していたと述べられている。人が使用するために貯えられている水を常にきれいで清潔なものにしておく事にも、彼は随分気を配っていた。例えば、貯めてある水の中にその水を汚すようなものを投げ込むことも禁じていたし、その水を汚すような貯水池の水の使用法も禁じていた。(Bukhārī & Muslim, Kitāb al-Birr wa'l-Silah)。

聖預言者ムハンマドの質素な生活

聖預言者ムハンマドは食べ物、飲み物に関してはとても質素であった。下手なまズい料理であっても、決して不満を表わすことはなかった。そのような料理であっても食べられさえすれば、その料理をしてくれた人をはがっかりさせないために食べた。しかしその料理が食べられないような場合には、彼はただ食べるのを控えただけで、それでも非難をするようなことはなかった。彼は食事の席につくと目の前に並べられた食べ物に注意を払った。そして食事中に食べ物や飲み物に対して全く上の空という人のように、食べ物に無関心な態度は好まないと彼はよく言っていた。食べられる物をもらった時には、彼は必ずその場に居合わせた人達とそれを分け合った。ある時、彼はナツメヤシをもらった。彼は全体を見回して、そこにいる人達の数进行を数え、皆に均等に配った。一人七つずつであった。Abū Huraira は、聖預言者ムハンマドは小麦パンでさえ、

満腹になる程食べたことはなかったと語っている (Bukharī)。

或る時彼が道を歩いていると、何人かが子山羊の丸焼きを囲んで宴会を開こうとしているのに出会った。彼等は聖預言者ムハンマドを見つけると、一緒に宴会に加わるように誘いをかけた。だが彼は断った。それは 彼が焼肉が嫌だったからではなく、十分に食べる物を持たない貧しい人々が見ている前で公然と御馳走を楽しむ人々に賛成出来なかったからである。他の場合には彼は焼肉を食べたと言われている。アーイシャの話によると、聖預言者ムハンマドは死ぬ迄、如何なる場合においても3日続けて満腹する迄食べたということはなかった。彼は非常に几帳面で、招かれてもいない家へ食事時に行ってはいけないと言っていた。或る時、彼を食事に招待してくれる人があり、その人に他に4人連れて来るように依頼された。彼を招いてくれた人の家についた時、6人目の人物が加わっていることに気がついた。主人が彼を迎え入れようと戸口迄出て来た時に、聖預言者ムハンマドは客が6人になっているので、その6人目の人物をも一緒に食事に招待するか、外すかは、主人が決めて欲しいと彼に促した。勿論その主人は快く、6人目の客をも招き入れた (Bukharī, Kitāb ul-At‘imah)。

聖預言者ムハンマドは食事の席につくと、必ずアッラーの御名と祝福の祈りを奉げてから食べ始め、食事が済み次第、次のような言葉で感謝の意を表わした。「すべての賛美は、アッラーに奉げられる、アッラーこそが私達に食べ物を与えて下さるからである。豊かで真実な、いつまでも高まりゆく賛美、どれだけ賛美しても満足せず、まだ不充分だという気持ちを抱かせるような賛美。決して果てることもなく、神のあらゆる御業は賛美に値し、賛美されるべきであると人に思わせるような賛美。主なるアッラーよ、私達の心をこのような感情で満たし給え」。又彼は時々次のようにも言っていた。「すべての賛美は、私達の飢えと乾きを満たして下さる神に属する。私達の心が常に神の賛美を追求め、決して神に対する感謝を忘れることがないように」。聖預言者ムハンマドは

常に満腹になる前に食べるのをやめるように仲間達を諭していた。又一人分の食べ物は何人で食べても充分であるとも言っていた。彼の家で何か特別の食べ物が用意された場合には、彼は必ず隣人達に分け与えていた。そして食べ物に限らず 他の物でも絶えず彼の家から近隣の家々に送り届けられていた (Muslim & Bukhārī, Kitāb ul-Adab)。

聖預言者ムハンマドは常に彼と共にいる者達の中で食物を必要としている者がいるかどうか、その表情から掴みとろうとしていた。Abū Huraira が次のような出来事を語っている。Abū Huraira が3日以上食べていない時があった。彼はモスクの入口に立って、Abū Bakr が通り過ぎるのを見つけた。彼は貧しき者達に食べ物を与えるよう教えている聖クルアーンの一節の意味について Abū Bakr に尋ねた。Abū Bakr はその意味を説明するとそのまま行ってしまった。この出来事を語りながら Abū Huraira は、自分だって Abū Bakr と同じ位に聖クルアーンの意味は知っているのだと憤慨していた。彼が Abū Bakr にこの一節の意味を尋ねたのは、自分が空腹状態にあるのを Abū Bakr が悟って、何か食べる物を捜して来てくれるのではないかと考えたからであった。その直後に今度は Umar が通りかかった。彼は Umar にも同じ一節の意味を尋ねた。Umar もその意味を説明すると、さっさと行ってしまった。Abū Huraira も聖預言者ムハンマドの仲間達すべてと同様に、直接的に要求するのは気が進まなかったもので、間接的に誰かに彼が空腹であることを気付かせようとしたのであった。その試みが失敗に終わったと気付くと、彼は気が遠くなってしまった。その後非常に穏やかなやさしい声で誰かが自分の名を呼んでいるのが聞こえて、彼は我に返った。声が聞こえて来る方向を見ると、聖預言者ムハンマドがその家の窓からこちらを見て微笑んでいた。「おなかがすいているのか？」と聖預言者ムハンマドは Abū Huraira に尋ねた。「そうなのです、アッラーの使徒よ、私はおなかがペコペコなのです」。と Abū Huraira は答えた。聖預言者ムハンマドは言った。「私達の家にも食べる物は何もないのだが、丁度ミル

クを一杯もらった所だ。モスクへ行って、あなたと同じ様におなかをすかせている者がそこにいないかどうか見て来なさい」。Abū Huraira はこのように話を続けている。「私は非常に空腹だったので そんなコップ一杯のミルクなら全部飲めてしまうのに、聖預言者は同じような空腹の者達を連れて来るようにおっしゃった。それでは私が飲める分はほとんどないではないか、などと私は心の中で思ったりしました。それでも聖預言者の命令に背く訳にはいかなかったので、モスクの中へ入って行って、そこに座っている6人の者達を見つけ、聖預言者の家の戸口へ連れて行きました。聖預言者はその者達の一人にミルクの入ったカップを手渡し、彼に飲むように勧められました。その人が飲み終り、口からカップを離すと、聖預言者は彼にもう一度そしてもう一度飲むように勧め、ついにその人は満腹してしまったのです。同じようにして、聖預言者はその6人が全員満足のいく迄飲むように勧められたのです。聖預言者が誰かにミルクを勧められる毎に、私は自分の分がなくなってしまうのではないかと気が気ではありませんでした。6人全員がミルクを飲み終り、聖預言者がそのカップを私に下さった時、なんとそのカップにはまだミルクがなみなみと残っていたのです。私の場合にも聖預言者は十分に飲むように勧めて下さり、2度目も3度目も飲ませて下さいました。最後に御自分が カップに残されたミルクを飲まれ、神に感謝を奉げて、ドアを閉められました」(Bukharī, Kitāb ul-Riqāq)。聖預言者ムハンマドが Abū Huraira にミルクを勧めるのを最後にしたのは、彼が神を信頼して、空腹の苦しみに堪え続け、そして たとえ間接的にしろ、自分の状況を人に知らせようとすべきではなかったのだ、ということを Abū Huraira に教えるためであったのであろう。

聖預言者ムハンマドは常に右手で飲んだり食べたりし、何か飲む時にはいつも途中で三度休んで息をついた。これは何故かという、喉が乾いている場合、一度に水を飲むと沢山飲みすぎて、消化が悪くなることがあるからである。物を食べる時には、きれいで食べてもよいものはす

べて食べることにしており、道楽で食べたり、他の人達の方まで取って食べるようなことは決してしなかった。前述されたように、彼の普段の食事は非常に質素なものであったが、誰かが彼のために特別に用意してくれた物を断るようなことはなかった。けれどもはちみつとナツメヤシが好物ではあったが、良い食べ物にあこがれたりはしなかった。ナツメヤシと言えば、ムスリムとナツメヤシの木の間には、特別な関係があると彼はよく語っていた。と言うのは、ナツメヤシの木は葉や樹皮や実（熟したのもそうでないものも）、そしてその実の種までも、何から何まですべて役に立ち、使えないものは何もないからであった。正実なムスリムに対しても同様である。彼の行為は善行に満ちており、彼のしたことは、人類の福祉を促進するものであったからである（Bukharī & Muslim）。

聖預言者ムハンマドは、衣服に関しても質素なものを好んだ。彼は普通シャツと izār（腰巻）かシャツとズボンという装いであった。衣服で体を足首の上のあたりまで包めるように izār かズボンははいていたのである。彼はさし迫った必要もないのに膝や膝上のあたりまで出すことをよしとしなかった。又衣服であれ、カーテンであれ、布に刺繍を施したり、柄を描いたりすることを嫌がった。特にその図案が大きかったり、又それが神や女神、その他崇拜の対象となるものを描いているとわかるような場合には許さなかった。ある家にかけてあるカーテンに大きな図柄が描かれているのを見て、彼が取りはずすように命じたこともあった。しかし、柄とはわからない程に小さな柄のついた布を使用することに関しては問題なしとしていた。彼自身が絹に身を包むことは決してなかったし、ムスリムの男が絹を着ることも許さなかった。又彼がイスラムを受け入れるよう諸王に勧告する手紙を書く時、その手紙が聖預言者ムハンマドの自筆であることを証明するために認め印付の指輪を作らせなければならなくなった。その時、彼は金ではなく銀でその指輪を作るように命じた。ムスリムの男が金を身につけるのは禁じられているからであ

ると彼は言った (Bukharī & Muslim)。ムスリムの女が絹や金を見につけるのは許されていた。だがこの場合にも聖預言者ムハンマドの過剰にならないようにという指示があった。聖預言者ムハンマドが貧しい者達救済のために寄付を募ったことがあった。すると一人の婦人がブレスレットを一つはずして寄付として彼の前に置いた。彼はその婦人に話しかけた。「あなたのもう一方の手も、火から救助すべきではないか？」それでその婦人はもう一方の手からもブレスレットをはずし、彼が抱いていた目的のために差し出した。彼の妻達の中で相当の価値がある装飾品を持っている者は一人もいなかったし、他のムスリムの女達でも、装飾品を持っている者はほとんどいなかった。聖クルアーンの教えに従い、彼はお金や金塊を貯め込むことには反対していた。それは社会の中の貧しい人々の利益に害を及ぼし、その結果、社会の経済を混乱させることになり、そうなれば一つの罪になってしまうと彼は考えていたからである。

或る時 Umar は聖預言者ムハンマドに、大君主国から使者を迎えなければならぬのだから、そのような儀式用に豪華なマントがあった方がよいのではないかと提案された。その案には賛成せず、「私がそのようなことをしても神はお喜びにはならないであろう。私は誰とでも普段着のままで会う」と聖預言者ムハンマドは言った。聖預言者ムハンマドが絹の衣服を何着かもらったことがあった。その中の 1 着を彼は Umar に与えた。Umar はこれを受け取った時に言った。「あなたが絹の衣服を身にまとうことを禁じていらっしゃるというのに、どうして私がこれを着られるでしょうか」。聖預言者ムハンマドは語った。「贈り物というものは、必ずしも本人が使うためとは限らない」。彼が言いたかったのは、その衣服が絹製だから、Umar が自分の妻か娘にそれを与えるか、或いは他の用途を考えればよいということであった (Bukharī, Kitāb ul-Libās)。

聖預言者ムハンマドの寝具もやはり質素なものであった。寝台や寝い

すを使ったことはなく、いつも地面に寝ており、寝具は皮製か、或いはらくだの毛織物であった。アーイシャは次のように語っている。「私達の寝具はとても小さく、聖預言者が夜の祈りのために起き上がられると、私は寝具の片側に寄っておりました。そして彼が立っていらっしゃる間は、私は脚を伸ばし、彼がひれ伏さなければならない時には私は脚を折り曲げておりました」(Muslim, Tirmidhī & Bukharī, Kitāb ul-At 'imah)。

聖預言者ムハンマドの住居も同様に質素であった。彼の家はごく一般的に一つの部屋と小さな中庭から出来ていた。部屋には中程に一本のロープが渡してあり、訪問者がある度にそのロープに布をかけ、彼の妻が使っている部屋と会見室とに分けた。彼の生活は非常に質素で、アーイシャの話によれば、聖預言者ムハンマドは生涯を通してナツメヤシと水だけで飢えを忍んだことがたびたびあり、聖預言者ムハンマドが亡くなった日には家の中にはナツメヤシがほんのわずか残っただけで、他には何も食べる物がなかったと述べられている (Bukhārī)。

神との関わり

聖預言者ムハンマドの人生におけるあらゆる面が神への愛と献身によって支配され特色づけられていたようである。彼の双肩に負わされた重い責任にもかかわらず、彼は昼夜を通してほとんどの時間を使って神を崇拜し、賞賛していた。彼は真夜中に床を離れ、朝の祈りのためにモスクへ行く時間が来るまで神への崇拜に身を奉げていた。彼は、夜半過ぎからずっとあまりにも長時間祈りのために立ち続け、足が腫れ上がってしまうことも時々あった。そのような状態の彼を見た人達は、感動を覚えずにはいられなかった。或る時、アーイシャが彼に次のようなことを言ったことがあった。「神はあなたに愛と親しみを込めて褒め讃えて下さっています。それなのに何故あなたは、それ程の不快と不便の中に自らを置かれようとなさるのですか？」彼は答えて言った。「神が寛大

さと慈悲をもって愛と親しみを私に授けて下さるのならば、それこそ、そのお礼として常に感謝の意を表わすのが、私の勤めではないのか？。感謝の意とは、好意を受ければ受ける程益々大きくなっていくものなのだ」(Bukharī, Kitāb ul-Kusūf)。

聖預言者ムハンマドは神の命令や許しなしには何事も引き受けたりはしなかった。すでに伝記の箇所に触れたことだが、メッカの人々から受けた激しい迫害にもかかわらず、彼は神の命令が下るまでその町を離れようとはしなかった。迫害が余りにもひどくなり、彼がその仲間達にアビシニアに移住する許可を与えた時、仲間の何人かが彼も一緒に行くことを願った。それでも彼は同行を断った。その旨に関する神の許しが、まだ与えられていなかったからである。苦難と迫害の下では、人々はたいてい自分の友人や親族を身近に引き寄せていたいものであるが、聖預言者ムハンマドはこのように、自分の仲間達にはアビシニアに逃げ場を求めさせ、自分自身はまだ神の指令が降りていないという理由で、メッカに残ったのであった。

神の言葉が朗詠されるのを聞く度に、聖預言者ムハンマドは感動のあまり涙を流した。特に彼自身の責任に関する節を聞いている時に、その傾向が強かった。Abdullah bin Mas'ūd は次のように語っている。彼は聖預言者ムハンマドに聖クルアーンの数節を朗詠するように頼まれたことがあった。「アッラーの使徒よ、聖クルアーンはあなたに啓示されたものではありませんか。(即ち「あなたが一番よく御存知のはずです」の意) それなのにどうして私があなたに朗詠してお聞かせするのでしょうか？」すると聖預言者ムハンマドは、「他の人々が朗詠しているのも聞きたいのだ」と答えた。そこで Abdullah bin Mas'ūd はアンニサー章から朗詠し始めた。彼は次のような節を唱えた。「されば、われらが各共同体より一人の証人を召喚し、また汝を彼等に対する証人たらしむる時、(彼等は) いかがせん」(4:42)。これを聞くと聖預言者ムハンマドは、「もういい。充分だ」と叫んだ。Abdullah bin Mas'ūd が顔を上げると、

聖預言者ムハンマドの目から涙があふれていた (Bukharī, Kitāb Fadā'il ul -Qur`ān)。

聖預言者ムハンマドは集会の祈りに参加することにおいてはとりわけ几帳面であった。そのため、自分の部屋で祈りを奉げるだけでなく、横になったままで祈りの言葉を唱えることすら許されている程の重い病気に罹っている時でさえ、彼はモスクへ行って自ら先導して祈りを奉げた。モスクへ向かうことすら出来ない程の状態だった時に、彼は Abū Bakr に先導して祈りを奉げるように指示したこともあった。だが、やがて回復の徴が感じられるようになると、彼は自分をモスクへ連れて行ってくれるように頼むのであった。彼は二人の男の肩によりかかっていたがあまりに体が衰弱していたため、地面に足をひきずるような状態であったとアーイシャは語っている (Bukharī)。

喜びを表わしたり、何か特別な事に人の注意を引こうとする時に手を叩くというのはよくある慣習であるが、アラブ人の中にも同じ慣習があった。しかし聖預言者は神を常に心に描く思いがあまりにも強かったため、彼は上記のような場合にも手を叩くかわりに神を思い賛美したのだった。或る時、彼が重要な仕事に追われている内に礼拝の時間が近づいてしまった。それで彼は Abū Bakr に祈りの先導をするように指示した。その後間もなく手がけていた仕事を終えることが出来たので、すぐにモスクへ向かった。Abū Bakr が祈りの先導をしていたが、聖預言者ムハンマドの到着に気づいた人々は手を叩き始めた。彼の到着を喜ぶ彼等の気持ちを表わすためと、同時に Abū Bakr に聖預言者ムハンマドの到着に注意を向けさせるためであった。それで Abū Bakr は一歩下がって、聖預言者ムハンマドが祈りを先導出来るように場所を空けた。祈りが終わると、聖預言者ムハンマドは Abū Bakr に尋ねた。「祈りの先導はあなたがするように言っておいたのに、何故退いたのか？」Abū Bakr は答えた。「アッラーの使徒よ、アッラーの使徒の面前で、どうして Abū Quhāfa の息子が祈りの先導に立てましょうか」。それで聖預言者ムハ

ンマドは集会に参加している人々に向かって言った。「何故あなたがたは手を叩いたのか。神を心に抱いている最中に手を叩いたりするのは、良いこととは思えない。もし祈りの最中に注意を向けなければならないようなことが起こったならば、手を叩くかわりに、神の御名を声に出して唱えなさい。そうすれば注目すべきものに注意が向けられるであろう」(Bukharī)。

聖預言者ムハンマドは祈りや礼拝が苦行か負担であるかのように行われることには納得がいかなかった。或る時彼が家に帰ると、二本の柱の間にロープがかけられているのに気がついた。その訳を尋ねると、彼の妻 Zainab が祈りの最中に疲れを感じ始めたら、そのロープで自分の体を支えるようにしているのだということであった。彼はそのロープを取りはずすよう命じ、それから、祈りというものは楽な気持ちで元気な時にのみ行なわれればよいものであり、疲れを感じたら座ればよいのだと論じた。祈りは負担に感じるべきものではなく、体が疲労を覚えるようになるまで祈るのであれば、祈りの本来の目的を失ってしまうことになるのだ (Bukharī, Kitāb ul-Kusūf)。

聖預言者ムハンマドは、たとえわずかでも偶像崇拜を感じさせるような行為や慣習をひどく嫌った。彼の死期が近づき、死の苦しみが彼につきまとっていた頃、彼は右に左にと激しく寝返りを打ちながら叫んだ。「預言者の墓を礼拝の場所にしてしまうようなユダヤ人やキリスト教徒に神の呪いあれ」(Bukharī)。自分達の預言者や聖者の墓にひれ伏し、祈りを奉げるユダヤ人やキリスト教徒のことが、彼の頭にあったのだ。だから、もしムスリム達迄が同じようなことをするようになってしまえば、彼等は彼の祈りには値しない者達となり、それどころか遂に彼からは離れていってしまうことになるのだという意味がその言葉には含まれていた。

神の栄光を守ろうとする聖預言者ムハンマドの意識が如何に強いものであったかは、既に伝記の箇所でも説明してある。メッカの人々は、彼の

偶像崇拜に対する反抗をやめさせようとあらゆる誘惑の限りを尽くした (Tabarī より)。彼の伯父 Abū Talib も彼を思いとどまらせようとして、もし彼が偶像崇拜批判をやめなければ、Abū Talib は彼の庇護をやめるか、自分の同胞達からひどい反発を受けるかの二者択一を迫られることになるという自分自身の不安を話した。その時、聖預言者ムハンマドは伯父に答えて以下のように言った。「たとえ彼等が 私の右手に太陽を、そして左手に月を据えたとしても、私は神の唯一性を宣言し、説き続けるのを止めたりは致しません」 (Zurqānī)。又 Uhud の戦いで傷ついたイスラム軍の残兵が丘の麓で聖預言者ムハンマドの周りに集まった時、敵は勝鬨を上げてイスラム軍兵士達を打ち破った歓喜を表わしていた。そして敵軍の指導者 Abū Sufyān は叫んだ。「Hubal (メッカ人が崇拝していた偶像の一つ) に栄えあれ！ Hubal に栄えあれ！」。聖預言者ムハンマドは自分自身と、彼の周りに集まっている数少ないムスリム達の安全のためには沈黙を守っていた方が良いとわかっていたにもかかわらず、もう自分を抑え切れなくなり、仲間達にお返しに次のように叫べた。「勝利と栄光は アッラーにのみ有り。勝利と栄光は アッラーにのみ有り！」 (Bukharī)。

イスラム出現前にさまざまな宗教の信徒達が共通して思い違いをしていた点は次のようなことであった。即ち、天地の現象は預言者や聖者やその他偉大なる人達の喜びや悲しみを表現するものであり、天体の動きすらも彼等によって支配されている。例えば、その人達は太陽を途中で静止させたり、月の満ち欠けを止めたり、流れる水を止めたりすることが出来るのだとする考え方であった。しかしイスラムの教えに従えば、そのような考えには根拠がなく、宗教上の聖典に書かれているこの種の現象はただ単に比喻にすぎず、その意味が正しく理解されずに、迷信を生み出してしまったのである。それにもかかわらず、ムスリムの中にもそのような現象を偉大なる預言者達の生涯に起こる出来事に関連させる傾向のある者達がいた。聖預言者ムハンマドの晩年に、彼の息子

Ibrāhīm が二才の若さでこの世を去った。その同じ日に日食が起こった。メディナのムスリム達の中に聖預言者ムハンマドの息子の死に際し、神の悔やみの印(しるし)として太陽が暗くされたのだという考えを広める者達がいた。この話を耳にした聖預言者ムハンマドは非常に不愉快な顔をし、その考えを厳しく非判した。太陽や月やその他の天体はすべて神の法則に支配されており、それらの天体の動きや、それに関わる現象は、如何なる人間の生死とも何の関係もないのだと説明した (Bukharī)。

アラビアは非常に乾燥した国であり、雨はいつでも歓迎され、心待ちにされている。アラブ人は雨が降るかどうかは、星の動きに支配されているのだと思っていた。誰かがその考えを口にする度に、決まって聖預言者ムハンマドは非常に気を悪くし、神から与えられたお恵みを他の原因にすり換えたりしてはならないと人々を諭したものであった。雨やその他の自然現象は神の法則によって支配されており、決して神や女神、或いはその他の何かの力によって気まぐれに動かされるものではないと説明した (Muslim, Kitāb ul-Īmān)。

聖預言者ムハンマドは如何なる不利な状況が重なるろうとも、絶対の、ゆるぎない信頼を神においていた。或る時、敵が全くの無防備のままで眠っている聖預言者ムハンマドを見付け、剣を抜いて彼の枕許に立ち、今にも彼を殺すぞと脅した。そして敵は殺す前に尋ねた。「こんな窮地に陥っているお前を助けられる奴は、誰もいまい？」すると聖預言者ムハンマドは静かに答えた。「アッラーがいらっしゃる」。聖預言者ムハンマドが余りにも確信に満ちてそう言ったので、疑い深い彼の敵でさえ彼の神に対する信仰と信頼の崇高さを感じずにはいられなかった。剣が敵の手から落ち、ほんの少し前には彼を殺そうとしていた敵は、彼の目の前に判決を待つ犯罪者のように立ちつくしていた (Muslim, Kitāb ul-Fadā'il & Bukharī, Kitāb ul-Jihād)。

聖預言者ムハンマドの神に対する謙虚さは実に完全なものであった。Abū Huraira は次のように語っている。「或る日聖預言者が善行によっ

て救いを得られる人間は誰もいないであろうとおっしゃいました。それを聞いて私は、アッラーの使徒、あなたは必ずや御自分の善行故に樂園に入ることが許されるでしょう、と申し上げました。すると彼はこう答えられたのです。『いいや、私であっても、自分の善行故に樂園へは入れまい。ただ神の寛大さと慈悲に包まれる位であろう』(Bukharī, Kitāb ul-Riqāq)。

聖預言者ムハンマドは常に人々に正しい道を選び、それに従い、神へ近づける方法を一生懸命求め続けるよう、熱心に勧めていた。自分から死を望んではいけない。よい行いをしていれば、長生きをする内により大きな善に到達することが出来るであろう。そしてもし行いが悪ければ、時間さえあれば、自分の間違った道を後悔し、正しい道を歩み始める時が来るであろう、と彼は教えを説いた。彼の神に対する愛と献身は、いろいろな形で表わされた。例えば乾期が続いた後、初めての雨が降ると、彼はいつも自分の舌を突き出して雨滴を受け、叫んだものであった。「これこそ一番新しい我が主のお恵みである」。彼は常に神の許しと慈善を求めて必死に祈っていた。特に彼が人々の中に囲まれて座っている時には、更に熱心であった。そうすることにより、彼と共にいる者達、彼と関わりのある者達、そして一般のムスリム達は神の怒りを免れ、神の許しを得るに値する人間になるようにと念じて 祈っていたのである。自分はいつも神の御前にいるのだという意識が、彼の心から消えることはなかった。眠りの床につく度に、彼は言ったものである。「主なるアッラーよ！汝の御名を口にして、私を休ませ（眠らせ）給え。そして、汝の御名を口にして、私を起きさせ給え」。目覚めの時には、こう言ったものであった。「すべての賞賛はアッラーにあり。アッラーが休み（眠り）の後の命を私に下さいました。そしていつの日か、私達は皆アッラーのもとに集まります」(Bukharī)。

聖預言者ムハンマドは常に神へ少しでも近づくことを求めていた。だから彼がよく口にしていた祈りは次のようなものであった。「アッラー

よ！私の心をあなたの光で満たし給え。私の目を、私の耳をあなたの光で満たし給え。私の右に、私の左に、私の上に、そして私の下にあなたの光を投げかけ給え。私の前に、そして私の後にもあなたの光を投げかけ給え。主なるアッラー！私の全身を光に変えさせ給え」(Bukharī)。

Ibn Abbās はこう語っている。「聖預言者が亡くなられる直前に Musailima (詐欺者) がメディナにやって来て、聖預言者ムハンマドが自分を後継者として指名しようというのなら、いつでも受けようと言った。Musailima は非常に多くの従者を従えており、彼が属する部族はアラビア中最大の部族だった。聖預言者は彼の出現を知らされると、Thābit bin Qais bin Shams を伴って彼に会いに出かけられた。手にシュロの小枝を持っておられた。Musailima の野営地に着き、聖預言者は彼の前に立たれました。その内に仲間の人達がやって来て、聖預言者を取り囲んだ。彼は Musailima に向かってこうおっしゃった。『あなたは、私があるあなたを後継者として指名すれば、それを受けると語ったそうだが、私はこの枯れたシュロの小枝ですら、あなたに授けるつもりはない。神の御意志に背くからである。神がお決めになった通りの終局をあなたは迎えることになるであろう。もしあなたが私の言うことに背を向けるならば、神はあなたをだめにしてしまわれるであろう。神が私に啓示して下さったことを、あなたにも分け与えられるであろうということが私にはわかっている』。それから、更につけ加えられた。『私はもう戻る。何か更に言いたいことがあれば、Thābit bin Qais bin Shams に話せばよい。彼は私の代理人である』。そして聖預言者は引き返して行かれた。Abū Huraira も彼と共に戻った。神が聖預言者に啓示されたことを Musailima にも分け与えられる、というのはどういうことかと聖預言者に尋ねた者がいた。聖預言者はこのように答えた。『私は夢の中で私の嫌いなブレスレットが二つ手首にはまっているのを見た。そして更に夢の中で、神にそのブレスレットを破壊せよと命じられた。私がそれら二つを壊すと、二つとも消えてしまったのだ。これは私の死後、(預言者の)

偽者が二人現れてくるという意味であると解釈した』(Bukharī, Kitāb ul-Maghazī)。この出来事が起こったのは、聖預言者の死期が近づいている頃だった。まだ聖預言者を認めていなかったアラビアの最後且つ最大の部族が彼に服従する気になり、その唯一の条件として、その部族の長を聖預言者の後継者として指名することを提案した。もし聖預言者が、ほんのわずかでも御自分の個人的動機に従って行動されたならば、その最大のアラビアの部族の長を彼の後継者にすると約束することにより、何の支障もなくアラビア全土の統一をなし得たであろう。聖預言者には息子がいなかった。それに彼には何の権力的野望もなかったから、このような手はずを整えることには全く問題はなかった。しかし聖預言者がたとえどんなに些細なものでも、自分のものであるとか、自分の自由に来れると思われたことはなかった。従って、あたかも自分の権限であるかのようにムスリムの指導権を扱うことは彼には出来なかった。聖預言者はその指導権を神聖なる神の委託として考え、神がふさわしいと思われる人物にその権利をお与えになるであろうと信じておられた。それ故に Musailima の申し出を軽蔑してはねつけ、ムスリムの指導権は言うまでもなく、枯れたシュロの小枝一本さえ、彼に与える気はないと言われたのだ。

聖預言者ムハンマドが神のことを引き合いに出したり、語る時は必ず、彼は彼を見ている者達の目に、彼の存在すべてを神への愛と献身に捧げているように見えた。

聖預言者ムハンマドは常に神の礼拝における簡素さを強調していた。彼がメディナに建立し、そこでいつも祈りを先導していたモスクは、床は何のカバーもマットもないむき出しの地面で、屋根は乾燥させたシュロの枝や葉で作られており、雨が降る度に雨漏りがするような代物であった。そのような時には、聖預言者ムハンマドも集会に参加した人々も雨と泥でびしょぬれになってしまうのだが、それでも彼は祈りを最後まで続け、礼拝を延期したり、もっと雨漏りのしない丈夫な小屋へ移る

ということは一度もなかった (Bukharī, Kitāb ul-Saum)。

聖預言者ムハンマドはまた、仲間達のことをよく見ていた。Abdullah bin Umar は非常に敬虔で、潔癖な暮らしをしている男であった。彼に関して聖預言者ムハンマドがこのように語ったことがある。Abdullah bin Umar が、もし Tahajjud の祈りの習慣をもっと几帳面に守れば、更に素晴らしい人間になるであろうに」。聖預言者ムハンマドのこの言葉が耳に入ってから、Abdullah bin Umar はその後、一度たりともこの祈りを怠ることはなかった。聖預言者ムハンマドが娘の Fatimah の家を訪ねた時に、彼は彼女とその夫である Alī に、Tahajjud の祈りの習慣を正しく守っているかどうか尋ねたことがあった。Alī は答えた。「アッラーの使徒よ。Tahajjud の祈りを奉げるために起きようとしてはいるのですが、私達が時間に間に合うようには起きられないであろうと神が所思の場合には、その祈りを致してはおりません」。聖預言者ムハンマドは帰途につき、その道すがら聖クルアーンの一節を数回繰り返した。人間とは自分の間違いを認めようとはせず、口実をつけて言い逃れをしようとするものであるという旨の一節であった (Bukharī, Kitāb ul-Kusūf)。聖預言者ムハンマドが言いたかったのは、Alī は自分の過ちを神のせいにして、神が彼等は起きなくてもよいと望まれた時には時間に間に合うようには起きられない、などと言いつつをしたりせず、そのような面での自分の弱さを認めればよかったのだということであった。

苦行を非難す

聖預言者ムハンマドは礼拝における堅苦しい形式を強く否定し、礼拝という名のもとに自ら苦行として課すことを非難した。彼の教えによれば、礼拝とは神が人間に授けて下さった能力を有益に利用するところに成り立つものである。神が人間に見る目を授けて下さったのだから、目を閉じていたり目をそらしたりしては、最早それは礼拝とは言えず、寧

ろ無礼な行為なのである。視覚という能力を正しく使っていないのだから、罪深い行為ともみなされる、能力の不正使用なのである。中傷や陰口を聞くために聴覚という能力を使うのは罪深い行為であるが、人間が勝手に聴覚を使わないようにするというのも恩知らずな行為となる。食事を控えることは、（それが規定されているか、或いは望ましい場合を除いては）それが積れば自殺行為ともなるため、許されざる罪である。勿論、自ら暴飲暴食に走ったり、禁じられているものや望ましくないものを食べたり飲んだりするのも、罪深いことである。これは、イスラムの聖預言者ムハンマドが教え、強調した素晴らしい節義であり、このような教えを説いた預言者は今までには一人もいなかった。

生来の能力を正しく使用すれば、高い道徳性が得られることになる。このような能力を下手に使ったり、だめにするのは愚かなことである。間違った目的や罪深い目的に使用するのはふさわしいことではない。正しく使用してこそ、真の徳が得られるのである。聖預言者ムハンマドが説いた道徳的教えの真髄はここにある。そして簡単に言えば、それは彼自身の生活及び行動の縮図でもあった。アーイシャがこのように語っている。「聖預言者が二者択一をなさる時は必ず易しい道をお選びになります。但し、その選択が何の過ちや罪を想わせるものがない時に限っております。その選択をすると過ちや罪を犯しそうな可能性がある場合には、すべての人々のために聖預言者はそれを敬遠されました」(Muslim, Kitāb ul-Fadā'il)。これは正に、人類に開かれた最高に有徳且つ賞賛すべき道である。人間には、苦痛や不自由を自ら望んで求める者が多いが、それは神の御心になかなうとするためではない。無目的に苦痛や不自由を自分自身に課しても神の御心になかなうはずはないからである。彼等の目的は人をだますことにあるのだ。そのような人間は、内在する徳などというものはほとんど持ち合わせず、ただ自分の欠陥を覆い隠そうとし、偽の徳を身につけて他人の目によく映ろうとしているだけなのである。しかしイスラムの聖預言者ムハンマドの目的は、真の徳を身につけ、神

の御心に沿うことにあったのだ。だから彼には、見せかけで人を信じ込ませようという態度ははなからみられなかった。世の中が彼のことを悪と見なそうが善と言おうが 彼には全く関心がなかった。彼にとっての問題は、自分自身をどうみるか、と、神が彼をどう評価なさるかだけであった。自分の良心による見極めと神の賞賛に加え、人々が彼を正しく見てくれさえすれば彼は満足であった。だが人々が彼を色めがねで見た時には、その人々を哀れに思うだけで、彼は彼等の意見に何の価値も置かなかった。

妻たちに対する態度

聖預言者ムハンマドは妻たちに対して非常に親切で公平であった。妻達の誰かが聖預言者ムハンマドに対して服従することに我慢がなくなってきたような場合には、彼はただ笑い、黙って見過ごした。ある日彼はアーイシャに言った。「アーイシャ、おまえが私に腹を立てている時はすぐにわかるよ」。アーイシャは「どうして」と尋ねた。彼は答えた。「おまえが私に満足している時には、おまえは話の中で神のことを、聖預言者ムハンマドの主よ、と呼ぶことに気付いたのだ。だが私のことが気に入らない時には、Ibrāhīm の主よ、と呼んでいるね」。これを聞いて ‘アーイシャは笑いながらその通りだと言った (Bukharī, Kitāb ul-Nikāh)。Khadījah は彼の第一夫人であり、彼の目的のために大きな犠牲を払った。彼女は聖預言者ムハンマドよりもかなり年上であった。彼女の死後聖預言者ムハンマドはもっと若い妻達を娶ったが Khadījah の思い出がかすむようなことは決してなかった。Khadījah の友人が彼を訪ねてくる度に、彼は立ち上がって、その友人を迎えた。(Muslim) Khadījah の所有物や彼女に関わる物を見る度に彼の心は愛情で一杯になるのであった。バドルの戦いにおいてイスラム軍に捕らえられた捕虜の中に聖預言者ムハンマドの義理の息子がいた。彼には身代金として差

し出せるような物は何も持っていなかった。彼の妻 Zainab（聖預言者ムハンマドの娘）は彼女の母親（Khadījah）の物であったネックレスをメディナへ送り、それを夫の身代金として差し出した。聖預言者ムハンマドはそのネックレスを見た時、すぐに気付き胸が一杯になった。彼は仲間達に言った。「この件に関しては私は何の権限もない。だが私は Zainab がこのネックレスを、亡くなった母親の最後の形見として大切にしていることを知っている。もしあなたがたさえ構わなければ、このネックレスを彼女から取り上げるべきではなく、彼女に返してやったらどうかと思うのだが」。それ以上の喜びはないとして、彼等は喜んで彼の提案を受け入れた（Halbiyyah, vol. 2）。聖預言者ムハンマドはよく Khadījah のことを褒めて他の妻達に話し、彼女の徳と彼女がイスラムのために払った犠牲を強調した。このような時に「アーイシャが憤慨して次のように言ったことがあった。「アッラーの使徒、何故その老婦人のことをいつもお話なさるのですか。神があなたにもっとよく、若く、魅力的な妻をお与え下さったではありませんか」。聖預言者ムハンマドはこれを聞くと感情的になり、言い返した。「なんということだ、アーイシャ。おまえには Khadījah が私にとってどんなに素晴らしい人間だったかわからないのだ」（Bukharī）。

高い道徳性

聖預言者ムハンマドは逆境において常に優れた忍耐力を持っていた。逆境のために挫けることもなく、彼を支配してくれる力を個人的に求めることもしなかった。彼が誕生前に父親を失い、まだ幼少の頃に母親を失ったことは既に述べた。八才迄は祖父の許で育てられ、祖父の死後は伯父 Abū Tālib の世話になった。身内の自然の愛情から、そして又そのことを父親から特に諭されていたために、Abū Tālib は常に心を配り寛大な心で甥の面倒を見た。しかし、彼の妻は夫と同じ位、この考えに影

響されている訳ではなかった。自分の子供達だけに何か物を分け与えて、その幼い従弟には何も与えないということがよくあった。Abū Tālib が偶然にも家の中へ入って来てその場面に会おうと、彼のほんの幼い甥が素晴らしい威厳を持って、顔に何のすねた悲しそうな表情も見せずに離れて座っているのを見つけたものであった。愛情で胸が一杯になり、自分自身の責任をも認識して、この伯父は甥にかけ寄り、胸に抱き締めて彼の妻に向かって叫ぶのだった。「私のこの子にも気を使ってやってくれ。私のこの子にも目を向けてやれ」。このような出来事は珍しいことではなかった。そしてそのような場面を目撃したことのある人々は声を揃えて、若き聖預言者ムハンマドはその待遇に影響された様子も従弟たちに対して嫉妬している様子も全く見せなかったと証言している。晩年になって聖預言者ムハンマドがその叔父の二人の子供、Alī と Ja'far の面倒を見、育てる立場になった時には、喜んで引き受け、出来る限り心を尽くしてその責任を果たした。

聖預言者ムハンマドの生涯は 次から次へと苦い経験の連続であった。生まれた時は既に片親で、幼年期に母親が他界し、八才で祖父までも失った。結婚後も次々に我が子を亡くし、その後彼の愛する献身的な妻 Khadijah が逝った。Khadijah の死後娶った妻達の中にも彼を残して先立つ者達があり、人生の終りを迎えた頃に息子 Ibrāhīm の死にも直面しなければならなかった。彼はこのような身内の死や災難をすべて気丈に堪え抜き、彼の不屈の精神や洗練された礼儀正しさに、何の陰りも残さなかった。彼が個人的悲しみを人前にさらすことはなく、人に会う時は必ず穏やかな表情を浮かべ、誰に対しても分け隔てなく、慈善の心をもって接した。或る時、彼は子供を亡くした女が その子の墓で声を出して嘆き悲しんでいるのを見かけた。彼は彼女にじっと堪えて、神の御意志を最高のものとして受け入れるように諭した。その女は話しかけてくる相手が聖預言者ムハンマドとは知らず、言い返した。「もしあなたに子供を亡くしたことがあるのなら、このような気持の時に堪えるなんてこ

とが如何に無理かおわかりになるでしょう」。聖預言者ムハンマドは「私は一人ならず、七人もの子供を亡くしました」と答えて立ち去った。このように彼自身の身内を失った痛手と不運を直接的に表わした時を除けば、彼はその悲しみにくよくよしたこともなければ、彼のたゆまぬ人類への奉仕と、彼等の重荷を喜んで分かち合う姿勢を、悲しみのために中断することは決してしなかった。

自制心

聖預言者ムハンマドは完璧な自制心を有していた。彼は統治者となった時ですら、常に忍耐強く人々の声に耳を傾けた。そして誰かが彼に無礼な態度をとってもじっと堪えて、決して報復しようとはしなかった。東洋では話しかけている相手に敬意を示す一つの方法として、その人を個人名で呼んだりはいしない。ムスリムは聖預言者ムハンマドのことを「アッラーの使徒」と呼び、ムスリム以外の人々は彼を「Abū'l Qāsim」(「Qāsimの父」という意味。Qāsimは聖預言者ムハンマドの息子たちの一人の名)と呼んだ。ある時、一人のユダヤ人がメディナに彼を訪ねて来て、彼と議論を始めた。議論の最中にそのユダヤ人は彼のことを「ムハンマドよ、ムハンマドよ」と繰り返して呼んだ。聖預言者ムハンマドはその呼び方には何の注意も払わず、忍耐強く議論の問題点を詳しく説明し続けた。しかし仲間達は、その対話者の無礼な呼び方に腹を立てた。ついに一人が自制しきれなくなり、そのユダヤ人に聖預言者ムハンマドのことを個人名ではなく Abū'l Qāsim と呼ぶように言った。ユダヤ人は「聖預言者ムハンマドの両親がつけてくれた名前で、彼のことを呼んでいるではないか」と言った。聖預言者ムハンマドは、微笑みながら仲間達に言った。「彼の言う通りである。私は生まれた時に、ムハンマドと名付けられたのだ。だから彼が私をその名で呼んだからと言って腹を立てる理由は何もない」。

人々が聖預言者ムハンマドの話を中断し、彼等が必要としていることを説明したり、彼に彼等の要求をつきつけたりすることが時々あった。彼はいつも忍耐強く話を止め、彼等の好きにさせ、彼等の話が終わってから又自分の話を続けるのであった。時によると、彼と握手をした人々が彼の手を握ったまま中々放してくれない時があった。これは困ったことだし貴重な時間の無駄使いになるけれども、決して自分の方から手を引こうとはしなかった。人々は気楽に彼を訪れ、自分達の悩みや困難な問題を彼に打ち明け、助けを求めた。彼に援助の手が差し延べられる限り、決してそれを断ったことはなかった。時には余りにも押し付けがましい要求を強くつきつけられることもあったが、彼は出来る限り願いを満たしてやろうとした。要望を満たしてやった後に、その要請をした人々に、神を更に深く信頼して、他の人々に救いを求めたりしないように諭してやることもあった。或る時敬虔なムスリムが数回彼にお金を無心して来たので、その度毎に彼はお金を都合してやったが、最後には「人は神に信頼を置き、要求をするのは避けるのが最も望ましい」と言った。そのお金を無心した人は誠実な男であった。聖預言者ムハンマドの気持ちを考えて、その男は既に借りたお金を返すとは申し出なかったが、今後如何なる状況においても誰にも要求はしませんでしたと約束した。何年か後にその男は馬に乗って戦いに参加した。その戦いの最中、武器のぶつかり合う音や混乱が最も激しくなり、彼が敵に囲まれた時、彼の持つ鞭が手から落ちた。彼の苦境に気付いた徒歩の兵士が彼のために鞭を拾おうと身をかがめると、馬上の人物は彼にそのままにしておくように頼み、馬から跳び降りて自分でその鞭を拾った。そして次のようにその歩兵に説明した。その馬上の兵士はずっと以前に、人には何事も要請しないと聖預言者ムハンマドに約束していた。だから、もしその歩兵に自分のために鞭を拾わせたならば間接的に人に要求をしたことになり、それでは聖預言者との約束を破る罪を犯してしまったことになるのであった。

正義と公正な処遇

アラブ人は依怙最賈をする傾向が非常に強く、人によって規準を変えた。今日のいわゆる文明国家ですら、法律が一般の市民に対して厳しく施行されているのにもかかわらず、名士や高い身分や官職についている人々の行為を咎めることには積極的でない。しかし、聖預言者は正義と公正な処遇について一貫して規準を守る点で他のアラブ人と異なっていた。或る時、立派な家柄の若い女性が盗みを犯したという事件が彼の許に持ち込まれた。もし規則にのっとった通りの罰がその若い女性に科せられたなら、名門の家庭は恥辱を受け、面目を失うことになってしまうため、これは大きな驚きであった。多くの者達はその犯罪者のために聖預言者ムハンマドにとりなしをしたかったが、そうすることも恐かった。従って Usāma がその役割を引き受けるよう説得された。Usāma は聖預言者ムハンマドのもとを訪れたが、聖預言者ムハンマドは Usāma の依頼の筋を悟った途端、非常に立腹して言った。「やめた方がいい。一般市民には辛くあたるくせに、身分の高い者には寛大に処するという間違った方向に国家になってしまう。イスラムではそのようなことは認めない。だから私も勿論そのようなことをする気はない。真実、もし私自身の娘 Fatimah が罪を犯すようなことがあれば、私は迷わず当然の罰を彼女に科すであろう」(Zurqanī, vol.3, p. 279)。

戦争中の緊急事態においてすら、聖預言者ムハンマドは あらゆる正当とみなされる規制や慣習を厳しく守っていた。或る時彼は、一団の仲間達を偵察隊として送った。聖なる月 Rajab の最後の日に、彼等は敵兵数人と偶然出会った。その敵をこのまま見過ごして、偵察隊がこれ程近く迄来ているという情報をメッカに持ち帰られては危険だと考えた彼等は、その敵に攻撃を仕掛け、その小競合いの最中に敵の一人を殺してしまった。偵察隊がメディナへ引き返した後、メッカの人々はムスリムの

偵察隊が聖なる月に彼等の一人を殺したと抗議した。メッカの人々はよくムスリムに対して聖なる月の神聖さを汚す罪を犯していた。だから、メッカの人々が聖なる月に関する慣習を無視しているのだから、ムスリム達にその慣習を守れと主張する権利はメッカ側にはない、と彼等の抗議に対して返答をしても構わないはずであった。だが聖預言者ムハンマドは、そのようには答えなかった。彼はこの偵察隊の隊員を厳しく叱責し、戦利品を受け取ろうとはしなかった。ある記録に依れば、2: 218 の啓示が全様を明らかにする迄は、その殺された人に対して慰謝料すら支払ったのである (Tabarī & Halbiyyah)。

人々は一般的に友人や親族の感情を傷つけないように気をつけているものだ。だが聖預言者ムハンマドは、彼に敵対する人々に関してもこの点を特に気遣っていた。ある時、一人のユダヤ人が彼を訪れ、Abū Bakr が神は聖預言者ムハンマドをモーゼよりも高い地位に置かれたなどと言うから自分の感情が傷ついた、と不平を言った。聖預言者ムハンマドは Abū Bakr を呼び寄せ、何が起こったのか説明を求めた。Abū Bakr の話に依ると、最初にユダヤ人が、彼の言う神が全人類の上に置かれたモーゼにかけて誓うと言ったので、それを受けて、神がモーゼの上に置かれた聖預言者ムハンマドにかけて誓うと、やり返したということであった。聖預言者ムハンマドは言った。「他の人々の感情には敬意を払うべきなのだから、あなたはそのようなことを言うてはいけなかった。誰も私をモーゼの上に置くはずはない」 (Bukhārī, Kitāb al-Tauhīd)。彼の言葉の意味は、実際に聖預言者ムハンマドがモーゼの上には置かれていないということではなく、このような断言をユダヤ人にすれば、彼が気を悪くするのは考えられることなのだから、避けた方がよいということであった。

貧しき者への配慮

聖預言者ムハンマドは、社会における貧しい者達の状況を改善し、彼等の社会的地位を向上させるべく常に気を配っていた。或る時、彼が仲間達と共に腰をおろしていると、一人の金持が通りかかった。聖預言者ムハンマドは仲間の一人にその金持のことをどう思うか尋ねた。するとその仲間は答えた。「彼は裕福でよい親戚に恵まれていますね。もし彼が一人の娘に結婚を申し込んだとすれば、喜んで承諾してもらえるでしょうし、もし彼が誰かのために口添えしてやれば、彼の口添えは聞き入れられるでしょう」。しばらくして、貧しい身なりで一文無しという風体の男が通りかかった。聖預言者ムハンマドは同じ仲間に この男についてはどう思うか尋ねた。その仲間は答えた。「アッラーの使徒よ、彼は貧乏人です。もし彼が一人の娘に結婚を申し込んでも、喜んで承諾してはもらえないでしょう。もし彼が誰かのために口添えをしたとしても、その口添えは退けられるでしょう。それにもし彼が誰かと話をしようとしたところで 誰も彼なんか見向きもしてはくれないでしょう」。この答を聞いて、聖預言者ムハンマドは次のように説いた。「この貧しい者は、全世界を十分に満たす程の沢山の金よりもはるかに価値がある」(Bukharī, Kitāb ul-Riqāq)。

貧しいムスリムの女が、メディナにある聖預言者ムハンマドのモスクを掃除してくれていた。モスクで彼女の姿を見かけなくなって数日経った。そこで、聖預言者ムハンマドは彼女のことを尋ねた。彼女は死んだということであった。「彼女が亡くなった時に、どうして私に教えてくれなかったのだ。彼女への葬送の祈りに私も加わりたかったのに」と彼は言った。更につけ加えた。「ことによると、あなたがたは彼女が貧しい故に 彼女に気を配る価値はないと思ったのではないか。それは間違っている。私を彼女の墓へ連れて行ってくれ」。そして彼は彼女の墓へ行

き、彼女のために祈った (Bukharī, Kitāb ul-salāt)。聖預言者ムハンマドは体中埃にまみれ、もつれた髪をした人々のことをよく語った。「そういう人々は裕福な者達からは歓迎されないが、神からは高い評価を受けているので、彼等が神の恩恵に信頼を置き、神の名にかけて、どのような物事でもいつか転換期を迎えるのだと信じれば、神は必ず助けて下さるのだ」と (Muslim, Kitāb ul-Birr wa'l-Silah より)。或る時、以前は奴隷で今は自由の身となっている、聖預言者ムハンマドの仲間達が集まって座っていた時に、Abū Sufyān が偶然通りかかった。(Abū Sufyān は クライシュ族の長であったが メッカ陥落の日迄ムスリムと闘い、その陥落の日にイスラムを受け入れた) この仲間達は Abū Sufyān に話しかけ、神がイスラムに与え給うた勝利のことを思い起こさせた。Abū Bakr もこれを耳にし、クライシュ族の長に彼等の恥辱を思い出させることには賛同出来ず、仲間達を叱責した。それから彼は聖預言者ムハンマドの所へ行つてこの出来事を彼に語った。聖預言者ムハンマドは言った。「Abū Bakr、あなたは神の僕達の心を傷つけたのではないのか。もしそうだったら、神があなたに傷つけられたことになろう」。Abū Bakr はすぐにその仲間達の所へ戻り、尋ねた。「兄弟達。私の言葉に気を悪くしたか？」それに対して彼等は答えた。「私達は全然、あなたの言葉に気を悪くなどしていない。神があなたをお許し下さるように」 (Muslim, Kitāb ul-Fadā'il より)。

聖預言者ムハンマドは貧しき者達に敬意を払い、彼等の気持ちを傷つけてはならないと主張し、彼等の必要を満たしてやろうと努める一方で、彼等の心に自尊心を植えつけ、人の情を乞うのはやめるように教えた。貧しき者は一粒が二粒のナツメヤシや一口か二口の食物で満足しようとするのではなく、如何に厳しい試練に遭おうとも、自分から人に物を頼む気持ちを抑えるべきであると聖預言者ムハンマドは常に言っていた (Bukharī, Kitāb ul-Kusūf)。又一方では、貧しき者達も招待されない限り、どのような饗宴も祝宴も受けられはしないであろうと言っていた。アー

イシャが或る時、幼い娘を二人連れて彼女を訪れて来た一人の貧しい女のことを語っている。そのときアーイシャにはその女にあげられる物といえはたった一つのナツメヤシしかなかった。その女はそのナツメヤシを二つに割って幼い娘達に与え、それから三人共帰って行った。聖預言者ムハンマドが帰宅した時、アーイシャはこの話を彼に伝えた。すると彼は言った。「もし ある貧しい男に娘が何人かいて、その娘達に愛情を持って接していたならば、神はこの男を地獄の責め苦から救って下さるであろう」。更につけ加えた。「娘達に示した愛情故にこの女には、神が樂園を授けて下さるであろう」(Muslim)。或る時、彼の仲間の一人で、裕福な Sād が 自分の事業について人に自慢をしていると彼に訴えてくる者があった。聖預言者ムハンマドはこの話を聞いて、言った。「自分の富や地位や権力をただ単に自分自身の努力や事業の成果だなどと思っ
てはいけない。そうではないのだ。あなたがたの権力や地位や富はすべて貧しき者達のおかげで得られるものなのである」。聖預言者ムハンマドの祈りの中に次のようなものがある。「神よ。生ある内は謙虚に、そして死に際しても謙虚に居させ給え。そして最後の審判の日、謙虚な者達の所へ私を甦らせ給え」(Tirmidhī, Abwāb al-Zuhd)。

或る暑い盛りの日に街を歩いていて、聖預言者ムハンマドは一人の非常に貧しいムスリムが重い荷物を運んでいるのを見かけた。彼は全く目立たない容貌の男で、汗やほこりで真黒になっており、更に醜く見えていた。それに憂うつそうな顔付きをしていた。聖預言者ムハンマドはその男の後からこっそり近寄り、丁度 子供達が時々ふざけてするように、両手を前にまわしてその男を目隠しして、誰だかあてさせようとした。その男は自分の手を後にまわして聖預言者ムハンマドの体を触り、それが聖預言者その人だと気がついた。彼は恐らく自分のような状況にいる者に このような親しい愛情を示してくれる人は他にはいないと思ったのであろう。喜び、勇気を得て、彼は自分自身を後向きに聖預言者ムハンマドの体に押しつけ、自分の汗とほこりにまみれた体を聖預言者ムハ

ンマドの衣服にこすりつけた。恐らくどこまで聖預言者ムハンマドが自分の好きにさせてくれるか確かめたかったのであろう。聖預言者ムハンマドは微笑んだままで、彼を止めさせようとはしなかった。その男が心から幸せな気分に入った頃、聖預言者ムハンマドは彼に言った。「ここに奴隷が一人いる。誰かこの奴隷を喜んで買ってくれるかな？」その男の中に価値を見出そうとしてくれるような人間は聖預言者ムハンマドを除いては、この世の中には恐らく誰一人いないであろうと思ったその男は、悲しそうな様子で答えた。「アッラーの使徒よ、私を買おうなどと考えて下さる方は、この世の中には誰もおりません」。聖預言者ムハンマドは言った。「いけない。いけない。そんなことを言うものではない。あなたは神の御前には、大いなる価値を持った人間なのだ」(Sharh ul-Sunnah)。

聖預言者ムハンマドは自分自身、貧しき者達への福祉に気を遣っていただけではなく、他の者達にも、同じようにするよう熱心に説いた。Abū Mūsā Ash‘arīの話によると、貧しき者が聖預言者ムハンマドに近づいて物乞いをすると、彼は周りにいる者達にも次のように言ったものであった。「あなたがたも彼の願いをかなえてやりなさい。そうすれば、善行を共に積み重ねたということでああなたがたの評価も上がるであろう」(Bukharī & Muslim)。聖預言者ムハンマドの目的の一つには、仲間の者達の心に積極的に貧しき者達を助けようという気持ちを育てることにあり、もう一つには、貧困者自身の心にも、より裕福な兄弟達が彼等への愛情と思いやりを持ってくれているのだという認識を植えつけることにあったのである。

貧しき者の利益保護

イスラムがアラビアの殆どの地域で大体受け入れられるようになった頃、聖預言者ムハンマドに大量の品物やお金が送られて来ることがよく

あった。彼はそれを受け取ると、ただちに困っている人々に分け与えた。或る時、彼の娘 Fatimah が彼を訪ねて来て、臼を引くなどの仕事のために水ぶくれが出来ていた自分の手を見せ、奴隷がいるなら、自分にもその一人を分けて欲しいと頼んだ。それは彼女自身の仕事の量を軽減してもらえるからである。聖預言者ムハンマドは答えた。「奴隷よりもはるかに価値が高くなるものを 教えてあげよう。夜、床につく時に、神を称える言葉（アルハムドゥ・リッラー）を 33 度唱え、神の完全性を証言する言葉（スプハーナッラー）を同じ回数で唱え、又神の偉大さを証言するように（アッラーフ・アクバル）を 34 度唱えなさい。こうすれば一人の奴隷を持つよりも、はるかにお前の救いとなるであろう」（Bukharī）。

或る時聖預言者ムハンマドが お金を分配していた時、一枚の硬貨が彼の手からすべり落ち、ころがってどこかへ行ってしまった。分配を終えてから彼はモスクへ行き、祈りの先導をした。祈りが終了してからも、神への思いを胸に、しばらくじっと座ったままでそこに居り、その後人々を側に寄せ、彼に質問させたり願いごとをさせたりするのが彼の習慣となっていた。ところがこの時には、祈りが終了した途端に彼は立ち上がり、家路を急いだ。なくした硬貨を捜し、見つけ出すと又引き返し、その硬貨を困っている者に与えた。そして 次のように説明した。その硬貨は彼がお金の分配をしている最中に手からすべり落ちてしまったのだが、彼はすっかりそのことを忘れてしまっていた。だが祈りの先導をしている時に突然そのことを思い出し、不安に駆られた。もし彼がその硬貨を見つけて出して、困っている人にそれを与えない内に死んでしまうようなことになれば、神の御前で責任を問われることになるだろうと思えたのだ。だからこそ聖預言者ムハンマドはその硬貨を見つけに、大急ぎでモスクを飛び出したのであった（Bukharī Kitāb ul-Kusūf）。

貧しい者、困っている者の利益を充分に保護したいという気持ちから、聖預言者ムハンマドは、彼の子孫は慈善の対象にならないということま

で定めた。ムスリム達が聖預言者ムハンマド自身への愛と献身から、そのうちに彼の子孫を彼等の慈善の中心的対象と考えるようになり、そのために、貧しい者や困っている者が得られる当然の分け前迄取りあげてしまうことになるのを、聖預言者ムハンマドは恐れたのである。或る時、施しとしてナツメヤシを持って来て差し出してくれる者があった。その時 ほんの2才半だった聖預言者ムハンマドの孫 Imām Hassan が聖預言者ムハンマドの側に居合わせていた。その子はナツメヤシを一つ取り上げて、自分の口の中へ放り込んだ。聖預言者ムハンマドはすぐにその子の口に指を突っ込み、ナツメヤシを吐き出させ、そして言った。「私達にはこのナツメヤシに対する権利はないのだ。これは神が創り給うた者達の中の 貧しい者達のものである」(Bukharī, Kitāb, ul-Kusūf)。

奴隷への処遇

聖預言者ムハンマドは、奴隷を所有する者達が奴隷に対して親切でよい待遇を与えるように、常に論していた。もし奴隷の所有者が奴隷を殴ったり虐待した場合には、彼に出来る唯一の償いは奴隷を解放してやることであると聖預言者ムハンマドは定めていた (Muslim, Kitāb ul-Imān)。彼はあらゆる口実を利用して奴隷を自由解放してやる方法を考え、解放を促した。彼はこのように語った。「もし奴隷の主人がその奴隷を自由にしてやれば、そのお返しとしてその奴隷の体の隅々に対応する彼自身の体の隅々迄が、神によって地獄の苦しみから救われることになるであろう」。又彼は次の様なことも定めている。奴隷には彼が簡単になしとげられる程度の仕事をさせなさい。一度仕事を頼んだら、その主人は彼が屈辱や不名誉を感じることはないように、その仕事上において手助けをしてやりなさい (Muslim)。もし主人が奴隷を伴って旅に出る場合には、二人共乗るか、一人ずつ交代で乗るかして、乗物を共用するのが主人の義務であった。Abū Huraira はムスリムに改宗後、ずっと

聖預言者ムハンマドの側で暮らしており、聖預言者ムハンマドが奴隷の待遇に関して何度も勧告するのを聞いていた。その彼が言った。「私の生涯をその手に委ねた神に誓って申し上げます。聖戦に加わり、そしてメッカ巡礼を行なう機会がないのならば、更に私の老いたる母に仕える機会がないのならば、私は寧ろ奴隷として死にたい。何故なら、聖預言者が常に、奴隷に対して親切でよい待遇を与えよと主張していらっしゃるからです」(Muslim)。Ma'rūr bin Suwaid も次のように語っている。「Abū Dharr Ghifārī (聖預言者ムハンマドの弟子) が、奴隷と全く同じような服を着ているのを見ました。その訳を尋ねますと、彼はこのように答えたのです。『聖預言者の生前に私は或る男を、その母親が奴隷であったということで嘲りました。これを耳にされた聖預言者が私をお叱りになり、こうおっしゃったのです。『あなたはまだ、イスラム以前の考えを持っているようだ。奴隷とは何か。奴隷とはあなたの兄弟であり、あなたの力の源である。神がその英知により、一時的にあなたにその奴隷に対する支配力をお与えになっただけなのだ。このように兄弟に対する支配力を持つ者は、奴隷に自分用と同じ物を食べさせなければいけないし、自分用と同じ衣服を奴隷に着せてやらなければならない。そして奴隷にその能力以上の仕事を与えてはいけないし、奴隷に仕事を命じたならば主人自ら彼を手伝ってやらなければならない』。別の機会に、聖預言者ムハンマド自身がこのように語っている。「あなたの召使いがあなたのために料理をし、あなたの前にその料理を並べてくれたならば、あなたは彼に同席をして、その料理を相伴するように勧めるべきである。彼は料理するという仕事をしたのだから、充分な権利が彼にはあるからである」(Muslim)。

女達への処遇

聖預言者ムハンマドは社会における女性の立場改善、及び女性の威厳

ある地位と公平且つ正当な待遇の確保に非常に熱心であった。イスラムは女性の相続権を認めた最初の宗教であった。聖クルアーンは息子同様、娘も両親の遺産に対する相続人として定めている。兄弟の死に際し、兄或いは弟だけではなく、姉或いは妹もその相続人になるのである。これ程明確且つ厳格に女性の相続権及び財産の所有権を確立させている宗教は、イスラム以前にはなかった。イスラムにおいては、女性は自分の財産の絶対的所有者であり、その夫といえども夫婦関係を盾にとって、その財産に口出しすることは許されない。女性は自分の財産を、自分の思うままに、自由に出来る。

聖預言者ムハンマドは 女性に思いやりのある待遇を与えることに非常に気を配ったが、今まで女性を配偶者とか仲間と見なしたことがなかった彼の周りの者達は、聖預言者ムハンマドが確立し、維持しようとしているレベルに、自分達自身を中々合わせられないでいた。Umar が語っている。「私の妻は時々私の仕事に干渉して、助言をしようとするので、アラブ人は今まで自分の仕事に女の口出しを許したことはないと言って、彼女を叱りつけてやりました。すると彼女は、『それはもう昔のことです。聖預言者は御自分の仕事に奥様方の助言を許しておられます。奥様方を止めたりはなさいません。あなたは何故、聖預言者を見習おうとはしないのですか』と反論をするのです。私の答えはいつもこうでした。『アーイシャについては、聖預言者は彼女を非常にお気に召していらっしやるのだ。だがおまえの娘 Hafsa がそんなことをしようものなら、彼女はいつか自分の出しゃばり行為の成り行きに辛い思いをすることになるぞ』。その後、聖預言者が何かで立腹され、奥様方を一時期遠ざけられる決心をされたことがありました。私はこの噂を耳にして、妻に『私の恐れていたことが起こってしまった』と言いました。それから私が娘の Hafsa の家へ行きますと、娘が泣いておりました。一体どうしたのか、聖預言者が娘を離縁されたのかと私は娘に尋ねました。『離縁かどうかはわかりませんが、聖預言者がしばらく私達から遠ざかる決

心をされたのです』と娘は答えました。私は言いました。『アーイシャと同じように聖預言者に勝手気儘な振舞いをしてはならないとおまえに何度も言いかせておいたではないか。聖預言者は殊の外、アーイシャをお氣に召しておられるのだ。それなのにおまえは、私が恐れていたことを自ら招いてしまったようだ』。次に聖預言者をお訪ねすると、硬いマットの上に横たわっておられました。彼はその時シャツを身につけておられませんでしたから、体にマットの跡がついていました。私は彼の側に座り、申し上げました。『アッラーの使徒よ、ローマ皇帝もイラン皇帝も神のお恵みに値しないというのに、非常に安樂な生活を送っています。それなのに あなたはアッラーの使徒であられるというのに、このように不便な暮らしを営んでいらっしゃる』。聖預言者はこのように答えられました。『そうではない。アッラーの使徒というものは、安樂な暮らしをするものではない。そのような暮らしが似つかわしいのは世俗的な君主だけである』。それで私は聖預言者に私と妻と娘の間に起こったことをすべてお話し致しました。私の話を聞くと聖預言者は笑いながら、このようにおっしゃいました。『私が妻達を離縁したというのは間違っている。私はただしばらくの間彼女達と離れた方がよいと思っただけなのだ』(Bukharī. Kitāb ul-Nikāh)。

聖預言者ムハンマドは常に女性の感情に気を配っていた。それを証明するような出来事があった。彼が祈りの先導をしていると子供の泣き声が聞こえて来たので、礼拝を短めに切り上げた。その後、この時のことを彼は次のように説明している。子供の泣き声が聞こえた時にその子の母親はその泣き声に心を痛めているだろうと思ったので、母親が子供の所へ行って面倒をみてやれるように早めに礼拝を切り上げたのであった。

聖預言者ムハンマドが一行の中に女達を伴って旅をする際には、彼はいつもその一隊がゆっくりと休み休み進むように指示を出していた。男達がもっと前進を急かすような時には、彼は「ガラスに気を配りなさい。

こわれやすい物に気をつけなければ」と言っていた。即ち、その一行は女連れであり、もし 駱駝や馬をかけ足させれば、ガタガタゆれるので、女達が辛い思いをするであろうという意味であった (Bukharī, Kitāb ul-Adab)。或る戦いの最中に騎馬兵の中で混乱が起こり、動物達の統率がとれなくなったことがあった。聖預言者ムハンマドが馬から落ち、女達の中にも乗り物からころげ落ちた者がいた。駱駝に乗って、聖預言者ムハンマドのすぐ後から続いていた一人の仲間がすぐ飛び降りて、泣きながら彼の所へ駆け寄った。「アッラーの使徒よ、私があなたの身代わりになれるものなら」。聖預言者ムハンマドの片足はまだ鎧 (あぶみ) にひっかかっていた。聖預言者ムハンマドは急いで足をはずすと、その仲間に言った。「私のことはいいから、女達を助けてやりなさい」。死を迎える直前、聖預言者ムハンマドはムスリム達への説話の中で、女達に常にやさしく思いやりを持って接してやらなければならないという指示を強く伝えた。もし娘がいるのならばふさわしい教育を与えるようにし、骨身を惜しまず養育すれば、神がその者を地獄の苦しみから救って下さるであろうということも聖預言者ムハンマドは繰り返し教えていた (Tirmidhī)。

アラブ人がほんの些細な過ちを理由に、女を折檻するのはよくあることであった。聖預言者ムハンマドは 女は男と平等に作られた神の創造物であり、男の奴隷ではないのだから、折檻を加えてはいけないと説いた。女がこのことを知ると、それが行き過ぎになり、あらゆる面で男と対立し始めた。その結果、家庭の平穏が乱されることが多くなった。Umar がこの点で聖預言者ムハンマドに苦情を訴えたことがあった。女というものは、時には折檻をしないと手に負えなくなり、抑えられなくなってしまうと言うのであった。女の扱い方に関しては イスラムの教えとして詳しく啓示されてはいなかったので、聖預言者ムハンマドは、もし女がひどく逸脱した罪を犯した場合には折檻してもよいとだけ言った。こうなると男の行為は多くの場合、昔ながらのアラブの習慣へと戻っ

ていくようになった。今度は女の方が不平を言う番になり、女は口々に聖預言者ムハンマドの妻達の前に悲しみを並べた。それに対して聖預言者ムハンマドは男達を諫め、思いやりのない態度で女を扱う者は神の恵みが得られないであろうと説いた。その後、女の権利が確立され、初めて女は独自の権利を持つ自由な一個人として扱われるようになったのである (Abū Dāwūd, Kitāb ul-Nikāh)。

Mu'āwiya al-Qushairī は次のように語っている。「私は聖預言者に妻が私に何を望んでいるのかを尋ねました。するとこのように答えて下さいました。『食べ物に関しては神があなたにお与え下さっているものと同じ物を彼女にも食べさせてあげなさい。衣服に関しても神があなたにお与え下さったものと同じ物を彼女にも着せてあげなさい。そして彼女を折檻したり、虐待したり、家から追い出したりしてはならない』」。聖預言者ムハンマドの女の気持ちや感情に対し非常に細やかな心遣いをした。彼は長く旅に出る者には常に速やかに仕事を済ませ、出来る限り早く家に帰るよう人々に言い聞かせていた。その妻や子供達が必要以上に別れて暮らす辛さを感じなくてもすむようにという考えからであった。聖預言者ムハンマド自身も旅から帰る時には、常に日の暮れる前に帰宅した。旅の終りに夜が来てしまった場合には、メディナの外で野営をして夜を過ごし、翌朝メディナへ入るようにしていた。仲間達にも、旅から帰る時には予告もなしに突然帰宅してはならないと命じていた (Bukharī & Muslim)。このような指示をするのは、彼自身男女の関係は感情によって大きく支配されるものだという事実を念頭に描いていたからである。夫が留守だと、妻は自分の体や服装に気を使わないこともよくあるであろう。だから、もし夫が思いがけず帰宅するようなことがあれば、妻或いは夫の感情における繊細な面が害されるかもしれない。男が旅から戻る時には日中に、然も家族の一員に帰宅を知らせてから帰るようにしなさいという指示を与えることにより、聖預言者ムハンマドは、家族全員が適切な方法で、戻って来る家族の一員を迎える準備が出

来るということを示したのであった。

死者への態度

聖預言者ムハンマドは、人は誰でも自分の死後の個人的問題を統制できるように遺言状を書き記しておくべきであると強調した。そうすれば、その人の死後彼に関わりのある者達が不都合さを感じたとしても最小限で済むからである。

彼が定めた事柄の中に、死者の悪口を決して言ってはならないが、その人が持っていた美点に関しては、誇張して話すべきであるというものもあった。死んだ人の弱点や悪行を述べたところで、誰の得にもならないが、その美德を強調すれば、人々はその人のために祈るようになるからである（Bukhari）。聖預言者ムハンマドは又死者の借金は埋葬の前に返済されるべきであると主張した。聖預言者ムハンマド自身が死者の負債を肩代わりしてやるが多かったが、彼にその余裕がない場合には、死者の相続人や親族、或いは他の人々にその負債を清算してやるように説いた。そして、その死者の負債が清算されるまで、決して彼のために葬送の祈りを奉げようとはしなかった。

隣人への処遇

聖預言者ムハンマドは常に最高の心遣いと思いやりを込めて、隣人と接した。御使いガブリエルは隣人への思いやりを余りにも頻繁に強調していたので、聖預言者ムハンマド自身、隣人とは規定された相続人の中に含まれるものではないのかと時々思い始める程であったと聖預言者ムハンマドはよく語っていた。Abū Dharr の話によると、聖預言者ムハンマドは次のように彼に言った。「Abū Dharr、家族のためにスープを作ったならば、それにもう少しだけ水を加えなさい。そうすれば隣人にもそのスープを分けてやれるであろう」。この言葉は、他の物の

場合には隣人を招待しなくてもよいという意味ではない。アラブ人は大部分が漂浪の民であり、彼等にとっての御馳走はスープであった。だから聖預言者ムハンマドはこの料理をその典型的なものとして例えに使っただけであり、人は食べ物の味を大切にしすぎて隣人と分け合うという義務を忘れてはならないと教えていたのである。

Abū Huraira が次のように語っている。「ある時聖預言者が『神よ、彼が信心深い者ではないということの証人となり給え。神よ、彼が信心深い者ではないということの証人となり給え。神よ、彼が信心深い者ではないということの証人となり給え』と叫ばれました。仲間達が『アッラーの使徒よ、一体誰が信心深くないとおっしゃるのですか』と尋ねると、聖預言者はこのようにお答えになりました。『自らの手で隣人達を傷つけたり、虐待したりするような者のことである』。又或る時、女達に向かって聖預言者はこのように言われました。『もし料理をするにも 山羊の足一本しか見つからなかったとしても、隣人とそれを分け合わなければいけない』。聖預言者は人々に、もし隣人が自分達の壁に釘を打ちつけたり、別に何の害にもなりそうにない別の用途で釘をとりつけたりしたとしても、非難したりしないようにと言っておられました」。

Abū Huraira は更に続けて語っている。「聖預言者は、『神と最後の審判の日を信じる者ならば、隣人に不都合を生じさせるようなことはしない。神と最後の審判の日を信じる者ならば、客人に対して失礼に当たるようなことはしない。そして神と最後の審判の日を信じる者ならば、徳を表わす言葉のみを唱えるか、じっと黙って静かにしているはずである』とおっしゃいました」(Muslim)。

親族への処遇

結婚をすると自分達のために家を建て、親のことを無視するという過ちをほとんどの者が犯す。そのため聖預言者ムハンマドは、両親に仕え、

心遣いと思いやりをもって彼等と接することの大切さを特に強調した。Abū Huraira が次のように語っている。「或る男が聖預言者を訪れ、最も親切に世話をするに値する人間は誰か教えて欲しいと頼みました。聖預言者が『あなたの母親である』と答えられると、その男は『母親の次は誰ですか?』と尋ねました。聖預言者は『次も同じ母親である』と答えられました。その男が3度目に『母親の次に来るのは誰ですか?』と尋ねると、聖預言者は再び『やはり あなたの母親である』とおっしゃいました。4度目の同じ質問に対して、聖預言者はこのようにおっしゃいました。『彼女の次に来るのはあなたの父親である。その次に来るのはあなたの最も身近な親族であり、そしてより遠い親戚へと続く』」。聖預言者ムハンマド自身の両親も祖父母も、彼が幼い頃に他界した。しかし彼の妻達の中には親が健在な者もいたため、彼は常に深い思いやりと敬意を込めて、彼等の面倒を見た。聖預言者ムハンマドが凱旋將軍としてメッカの町へ入ったメッカ降伏の時、Abū Bakr が聖預言者ムハンマドに会わせようと自分の父親を連れて来た。彼は Abū Bakr に言った。「何故 わざわざ父上に御足労願ったのか。私の方から喜んで出向いて行ったものを」(Halbiyyah, vol.3, p. 99)。聖預言者ムハンマドがよく言っていた言葉に次のようなものがある。「両親が長生きしているにもかかわらず、楽園に入る資格をえられない者は不幸である」。即ち、両親への奉仕、特に彼等が年老いてからの奉仕は神の慈悲と賛美を受け易くなるので、年老いた両親に仕える機会を与えられた者は、最大限にその機会を利用して両親に尽くせば、正しい道を知ることが出来、神の慈悲が受けられるようになるという意味である。

一度、聖預言者ムハンマドに苦情を訴えて来た男がいた。その男の言いつ分によると、彼が親族に善意を示せば示す程、彼等からの敵意が強くなり、彼等に心遣いを示して接すれば接する程、彼等から迫害を受けることになり、彼等に愛情を示せば示す程、彼等から不快な顔をされることになるというものであった。聖預言者ムハンマドは答えた。「もしあ

あなたの言葉が真実ならば、あなたは本当に幸運な人だ。あなたは神の救いを受けられるようになるからである」(Muslim, Kitāb ul-Birr wa'l Silah)。或る時、聖預言者ムハンマドが人々に施しや慈善を呼びかけていると、彼の仲間の一人である Abū Talha Ansārī が彼の所へやって来て、果樹園を慈善のために使って欲しいと申し出た。聖預言者ムハンマドは大いに喜び、歓喜の声を上げた。「何と素晴らしい慈善だろう。何と素晴らしい慈善だろう。何と素晴らしい慈善だろう」。そして付け加えた。「この果樹園を貧しい者達のために使って欲しいということだから、今あなたにこの果樹園をあなた自身の貧しい親族達に分け与えてやって欲しいのだが」(Bukharī, Kitāb ul-Tafsīr)。又別の場合には、或る男が聖預言者ムハンマドを訪れて言った。「アッラーの使徒よ、私にはいつでもヒジュラ(移住)の誓いをする覚悟が来ています。喜んで聖戦に参加する誓いをたてます。神の喜びをどうしても勝ち得たいのです」。聖預言者ムハンマドが彼の両親の内どちらか一方でも健在かどうか尋ねると、両親共に健在であるという答えが返って来た。聖預言者ムハンマドは更に尋ねた。「あなたは本当に神の喜びを勝ち得たいと思っているのか?」その男がはっきり肯定するのを聞いてから、聖預言者ムハンマドは言った。「それならば両親の所へ戻って、彼等に仕えなさい。彼等に心から尽くしなさい」。聖預言者ムハンマドはムスリムでない親族でも、ムスリムの親族と同様にやさしく思いやりのある待遇を平等に受ける資格があると指摘した。Abū Bakr の妻の一人はムスリムではなかった。彼女が娘の Asmā を訪ねると、Asmā は母親に対して尽くすべきかどうか、そして彼女に贈り物をするべきかどうか、聖預言者ムハンマドに尋ねた。その問いに対して聖預言者ムハンマドはこのように答えた。「勿論である。彼女はあなたの母親なのだから」(Bukharī, Kitāb ul-Adab)。

聖預言者ムハンマドは身近な親族だけでなく、遠い親戚にも、又彼等と繋がるすべての人々に対して深い思いやりを込めて接した。動物を

犠牲にした場合には必ずその肉の一部を Khadijah（彼の亡くなった妻）の友人達に送り、彼の妻達にこのような場合には、決してその人達のことを見落としてはならないと命じていた。Khadijah の死後何年も経た頃、聖預言者ムハンマドが仲間達数人と共に座っていると、Khadijah の妹 Halah が彼のところを訪れ、中へ入る許可を求めた。Halah の声は聖預言者ムハンマドの耳には正に Khadijah の声のように響いた。彼はその声を聞くと、「おお主よ、Halah です。Khadijah の妹です」といった。愛しているが、非常に好意を感じている者につながるすべての人に対して、人は好意を抱き、思いやりを持つようになる。真実の愛は常にこのように働くものなのである。

Anas bin Malik が次のような話を伝えている。旅の間に Anas は偶然 Jarir bin Abdullah と連れになり、Jarir が Anas の世話を一生懸命しているのに気がついた。その様子は、まるで召使いが御主人に仕えるかのようであった。Jarir bin Abdullah は Anas よりも年上だったので、Anas は恥ずかしくなり自分のためにそれ程骨を折ることはないと言 Jarir に抗議した。Jarir はこう答えた。「Ansar の人々が何如に献身的に聖預言者に尽くしているかを見て来ました。聖預言者に向けられた彼等の献身と愛に感銘を受け、私は心の中で意を決しました。もし私が Ansar の誰かと連れになるようなことがあったら、召使いのようにその人に仕えようと決心したのです。だから私は自分自身の決意を実行に移しているだけなのだから、私を思い留まらせようなどとする必要はないのです」(Muslim より)。この出来事から、一人の人間が別の人間に対して真実の愛を抱くと、その愛情は、自分の愛を傾けている人に対して誠心誠意尽くしている人達に迄広がっていくものだということがよくわかる。同様に、両親を心から大切にしている人々は常に、愛の絆、或いは姻戚関係を通して関わってくる人々すべてに対して、敬意や思いやりを持つのである。ある時、聖預言者ムハンマドが、父親の友人を大切にすることが人間にとって最高の徳であると強調したことがあった。その話を聞

いていた人々の中に Abdullah bin Umar が居た。何年も後、巡礼に出かけた時、Umar は一人のベドウィンに出会った。彼は自分自身の乗っていた動物をそのベドウィンに譲り、又ターバンをも彼に与えてしまった。Umar の連れの一人在、彼に、ベドウィンはほんのわずかなもので充分満足するというのに、Umar は寛大すぎだと言った。Abdullah bin Umar は言った。「この男の父親は私の父の友人なのだ。それに父親の友人を大切にすることが人間にとって最高の徳であると聖預言者がおっしゃるのを聞いたことがあるのだ」。

良き友を持って

聖預言者ムハンマドは高潔な人々と好んで付き合った。もし仲間の誰かに弱さを見いだしたりした場合には、穏やかに且つこっそりと本人を諭した。Abū Musa Ash`ari がこのような話をした。「聖預言者は良き友、高潔な仲間からは得る物があるが、悪友、邪悪な仲間からは害を被る恐れがあると、説明して下さいました。そしてこのようにおっしゃったのです。『高潔な人々と付き合う者は、麝香を身につけているようなものである。その香りを共に分かち合えば、得るものがある。その香りを売れば利益が得られる。それにただ持っているだけでもその香りが楽しめるからである。邪悪な人々と付き合う者は、かまどに空気を吹き込んでいるようなものである。得られるものと言え、服に飛んで来る火花くらいで、服を燃やしてしまうであろう。或いは、炭から発散される煙を吸って、気持ちが悪くなるのが関の山である』人間の性格は付き合っている人の影響を受けるものだから、良い人々と共に時を過ごすよう、常に心掛けていなければならないと聖預言者ムハンマドはよくおっしゃっていた」(Bukhari & Muslim)。

人々の信仰を守れ

聖預言者は、起こり得る誤解に対して常に防衛策を考えていた。彼の妻 Safiyyah が彼に会いにモスクへやって来たことがあった。彼女が帰宅しようと思った頃にはすでに暗くなっていたので、聖預言者ムハンマドは彼女を家まで送ることにした。道すがら、二人の男とすれ違った時、彼等に自分の連れに関して余計な誤解をさせまいと考えたムハンマドは、妻の顔からベールを上げて、「ほら、Saffiyyah だ。私の妻である」と言った。二人の男は抗議した。「アッラーの使徒よ、どうして私達があなたの事に関して勘違いするなどと思われたのですか？」聖預言者ムハンマドは答えた。「悪魔(邪悪な考えのこと)はよく人間の血の中をかけ巡るものなのだ。あなた方の信仰がそのようなものに影響されるのではないかと恐れただけである」(Bukharī, Abwab ul-I'tikaf)。

他人の誤ちを見逃せ

聖預言者ムハンマドは他人の誤ちや欠点を公表するようなことは決してしなかったし、自分自身の誤ちを人に吹聴したりしてはいけないと人々を諭した。「もし人が他人の誤ちをかばってあげれば、神が最後の審判の日にその人の誤ちをかばって下さるであろう」と彼はよく言っていた。更に、「自分の悪事を宣言して止めない者達は別として、私を信じてついて来る者はすべて(心からくい改め改善すれば)自分の誤ちがもたらす結果を免れることができるであろう」と加え、更にこの内容を次のような言葉で説明した。「人は夜に罪を犯し、神がその罪をかばって下さる。翌朝になりその人は友人に会って、彼等の前で『昨夜こういうことをした。昨夜ああいうことをした』と言って自慢する。こうすることによりその人自身で、神がかばって下さったことを暴露してしまうのだ」(Bukharī & Muslim)。

罪を告白すれば罪の改善によって助けられる、と愚かにも考える人間がいる。それは実際、厚かましさを助長するにすぎない。罪は悪であり、罪の世界に足を踏み入れ、恥と自責の念にとりつかれる者には、後悔を通して純粹且つ正義の道にたち戻るチャンスがある。この人間の場合は正に次のような人間の場合と似ている。即ち、悪にそそのかされてしまったが、正義の声に追い求められている人間にチャンスが与えられ、悪が打ち破られその罪人は正義にひき戻されたといった場合である。しかし自分の罪を吹聴し、その罪に誇りを持っている者はあらゆる善悪の見分けが出来なくなり、悔い改めることさえ出来なくなってしまうのである。或る時一人の男が聖預言者ムハンマドを訪れ、「私は姦淫の罪を犯しました」と言った。(姦淫は、確かな証拠によって実証された場合には、イスラム法の下では処罰に値する罪である。) その男の告白を聞きながら、聖預言者ムハンマドは彼から顔をそむけ、何か別のことをし始めた。このような場合にふさわしいのは、人前で告白することではなく自ら悔い改めることであると聖預言者ムハンマドは示したかったのである。だがその男にはその意味がわからず、聖預言者ムハンマドには自分の言うことが聞こえなかったと思い込み、進み出て聖預言者ムハンマドの面前に立ち、彼に向かって告白の言葉を繰り返した。聖預言者ムハンマドは再び彼から目をそらしたが、その男は又進み出て聖預言者ムハンマドの面前に立ち告白を繰り返した。その男が同じことを4度繰り返した時、聖預言者ムハンマドはおっしゃった。「神がこの男に関して御考えをお示しになる迄は、この男に自らの罪を公表しないで欲しいと思っていた。だが彼が、4度も告白を繰り返したからには、私としても行動を起こさざるを得ない」(Tirmidhi)。そして聖預言者ムハンマドは言葉を続けた。「この男は自ら告白をしているが、彼が告白をしている当の女性に訴えられているわけではない。その女性にも尋ねてみる必要があるのではないか。もし彼女が自ら罪を犯したのではないと主張するならば、彼女を苦しめてはならず、その男だけを告白に基いて罰するべきであるし、も

し彼女自身も告白をするようならば、彼女をも罰しなければならない」。これが聖預言者ムハンマドの訴訟法であったが、聖クルアーンではまだ啓示されていない事柄において、モーゼの立法に従っていた。モーゼ五書では、姦淫者は投石による死刑と定められており、聖預言者ムハンマドはそれに従ってこの男に死刑を宣告した。刑執行の際にこの男は逃亡しようとしたが人々に追いかけられ、死刑が執行されてしまった。聖預言者ムハンマドはこの事件を耳にすると、不満の意を表した。その男は自分の告白に従って刑を宣言されたのであると彼は言った。その男が逃げ出そうとしたのは、自分の告白を撤回するという意味だったのだから、告白に基づいてのみ科せられた刑罰には、処せられなくてもよかったのである。

聖預言者ムハンマドは、モーゼ五書の掟が適用されるのは、行き過ぎの行為があった時のみであると定めていた。戦いの最中にムスリムの一団が一人のムスリムではない男と遭遇したことがあった。その男は、人気のない所で人を待ち伏せし、ムスリムの人間がたった一人でいるのを見つけると、必ず襲いかかり、殺した。この時、ムスリムの一団にいた Usama bin Zaid がこの男を追いかけて、追いつき、捕らえると、刀を抜いて殺そうとした。逃れるすべはないと悟ったその男は、ムスリムの信仰の告白の最初の部分を繰り返した。即ち「アッラー以外に崇高に値するものはなし」という言葉であり彼がイスラムを受け入れたことを示すものであった。Usama はこれを無視し、彼を殺してしまった。この戦闘に関する他の出来事と共にこの話を聖預言者ムハンマドに伝えたと、彼は Usama を呼び出し、問いただした。この事件の成り行きを確認してから、聖預言者ムハンマドは言った。「その男の信仰告白が彼にとって有利な証拠となった場合、最後の審判の日に、あなたは一体どういうことになるのか？」 Usama は答えて言った。「アッラーの使徒よ、あの男はムスリムを何人も殺したのです。それに、彼が自らムスリムと言ったのは、ただ単に報復を逃れるためのたくらみにすぎなかったのです」。

だが聖預言者ムハンマドは何度も同じ言葉を繰り返すだけであった。「Usama、その男の信仰の告白が、最後の審判の日にあなたにとって不利な証拠になった場合、あなたは一体どういうことになるのか？」この言葉は、その男の死については Usama に責任があると神が判断されるであろうという意味であった。その男はムスリム達を殺すという罪を犯したが、彼が告白をしたということは、彼が自分の誤ちを悔い改めたことになるからである。Usama は、その男が信仰の告白をしたのは死を恐れたからであって、悔い改めをしたということではないと抗議した。そのため聖預言者ムハンマドは言った。「あなたは、彼が真実を告げているのかどうかを確かめるために彼の心の奥底をのぞいたのか？」そして、又同じ言葉を繰り返した。「彼の信仰の告白があなたにとって不利な証拠として述べられた場合、最後の審判の日はどう答えるつもりなのか？」Usama は答えている。「聖預言者がこの言葉を何度もおっしゃるのを聞いていて、私はその瞬間にイスラムに改宗していたら、そして、私が責任を問われているこの罪を犯していなかったら、よかったのと思いました」(Muslim, Kitāb ul-Īmān)。

聖預言者ムハンマドはいつでも人々の誤ちや罪を喜んで許した。彼の妻アーイシャに対する中傷事件に関わっていた者達の一人は、Abū bakr(アーイシャの父)からの施しに頼って生活をしていた。アーイシャを傷つける主張が偽りであるとはっきり立証された時、Abū Bakr はその援助を止めただけであった。それによって、Abū Bakr が節度のある慎重な人間であったということが証明された。普通の人間ならば、娘に恥辱をあたえるという罪を犯した者には行きすぎとなる程に訴訟を起こしていたであろう。Abū Bakr の行為を知った聖預言者ムハンマドは彼に話しかけ、その男は間違いを犯したけれども、その不正行為ゆえにその男から生計の手段を奪ってしまうのは、Abū Bakr ほどの人間にはふさわしくないと指摘した。それに従い、Abū Bakr はその男に対する援助を再開した (Bukharī, Kitāb al-Tafsir)。

逆境における忍耐

聖預言者ムハンマドは次のようによく言っていた。「ムスリムにとって人生は喜びに満ち、真の信仰者だけがそれを味わえる。何故なら、もし彼が成功すれば、彼はその成功を神に感謝し、神からは、より一層与えられることになるからである。一方、もし彼が苦痛や厳しい試練を味わう時には、彼は忍耐を持って堪え忍び、神の恵みを受けるに値する人間へと更に成長するからである」。聖預言者ムハンマドの死期が近づき、極限状態においてうめきを発するようになると、彼の娘 Fatimah は、このような状態にある彼を見るのは堪えられないと叫んだ。それに対して聖預言者ムハンマドは言った。「堪えるのだ。あなたの父親はこの日を境にもう苦しまなくてもよくなるであろう」。これは即ち、聖預言者ムハンマドの苦しみはすべてこの世の中だけに限られており、彼が人生から解放され、彼自身の創造主がおられる世界へ入った瞬間にもう何も彼を苦しめないであろうという意味である。伝染病が猛威を奮っていた頃、聖預言者ムハンマドは人々が汚染の広がった町から別の町へ移り住むことを許さなかった。そのようなことをすれば伝染病の流行地域を拡大することになってしまうからである。伝染病が流行する時に、もし人が自分自身の町に留まり、まだ感染していない地域に汚染を広げるようなことを控え、そのために死んでしまうようなことがあれば、その人は殉教者とみなされるであろうと聖預言者ムハンマドはよく言っていた (Bukharī Kitāb ul-Tibb)。

相互協力

聖預言者ムハンマドの教えの中に、イスラムの最高の資質の一つとして、人は自分に関係ない事柄に干渉してはならず、他人の問題で人を批判したり、口をはさんだりしてはならないということがある。この主義

が一般的に受け入れられ、実施されれば、世の中の平和や秩序を確立するのに大いに役立つはずである。我々が抱えている問題の大部分は大多数の人々が不当な干渉をして、困っている人々に当然差し延べるべき協力を渋るために起こるのである。聖預言者ムハンマドは相互協力の重要性を強調した。もし誰かが罰金としてある金額を要求され、その金額が支払えない場合、彼の隣人か、同市民、或いは同族の者が寄付を募って必要額を集めるという規則が聖預言者ムハンマドの手により定められた。人々は時々聖預言者ムハンマドの近くへやって来て住居を構え、様々な方法でイスラムの奉仕活動に時間を裂いて貢献した。聖預言者ムハンマドは常に適度な生活必需品を自分でまかなう責任を負うよう親族に話していた。Anasの話によると、聖預言者ムハンマドの生存中に、二人の兄弟がイスラムを受け入れた。一人は聖預言者ムハンマドと共に暮らし、もう一人は彼自身の通常の仕事を続けていた。後に、後者のほうが聖預言者ムハンマドに、もう一人の兄弟は怠惰に時を過ごしていると言って不満を述べた。聖預言者ムハンマドは次のように語った。「神はあなたの兄弟故に、あなたも養って下さっている。だから、彼を養ってやり、彼に自由に信仰に尽くせるようにしてあげるのがあなたにはふさわしい行為なのである」(Tirmidhi)。

旅の途中、聖預言者ムハンマドの一行が野営地に到着すると、仲間達はすぐに、野宿に備えて、各自それぞれ分担した仕事についた。聖預言者ムハンマドは言った。「あなたがたは私には何の仕事も割り当ててくれない。私は料理用に燃料を集めに行って来よう」。仲間達は抗議した。「アッラーの使徒よ、私達全員がここにいて必要なことはすべて致しますのに、どうしてあなたがそのように自ら働かれる必要がありますでしょうか」。聖預言者ムハンマドは答えた。「いいえ、それは違う。すべきことは皆と分かち合うのが私の勤めです」。そして彼は料理用のたき木を森から集めてきた (Zurqāni vol 4 p.306)。

正直さ

語り草にもなっているように、聖預言者ムハンマドは彼自身の正直さの基準を定め、非常に厳しく守っていたため、彼は、「信頼できる人」とか「真実の人」として知られていた。彼は、自分が遵守している基準と同じ位の正直さの基準をムスリム達にも取り入れて欲しいと切望していた。正直さは、あらゆる徳、善、そして正しい行いの基盤となると考えていたのである。彼は、神から正直であると評価される程、確固として誠実さを通す人間が本当の正直な人間であると教えを説いていた。或る時、一人の捕虜が聖預言者ムハンマドの前に連れて来られた。ムスリムを殺すという罪を犯した者であった。その場に居あわせた Umar は、その男の罪は死刑の宣告を受けるに十分に値すると信じていたので、聖預言者ムハンマドが今にもその男を死刑に処すべしと言うかと思い、何度も聖預言者ムハンマドの顔を見た。聖預言者ムハンマドがその男を立ち去らせてしまうと、Umar は、その男の罪にふさわしい罰は死刑しかないのだから、彼を死刑にするべきだったのにと訴えた。「もしそう思ったならば、何故あなたは彼を殺さなかったのか」と聖預言者ムハンマドが尋ねると、Umar は次のように答えた。「アッラーの使徒よ、もしあなたがまばたきでもして合図を送って下さったならば、私はすぐにもそうしたでしょう」。聖預言者ムハンマドは答えた。「預言者というものは、あいまいな態度はとらないものだ。口でその男に向かって好意的なことを語っている一方で、目で彼に死刑の宣告をするなどということがどうして私にできただろう」(Hishām, vol.2, p.217)。

一人の男が聖預言者ムハンマドを尋ねて来て、このようなことを言ったことがあった。「アッラーの使徒よ、私には、嘘とアルコール依存と姦淫の三つの悪がつきまとっています。何とかやめようと最善を尽くしたのですが、今だにうまくいってません。どうしたらよいのでしょうか

か？」聖預言者ムハンマドは答えた。「もしあなたが私にその三つの内の一つをやめると固く誓えば、他の二つもきっとやめられるであろう」。その男は約束をしたが、三つの内のどれをやめたらいいのか教えて欲しいと聖預言者ムハンマドに頼んだ。聖預言者ムハンマドは、「嘘をつくのをやめなさい」と言った。しばらくしてからその男が聖預言者ムハンマドの所へ戻って来て、彼の忠告に従ったところ、今では三つの悪も、すべてをやめることが出来たと伝えた。聖預言者ムハンマドがその男に苦闘の状況を詳しく説明するように求めると、彼はこのように語った。「或る日酒が飲みたくなって飲もうとしたところ、聖預言者との約束を思い出したのです。そしてもし友人の誰かに酒を飲んだのかどうか尋ねられたら、嘘は言えないので、それを認めなければならなくなると気付いたのです。そうなれば、友人の間で私の悪評がたち、彼等は今後私を避けるようになってしまうでしょう。このように考えたらもう少し後の機会まで、飲酒を我慢しようという気持ちになり、その場は誘惑に堪えることができました。同じように姦淫を犯したい気になった時、心の中で葛藤が起きました。悪にのめり込んでしまえば、友人に尋ねられた時に嘘をついて聖預言者との約束を破ることになるか、或いは私の罪を認めなければならないことになり、どちらにしても友人達からの愛を失うことになってしまうからです。このようにして、聖預言者との約束を守ろうという決意と、飲酒や姦淫に走りたいという欲望との間で苦心し続けました。そうこうする内に時が経ち、このような悪を犯したいという気持ちがなくなり始めました。そして、嘘をつくまいという決意のおかげでその二つの悪からも解放されることが出来たのです」。

他人の詮索

聖預言者ムハンマドは常に人々に他人の詮索をしないように、又お互いを好意的に考えるように諭していた。Abū Huraira が次のように語っ

ている。「聖預言者がおっしゃいました。『他人を疑うのはやめなさい。これは最大の虚偽ともいえることだからである。又、お互いに軽蔑の気持ちからのしり合ったり、お互いを羨んだりしてもいけないし、お互いに嫌な感情を抱き合ってもいけない。各自自分自身を神の僕と考え、神が命じられるように他人に兄弟として接しなさい』そして又、このようにおっしゃいました。『覚えておきなさい、ムスリムは誰もがお互い兄弟である。従って、他人の権利を侵害したり、困っている者を見捨てたり、中身のない人間だとか、学識や他のものが不足しているという理由で他人を軽蔑したりしてはいけない。誠実さは心の中からあふれて来るものであり、自分の兄弟を軽蔑しただけでも、自分自身を不浄にしてしまうのである。ムスリムならば誰でも、他のムスリムの命、尊敬、財産を神聖で侵すべからざるものと考えなければならない。神はあなたがたの体や顔つきや外面的な行動などを見てはおられない。神が見ておられるのは、あなたがたの心の中なのである』」(Muslim, Kitāb ul-Birr wa'l Silah)。

公然且つ正直な取引き

聖預言者は或る時、市場を通り抜けようとして、せりにかけられているとうもろこしの山を見つけた。その山の中に手を突っ込んでみると、とうもろこしの外側の層は乾いているのに、中側の層は湿っていた。彼はその所有者に理由を尋ねた。突然、夕立が降って来たために一部が濡れてしまったのだとその男は説明した。それならば、濡れたとうもろこしをそのまま外側の層に置いたままにし、買ってくれそうな人にその実際の状態を判断出来るようにしておくべきだったのではないかと聖預言者ムハンマドは言った。そして、彼はこのように諭した。「他人と不正な取引きをする者は、社会の役に立つ人間にはなれない」(Muslim)。彼は貿易や商売というものは疑いを一切取り払わなければならないと主

張していた。彼は、買い手は購入しようと思う商品や品物を常によく調べるように諭し、取引交渉が別の人と進行しているにもかかわらず、他の人にも取引交渉を進めるようなことは一切禁止した。聖預言者ムハンマドは更に、市場での値上がりに対処して商品を買いだめすることを禁じ、市場の供給は常に一定でなければならないと主張した。

悲観主義

聖預言者ムハンマドは悲観主義を激しく非難した。人々の中に悲観主義を広める罪を犯すような者は、人々が失墜した場合にその責任を負わなければならない、と彼は言った。何故ならば、悲観的な考えには人々を落胆させ、進歩を阻む傾向があるからであった（Muslim, Part II, vol.2）。

聖預言者ムハンマドの人々に対する警告は、一方では思いあがりや自惚れを戒め、他方では悲観主義を戒めるものであった。両極端ではなく、中道を辿るように諭したのである。ムスリムは、神が自分たちの努力には最良の結果でもって祝福して下さると信じ、勤勉に働かなければならない。各自前向きに努力し、社会の福祉及び進歩促進を目指さなければならない。しかし何人も思い上がったり、自惚れてはならない。

動物虐待

聖預言者ムハンマドは人々に動物を虐待しないよう警告をし、優しく動物達を扱うように言った。説話の際には、飼猫を餓死させた罪で神に罰せられたユダヤ人の女を例に取りあげた。聖預言者ムハンマドがよく語っていた別の例として、深い井戸の側で、犬が喉の渴きを訴えているのを見つけた女の話もあった。彼女は履き物を片方脱いで、それを井戸の中に降ろし、こうして汲み上げた水をその渴いた犬に飲ませてやった。その善行により、彼女はそれまでに犯したあらゆる罪に対する神の許し

を得たのである。Abdullah bin Mas'ūd が次のように語っている。「私達が聖預言者のお伴をして旅をしていた折、二羽の小鳩が巣の中にいるのを見付け、その二羽を捕まえました。二羽共、まだとても幼い小鳩でした。その母鳩が巣へ戻り、ひな鳥達がいなのを見ると、あたりをぐるぐると狂ったように飛びまわり始めました。聖預言者がそこに到着され、その鳩の様子を見て、『あなたがたの中にひな鳥達を捕まえた者がいるのならば、すぐに放してやり、母鳩を安心させてやりなさい』とおっしゃいました」(Abū Dāwūd)。Abdullah bin Mas'ūd は、又別の話も語っている。ある時、彼等は蟻の塔を見つけ、わらをおいて、火をつけた。それで聖預言者ムハンマドに叱られたのであった。又別の時に、聖預言者ムハンマドは、ロバが顔に焼印を押されているところを見つけた。その訳を尋ねると、そのローマ人は優良種の動物を明らかにするのに、この方法に頼っているのだと説明した。顔は体の中でも非常に敏感な箇所なので、動物といえども顔に焼き印を押すべきではない。もしどうしてもしなければならぬのであれば、焼き印は臀部にするべきである、と聖預言者ムハンマドは言った (Abū Dāwūd & Tirmidhī)。その時以後、ムスリム達は動物の焼き印を臀部に押すようになり、今では、このムスリムの慣習に従って、ヨーロッパ人も同じようにしている。

宗教的事柄における寛容さ

聖預言者ムハンマドは宗教的事柄における寛容さの必要性を強調するに留まらず、高い基準を定めていた。Najrān のあるキリスト教部族の代表団がメディナへ聖預言者ムハンマドを訪れ、宗教問題について意見の交換を行ったことがあった。教会の持つ威厳に関する問題も含まれていた。話し合いはモスクで行われ、延々七時間以上にもわたった。その途中で、代表団の指導者が、一時モスクを出る許可を求めた。どこか適当な場所で彼等の宗教上の儀式を行ないたかったのである。聖預言者ム

ハンマドは、モスクはそれ自体神への崇拜を行なう神聖な場所なので、彼等にモスクを出て行く必要はないと言った。それで彼等はモスクの中で自分たちの宗教上の儀式をとり行なうことが出来たのであった。

勇敢さ

聖預言者ムハンマドが何如に度胸があり勇敢であったかは、彼の伝記の箇所ですべた話の中で明らかであろう。ここではもう一つ紹介するに留めておく。ローマ人が侵略を企て、大軍を組織しているという噂がメディナに広がったことがあった。その間ずっとムスリム達は夜間警戒をしていた。ある晩、砂漠の方から突然大きな音が聞こえて来た。ムスリム達は家から飛び出して来た。彼等の中にはモスクに集まり、聖預言者ムハンマドがこの偶発事件に対処すべく、指示を与えに来てくれるのを待っている者達もいた。まもなくして聖預言者ムハンマドが馬に乗って音のする方向から戻ってくるのが見えた。その時になってやっと、彼等は、最初の警鐘を聞いた途端にムハンマドは馬に乗り、警戒する必要があるかどうかを見に音のした方へ出かけていったことを知った。彼は組をなして行けるように人々が集まる迄待ってはいなかったのである。戻って来たら聖預言者ムハンマドは仲間達に警戒する必要は何もないから家へ戻って眠ってもよいと請け合った (Bukharī, Shajāh fi'l Harb)。

無教養な人々への配慮

聖預言者ムハンマドは、教養がないためにマナーを知らない人々に対して特別の配慮を示していた。或る時、つい最近イスラムへ入信したばかりの一人の砂漠の住民がモスクで、聖預言者ムハンマドを囲んでいる皆と一緒に座っていた。突然、彼は立ち上がり、数歩離れたモスクの片隅へ行って座り、放尿をしようとした。聖預言者ムハンマドの仲間の内

何人かが、彼をやめさせようと立ち上がった。聖預言者ムハンマドは彼等を制し、その男の行動に何か口出しをすれば、彼に不自由な思いをさせることになるか、或いは彼を傷つけてしまうことになりかねないと指摘した。仲間達にその男は放っておき、後でその場所を掃除しておくように聖預言者ムハンマドは告げただけであった。

盟約の遂行

聖預言者ムハンマドは、盟約の遂行に関しては、特に厳しかった。或る時、一人の使者が特別な使命を帯びて彼を訪れ、数時間共に過ごした後、イスラムの真理を確信して、イスラムへの帰依を誓いたいと申し出た。彼は国の代表としての任務を負っており、新しく別のものへの忠誠心を持たずに自国の政府に戻るべきであり、ここで帰依の宣言をするのは妥当ではない、と聖預言者ムハンマドは彼に言った。もし国に帰った後でも、やはりイスラムの真理への確信が変わらないようであれば、今度は自由な彼個人としてここへ戻って来て入信を誓えばよいと。(Abū Dāwūd, Wafa bi'l 'Ahd)。

人間愛に身を奉げる者への敬意

聖預言者ムハンマドは、人類のために時と心を奉げる者に対しては特別の敬意を払った。アラブ系の Banū Tai' 族はムハンマドに対して敵意を抱いたが、その結果起こった戦いで敗北し、何人かが捕らえられてしまった。その中に Hātim Tā'i の娘がいた。Hātim Tā'i は、その寛大さがアラブ人の中で語り草になった程の人物であった。Hātim の娘が彼女の家柄について聖預言者ムハンマドに伝えると、聖預言者ムハンマドは彼女に深い思慮を配って接した。そして彼女の取りなしの結果、聖預言者ムハンマドは侵略の罪で Banū Tai' 族に科したすべての刑罰を免除してやったのである (Halbiyyah, vol.3, p, 227)。

聖預言者ムハンマドの人間性はこれ程までに豊かで、その様々な面すべてを、ほんの二、三ページの内に充分言い尽くそうというのは全く不可能である。しかし当書は、彼の人間的な描写を主題としたものではないので、この大まかな彼の生涯の概略の限界を考慮して、以上述べたことで満足せざるを得まい。

聖クルアーンの完全性

この入門書の初めの章で示したように、聖クルアーン以前に啓示を受けたと言われる聖なる教典の内どの一冊を取り上げてみても、完全なままに残っているものはない。熱心な真理の探求者が、そのような啓典はすべて、正しい行動への実際的な手引きとしては使えないという程にまで、干渉を受けているのである。これに対して、聖クルアーンという教典は正に完全なままの状態にあり、1400 年前に聖預言者ムハンマドに啓示されたそのままの形で、何の干渉や改ざんもなく、その一語一句が我々に届けられているのである。

聖クルアーンは聖預言者ムハンマドに与えられた使命の手始めとして啓示された。最初の啓示はほんの数行だけの短い物で、彼が Hira の洞穴にいる時に与えられた。その後、彼が死ぬまで啓示は続いたのである。このように、聖クルアーンの内容がすべて啓示される迄、総計 23 年の歳月を要したのであった。最初の頃の啓示は間隔を置いて、ほんのわずかずつ聖預言者ムハンマドに与えられていたが、時が経つにつれ、量も頻度も増して行き、晩年には、間断のない流れの如く啓示が続いていったという事実が、その同時代の人々の証言からわかっている。この理由としては色々考えられるが、その一つに、この啓示される教えはすべて真新しいものであり、人々がその教えの意義を充分に把握するのはなま易しいことではなかったという点が挙げられる。だからこそ、聖クルアーンは最初の内は少しずつ啓示されたのである。だが、聖クルアーンの根

本的理念が充分に理解されてからは、人々にとって教えや、聖クルアーンの中で扱われている問題を理解するのが比較的楽になり、啓示はより頻繁に且つ大量に授けられるようになった。目的は、すべてのムスリムが聖クルアーンの教えを充分に理解出来るようになることであつた。もう一つの理由として最初の頃はムスリムの数が非常に少なかったという点が挙げられる。神は聖クルアーンの原文が慎重に保存され、何の疑問の対象ともならないようにしておくことを望まれたので、最初の内はほんのわずかな部分の啓示に留まり、常に間隔が開いていたのである。時には一連の節の啓示から次の啓示迄に数ヵ月を隔てることもあつた。このようにして限られた数のムスリムが原文を確実に維持するため、啓示の全内容を記憶に留めることが出来た。ムスリムの数が増え始め、聖クルアーンの原文保護及び保存が簡単になって来ると、啓示は頻度を増して授けられるようになった。聖預言者ムハンマドの死が近づいた頃には、ムスリムの数も10万人を超え、聖クルアーンを記憶することも非常に易しくなった。その頃には啓示は更に頻繁に下された。このような神の計画により、聖クルアーンの原文の純粹性は疑いの余地なく維持されたのであつた。Uthmān がカリフの地位についていた頃、聖クルアーンの写本七部がイスラム世界の様々な地域へそれぞれに送られた。その七部が今度は原文の見本となり、それを元に写本が作られ、その後、各世代ごとに何十万人もの人々が聖クルアーンの全文を記憶に留める習慣が出来ていったのである。イスラムの最大の敵ですら、Uthmān の時代以降、聖クルアーンの原文への干渉がされたことはないと言言している程である。聖クルアーンの原文の純粹性に疑問を投げかけようとしている人々は、彼等の批判の的を、聖預言者ムハンマドの死から Uthmān のカリフ時代までの間に絞っている。

聖クルアーンの一部が聖預言者ムハンマドに啓示された時には、彼は必ずそれを記憶に留めるようにしていた。そして、聖クルアーンの最初から最後迄を連続して暗誦したので、啓示された聖クルアーンの全文が

いつでも彼の記憶の中にあった。これに加えて聖クルアーンの原文を、完全なままに保護し、保存するために、次のような工夫が取り入れられた。

聖クルアーンの原文保護のための工夫

- (1) 聖預言者ムハンマドは啓示を受け取ると、間髪を置かずそれを語り、書き取らせて記録に残した。このために多数の人々が聖預言者ムハンマドに雇われたとして知られている。このような人々について次の 15 人の名前が教外伝の中に述べられている (Fathul-Bari, vol9, P,1)。

1. Zaid bin Thābit
2. Ubayy bin kab
3. Abdullah bin Sad bin Abi sarh
4. Zubair bin al-Awwām
5. Khalid bin Saʿīd bin al-Ās
6. Abān bin Saʿīd bin al-Ās
7. Hanzalā bin al-Rabi al-Asadī
8. Muʿaiqib bin Abi Fātima
9. AbduAllah bin Arqam al-Zuhrī
10. Shurahbīl bin Hasana
11. Abdullah bin Rawāha
12. Abū Bakr
13. Umar
14. Uthmān
15. Alī

聖預言者ムハンマドは啓示を受ける度に、上記の人々の内誰か一人を呼び寄せ、彼が受けた啓示の原文をその者に書き取らせたのであった。

- (2) よく知られている通り、一日5回の集会の祈りがムスリムには義務付けられており、ムスリム各自が聖クルアーンの或る箇所を唱えなければならない。だから、ムスリムならば誰でも聖クルアーンを暗記しているのである。ムハンマドの仲間は10万人以上にも達しており、もしこの仲間が100人毎に分担を決めて暗記したとしたら、聖クルアーンの全文は仲間の記憶の中で1,000倍にもなって保存されていったに違いない。
- (3) 戒律、教義、哲学、道徳的戒め、そしてそのほかのイスラムの教え、すべてが聖クルアーンの中に含まれている。国家を建設し、育てていくにはこれらの教えすべての助けが不可欠である。聖預言者ムハンマドは文明及び文化社会を建設し、方向付けるために要する多種多彩な義務や役割を遂行出来るように、ムスリムを教育していた。例えば、裁判官、法律の専門化、教義の解説者、そしてイスラムの法的、並びに道徳的禁止命令を説明する人々などが必要となった。このような人々は聖クルアーンを暗誦していなければ任務の遂行が出来るはずはなかった。だから、彼等は誰もが聖クルアーンを完全に暗誦する必要があったのである。
- (4) 聖預言者ムハンマドは常に聖クルアーンを暗記する価値を強調していた。その強調の仕方は余りにも強く、聖クルアーンを暗記する人間は地獄の責め苦から救われるであろうと彼が言ったと言われている程である。神は聖預言者ムハンマドに常にあらゆる方面で、善行を積み重ねようと熱心に努力している仲間を与えられたので、聖預言者ムハンマドがこの暗記についての通告をすると、彼等の大部分が聖クルアーンを暗記しようと努め始めた。そういう仲間達の中には発音が余り明解ではない者や、全く教育のない者までいた。Imām Ahmad Hanbal が Abdullah bin Umar から聞いた次のような話を伝えている。或る男が聖預言者ムハンマドの所へ

やって来てこう言った。「アッラーの使徒よ、私は聖クルアーンを覚えてはいるのですが、私の頭ではその意味を十分に把握出来ないのです」。この話から、学識ある人だけでなく一般の人々も聖クルアーンを記憶しようと努めていたことがわかる。やはり同じ権威の話として Imām Ahmad Hanbal による別の伝説に次のような話もある。或る男が聖預言者ムハンマドの所へ息子を連れて来て言った。「アッラーの使徒よ、この子は一日中聖クルアーンの暗誦ばかりして夜はただ眠るだけなのです」。聖預言者ムハンマドは答えた。「それなら一体どこに心配すべきことがあるのか。あなたの息子は神を心に抱いて昼間を過ごし、夜になっても何の罪を犯すこともなく穏やかに眠るのではないか」。この話からは、聖預言者から遠く離れた所に暮らす一般の人々ですら、聖クルアーンの暗誦をし始めていたということが明らかになる。

聖クルアーンの指導者

- (5) 人々の聖クルアーン暗誦熱が高まるに伴ない、聖預言者ムハンマドは聖クルアーンの教師として四名の中心的人物を指名した。その四名は聖預言者ムハンマドの指導の下に聖クルアーンを暗記した者達であり、今度は彼等が他の人々にそれを記憶に留めるように指導することになった。この四名が交代で他の数多くの人々を教育し、その人々が聖クルアーンを教える能力を持てるようになる迄鍛えたのであった。その四名は以下の人物であった。

1. Abdullah bin Mas'ūd
2. Sālim Maulā Abī Hudhaifa
3. Mu'ādh bin Jabal
4. Ubayy bin ka'b

最初の二人はメディナへ移住したメッカ人であり、残りの二人は

Ansāri 人 (メディナ人) であった。Abdullah bin Mas'ūd は以前は肉体労働者であったし、Sālim は自由の身となった元奴隷であった。そして Mu'ādh と Ubayy はメディナの指導的立場に立っていた者達であった。このように、如何なる者も彼等に気楽に近づき彼等から学べるようにという配慮で、聖預言者ムハンマドは様々な分野から聖クルアーンの指導者を選び出して指名したのである。聖預言者ムハンマドは、よくこう言っていた。「あなたがたの中で、聖クルアーンを学びたいと望む者があれば、Abdullah bin Mas'ūd, Sālim Maula Abī Hudhaifa, Mu'ādh bin Jabal, Ubayy bin Ka'b の内の誰かから学べばよい」 (Muslim) 。これら四人は聖預言者ムハンマドの指導の許で聖クルアーンの全文を学んでいた。だが、他の聖預言者ムハンマドの仲間達の中にも、聖クルアーンを断片的に、聖預言者ムハンマドから直接学んだことがある者が多勢いた。次のような逸話が残っている。ある時、Abdullah bin Mas'ūd が聖クルアーンを暗誦している時、Umar が、或る語彙を取り上げ、それには、独特の発音をするべきであると指摘した。‘Abdullah bin Mas'ūd は、自分は聖預言者ムハンマドに教えられた通りに発音していると言いつ返した。Umar は彼を聖預言者ムハンマドの所へ連れて行き、彼が、聖クルアーンを正しく覚えていない、と訴えた。聖預言者ムハンマドは、Abdullah bin Mas'ūd に、二人の意見の相違の見られる箇所を暗誦するように依頼した。そして、その暗誦を聞いて、聖預言者ムハンマドは、彼の発音は全くその通りであると言った。すると Umar は、自分自身が聖預言者ムハンマドに習った発音の仕方は違っていたと申し述べた。それで、ムハンマドの指示に従い Umar もその箇所を発音すると、聖預言者ムハンマドはそれもやはり正しいと言った。このことからわかるように、聖預言者ムハンマドから聖クルアーン全文を学んだ四人の仲間以外にも、彼から聖クルアーンを部分的に教えてもらった者達がいた。Umar が或る語彙を独特の発音でするように教えられたと主張した事実も、彼が聖預言者ムハンマド自身から聖クルアーンを断片的に学んだということを示

している。

Umar と Abdullah bin Mas'ūd との間に相違が生じたからと言って、聖クルアーンの原文に変形があったという訳ではない。ただ単に母音記号の問題だったのである。母音記号はアラビア語の特徴であり、動詞によっては、母音記号の変形が許されており、それでも意味は変わらないものがある。例えば、「a」と読んでも「i」と読んでも構わないものがある。それは一般的な読み方の変形という場合もあるし、部族や家族による読み方の習慣という場合もある。しかしどちらの読み方をしようと、意味は同じである。聖預言者ムハンマドはこの習慣を認識した上で、言葉の内容や意味あいは何の影響も与えない限り、神の定めに従い、どちらの発音をしてもよいと認めたのである。アラビア語を話さない人々はこのアラビア語の特徴を知らないために、このような二者択一的発音方法が原文に変形を生じさせたのだとか、聖預言者ムハンマドは聖クルアーンの節を教えるにも、相手によって教え方を変えていたのだという間違った思考に陥りがちになってしまう。だが、事実は全く違うのだ。議論の争点となった変形は原文とか節の変形でも、単語の変形でもなかった。すべて母音記号の発音の問題であって、単語の意味や意義を変えてしまうようなものではなかった。独特な語形変形を伴う一部の動詞をある法則に従って発音するという習慣を持つ部族、或いは家族がその習慣を守ることを許された、ただそれだけの違いにすぎなかったのである。

聖クルアーンの暗誦者

聖預言者ムハンマド自らの手で教育された四人の聖クルアーンの中心の指導者以外にも、聖クルアーン全文を暗誦していた朗詠者として知られている者達がいた。そのような者達の中に次に挙げる人物がいた。

1. Zaid bin Thābit、彼は啓示の記録者の一人でもあった。
2. Abū Zaid Qais bin Al-Sakan. ムハンマドの母親の部族である

Banū Najjār 族出身の Ansīrī であった。

3. Abū al-Dardā Ansārī.(Bukhari)
4. Abū Bakr. 彼は最初の頃から、聖クルアーンを暗記する習慣を身につけていたと言われている。
5. Ali は聖クルアーンを暗記していたばかりでなく、聖預言者ムハンマドの死後すぐに、聖クルアーンを啓示された順序に整理する仕事に着手した。
6. Nasai の話によると、Abdullah bin Umar も聖クルアーンを暗記しており、一夜の内にその全文を暗誦したという。聖預言者ムハンマドはそれを知って、彼に、一夜の内に聖クルアーン全文を暗誦せず、一ヵ月の時をかけて、全文一回分を終了するように告げた。一夜の内というのは、負担が大きすぎるという理由であった。
7. Abū Ubaid の話によると、Muhajirin の内、聖クルアーンを暗記していたのは次の者達であった。Abū Bakr, Umar, Uthmān, Ali, Ialḥa, Sad, Ibn Masud, Hudhaifa, Salim, Abdullah bin Saib, Abdullah bin Umar そして Abdullah bin Abbās であった。そして 女性としては、アーイシャ、Hafsa、Umm Salma の三人がいた。

以上の人々の大部分が、聖預言者ムハンマド生存中に聖クルアーンを暗記していたが、彼の死後暗記を完成した者もいた。Bin Abi Dawud が彼の著書、the Al-Shariah の中で、Muhajirin の人々の内、Tamim bin Aus al-Dari と Uqba bin Ami も聖クルアーンを暗記したと書いている。上記のリストの中に Amir bin al-As と Abū Musa Ash ari を加える歴史家達もいる。

Ansar 族の中で、聖クルアーンを暗記した者として知られているのは、次の通りである。Ubada bin Samit、Mu`ādh、Mujama bin Haritha、Fudāla bin Ubaid、Maslama bin Mukhallad、Abū Darda 、Abū

Zaid、Zaid bin Thābit、Ubayy bin Kab、Sad bin Ubada、そして Umm Waraqa。

暗記された聖クルアーン

聖預言者ムハンマドの仲間の内、大部分が聖クルアーンを暗記していたという事実はよく知られている。伝記の箇所に述べられている Bīr Ma'ūna の出来事からわかるように、聖預言者ムハンマドは遷都から 4 年目に 70 人の仲間を指導者として或る部族に派遣し、その各部族の人々全員に聖クルアーンを暗記させている。聖クルアーンを暗記していた人々は昼夜を問わず時間をかけて他の人々のために暗誦して聞かせてやっていた。Hafiz Abū Yala が次のような話を語っている。或る時、聖預言者ムハンマドは、Abū Musa が自宅で人々に聖クルアーンの暗誦を指導しているという話を知らされた。聖預言者ムハンマドは、その家を訪れ集まった人々に自分の存在を気づかれることなく、Abū Musa の話が聞こえるような場所へ案内してくれるように依頼した。格好の場所に納まり、Abū Musa が聖クルアーンを暗誦するのを聞いて、聖預言者ムハンマドは彼の暗誦を褒め称え、大いに満足し、そして語った。「彼の暗誦は預言者ダビデのように素晴らしい」(Muslim、Kitab ul-salat)。このことからわかるように、聖預言者ムハンマドは、自ら指名した四人の聖クルアーンの中心的指導者以外の者達が行なう聖クルアーンの暗誦を監督するのに大いに心を砕き、その暗誦に何の誤りも生じないことを強く望んでいた。Imam Ahmad Handbal は Jabir bin Abdullah から聞いた話を次のように伝えている。ある時聖預言者ムハンマドがモスクにやって来ると、人々が聖クルアーンを暗誦していた。それで彼は、「人々が聖クルアーンを正しく暗誦する時代が来る前に、心を清める手段としてではなく、むしろ生活の糧とするために、聖クルアーンを充分に暗誦しなさい。そして、その暗誦を通して神の喜びを勝ち得るように努力を

しなさい」と言った (Musnad, vol.3)。Jabir bin Abdullah によれば、この時聖クルアーンを暗誦に励んでいた者達の中には、Muhajirin (移住者達) や Ansār (移住者を迎え入れたメディナ人) だけでなく砂漠の住人やアラブ人ではない者達も含まれていたという。聖預言者ムハンマド存命中に、聖クルアーンを暗誦出来るようになった者の数は何千人にも上った。聖預言者ムハンマドの死後間もなく、Musailima が宣戦布告し、10 万人の兵士を率いてメディナへ進軍した。これに対し Abū Bakr は Khalid bin Walīd を司令官として、一万三千人の兵を派遣した。この中には、まだイスラムに入信したばかりで、その精神や伝統に染まっていない者が多く、イスラム軍は数箇所の戦闘で押し返されていた。この時、聖預言者ムハンマドの仲間達で、聖クルアーンを暗記している者が、次のような提案をした。軍の中の聖クルアーンを暗記している者達だけが別の部隊を作り、最前線へ出て、Musailima 軍と戦うべきだというものであった。このような人々ならばイスラムの真の価値と、命をかけてイスラムを守る必要性を感じているので、彼等の熱意と献身をもってすれば、自分達をはるかに優る数の敵軍を打ちまかせるであろうと考えたのであった。Khalid bin Walīd はこの提案を受け入れ、聖クルアーンを暗記している者達だけの特殊部隊を編成した。その数は三千人であった。この特殊部隊は猛烈に Musailima 軍と戦い、退却させ、ついにこれを包囲し、壊滅させた。その時、この三千人は自分達のモットーとして、「汝、アルバカラ章を暗記せし者。(アルバカラ章は聖クルアーンの中で最長の章)」を選んでいて、34 人の内 500 人がこの戦いで命を失った。ウィリアム・ミューア卿は語っている、『読み手達 (聖クルアーンを暗記していた者達)』の被害が余りにもひどかったため、Umar は聖典を編纂して、例え一部でもその教えが失われることがないようにしようと初めて思いついたのだ」と (The Caliphate)。

このことから、聖預言者ムハンマドの生存中には、聖クルアーンは記述され、暗記され、常に暗誦されて、何千人もの人々がその全容を記憶し

ていたけれども、まだ一冊の本としては編纂されてはいなかったことがわかる。

一冊にまとめられた聖クルアーン

Musailima 軍との戦いで聖クルアーンの暗誦者が 500 人も命を失ったという事実が判明した時、Umar は Abū Bakr（当時のカリフ）に、もしこのように大量に、聖クルアーンの暗誦者が戦死するようならば、聖クルアーンの純粋性を保つことは困難になってしまうので、今こそ聖クルアーンを一冊の本にまとめておくべきであると提言した。Abū Bakr は最初難色を示したが、最後にはその提案を受け入れ、聖クルアーンの原文を一冊にまとめる役に Zaid bin Thābit を任命し、その助手として、聖預言者ムハンマドの主な仲間達を指名した。Zaid bin Thābit は以前聖預言者ムハンマドの口述に従って聖クルアーンを記録したことがある人物である。Abū Bakr の指示に従い、聖クルアーンの原文は書き残されている断片的部分から集められ、聖クルアーンを暗記している二人の人物の証明によって正確さを確認することになった。この仕事は間もなく完成し、記録に残っている聖クルアーン的全容が一冊の本にまとめられ、聖クルアーンを暗記している者達の証言により、正確さが証明された。これらの事実から、聖預言者ムハンマドの死と、Abū Bakr の指示の下に Zaid bin Thābit が監督して一冊の本にまとめ上げた聖クルアーンの編纂との間に、聖クルアーンの原文に何らかの変形が入り込んだと考える根拠は、例えわずかなりとも、あり得ないことがわかる。多くの人々が毎日絶えることなく暗誦し、その全文がラマダンの月を通して集会に集まったムスリム達のために最初から最後迄、聖クルアーンを暗記している者達の口から暗誦され、又その集会に集まった人々の中にも聖クルアーンを全て暗記している者が多く、そしてその原文は神の啓示がある度に聖預言者ムハンマド自身の口述に基づき書き取られたので

ある。それなのに、この聖典の編纂にあたって何らかの困難があったのではないかとする見方に、いささかの道理が見出せるであろうか。ましてや、その編纂の仕事を委ねられたのは、自分自身聖クルアーンの記録に携わり、その全文を暗記していた人物なのである。もしその編纂された教典に、聖預言者ムハンマドにより口述され、彼の監督の下に多くの人々によって、暗記された原文と少しでも異なったところがあったならば、それはただちに見付けられ、訂正されたはずである。聖クルアーンの内容の確実性と正確さは、このように、最も信頼すべき、且つ絶対に反駁出来ない根拠の上に成立しているのである。原文の正確さに疑いの余地がないという点では、世界中のどの書物を取り上げてみても聖クルアーンに優るものはない。

聖クルアーンの標準版

Uthmān の時代になって、様々な部族が聖クルアーンに出てくる一部の語彙を彼等独自の方法で発音するため、その結果言葉を聞き誤ったムスリム以外の人々が、聖クルアーンの原文にはいろいろな変形があるという誤った概念を持つようになった、という不満の声が聞かれるようになった。すでに説明したように、これらの変形は部族や家族の発音の習慣によるもので、原文の変形とは全く関係がなく、又どの言葉に関しても意味に影響を与えるようなものではなかった。それにもかかわらず、Uthmān は例え母音記号の発音方法にしる、あらゆる変形を禁止したほうが賢明であると考えた。彼は Abū Bakr の時代に編纂された原文の写しを用意させ、それをムスリムの各領域へ急送させ、聖クルアーンの標準版からの暗誦においては何如なる変形も、例えそれが母音記号の発音方法であろうと認めないという指令を出した。聖預言者ムハンマドの時代には、アラブ人の社会生活は部族単位に基いていた。各部族は他の部族とは異なった独立した生活を営んでいたのである。そのため、彼

等は話し言葉では、独自の習慣に基いた発音をしていた。イスラムを受け入れた時点で彼等は別の文化社会に統合され、アラビア語がただちにその文化の伝達手段となった。読み書きの能力が急速にアラブ人の間で高まり、あらゆる人々が極めて容易に正しいアラビア語の発音を身につけられるようになった。このためにメッカで使われる言語が標準語となったのである。そして Uthmān の時代迄には聖クルアーンを暗誦する際に、部族の習慣に従った母音記号で発音するという変形は、一切認められなくなった。非アラブ人の心に誤解を生じさせるような場合にはとくに厳しく禁止された。Uthmān の賢明且つ時宜にかなった処置は、イスラム以外の作家達に格好の攻撃の材料とされてしまった。その作家達は、Uthmān が聖クルアーンの内容を変えてしまったとか、彼が普及させた聖クルアーンの写本には、標準版や、聖預言者ムハンマドに啓示された原文とは幾分異なったところがあると言って非難したのだ。彼等は、聖クルアーンの原文の正確さを攻撃するための有力な武器を発見したかのように思っているが、アラビア語や聖クルアーンの編纂の歴史に精通している者達にとっては、己の無知をさらけ出すばかりであるその非難など、片腹痛いだけである。Uthmān が普及させた聖クルアーンの内容は、聖預言者ムハンマドが啓示されたものと全く同じであるという事実には疑う余地もない。ましてや Uthmān がムスリム支配下の各地へ聖クルアーンの標準版を送付して以来、聖クルアーンの内容が絶対的に純粋で、何の墮落もないということは言うまでもない。この標準版は順に写本を重ねて驚く程速く、広範囲に広がり、まもなく読み書きできるムスリムはほとんどの者が聖クルアーンの写本を自分のものとして手に入れられる程になった。ある記録によると、それから数年後、Ali と Muawiya との間で闘争が起こった時、Muawiya 軍の兵士達が聖クルアーンの写本を各自の槍の先に結び付け、聖クルアーンが対立する両者の間に立って決着をつけてくれるだろうと言ったことがあった (The Caliphate)。この話から、もうその頃迄には、すべてのムスリムが各自

一冊ずつ、聖クルアーンの写本を持っていたことが明らかである。

聖クルアーンを暗記する習慣の続行

イスラム世界では、聖クルアーンを暗誦、写本、そして発行することは、常に大きな精神的功德を積む行為であると考えられていた。歴史的にみても、偉大なるムスリムの聖職者のみならずムスリムの君主までが自ら、聖クルアーンの写本に努めていたことがよくわかっている。聖預言者ムハンマドの死後何世紀もすぎた頃、ムスリム達は多くの面でヒンドゥー教の習慣を取り入れるようになっていた。だが、その頃のインドのようなアラブ系ではない国においてすら、大ムガル皇帝 Aurangzeb は暇な時間を当てて、聖クルアーンの写本に励んでいた。彼はなんと自らの手書きで聖クルアーンを七回も写本したという。聖クルアーンを暗記するという習慣は、聖預言者ムハンマドや、カリフたちの時代の初期の頃に限られていたわけではない。聖クルアーンの写本が増え、簡単に手に入るようになった後ですら、どの時代にも聖クルアーンを暗記するムスリム達が非常に多かった。いつの時代を取り上げても、控えめに見積もっても 10 万から 20 万のムスリム達が聖クルアーンを暗記しており、時には、はるかにその数を上まわっていることもあった。ヨーロッパの作家達は、ムスリム達の所感や、彼等の心の中で聖クルアーンに対する愛情や献身の深さを全くわかっていないために、このような形をとって、聖クルアーンの原本が純粋に且つ正確に維持されて来たのだという事実を信じようとはしないのである。バイブルを完全に暗記したという人物の記録が一例も残っていないので、各世代ごとに、沢山の人が聖クルアーン全文を暗誦したなどということは、彼等にはとても信じられないことなのであろう。しかし聖クルアーンの顕著な特徴の一つ、使われている言葉が非常にリズムカルで暗記し易いという点を見逃してはならない。当手引き書の著者の長男、Mirza Nasir Ahmad はパンジャブ大学

を首席で卒業し、オックスフォード大学の修士号を持つ人物であるが、彼は、宗教には関係のない彼自身の勉学を始める前に、父親の指導の下に聖クルアーンの全文を暗記してしまった。Qadian のような狭い地域ですら、二人の医師と数人の大学卒業者が聖クルアーンを覚えてしまっている。この二人の医師の内の一人は聖クルアーン全文をほんの 4.5 ヶ月という期間で暗記してしまったという。一時、インドの連邦裁判所の判事を勤めたことのある Sir Muhammad Zafrullah Khan の父親は、50 歳を過ぎてから聖クルアーンを暗記し始め、ほんの 2.3 ヶ月という期間で全文を覚えた。一時、モーリシャスで我々の運動の宣教師をしていた Ghulam Muhammad は三ヶ月で聖クルアーンを暗記した。この手引き書の著者がメッカ巡礼の旅に出ていた時、Munshi Muhammad Jamal ud-Din Khan（長い間、Bhopal 州で大臣を勤めていた）の孫に出会ったことがあった。その人物は、聖クルアーンを完全に暗記するのにかかった時間はほんの一ヶ月であったと著者に語った。このような例から、この原文が何如に覚え易い言葉で書かれていたかがよくわかる。ムガル皇帝 Alamgir II の時代に生き、アハマディア運動の創始者となった人物の曾祖父であった Mirza Gul Muhammad は、聖クルアーンを全部暗記している人間を常に 500 人、宮廷に置いていたと語っている。Mirza Gul Muhammad はわずか 250 平方マイルの領土を支配する族長であった。アラビア語が余り広く使われてはいないような国、即ちインドの或る地域でさえ、聖クルアーンを暗記する習慣が何世紀にも亘って、大部分のムスリム達に定着していたようである。聖クルアーンの内容の純粋性を守るためにムスリムが生み出し、何世紀にも亘って実行して来た工夫の一つとして、生まれつき、或いは幼児期に視力を失った子供達に聖クルアーンの暗記を奨励するという習慣がある。視覚障害者は普通の職に就くことが出来ないため、聖クルアーンの原文の守護者となることによって、そのハンディキャップを長所に変えられるように、という配慮からできた習慣である。この習慣は一般的なものとして定着し、インド

では視覚障害を持つムスリムは例外なく Hafiz (守護者)としての優遇と名誉を与えられる程になった。Hafiz とは即ち、聖クルアーンを暗記することにより、聖クルアーンを原文通りに保護する人である。ラマダン月には、世界中の主なモスクで会衆の祈りを通して、聖クルアーンの全文が声高らかに暗唱される。イマームが聖クルアーンを暗誦し、そのすぐ後に別の Hafiz が立って、その暗誦が正しいかどうか監視し、必要があれば注意を促すという形をとる。このようにして、ラマダン月には世界中の何百何千ものモスクで記憶に基づいた聖クルアーンの暗誦がなされているのである。以上のように様々な工夫や用心によってムスリムが聖クルアーンの原文の純粹性や正確さを保護してきたために、最も辛らつなイスラムの敵ですら、聖クルアーンの原文は聖預言者ムハンマドの時代から、完全にけがされることなく保護されて来ている事実を認めざるを得ない。だからこそ、今日存在する聖クルアーンは、聖預言者ムハンマドが世に伝えたものと寸分たがわないものであると確信を持って言えるのである。これを証明するために、西洋の作家達の証言を次に提示しておく。ウィリアム・ミューア卿は、彼の著書「ムハンマドの生涯」(p, xxviii)の中で、この問題に関し、次のような結論を出している。「現在まで受け継がれている聖クルアーンは、ムハンマド自身の訂正は加えられているかもしれないが、依然として当時のままである」。「聖クルアーンのどの節を取り上げてみても、ムハンマド自身の言葉通りで何の変更も加えられていないと強く確信してよい」。(p, xxviii)「主観的に見ても客観的に見ても、現在使われている聖クルアーンは、ムハンマド自身が伝え、使っていたものに間違いはないという点は完全に保証されている」(p, xxvii)。更に次のような言葉もある。「…そして、ムスリムが聖クルアーンを神の言葉として受けとめているように、我々も聖クルアーンを正にムハンマドの言葉として受けとめるという VonHammer の評価に非常に近い考えを私の結論とする」(p, xxviii)。「筆記上の誤りが少し位はあったかもしれない。だが、Uthmān が編纂した聖クルアーン

は順序に奇妙な所が時々見られるとしても、内容的には本物以外の何物でもない。聖クルアーンが後世において改ざんされたことを証明しようとするヨーロッパの学者達の試みはことごとく失敗におわった」とノルデケは述べている（ブリタニカ大百科事典、第9版「クルアーン」の項）。

章および節の配列

聖クルアーンの各章の配列を決めたのは Uthmān であると言われている。これは正しくない。聖預言者ムハンマドがラマダンの時に聖クルアーンの全文を暗誦していたし、彼の仲間達の中にも、その習慣に従っていた者がいたことはよく知られている。聖預言者ムハンマドがラマダンの月に聖ガブリエルに対して、聖クルアーン全文を暗誦していたという言い伝えも聖伝承^{ハディース}に書き残されている（Bukharī）。ムスリムではない者はこのような話を受け入れようとはしないかもしれないが、聖預言者ムハンマドが聖クルアーンを暗誦していたのは疑いようもない事実である。彼はある順序に従って暗誦したはずである。

聖預言者ムハンマドの死後、Ali は Abū Bakr（その時選出されてカリフになっていた）をしばらく訪れなかった。Abū Bakr は彼を呼びにやり、自分がカリフに選ばれたことについて不満なのではないかと尋ねた。そうではなく、啓示された順序に従って、聖クルアーンを写すのに忙しかったのだと Ali は答えた。彼は聖預言者ムハンマドの死に際して、この仕事をやり通す決意をしていたのであった。この話からも、聖預言者ムハンマドの時代に、聖クルアーンは或る一定の順序で暗誦されており、その順序は、啓示を受けた順番とは異なったものであったことがわかる。だからこそ、Ali は歴史的な意味からも啓示された順序を残しておくべきだと考え、その順序に従った写本をしようと決意したのであった。聖預言者ムハンマドは多少なりとも啓示を受ける度に記録者を呼びよせ、その啓示を書き取らせると同時に、それをどの章に入れるべきか

をも指示した、と伝える伝説も残っている。即ち、聖預言者ムハンマドは啓示を受けた時に、その啓示がどの章に入るものかをも教えられていたということである。しかしながら、その章で取り上げられている主題自体が、聖クルアーンの編纂の際に採用された配列を支持する強力な証拠である。聖クルアーンを研究すれば、各章の主題がその前後の章の主題と関連しているという事実がすぐわかる。もし現在使われている配列が、Uthmān の手により、ただ単に各章の長さを考慮して組み立てられたものであったならば、どうしてその配列法で主題と内容に継続性が生まれて来るであろうか。例えば、アルファーティハ章はメッカで啓示されたものであり、聖クルアーンの冒頭の章となっている。アルバカラ章はメディナで啓示され、アルファーティハ章の直後に続く。西洋の作家達は、アルバカラ章が聖クルアーンの中で一番長い章であるために先頭に置かれているのだと主張する。まず第一に、聖クルアーン的第一章はアルバカラ章ではなく、アルファーティハ章である。それを読むと、「我々を正しき道に導き給え」という祈りの言葉で終わっている。そして、すぐ後に続くアルバカラ章が聖クルアーンの中で最長の章であるという理由だけで、アルファーティハ章の次に来るように選ばれたのだとしたら、どうしてその直前のアルファーティハ章の最後の節が導きを求める祈りで終わり、アルバカラ章はその祈りで求められた導きを示す節で始まっているなどということがありえようか。これは単なる偶然ではない。メッカで啓示された章がメディナで啓示された章の後に来たり、又その逆になったりすることはあるけれども、この主題と内容の継続性は聖クルアーン全体を通して見受けられるのである。以上により、聖クルアーンの章と配列は神の指示の下に定められたことが証明される。そこで、聖クルアーンを編纂する時に取られた配列法が、何故啓示された順序と異なっているのか、という疑問が生じる。聖クルアーンが啓示された当時、その教訓や教義がアラブ人にとって全く新しく、馴じみのないものだっ

たというのがその答である。まず彼等の心の中にイスラムの教訓や教義の背景となるものを植えつけ、馴染ませて、その教訓や教義の詳細を受け入れられるように精神的準備をさせなければならなかった。だからこそ、最初の頃の啓示は、基本となるべき教訓とは、神の唯一性、貧者への親切と配慮、神への崇拜および、神を常に心に抱くことの重要性および、そこから得られる恩恵、そして又、聖預言者ムハンマドがどのような敵と遭遇しなければならないか、ムスリムはどのような遭遇を受けることになるか、イスラムはどのように発展していくか、そしてイスラムの敵や対立者達はどのような終局を迎えることになるか等についての預言であった。ムスリムの数が増大し、イスラムが広まり始めるにつれ、イスラムの戒律や教訓についての詳細は事項も啓示されるようになった。だから、聖クルアーンが啓示された順序は、啓示された当時の必要に最も適したものであったが、啓示がすべて完了し、何十万人もの人々がそれを受け入れ、ムスリム以外の者達迄がその背景について認識するようになってしまうと、ムスリムであろうとムスリムでなかろうと、その教訓や教義を伝えるには新しい角度から行なう必要が生じた。この必要に応えるために、聖預言者ムハンマドは神の導きの下に、将来使用すべき聖クルアーンの不変の配列について迄指示を与えたのである。聖クルアーンが啓示された当時には、その時代の必要に最もふさわしい順序で啓示され、そして後の時代のムスリムの必要に最もふさわしい順序で永久に使用出来るように配列されたことは、実に注目すべき聖クルアーンの奇跡と言えよう。23年の月日をかけて、その時代の要求に最もうまく応じた順序で断片的に啓示されていた一冊の啓典が、同時に将来の要求にも最もうまく応じられるような形に作られていたとは。神の指導なくして成し得る業ではない。なお一つの章の主題と、それに続く章の主題との関連は、各章の冒頭に書かれた留意の部分で説明されている。

聖クルアーンに於けるいくつかの預言

聖クルアーン以前に啓示された啓典の中に、聖クルアーンについての預言が書かれていたことは、この入門書の始めの方で説明済みである。西洋の作家達は、聖クルアーン自体には何の預言も書かれていないと主張しているが、それは間違いである。Hirāの洞穴で聖預言者ムハンマドが初めて受けた啓示の中に、人間が今まで得たこともない知識が聖クルアーンを通して人間に授けられるであろうという預言が含まれている。その結果、以前の啓典の中にあった誤りを聖クルアーンが指摘している箇所が数例見つかり、然も後に起こった出来事により聖クルアーンが正しかったことが確認されている。例えば聖クルアーンで啓示された内容は、エジプト王が溺死した時、彼の肉体は救われ、後の世への徴(あかし)となるように保存されるというものであった。神は聖クルアーンの中でこのように言われている。

「而して、われらはイスラエルの子らをして海を渡らしめたり。さればファラオとその軍勢は暴虐と敵意を以って彼等を追跡せしが、溺死その身に襲いかかるに及んで、彼は云えり、「イスラエルの子らが信じたる御方の外に神無き^{ほか}を信じ、我は服従する人々の中^{うち}になれり」。何事ぞ、今となって！以前汝は不服従にして、騒乱する者どもの中^{うち}なりたるにもかかわらず。されど今日われらは汝をその肉体と共に救わん。そは汝が汝の後に来る人々のため神兆^{しるし}たらんがためなり。されどまことに多くの人々がわれらのしるしを無視するなり」(10:91-93)。

つまり、神がイスラエル人達に無事に海を渡らせると、ファラオとその軍勢が敵愾心から罪を犯してまで、彼等を追いかけて来た。そしてその軍勢は追い続けついに溺れそうになってしまったのである。その時ファラオは、「今こそ、イスラエル人が信じる神以外に神はいないこと

を私も信じます。そして神への服従を私も誓います」と言った。そこで神は、次のように決断を下された。「おまえは以前は反抗し罪を犯してばかりいたというのに、今になって信仰を誓うというのか。おまえの最後の瞬間の信仰への誓いに免じて、おまえの肉体だけは助けてやろう。そうすれば、おまえの肉体は来たるべき時代の人々にとって、証となるであろう。それにしても、全く人間というものは、殆どの者が神の証に対して注意を払おうとしないものだ。」

この出来事はバイブルにも、ユダヤ教の歴史にも、又、当時のどの信用出来る記録文書にも書かれていない。聖クルアーンはこの話を 14 世紀も前に述べていたのである。その後約 13 世紀も経ってから、当時のそのファラオの遺体が発見され、身許が確認されたのであるが、それによって彼は溺死した後、彼の遺体が見つかりミイラにされ、保存されたという事実が、議論の余地なく確立されたのである。ミイラにされたとはいえ、モーゼの後、エジプトの地が幾多の動乱を経て来た事実からすれば、彼の遺体が破壊されるということもあり得たはずである。だが、それにもかかわらず、その遺体は破壊を免れ、保存され、人類への証及び教訓となり、且つ聖クルアーンの真実性を確証したのである。

別の例として、最初の頃の啓示の中に次のような節がある。「夜、すべてを覆い包む時にかけて」(92:2)。即ち、イスラムは厳しい試練と迫害を連続して受けることになるであろうという事実を示すのに、神は夜の闇を証人として挙げておられるのだ。この預言がなされたのは、聖預言者ムハンマド自身すら、自分の使命に対して同胞達が断固として反対のろしを上げるとは思いもしなかった頃である。彼が初めて啓示を受けた直後に Khadijah は聖預言者ムハンマドを彼女の従兄である Waraqa bin Naufal の所へ連れて行った。聖預言者ムハンマドが経験したばかりの出来事を彼に語ると、Waraqa は言った。「モーゼに啓示を伝えた御使いがあなたの頭上にも降りて来られたのだ。だが、あなたの同胞達はあなたを迫害し、メッカから追放しようとするのではないだろうか」。

聖預言者ムハンマドはこの言葉にショックを受け、驚いて尋ねた。「私の同胞達が本当に私を追い出すであろうか？」(Bukhari)。聖預言者ムハンマドは、自分が同胞達から大いに人望があることを知っていたので、彼等から反対されるなどということは考えも及ばなかったのである。しかし正にこの時に神は聖預言者ムハンマドに、イスラムとムスリム達は反対と迫害という厳しい暗黒の夜を耐えなければならないのだと知らせておられたのだ。そしてその夜が始まり、10年もの間、辛い時期が続いたのである。

この迫害や試練の時期が10年以上も続くであろうという預言は聖クルアーンの他の箇所にも載っている。アルファジュール章の冒頭の節で、神は夜明けを迎える前に10日間の夜を証人として出している。ウィリアム・ミューア卿や他の西洋の作家達は、当章が啓示されたのは聖預言者ムハンマドが使命を受けて以来三年目の終りの頃であることを認めている。その頃迄は、まだメッカの人々による反撥はそれほど過酷な様相を呈してはいなかった。その時聖クルアーンは、ムスリム達は10夜続く迫害に堪え忍ばなければならないだろうという警告を発していた。聖なる教典の言葉遣いに精通している人ならば、一日とか一夜という言葉は一年を指すことが多いとすぐにわかる。バイブルでは一年を指すのに「一日」を使っている例が多いが、聖クルアーンでは苦悩の日々を表わすのには一年という意味で「一夜」を使っている。苦悩の時期は暗黒の時期であり、「夜」の方がもっと適切に状況を表わすからである。この節の意味は、厳しい試練や迫害の時期が10年間続くであろうという警告であった。そしてその過酷な時期は、この節が啓示された直後から始まり、10年間続いたのである。敵愾心旺盛な批評家ならば、この節が啓示された時に、聖預言者ムハンマドは、すぐにメッカの人々の反撥は迫害に変わってしまうだろうという点を予測出来てもよさそうなものだと言い出すかもしれない。だが神の啓示を除いて、聖預言者ムハンマドが迫害の時期は5年でも、8年でも、12年でも、13年でもなく、10年

間なのだと確かめる方法が他にあっただろうか。啓示は10年間であると明言し、聖預言者ムハンマドは啓示を受けてから正に10年間メッカに留まることを許され、その間迫害を受け続けることになった。そして10年後、彼はメッカを出ざるを得なくなった。メッカには彼や彼に従う者達に与えられるものと言えは迫害しかなかったからである。それから彼はメディナに到着した。メディナでは、神がイスラムとムスリムの急速なる進展を約束して下さったのである。こうして聖預言者ムハンマドのメッカ脱出は、イスラムの普及と発展を迎える夜明けとなった。10年という期間は聖預言者ムハンマドにとっては賢明な推測であったと言えよう。だが啓示を受けて後、10年経ってメディナの大部分の人々がイスラムを受け入れ、聖預言者ムハンマド自身がその町に移住することになるというのも彼にとって賢明な推測だったのだろうか。メディナの人々をイスラムに改宗させるという仕事も彼にまかせられていたのではないのか。又メッカからメディナへ無事に辿りつけかどうか、彼にかかっていたのではないのか。

ところが啓示はそこで終らず、このように続いていたのだ。「^き逝り行く夜にかけて誓う」(89:5)。この節では、神は暗闇が去ろうとしている別の夜を証人として挙げている。この節の意味は、10年間の迫害に終りを告げようとする夜明けが来た後でも、暗闇は完全に姿を消す訳ではなく、その夜明けの次にもう一度夜の闇が訪れるが、その後はもはや暗闇が来ることはない言うことである。この預言は正に現実となった。メッカからの移住の後、さらに一年の警戒と苦悩の時が訪れたのである。その一年の間も、メディナのムスリムはメッカ軍の侵略に絶えず脅かされていた。バドルの戦いが起こったのは、聖預言者ムハンマドがメッカから移住して一年目のことであった。バイブルの預言通り、又この入門書の最初で既に述べた通り、この戦いはケダルの栄光を打ち崩し、メッカ人によるムスリムへの迫害に完全なる終止符を打つことになった。イスラム軍は後にも他の大きな戦いをしなければならなかったが、バドル

の戦いでこそ彼等は人民として独立と主権を確立し、中心となってムスリムを迫害し続けたクライシュ族の指導者格の人々を崩壊と破滅へ追いやることになったのである。

更に聖預言者ムハンマドがまだメッカにいた頃に受けた啓示がもう一つあった。

「クルアーンを汝に義務付け給うた御方は、必ず汝を帰るべき所に帰させるなり」(28:86)。

即ち、聖預言者ムハンマドに聖クルアーンを啓示し、彼に聖クルアーンへの服従を誓わせた神が、聖預言者ムハンマドをメッカへもう一度復帰させると保証して下さったのである。この節は聖預言者ムハンマドがメッカを出て他の地へ移住しなければならなくなると啓示しているだけでなく、移住の後、勝利者としてメッカへ再び戻るであろうと預言もしていた。この節が啓示された当時の、聖預言者ムハンマドを取り巻く環境を経験した者ならば、聖預言者ムハンマドがメッカを追い出された後、勝利を手にしてメッカに凱旋するなど予測出来た者は誰一人としていなかったであろう。同じ出来事を予告する預言がもう一つ聖クルアーンに載っている。その預言が啓示されたのも、やはりまだ聖預言者ムハンマドがメッカにいる間であった。

云え、「主よ、我に正しい入り方で入らせ、正しい出方で出し給え。^{しか}而して、我になにとぞお手ずからお手助けの力を授け給え」(17:81)。

この節では、神は聖預言者ムハンマドに次のように祈るよう命じられた。即ち（神が聖預言者ムハンマドを送って下さった町へ）聖預言者ムハンマドが首尾よく入り、その後首尾よく攻撃をしにその場所から出られるようにし、その攻撃の際には彼の味方となって下さるように神に祈ることであった。即ち、聖預言者ムハンマドがメッカからメディナへ移住し、メディナからメッカへ侵略を仕掛け、ついにはメッカも彼に降服することになるだろうという預言がこの説で語られているのである。

聖預言者ムハンマドがまだメッカにいる間に受けた啓示にもう一つ別の預言が含まれていた。その内容は、「その時は近づけり、月も裂けたり」(54:2)である。アラブ人にとって月は力の象徴であり、月が引き裂かれるとはアラブ人の力がバラバラに分裂しつつあるという意味であった。この節の啓示を受けた頃、ムスリムは各地へ移住を余儀なくされ、聖預言者ムハンマドはメッカで弾圧を受け、カーバ神殿で祈りを奉げることすら禁じられていた。彼がその神殿で祈りを奉げようと欲した時など、屈辱的にもその境内から引きずり出されてしまった。メッカ全体が聖預言者ムハンマドに対して反発の火の手を上げているその時に、彼はメッカ人に向かって、彼等の力は崩れ去り、イスラムの勝利が近づいているという神のお告げがあったと伝えたのである。数年の内に、非常に明解にも、この預言は現実となった。バドルの戦いにおいて誇り高きケダルの力と栄光は地にまみれ、イスラムの旗が永遠にひるがえることになったのである。月はまさしく引き裂かれた。その日はアラブ人にとって最後の審判の日のようであった。そして正にその日に、新しい天と地が創られたのである。

イスラムとムスリムがメッカにおいて、依然としてアラブ人の迫害的とされていた頃、ペルシャ軍がローマ軍を打ち破ったという噂が流れた。ペルシャ人は偶像崇拝者であり、ローマ人はキリスト教徒であったため、この話はメッカ人に大きな喜びをもたらした。メッカ軍はこのペルシャ軍の勝利を、彼等自身のムスリムに対する完全勝利を示す吉兆として受け取った。ところが聖預言者はこの時に、別の啓示を受けていたのである。

「^{ローマ}羅馬人は破れたり、この国に隣接する地に於て。しかしながら、彼等はいずれ勝利せん、数年の中には一前の敗北も後の勝利も、アッラーの御意志なり—その日、信者たちは喜ばん」(30:3-5)。

その啓示によれば、ローマ軍は国境に接する地では降服することになったが、その屈辱の時から9年も経たない内に再び勝利者となるであ

ろうということであった。即ち、その節に出て来るアラビア語の bid という言葉は、3 から 9 迄の数を表わす。この啓示のことを知ったメッカの人々は大笑いをし、ムスリムを愚弄した。預言は成就しないと、Abū Bakr と 100 頭のらくだの賭けをする者すら現れた。その当時の状況では、ローマ軍のシリアでの敗北に続いて、更にペルシャ軍は勝利を重ねており、ローマ軍がペルシャ軍に勝てる見込みは殆どなく、ローマ軍は徐々にマルマラ海の波打ち際へと押し返されていた。ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルは東の支配から切り離され、ローマ帝国は一つの小さな国に縮小されてしまった。だが神の約束は成就するはずで、事実その通りとなった。ローマ軍は数や軍備でペルシャ軍に劣っていたにもかかわらず、完全勝利を納め、ペルシャ軍は退散した。彼等はペルシャへ撤退し、ローマ軍は以前占有していたアジア、アフリカ地域を奪回したのである。

聖クルアーンには、後の世の事を告げる預言が何箇所かに出ており、その中には既に成就したものもある。例えば、このような箇所がある。

「彼は二つの海を合流せしむる。そは進んで合^{まみ}い見えん。(いま)
その二つの間には隔壁ありて、両者は(之を)超え得るに非ず
……………その両方から真珠と珊瑚出づる……………而して、
山の如く海面^{そび}に聳え立つ船も、また彼の所有^{もの}なり」(55:20,21,23,25)。

この箇所では、真珠や珊瑚の取れる、二つの隔てられた海がお互いに繋がり、そこを通して高性能の船が往航すると述べられている。この預言はパナマ運河やスエズ運河の建設により成就された。この二つの運河によって結ばれた海は、真珠漁や珊瑚漁でよく知られている。

アルカハフ章に出て来る預言は、キリスト教国の隆盛、海軍力、地上の大部分の制覇、そして彼等相互間の戦争に関するものであった。イスラムの究極的な勝利についても予告されている。キリスト教国の盛衰に関わる預言は大体が現実のこととなった。次に迎えるべき段階はイスラムの勝利に関する預言が成就するかどうかである。ヨーロッパのキリス

ト教徒や無神論者は、現在のイスラムの状況だけから判断して、この預言を嘲笑するであろう。だがこれらの預言を啓示し、キリスト教国の運命に関する預言を成就された神が、必ずやイスラムの勝利をうたう預言をも成就させて下さるはずである。イスラムの勝利の日は今そこまできています。イスラムの陽光が暗闇の厚いとばりを貫きつつある。神の御使い達が天から降りて来ようとしている。地上は確かに悪魔の力に捕らえられているが、この悪の力を打ち破る明らかな神の力の勝利の日が急速に近づきつつあるのだ。神の唯一性がその時に確立されるであろう。そして神と人間との間の平和を築き、人間同士の正義及び公正な取引を確立し、神の王国を地上に打ち建てる事が出来るのは聖クルアーン以外にはないことを、人類は認識し納得するであろう。

聖クルアーンの教えにおける特徴

聖クルアーンとその他の啓典とを区別する特徴の一つは、イスラム教内で持ち上がるあらゆる問題に対して、聖クルアーンが充分に対応している点にある。又、イスラム教の機能を強調することにより、聖クルアーンは適切な範囲へと人々の注目を導き、そこへ目を向けることによって得られる恩恵についても記している。旧・新約聖書、ヴェーダ、ゼンドアベスタ等を読むと、長期に亘る自然現象の途中で現れた人物が、その現象の各段階をあたかも目撃したかのように書き記しているような印象を受ける。だが聖クルアーンは違う。聖クルアーンは創生の哲学と創生に関するすべてについて解説している。何のために神は天地万物を創り、人類を創造されたのか、そしてその目的を達成するにはどうすべきかを、聖クルアーンは説明している。又神格の性質と属性、及びその属性の現れ方についても説明している。人類創造の目的に関連して、天地万物が従っている法則についても聖クルアーンは語っている。人類の肉体的発達と進化を助けるために、神は人間の肉体状況と精神状況を支配する自

然の法則を定められ、これらの実施は、ある御使いの集団の手に委ねられていると、聖クルアーンは指摘する。人間の魂の発達と啓発のために、神は預言者達を通して シャリーアを啓示された。聖典を含む啓示が不十分で不透明な場合もあるが、聖典の基準をすべて完璧に含んでいる啓示もある。又啓示の目的が、人間による間違った解釈によって汚されてしまった聖典を、元の純粹無垢な状態に復興させることにある場合もある。言い換えれば、神は様々な目的を抱いて、人間の中に預言者を遣わされるのである。法を伝えることを目的とする預言者を通じて、新しい神命が啓示される。この他に、既に啓示された法を修正するための預言者もいれば、法の解釈における誤りを正すための預言者もいる。聖典が何故必要か、この法からどのような恩恵が得られるか、又 人間の進化との関わりにおけるこの法の役割等についても、聖クルアーンに説明されている。

不滅なる神への信仰

聖クルアーンには、神とその属性との違いについて記されている。この違いを理解することによって、我々は次の言葉が間違っていることがわかる。

「始めに、言葉ありき。その言葉は神と共にあり、その言葉は神であった」(ヨハネによる福音書 第1章1節)。

属性というものは、存在そのものの代理にはなり得ず、従ってこの二者は全く異なったものであることを聖クルアーンは教えてくれる。

人間に許されている行動決定権の範囲と強制される行動範囲についても聖クルアーンは説明している。聖クルアーンの教えによると、人間には、自分の行動について、神に対して責任を負い、自己改善を常に押し進めていくだけの自由は十分に与えられている。一方人間の行動範囲は限られており、その限界を超えることは出来ない。如何なる努力を払っ

でも、人間の生命に与えられている限界を取り払うのは不可能である。人間は静的な固体になることも出来なければ、空気のような存在になることも出来ない。しかし人間の領域内では、人間は偉大な能力と大きな力を持っており、常に向上、進歩することが出来る。

聖クルアーンは神への信仰の必要性を説いており、神の存在を証明する証拠を示している。神は暗黒の世に、常に神の言葉を人々に啓示して下さり、奇跡を通して神の力のゆるぎない証を明示して下さっているのだと、この啓典は強調している。預言者達と彼等の高潔な信徒達は、人々の心の中に神への完璧な信仰を芽生えさせるためには、必要不可欠な存在であった。もし、神が預言者達やその信徒達を通して神の属性を明示するのを止めてしまわれたならば、人間は疑いと不安にさいなまれ、神の存在に対する確信も消え失せてしまうであろう。だからこそ、人類が存続する限り、一部の人間に神からの啓示が与えられることは絶対に必要なのである。神の存在に対する信心を維持することが出来るのは、この方法を通して以外にあり得ない。天地万物の創生以来、神が創造と見聞を通して神の属性を顕示して来られたように、神は太古の昔からイエスまでの預言者たちを通じて、そしてイスラムの聖預言者ムハンマドを通して人々に話しかけられて来られた。同様に、今後も神は永遠に、選ばれた僕に向かって話しかけ、このような手段によって、神の存在を顕示し続けて行かれるであろう。イエスの時代には神が「話す」という属性を使用されていたが、その後はこの属性を使用されなくなった。或いは、聖預言者ムハンマドの時代には神はこの属性を使用されていたが、その後は永遠に沈黙を守ってしまわれている、という考え方は全く納得がいかない。イエス或いは聖預言者ムハンマドの時代迄は、神は「見る」という属性を所有されていたが、その時代後は見る事が出来なくなったとか、イエス或いは聖預言者ムハンマドの時代迄は、神は創造する力を持っておられたが、その後創造の属性は失われてしまったとか、更に、イエス或いは聖預言者ムハンマドの時代迄、神は全能であったのに、そ

の後は全く力を失ってしまったなどという考えは神を冒瀆するものであるとして、我々がそれらを拒絶するのと同様に、神が特定の時期迄は話されていたが、その後は話されなくなったなどという考えも拒絶しなければならない。神の属性はすべて完璧で永久不滅である。この事が自明の真理であるにもかかわらず、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ゾロアスター教徒のみならず、ムスリムを自称する大部分の者達までがゾロアスター、イスラエルの預言者達、イエス或いは聖預言者ムハンマドの出現と共に神の啓示は終りを告げたのだと信じるようになってしまった。聖クルアーンはこのような考えをはっきり拒否している。聖クルアーンは今でも生きておられる神への信仰を説いており、神は自らが選ばれた高潔なる僕に対しては、これまで通りに話しかけられておられるという事実を、この啓典は神が生きておられる証拠として挙げている。聖クルアーンが説くこの教義は、約束された救世主、即ちアハマディア運動の創始者の出現により、現在でも確認されている。再び、この救世主やその真の信徒達が神から受け取った啓示が、神が話す力を失ってしまったなどということを口では言わないまでも、教義で説いている人々に対して挑戦状を叩きつけているのである。

神からの啓示は特定の民族に対して与えられたものではなく、神はすべての人々の中から預言者を立てられたのだ、と聖クルアーンは教えている。何故、預言者を次から次へと送る必要があったのか、何故人類の歴史の初期の頃に完璧な法が啓示されなかったのか、などの説明も聖クルアーンの中でなされている。神の唯一性の問題を聖クルアーンは長々と取り上げており、この教義を裏付けるために聖クルアーンは説得力のある証拠を提示している。複数の神の存在は、理性的にも事実として受け入れ難いということを証明している。そして又、聖クルアーンは、神の唯一性の教義が如何にして人間の精神的発達を助けているかということとを説明している。

聖クルアーンは預言者制度という課題に、大きくスポットライトをあ

てている。「預言者」或いはこれに匹敵する言葉は、宗教的な聖典の中で自由に使用されているにもかかわらず、どれ一つとして預言者というものの明確な概念を取り上げているものはない。預言者と呼ぶにふさわしいのは誰か、そしてふさわしくないのは誰か。又どのような種類の預言者がいるのか。預言者の定義とその種類を明記しているのは聖クルアーンだけである。聖クルアーンでは、預言者とそうではない者との違いが説明されており、預言者のなすべき勤めと、神と預言者との関係が定義されている。何故預言者が立てられるのか、預言者とその信徒達との関係はどうあるべきか、又預言者と預言者を信じようとはしない者達との関係はどうあるべきか、という問題についても説明がなされている。預言者の権利とは何か、又預言者は神と人間との間の壁として立ちふさがるものなのか、それとも単に手助け役、或いは案内役に過ぎないのであらうかといったことについての説明も、この啓典にははっきり描かれている。

聖クルアーンは御使いの問題、御使いの役割、御使いが創造された目的についても詳細に取り扱っている。

聖クルアーンが説明している内容の中には、悪魔とは何か、又その存在が人間にとってどのように役立っているか、などの問題も含まれている。人間と悪魔との関係とは何か。悪魔的な衝動から人間はどうすれば身を守ることが出来るか。悪魔には人間に特別の行動を強いる力があるのか。御使いは常に人間を善へと導き、悪魔は常に人間を悪へと仕向けるものであり、御使いによって仕向けられた善行を受け入れる権利も、拒絶する権利も人間は常に持っているし、同様に悪魔によって仕向けられた悪行を受け入れる権利も、拒絶する権利も人間は常に持ち合わせているのだ、と聖クルアーンは説いている。この御使いと悪魔という二種類の存在は人間を完璧なものに導くための助けとして、人間の存在に現実味を与えるために創造されたものである。御使いの導きも悪魔の誘いもなければ、人間は報酬を受ける権利も罰を受ける義務もないであろう。

悪魔の誘いと戦いによって、人間は報酬を受けるに値する存在にまで高められ、進歩への道が開かれるのだ。御使いの導きに背を向けるならば、人間は罰を受けなければならなくなってしまう。

聖クルアーンは祈りの哲学を説明し、如何に祈り、どのような状況下で祈りが聞き入れられ、どのような祈りが聞き入れられないか、又祈りの効果がある範囲はどのようなものかを明示している。

聖クルアーンは善悪についても論じ、両者の定義付けをし、両者を見極める境はどこにあるかを説明している。絶対的な善と絶対的な悪、及び相対的な善と相対的な悪とは何かの定義も明記されている。高い道徳的資質と善とを修得する方法と、如何にすれば悪を避けられるかの説明もある。そして善と悪の源はどこにあるかに光を当て、悪の源を絶たなければならないと人間に教えている。

悔いについても取り上げられており、真の後悔の意味も聖クルアーンは説いている。悔い改めることから得られる恩恵について聖クルアーンは教えており、真の後悔の必要条件とは何か、そしていつ悔い改めることが出来るかについても語っている。又どのような原理に基づいて報酬と罰が決定されるのかや、審査する際にどのような要因が考慮に入れられるかについても説明している。違反と罰についての相関関係と、この両者はどのように調整されるべきかについての説明も聖クルアーンにはある。

救いに対する聖クルアーンの方

救いとは何か、又どのようにすれば救いを得ることが出来るのか、聖クルアーンは説明している。救いには(1) 完全な救い(2) 不完全な救い(3) 先に延ばされた救いの3種類がある。完全な救いは正に現世において得られるものである。現世において不完全な救いしか得られなかった者は、死後の世界において徐々に救いを得る手段を完成させる。先に延

ばされた救いは、地獄で罰を受け、苦しんだ後にしか得ることは出来ない。この先に延ばされた救いに関するキリスト教の教えとイスラムの教えはある点で類似しているが、根本的に異なっている。キリスト教では、この種の救いでさえ、キリスト教の教義を固く信奉しながらも現世において完全な救いを得られなかった者だけにしか与えられない。このような者だけが、地獄で苦しんだ後に完全な救いを得ることが出来ると教えている。これに対してイスラムでは、すべての人間が最終的には完全な救いを得るために作られていると教えている。イスラムでは最もひどい背信者であり悪人であっても、地獄の責め苦のような矯正処置を受けた後には、最終的に救いを得て天国へ行くことが出来るという。これに関して、聖クルアーンは行動が持つ意味合いの重さ、及び各行動のバランスを取ることの重要性を強調している。人間が生前に数多くの善行を重ねたということは、その人が救いを得ようとして本当に努力した証拠であり、或る目標を達成しようと努力をしている最中に死んでしまった人間は、勝利を目前に死んでしまった兵士に似ている、と聖クルアーンは説いている。死は神によって完全に支配されている。戦場の兵士は、勝利を得る迄自分の死を延期するなどということは出来ない。同様に、心から救いを求めて戦っている人間でも、勝利を手にする迄自分の死を延期することは出来ない。このような人間がこの戦いの最中で死んだ場合は、神の恩恵と慈悲を受けるべきであり、神の怒りや罰を受けるには当たらない。勝利を収める前に戦死したからという理由で、兵士を責めた国家はない。心から勝利を目指した兵士ならば誰でも称えられる。神の王国を設立するために悪魔を打ち負かそうとして戦い、勝ったり負けたりしながらも、最後迄ひるむことなく勇気を持って戦い続けた人間に対しても同じことが言える。このような人達も当然救われるべきであると聖クルアーンは説く。このような人間の弱さは汚点ではなく、むしろ勲章と言えよう。何故ならば、この人間は弱さ故に神に味方して戦っている軍勢に加わることを恐れなかったし、自ら戦いの犠牲となることもた

めらわなかったからである。

聖クルアーンは精神の進化の段階、そしてその段階の数と詳細について説明している。例えば純粹さ、純潔、慈善、正直さ、親切な行い等の種類と程度について書かれている。このようにして聖クルアーンは、人間が自分の道徳的、及び精神的な発達に従って計画を立てることが出来るようにしている。このように人間の手の届く範囲に当面の目標を置くことにより、聖クルアーンは人間を進歩の方向へ導き、各段階においてより高い一連の目標を人々に示すことによって、益々努力する方向へと人々を導いている。このように、聖クルアーンは一步一步、一段階ずつ、人々を進歩への道に導いてくれているのである。

聖クルアーンは人間の知的進化についても解明している。人間の知的な進化はどのようにして行なわれるかを説明し、神が人間の行動を評価される際にその人間の知性の発達をも考慮に入れられるのだと説いている。好運にも恵まれた環境で育ち、美德への道が容易に開かれていた人と、その人と比べて知的な発達が遅れており、育った環境も恵まれていなかった人とは、異なった基準で評定されるかもしれない。後者の場合は背負った負担が大きかったという点で、審査の際に考慮されるであろう。

信仰とは何か、どうすれば信仰心を得ることが出来るか、又どのように信仰というものを知ることが出来るかについても、聖クルアーンの説明は続く。シャリーアの掟の必要性、及びその考え方についても説かれている。聖クルアーンの教えによれば、神の法は神の英知に基づき、人間の進歩を助けるためにある。神の命令は、神の僕達にとって負担、もしくは罰となるべきものではなく、むしろその命令は、各自の人間が進歩し、社会的な環境を改善するための手助け、及び道具として作られた。神の命令及び罰を強制的に実行すべし、という考えを聖クルアーンは支持してはいない。聖クルアーンが教えているのは、人間の行動を許す、又は酌量する余地のある状況をすべて考慮に入れた上で、初めて神は人

間に対して有罪の判決を下されるということである。前もって十分な警告を与えた上でなければ、人は有罪と判断されないということも、聖クルアーンは教えている。

奇 跡

聖クルアーンは、そこに使われている言語及び考え方については独特で他に類がないと主張しながらも、奇跡については何の明確な立場をもとてはいないと、キリスト教作家たちは公言している。奇跡に関する聖クルアーンの見解を説明しておかなければなるまい。

聖クルアーンでは二つの根本的な教義が提示されている。第一に特定の神の法は不変である。例えば死者がこの世に復活することはあり得ない。第二に創造の力を持つのは神だけである。例え細工人、技術者、発明家などが生まれて来ようと、創造という特性は神の働きを通じて顕現する。この二つの教義の内、前者について神は聖クルアーンの中で次のように述べておられる。

死が彼等の一人に臨む時、その者は懇願して云う「主よ、我を還らしめよ、正しい行為をするために、置き去りし我が命に」と。決して然らず、そは口先だけの出まかせににすぎず。彼等の背後には、再び甦らしめられるまで障壁が立ち塞ぐ（23:100,101）。

又 次のようにも述べられている。

われらが絶滅せし邑の住民には冒しがたい禁忌あり、すなわち、彼等世に戻ることもなかるべし、ゴグとマゴグが解き放たれて、諸丘より奔り下り来るその時までは（21:96,97）。

これらの節はゴグとマゴグの巨人族が解き放たれて、あらゆる丘とあらゆる波の頂きからやって来て地上に広がるその日迄は、一度死んだ人々は二度とは地上へ戻れない、と神が定められたことを示している。即ち、明らかに死者がこの世に甦ることはないと言われているのである。

最後の節に出て来るゴグとマゴグへの言及は、決してその時が来れば死者も地上に戻ることを許されると言っているのではない。ゴグとマゴグの解放は時の終りが近づいている証であるため、この神の法は時の終りまで施工され続ける、というのがこの節が表わす意味である。この節の意味を次のように解釈した文法学者もいる。即ち、ゴグとマゴグが立ち上がった後で使者を甦らせる努力が行なわれるが、そのような努力も無駄に終わってしまう。つまり如何なる科学を駆使しての努力も、死の謎を解明することは出来ないであろうとする解釈である。一言で言えば、聖クルアーンは死者が地上へ戻ることは許されないと教えているのだ。聖クルアーンは第二の教義として、創造する力は神のみが持っておられる、とも説いている。次のように書かれている。

然るに、彼等がアッラーの他に拝する神々は、何一つ創造せず、却って自ら創られたり。彼等は死物にして、生命なし。されば、いつ甦らされるのか、その時を知らず (16:21,22)。

又聖クルアーンは、英知は神の属性を示すものであるから、英知に反するものは、すべて神のせいだと考えてはならない、と教えている。聖クルアーンの中でたびたび神には「賢明なる者」という表現が使われている。例えば次のような箇所である。

「お前たち如何になりしか、お前達がアッラーに如何なる尊厳をも望まざることは？」 (71:14)。

不信仰者達は 自分達の行動はすべて英知に基づいていると主張しているにもかかわらず、神には同じことを想定しないで、英知に反するものは神に起因するものだと考えている、と神はこの節で不信仰者達を叱責しておられる。

従って、例としてあげられたこれら三つの法に背くことが実際に起こったとされても、このような出来事が奇跡と呼ばれようと、神秘と呼ばれようと、魔法と呼ばれようと、聖クルアーンはこれを拒否する。聖クルアーンはこのような事が実際に起こる可能性を否定し、このような

奇跡はどの預言者に起因するものでもない。又このような奇跡を起こしたのは聖預言者ムハンマドであるとも決して主張していない。思慮分別のある人ならば、まず法を作り、或いは規則を定め、その後自らその法又は規則を破るようなことはしないはずである。ましてや、完全なる英知そのものである神が、そのような行動をとられるとは考えられない。このような出来事を、神の正しい預言者達が起こしたことだと考えるような者は、預言者達に払われるべき敬意と栄誉を決して高めているのではなく、寧ろ預言者達の知性と誠実さを攻撃していることになるのだ。この主張は、その主張された相手に対する賞賛より、寧ろ中傷となるため、このような主張を拒否することが正しい考え方の出来る人間のなすべき勤めなのである。

一方聖クルアーンは、神が預言者達を神の基本的な法に全く違反しないある種の証を示す手段にしている、とはっきり主張している。この事は議論の余地がない真実であり、これこそ聖預言者ムハンマドが得た奇跡であると聖クルアーンは述べている。本来隠されている物事を、神が間違いなく本当であると保証して下さること自体、正に奇跡ではないだろうか。力の強い無数の敵に対して抵抗する手段をなんら持たない、弱くつつましやかな人間に、神が成功や勝利を与え賜うことは正に奇跡と言えるのではないか。聖クルアーンは、それ自体が他に類を見ないものであると主張しているだけでなく、聖預言者ムハンマドに隠された物事について知らせたのは神であり、聖預言者ムハンマドの後押しをするために神が常にその力と栄光を顕示なさったと説明している。それでも聖クルアーンは、奇跡は全く聖預言者ムハンマドによって引き起こされたものではないと主張している、と言えるであろうか。事実聖クルアーンはこの主張を繰り返しているのだ。聖預言者ムハンマド自身がメッカの人々からの激しい反発と迫害を受けることになると予知する根拠など何もなかったにもかかわらず、このような反発と迫害を受ける危険があると聖預言者ムハンマドに警告が与えられたのは奇跡ではなかったのか。

聖預言者ムハンマドがメッカを出て他の地へ移住しなければならなくなるという予告され、その時期までも前もって知らされたのは奇跡ではなかったか。バドルの戦いが起こる数年前に、このような戦いが将来起こり、この戦いにムスリムが勝利を納め、彼等の敵は敗北を喫するであろうというお告げを聖預言者ムハンマドが受け、又その戦いの時期までも知らされたことは奇跡ではないだろうか。聖預言者ムハンマドがメッカを離れて他の地へ移り住まなければならなくなり、その後に勝利者としてメッカに戻るであろう、と告げられたのは正に奇跡ではなかったか。ローマ人達がシリアでペルシャ人達に敗れた後、9年以内にローマ人がペルシャ人を打ち破るであろうというお告げが聖預言者ムハンマドに下されたことは奇跡ではなかったか。アラビア中にイスラムが広がり、その他すべての宗教に優るであろうと聖預言者ムハンマドに告げられたのは奇跡とは言えないのか。これらの出来事がすべて現実となった今、これらはすべて奇跡であると言い切るのに、何の疑いの余地があるだろうか。このような出来事やその他類似した事柄が聖クルアーンの中に記されている。それでも聖クルアーンは聖預言者ムハンマドが奇跡を得た事を否定していると言えるのだろうか。「否定している」と主張し続ける人々は、アラビア語とその慣用表現や聖クルアーンの文体に関する知識が不足しているために、誤った解釈をしているに過ぎない。例えば聖クルアーンの中に次のような節がある。

「^{しるし}神兆を^{くだ}降すにわれらの妨げとなるものは何もなし。ただし、^{これ}往古の人々が之を拒否せり」(17:60)。

キリスト教作家達は、神がそれ以後人々に証を示すのを拒否されたと解釈しているが、ここの節はそのような意味ではない。過ぎし時代に、神は恩恵を与えようとして特定の人々に証を示したのにもかかわらず、彼等はその証を受け入れようとはしなかった。この事が、神がそれ以降証を示されなかった理由かもしれないが、だからと言って、このために神が今後一切人々に証の顕示をやめてしまわれるということはない、と

この節には書いてあるのだ。昔の預言者が人々に示した証を人々が拒否したにもかかわらず、後の預言者の言葉を裏付ける証が示されていた。従って、イスラムの聖預言者ムハンマドの言葉を裏付ける証も当然あったはずである。

又、不信者達の要求に答えて、自分は他の人々と同様に人間であると言いなさいと聖預言者が聖クルアーンの中で指示されいながら、彼の言葉を裏付けるような証を神が示されなかったということではない。ここで言おうとしていることは単に、証は神が示されるものであって、聖預言者ムハンマドと言えども随意に示せないということである。この根本的な真実を、あえて聖クルアーンに記すことにより、我々の認識を深めているだけなのだ。「神はその特性と権威を御自分が創り給うた者に手渡されたのだ」と主張する者と、「自分は神によって創られた者にすぎず、神は御自分が愛しておられる僕を通じて、証を人々に示して下さるのだ」と主張する者とは、どちらが真理の追究者であり、どちらが間違っていると言えるであろうか。

預言以外の奇跡についても、例えば次のような奇跡について聖クルアーンは述べている。移住の際、聖預言者ムハンマドは Abū Bakr に伴われてメッカを去り、メッカから3マイル離れた Thaur の洞窟に避難した。聖預言者ムハンマドに逃げられたと知ったメッカの人々は、最も優れた追跡者を呼び出し、この洞窟をつきとめた。追跡隊がこの洞穴の入口に辿りついたのを知った Abū Bakr は聖預言者ムハンマドの身の危険を懸念したが、聖預言者ムハンマドは「敵に捕まりはしない」という意味で、「悲しむなかれ、アッラーは我等と偕にあり」(9:40)。と答えた、と聖クルアーンに記してある。その後起こった事は正に奇跡ではなかったか。全く何の助けももたない二人の人間が敵の激しい復讐から逃れて洞窟に隠れる。夜の闇に紛れて、この二人が町を抜け出したのを知った敵は怒りと当惑に齒ざりしりする。敵はここでこの二人を逃してしまつては、自分達の楽しみが奪われてしまうだけでなく、末代までの屈辱、

恥となると考える。生死を問わず、主たる逃亡者を捕らえてメッカへ連れて来た者には100頭のらくだを与えよう、と敵は聖預言者ムハンマドに賞金を懸けた。その後最も優れた追跡者を呼び出して、二人が隠れている洞窟の入口まで二人を追い詰める。追跡者は二人が絶対中にいると自信を持っている。追跡隊は復讐に燃え、逃げ道をすべて完全にふさいでしまおうと固く決意していた。3マイル余りにも渡る追跡の後、ほんの2、3フィートの距離迄獲物を追い詰める。下を見て、彼等の足下に大きく口を開けている洞窟の中を覗きさえすれば、彼等が求めている二人がそこにいるのだ。ところが神が彼等の知性と目に働きかけたがために、誰一人洞窟の中を覗こうとはしない。そのまま彼等はがっかりして手ぶらで引き返して行ってしまう。これ程大きな奇跡が今までにあったであろうか。

又バドルの戦いに関しても、聖クルアーンは次のような事実を残している。この戦いの最中、聖預言者ムハンマドは敵に向かって一握りの小石を投げつけ、このために敵の中に大混乱が巻き起こった（アルアンファール章）。この話は伝承の中ハディースでもっと詳しく語られている。この戦いが最も激化し、イスラム軍が敵に押され気味になった時、聖預言者ムハンマドは、「彼等の顔がゆがみ、変わってしまいますように」（Tabarī & Zurqānī）と叫びながら、一握りの小石を敵に向かって投げつけたという。これと同時に神はイスラム軍からメッカ軍に向かって激しい風を吹かせた。この風は砂を巻き上げ、メッカ軍の顔や目に砂を激しく叩きつけた。その結果、メッカ軍は目がよく見えなくなり、イスラム軍が目がけて正確に矢を射ることが出来なくなってしまった。又向かい風のため、放たれた矢も半分の距離しか飛ばなかった。一方イスラム軍はうろたえているメッカ軍をはっきりと見る事が出来、彼等の射る矢も風に乗って勢いよく飛んでいった。おかげで、装備も武器も粗末な少人数のイスラム軍が、馬、武器共に優れた装備を持つメッカの大軍を打ち破ることが出来たのである。これが奇跡でなくて何であろう。聖クルアーン

もこれを奇跡と呼んでいるではないか。

聖預言者ムハンマドが奇跡を起こした、と聖クルアーンにははっきり記されている。但し、聖預言者ムハンマドが死者を復活させたとか、太陽や月の動きを止めたとか、川の流れを止めたとか、山を動かした、などという愚かな奇跡を引き起こしたとは記されていない。このような話はおとぎ話にすぎず、幼い子供達を楽しませる程の価値しかない。このような奇跡を聖預言者ムハンマドもしくは他の預言者が引き起こしたとは、聖クルアーンのどこにも書かれてはいない。聖クルアーンよりも前に書かれた聖典に語られているものを解釈して、前述のような出来事が実際に起こったと信じるようになった人もいるが、このような文章についての説明も聖クルアーンには記されている。古い文典に記されているものには比喩的な表現が使われているので、決してその言葉通りに解釈してはならないと聖クルアーンは警告している。

神を崇拝すること

神への礼拝について、聖クルアーンは詳細に取り上げている。聖クルアーンは神への礼拝を四つに分類している。

- (1) 人間と神とのつながりを強め、神に対する愛を深めるための礼拝。
- (2) 人間の肉体的状態を高め、神のために犠牲をいとわぬ心を育てるための礼拝。
- (3) 人間同士の和と統一を促進し、万物の中心である神とのつながりを確立するための礼拝。
- (4) 社会における、公正な経済的調整の実現を目的とする崇拝。

上記の各分類に基づいて、聖クルアーンは異なった礼拝方法を勧めている。礼拝では単に神のみを意識して尊敬の意を示すのではなく、自分の仲間達をも意識しなければならない、と聖クルアーンは教えている。更に、礼拝とは個人的に行なえばよいものではなく、集団的なものでも

ある、とも教えている。礼拝に関して人間には、自分だけが神の御前にひざまずくのではなく、仲間も神の御前にひざまずけるようにしてあげることがあるのだ。このため、聖クルアーンに記されている礼拝に関する法令は、すべて個人を意識していると同時に集団をも意識したものである。

第一の分類で、聖クルアーンは一日五度の礼拝を勧めている。イスラムの祈りは他の宗教の祈りとは全く異なっている。個人の部と集団の部とがあり、派手さや儀式めいた要素は全くない。聖なる教会、寺院など神への礼拝に関して改まったものを聖クルアーンはすべて廃止した。神に祈りを奉げようと思えば、地球上のどこにしようと、祈りの場所にふさわしい、と聖クルアーンは教えている。聖預言者はこのことを心に抱いて次のように語った。「私にとって地球上すべてがモスクなのである」(Bukharī)。この言葉には数々の意味があり、祈りの時間が来たら、どこにしようとムスリムは祈りを捧げてもよいという意味がある。ムスリムは祈りの時間が来たからといって教会や寺院に行く必要はなく、牧師や聖職者がいなければ祈りが出来ないというわけでもない。イスラムには聖職制度などはない。すべての善人は神の代理人であり、いかなる人でも祈りを先導する能力がある、とイスラムは認めている。

イスラムの礼拝堂

ムスリムは集団の祈りのためにモスクを使用しているが、これらのモスクが建てられている場所や建物自体に、神への礼拝を奉げる場所として特別の神聖さがある訳ではない。その地域のムスリムが集まって集団的な祈りを捧げることが出来るようにモスクは建設されるのだ。モスクがあれば集団的礼拝が円滑にできるし、それ以外の宗教的、社会的目的のためにこの場所を利用することも可能になる。寺院や教会と違って、モスクを清めて神の礼拝に捧げる特に儀式をとり行う必要はない。ムス

リム達が集団礼拝のために使用する建物はすべてモスクである。モスクには特別の建築様式など何もなく、十字形教会堂のように中心となるべき縦の部分や横に突き出る翼廊の部分に分けられるわけでも、祭壇があるわけでもない。モスクの中には神の絵や像はなく、聖人の遺品も納められてはいない。ムスリム達は最もシンプルな形で神への礼拝のために集まり、イスラムの礼拝には芸術的且つ感情的に人の気を散らせる要因は何もない。音楽や歌、神に捧げる儀式的な踊り、聖職者らしい制服、ローソクの火などは何もなく、オルガンを弾いたり香をたいたりして感情的な雰囲気作りをしようとするものもない。おごそかな雰囲気作りのためにモスク内の照明を人為的に暗くしたり、聖人の像を据えて、神の礼拝を捧げるために集まった人々の気を散らせるようなものもない。礼拝者は定められた時刻になるとモスクに集まり、整然と並ぶことによって、それぞれ家庭又はモスクにおいての個人的な祈りを終えており、集団で神を称える準備が整ったことを示す。彼等は神を称え、感謝の意を捧げ、自分自身や友人縁者、ひいては全人類の精神的、道徳的且つ肉体的進歩を神に祈る。このことは音楽も流れていない完全なる静寂の中で行なわれる。真剣な祈りの最中には、左右を見回したり、他の礼拝者に話しかけたりしてはならない。富める者も貧しき者も一様に肩を並べて立つ。国王が靴磨きの隣に立っていることもあれば、訴えられた人の隣にその人を裁く判事がいたり、将軍の隣に二等兵が立っていることもあるだろう。礼拝者はたとえ誰であろうと自分の隣に来る人を嫌がってはならないし、礼拝者が他の場所へ移動させられるようなことがあってはならない。礼拝者すべてが神の前に謙虚な気持ちで静かに立ち、イマームの指導に従ってお辞儀をし、ひれ伏し、再び立ち上がる。礼拝の最中に、礼拝者達に聖クルアーンの言葉の意味を印象付けるために、イマームが聖クルアーンの数節を声を出して唱えることがある。礼拝の中で、特定の時に、各礼拝者は定められた祈り、そして個人的な言葉で祈りを神に捧げる。

定められた祈りに加えて、昼夜を問わず時間が許す限り、ムスリムは神に祈りを捧げ、静かに神を心に抱き、神の属性について考える。モスクが集団礼拝や個人礼拝に加え、あらゆる宗教的又は知的研究の場として使用される。学校、結婚式場、法廷、又は地域社会の社会的、経済的進歩のための計画を決定する集会場としてもモスクは使用される。

イスラムの断食

礼拝者の肉体的進歩を根本的な目的とする第二の礼拝の分類は断食である。イスラムの断食は、他の宗教における断食とは異なる。例えばヒンドゥー教では、断食者でもある種の食物は許されているし、キリスト教のレント（四旬節）では、肉やイーストを使って膨らませたパンなどの特定の食物を我慢すればよい。しかしムスリムは、断食の期間は夜明けから日没まで一切の飲食を禁じられている。更に断食の時間内における飲食の禁止とは別に、ムスリムには一ヶ月間の断食を通してより高い徳と純潔さを求めて特別の努力をしなければならないという義務も定められている。断食の間、目の前にある物にも手を出すことを許されない人間は、如何なる場合にも決して禁じられたものに身を委ねるべきではないということをまず断食から学ぶことが出来る。断食の時間帯、即ち夜明けから日没迄は、24時間の内に昼夜の交代のある所ならばどの国にでも当てはまる。但し、地球上の特に緯度の高い地域など、この規定が意味をなさないような所ならば、断食の時間を通常の日中の長さを参考に決定すべきである。

この礼拝の形にも個人的なものと集団的なものがある。個人的なものでは、ムスリムは一年を通してどの時期に断食をしても構わないが、ラマダン月にはすべてのムスリムは、どこにしようと、一斉に断食を守らなければならない。

巡礼

イスラムが勧めている第三の分類における礼拝の形式はメッカへの巡礼の旅である。この巡礼の目的は、ムスリムの心の中に万物の中心である神への帰属意識を生み出すことにある。巡礼のために旅をする余裕のあるムスリムは、指定された期間にメッカに集合する。このような機会を通して世界中の各地から集まったムスリムがお互いの絆を強め、国内及び国際間の問題について意見の交換をすることが出来る。この礼拝形式にも集団と個人の別がある。巡礼は指定された期間内に行なわなければならないが、Umrah（カーバ神殿訪問）はいつ行なってもよい。ムスリムは旅に出かける準備さえ整えば、一年を通していつメッカへ行っても Umrah を行なっても構わない。この形の礼拝を遵守することによって、ムスリムは万物の中心である神の存在を維持し強化するためには、個人的にしる集団的にしろ、自己犠牲の覚悟が必要だということを学ぶのである。

第四の分類となる礼拝形式は施しと慈善である。これにも集団で行なうものと個人で行なうものとがあり、強制的なものと自発的なものとがある。例えば Īd-ul-Fitr（断食終了の祝い）の時、その日に指定されている特別の礼拝に参加する前に、ムスリムはすべて、男も女も、大人も子供も、貧しい者を助けるために寄付をしなければならない。その内容は三ポンドの小麦かとうもろこし、或いはそれに相当する金額であってもよい。如何に貧しい者であろうとも、この義務を免除されることはない。寄付をする余裕のある者は自分自身の財産から寄付をしなければならない。その余裕のない者は、その日に慈善として受け取った物の中から寄付をしなければならないのである。

ザカート（喜捨）

ムスリムに課せられたその他の義務としてザカートがある。ザカートとはある規定量以上の現金、品物、家畜等を所有する者すべてに課せられる喜捨である。喜捨は物によって異なる。例えば、農産物に対しては10%、商業資本や利益に対しては2.5%である。この喜捨は一見差別的で不公平に見えるが、商業資本や利益に対する率は、見かけ程軽いものではない。農産物はその生産量に対して喜捨を行うのに対し、商業はその資本と利益の両方に対して喜捨を行うからである。ザカートには二つの目的がある。その一つは生活困窮者の救済、及び経済的に恵まれない地域の福祉を促進するための資本を確保すること、そしてもう一つは通貨や品物の貯め込みを思い留まらせ、両者の流通を確実に活発化させ、それにより健全に経済調整をすることである。

聖クルアーンには、人間の交友関係の基盤となるべき信条が詳細に説明されている。協力のが重視され、個人及び集団の権利と義務の範囲が規定されている。政府とその果たすべき義務についての原則、そして政府と国民との相互関係に関する説明もある。又主人と使用人との関係も規定され、国際関係を運営する根本方針についても定められている。

聖クルアーンは、富が少数の人々の手に蓄積されることをはっきりと禁じ、常に富の流通を促している。この目標達成のために、少数の抜け目のない人間が利子をつけて金を貸すことを禁止し、彼等が社会の富の大半を独占することが出来ないようにしている。又 遺産分配の義務をも規定している。その規定により、如何なる人物も、数人いる自分の相続人の内から一人を選び、その人に全財産を譲ることは許されないし、又一人の相続分を削って、もう一人への割り当て分を増やすことも出来ない。聖クルアーンはザカート、施し、そして慈善を通して富を公平に分配するよう求めている。政府の全歳入及び財源を使用する第一の目的

は、比較的貧しい地区の福祉と発展に備えることにあり、と聖クルアーンに定められている。以上のような方法により、あらゆる地域の人々の経済的繁栄を計っているのである。

聖クルアーンは、教育と知的発達の一必要性を強調し、宗教上の義務として反省と瞑想を勧めている。人々が争いに巻き込まれたり、お互いに戦争をしたりするようなことがあってはならないと説き、侵略を禁じている。異教徒間同士の関係を調整する細かい規則も聖クルアーンに記されている。ムスリムが他の宗教の創始者や指導者の名誉を傷つけるような発言をすることを禁じている。宗教上の論争に関して、自分自身の信仰や教義と同じ位に公認されている他の宗教を批判することが如何に不合理であるかを、聖クルアーンは指摘している。聖クルアーンの教えに従えば、偉大な宗教はすべて神の啓示に基づいており、その宗教が墮落するのは、その後人間が手を加えて腐敗させてしまうからである。だからこそ聖クルアーンは、他の宗教を大々的に非難することを禁止しているのである。

聖クルアーンでは女性の権利が全面的に保護されている。女性が男性に対して義務と責任を負っているのと同様に、男性も女性に対して義務と責任を負っていることを明確に言葉で記している啓典は聖クルアーン以外にはない。聖クルアーンには様々な立場の人間の権利と義務が項目別に説明されている。各項目は次の通りである。「両親」「兄弟と姉妹」「夫と妻」「息子と娘」「隣人」「貧者」「孤児」「未亡人」「友人」そして「見知らぬ人」。「見知らぬ人」には同胞人だけでなく、同国に住居を構えているか、或いは訪問中の異邦人も含まれる。

イスラム式行政

聖クルアーンは政界に全く新しい概念を導入した。何人たりとも、世襲制によって他人を支配する権利を持つことは出来ないという原則を定

めた最初の啓典が聖クルアーンである。政府とは、人民が選出した代表者の手に委ねられるべき信託統治機関であると聖クルアーンは教えている。ヨーロッパで誇らしげに宣言され、今日では目に余る程乱用されている民主主義の原則が最初に確立されたのは、実は聖クルアーンにおいてである。聖クルアーンは組織、規律、服従を厳しく命じる一方、公僕には正直と誠実をモットーに任務の遂行に励むべしと要求している。権威ある立場についた者の権利を制限し、又 その権力者も規律に従わなければならないと定めたのも聖クルアーンが最初である。この啓典は、如何なる人物に対しても、社会への絶対的権力を行使する権利を認めない。又慈悲深い支配や行政が、統治者の被統治者に対する好意に由来するものであってはならない。聖クルアーンに強調される原則として、主権は国民に在り、権威ある地位についた者は、神に代わって統治権を委ねられているだけなのである（4:59）。状況に合わせ、それに適した方法で権威を行使するということは、決して国民に対する権威者の恩寵ではなく、権威を与えられた人々に課せられた信頼の履行にすぎない。だからこそ、選挙の際には、有権者は党、或いは個人の思惑に影響されることなく、候補者が任務を遂行するのにふさわしい人物かどうかだけを唯一の選出基準として選ばなければならないと聖クルアーンは強調しているのだ。選ばれた人間が、最も慈悲深い方法で任務を遂行するのに最もふさわしい地位につくのは、その時である。党、或いは個人的な思惑から、不適当な人物を権威ある地位に擁立する手助けをする人間は、その選ばれた者と共に失政の責任を負わなければならない。その失政行為は自分には関係がないという言い逃れは許されない。公務に関して不正を行なえる立場に問題の人間が就いたのは、彼がその役を任せたからであるためだ。

聖クルアーンは個人と同様に、政府や行政機関も道徳基準を遵守すべしと強く説いている。厳しい道徳基準を政府や行政機関にまで適用する必要はないとする教義は、聖クルアーンでは認められない。市民にとっ

ても政治家にとっても真理とは価値のある必要不可欠なものであり、又個人であろうと行政機関であろうと罪は悪であり非難されるべきものであることには変わりはない、と聖クルアーンは教えている。個人の場合と同様に、ある政府はその国民に対してだけでなく、その隣国政府に対しても、正当な扱いや公正な待遇を示さなければならないという規定も聖クルアーンには定められている。

聖クルアーンは常に信者への気配りを欠かさない。ムスリムに勤勉を勧め、卑怯な振舞い、いじめ、狂信などを咎め、理性と熟慮を奨励する。自殺及び自滅を招くすべての行為を禁止する。聖クルアーンは政府に対して、国境を自衛する義務を課している。侵略を禁じてはいるが、外部からの侵略に対しては屈せぬ抵抗を義務付けている。戦争中の夜間の奇襲を禁止している。条約の厳正なる遵守を強調し、和解の機会があれば、如何なる場合にも見逃してはならないと命じている。

奴隷制度と聖クルアーン

聖クルアーンは同胞人、異邦人を問わず、奴隷売買を認めない。戦争捕虜を奴隷とすることは認めているが、如何なる捕虜も身代金さえ支払えば、自由が保証される (47:5)。身代金を支払った捕虜に対しては、何人もその者を拘束することは許されない。戦争捕虜となった者がすぐに身代金を支払えない場合には、労働という手段によって自由を獲得する権利が与えられている。もし労働も不可能な場合には、ムスリム達が助けの手を差し延べて、その者に自由を得る手段を見つけてやらなければならないと聖クルアーンは命じている (24:34)。だが捕虜達の中には、ムスリムではない親族の所へ戻って非ムスリム政府の下で暮らすよりも、彼のムスリムの主人の下に留まることを望む者が出て来るかもしれない。このような場合には、公正且つ正当な待遇を彼に与えなければならないと聖クルアーンは説く。このような場合には、主人はその捕虜

に対して自分と同じ食物を与え、自分と同じ品類の衣服を着せ、自分の馬と同じような馬を与えるか、或いは自分の馬に彼と交代で乗るようにしなければならないと聖預言者ムハンマドは語っている（Bukhari）。

聖クルアーンでは全人類の平等が強調されている。人類は一つの世界を築いていると教えた啓典は、聖クルアーンが最初である。聖クルアーンによれば、確かに世界は国、民族、部族などで分割されてはいるが、この分割はただ単にそれぞれの同一性を示すだけのものであり、権利という意味では、人類はすべて平等なのである。人種、経済、その他思いつく優越感に基づいた差別は、聖クルアーンにおいてすべて否定されている。又、聖クルアーンは次のような警告を与えている。「如何なる類のものであれ、優越感に溺れる者はいつか蔑まれ低く見られることになり、自分が見下していた者に追い抜かれることになるであろう」。聖クルアーンによるこの崇高な教義が広く受け入れられるようになれば、世界平和を確立する上での大きな障害物が取り除かれることになるであろう。

聖クルアーンでは、人々をばかげた軽はずみな行動に誘う恐れのあるものは、すべて禁じられている。ギャンブルやアルコール類などがよい例である。軽はずみな行動はすべて許されない。装飾品や絹の着用は、男性には全面的に禁止されているが、女性の場合は控え目に使用する限りにおいて認められている。

人間の魂

聖クルアーンは、人間の魂とその創造についての問題を詳細に取り扱っている唯一の啓典である。他の啓典は、この問題を全面的に無視するか、単に推測しているにすぎない。聖クルアーンには次のように書かれている。

「彼等は汝に、霊について問う。云え、『靈魂は我が主の命令による。

而して、お前たちが授かりし知識は、僅かなものにすぎず』(17:86)。

人間の魂は独自に存在する永遠のものであり、宇宙のどこかに、いわば保存されており、存在しているというよりは、逆に他の宇宙のどこかに留まっており、時々地上に降りて来て人間の肉体に入り込むのだという論理もあるが、この論理は上記の聖クルアーンからの引用箇所でも論破されている。人間の魂は他の生き物と同様に神によって創造され、神の導きの下に発達していくと、この聖クルアーンの節は説いている。又魂の誕生の過程は、決して肉体の誕生の過程と区別されるべきものではないとも述べられている。肉体を誕生させる一連の発達段階において魂も誕生し、進歩し、向上していくのである。この問題は聖クルアーンの別の箇所でも詳しく取り上げられている。そこには次のように書かれている。

「而して、われらは確かに人間を泥の精髓^{せいずい}から創れり。次いでわれらは彼を精液^{せいじやく}として安全な留まる所におさめたり。次いでわれらは、その精液^{かたま}を塊^{かたまり}りに創り、次いでその塊^{かたま}りを凝血^{ぎょうけつ}に創り、その凝血^{ぎょうけつ}を骨^{こつ}に創り、従ってその骨^{こつ}に肉^{にく}をまとわせたり。然る後にわれらは彼を新たな創造体として生育せしめたり。されば、最も優れた創造者なるアッラーこそ祝福の主なり」(23:13-15)。

生命を支え、力を維持するために男と女が摂っている滋養の結果、人間が誕生するとこの節で説明されている。この滋養が人間の体内に生殖の手段を創り出す。この要素が子宮に入ると、その生殖能力を持つ要素の一部が子宮に付着し、そこから栄養分を吸収し始める。23日もするとその要素は大きくなり始め、柔軟な物体に成長すると骨の形成が始まる。そしてしばらくして骨の周りに肉がつくと、肉体的生殖段階がすべて完了することになる。この発達と同時に或る種の蒸留作用が行なわれ、その結果、この成長の段階で動物的特徴が発展し、遂には知的人間の誕生となるのである。人間の魂は外部から入って来る物ではなく、母親の子宮の中で発達した物体から精粹作用によって生まれて来ると、聖クル

アーンのこの節で明示されている。魂は、それが蒸留されたその物体とは明らかに異なったもので、その物体に動物的特徴を与えたり、その物体を、理性と知性と進歩する能力とを備えた人間に変えてしまう効果に魂にはある。この意味を理解するには、一つのたとえとして化学変化について考えてみるとよい。化学変化においては異種の物質を結合させると全く別の性質を持った新しい物質が出来る。例えばアルコールはビート（赤かぶ）、小麦、とうもろこし、糖蜜を蒸留して作られる。こうして出来上がったアルコールは原料とは全く異なった性質を持つ。アルコールの原料は腐敗し易いが、アルコールは保存がきく。又アルコールの原料は人間の知力に直接影響を与えることはないが、アルコールは大きな影響力を持つ。

要するに聖クルアーンは、人間の魂の誕生について、全く新しい概念を提示している。このような概念は 以前のどの啓典にも見られなかった。既に述べたように、これまでの啓典の中には、この問題に関して全く触れていない物すらあるのである。そのような啓典は、人間をありのままに受けとめるに留まり、人類の創造やその魂について語る必要すら感じていない。この問題を取り上げていると称する啓典は次の2つの論理の内のどちらかを主張している。まずその1つは、人間の魂は 神の創造によるものではなく、神御自身と同様に永遠で 自立したものであり、神が適宜、この永遠の魂が人間の肉体に入るきっかけを与えて下さっているのだとする考え方である。そして、もう一つの考え方によると、魂は確かに創造されたものであって、決して自立してはいないが、神が創世時に 既に必要な数の魂を創造されており、この保存されていた魂を 神が時々取り出して人間の肉体の中に入れて下さっているのだと言う。聖クルアーンは この問題についての正しい見方を提示している最初で 且つ唯一の啓典である。魂の誕生は、創造の過程における人間の肉体の進化の最終段階である、と聖クルアーンは教えている。魂は外部から肉体に入り込むものではない。肉体が発達の過程を経ていくそ

の変化の結果として生まれてくるのが魂なのである。しかし、魂は肉体とは異質のものである。魂は人間の肉体の原動力となるだけでなく、肉体という物体から精製された、明らかに異なった永遠のものなのだ。それは丁度、とうもろこしや果物から蒸留して作ったアルコールが、その原料とは全く異なったものになるのと同じことである。この真理を明解にすることによって、聖クルアーンは、肉体と魂の関係に対する人間の姿勢に大革命を巻き起こした。人間の魂は自立した永遠のものであるとか、創生の際にまとめて沢山作られた魂が、時々必要に応じて地上に降ろされるなどと信じている者達は、肉体的条件や発達が魂の発達に何らかの影響を与えるという考え方を拒否してしまうであろう。ところが、聖クルアーンはこの真理と現実を明らかにして、人間の条件や発達は、精神的条件や発達と密接な関わりがあると強調している。事実、聖クルアーンの教えの下では、人間の肉体は或る段階において魂を発達させるようになっている。だが、聖クルアーンがもっと注目するように呼びかけているのは 次のような原理である。即ち、もし人間の肉体が健康的、且つ衛生的な過程に沿って発達するように心掛ければ、このような発達が無視されている場合よりも、その発達の末に形成される人間性はより力強く、より知的なものとなるであろう。この事実に目を向けるよう促しながら、聖クルアーンは、人間の知的、及び精神的な発達を目指す新しい道を切り開いてくれている。

魂には、それ本来の能力は何もないのだから、肉体の変化に影響を及ぼされるはずがないと確信している人もいるであろう。だが、この考えは間違っている。魂には何の能力もないと言い切るのは 無意味である。もし本当に何の能力もないのならば、魂が自立した存在ではあり得ない。魂には能力があるのだが、肉体を通してでなければ、その能力を発揮出来ないだけなのだ。物質的な世界にも、それ自体よりもきめの粗い物質を通してでなければ力を発揮することが出来ない物が各種あるであろう。例えば 我々は電気が他の物質を通してその効力を発揮するよ

うな現象に絶えず出遭っている。同様に、魂の能力は肉体を通して 様々な形で表面化しているのだ。

以上のような問題、及びこれに類する事柄は、すべて聖クルアーンで取り挙げられている。だが当然ながら、この入門書ではスペースに限りがあるため、これらの問題をすべて討議するのは不可能である。聖クルアーンでは、人間の肉体的、道徳的、精神的発達、及び進歩に必要な事柄がすべて語られており、いつの時代にも、この内容は正当なものと思なされて来た。科学や学習が高度な進歩を遂げたこの20世紀になっても、聖クルアーンは すべて本当に必要とするものを満たしていることがわかる。人間の肉体的、知的又は精神的純粋さと進歩に関わる事柄で、聖クルアーンの説明が 不適當だと思えるようなものは何一つない。これらの事柄に関しては、ここでは簡単に触れる程度で止めておこう。詳細を求めるのならば、「翻訳書」又は各節に付け加えられている「注釈」を参照していただきたい。又「英文大解説書」(The Large Edition of English Commentary) やウルドゥー語による聖クルアーンの解説書」(The Urdu Commentary of the Qurān) などもお勧めしておく。

聖クルアーンによる精神世界の構想

ここまでは、聖クルアーンの教えに見られる特徴を簡単にまとめたが、次に聖クルアーンが描いている精神世界構想に目を向けてみよう。物質的世界をよく見ると、その世界が一つのシステムに基づいて動いているのがわかる。即ち、数個の惑星が 太陽の周りを回っており、その太陽は、その系列の惑星を従えて、一つのゴールに向かって動いている。そのゴールこそ 近代数学者が、数種の太陽系が繋っている中心だと主張しているものなのだ。このような見方が 事実に基づいたものであらうとなかろうと、全物質的世界が一つのシステムに従って動いていることだけは否定出来ない。もしそうでなかったとしたら、ずっと以前に世界

は混沌とした状態になってしまっていたであろう。このシステムは様々な面から物事を規制する一連の法によって支配されており、その法の結果、世界には莫大な種類の物質や物が溢れるようになったのだ。物質的世界の進歩及び発達は、このような物質や物を如何に使用し開発するかにかかっている。聖クルアーンの教えによれば、精神世界も同様に、全世界を統制する包括的な中心である神を巡って回る一つのシステムの下に動いている。この神の支配を受けないものやこの支配からは独立したものは、この世界には何も存在しない。中心たる神は、唯一つの存在であり、自存したものであって、創造されたものではない。神は、御自身の計画を実現するために他のものに頼ったりはなさない。神は、子として生まれたり、子をもうけたりする存在ではないし、神の力や属性を分担するような仲間や協力者なども、神にはいない。このことはアルイフラース（第112章）ではっきりと記されている。該当章の中で、神は聖預言者ムハンマドに対して、「神は、その力と属性において唯一の存在であるというのが 真理である」と宣言せよと指示している。時には 或る物や人間の特性と神の特性との間に類似点を見出す人がいるかもしれないが、そのような類似点はほんの見かけだけのものにすぎない。例えば、我々が「神は存在する」と言えば、「人間も動物も、その他すべてのものだって存在している」という返事が返って来るであろう。どちらの場合にも「存在」という概念を表わすのに同じ言葉が用いられているが、それぞれが同じ現実を表わしている訳ではない。我々が「神は存在する」という時、それは神は独立した存在であり神自体で完全であって、独自の存在を何か他の存在 或いは物に依存しているのではないという意味である。

一方我々が「人が存在する」、「動物が存在する」、「何か物が存在する」などと言う時は、別の意味を持つ。即ち、人や動物や物の起因と条件が相互に作用した結果、これらの物が創造されたのであり、その起因と条件が存続する限り、これらの物も存在し続けるであろう。だが、もしそ

の起因と条件が取り除かれるか、或いは、物質的な影響を受けたりするようなことがあれば、人も動物も物も存在しなくなるか、或いは物質的影響を受けることになるであろう。例えば人は魂と肉体の関係が存続する限り生きる。だが、この関係は一時的なものであって、必ず終りが来る。そして、その終りが来た時肉体は存続しても最早生きてはいない。又肉体は特定の形を作りあげる無数の原子から成り立っており、その原子は一定の条件の下で、一定の結合をする。その結合が分解されてしまえば、肉体はもう肉体としては存在しなくなる。死んだ肉体は地に埋められると、化学変化が起こって、分解してしまう。人間の肉体を形成していた原子は存在していても、肉体を形成するための結合を引き起こしていた起因や条件に変化が起これば、肉体はもう存在しなくなるのだ。肉体が水や火や電気的作用で分解されても同じことが起こる。肉体を形成していた問題の原子は残っているとしても、その原子は新しいものを形作るようになり、肉体は最早 その形或いは、その構成を維持することは出来ない。しかしこのような考え方は神には当てはまらない。神を誕生させ、その存在を持続させる外的起因や条件などは何もない。神は完全、且つ時間の支配を受けない故に、存在する。あらゆる物が時間の支配を受けているのに、何故神はその支配を受けないのか、という問題を理解出来るだけの頭脳は人間にはないという考えもあるであろう。だが、真実はこうなのだ。神が存在するという意味は、人間やその他の物質が存在する意味とは異なっている。例え両者に類似点が見られようと、それはほんの表面的なものにすぎない。神は唯一の存在であって、その神の属性を他の存在と共有されることはない。聖クルアーンの別の箇所に、「神は天地の創造主である」という言葉がある。神は人類、動物、そしてあらゆるものをすべて対を成して創造され、この方法によって物質的世界が発展出来るよう準備をして下さった (42:12)。即ち、人間も動物も野菜も、固形物ですら、雌と雄、陰と陽、或いは別の表現で表わされるような対を成す形で創られており、すべて対を成す形で創られた物

に基づいて世界が発展していくのである。又、聖クルアーンには この
ような言葉も記されている。

「而して、われらはすべてのもののうち^{ついで}対を創造せり。お前たちが
忠告に従わんがために」(51:50)。

世界中のあらゆる物を熟視し、すべてが対を成して創られているのを知ることによって、人間は これらの創造者は、神以外にはあり得ないという結論に到達出来るというのが、この節の意味である。何故ならばこれらの創造物は、それ自体では不完全であり、雄の側の適切な助けがあって初めて存続し、機能を果たし得るからである。

簡単に言えば、世界の中心たるべき神は、それ自体で唯一の存在であり、神に真実に類似する存在などは何もないと、聖クルアーンは教えているのだ。万物が その存続、及び機能遂行を別の存在に依存しているのに対し、万物の中心である神は、その存在、或いはその特性の顯示を他の何にも依存してはいない。神は 子として生まれたものでもなければ、子をもうけるものでもない、と聖クルアーンは説いている。ここがキリスト教の教えと 聖クルアーンの教えとの大きな相違点である。その他のアーリア人の教義同様、キリスト教も神が子供達を産んだとしている。一方聖クルアーンは、子供達を必要とするのは他に依存しており、死を免れ得ない者達だけだと教えている。神は唯一の存在で、永遠に存在するゆえに、子供を必要としない。神は唯一の存在ゆえに父を持たない。神は子として生まれモーゼず、子をもうけもしないという点で唯一の存在であり、且つ類似の力や属性を持つものは他にはいないという点でも唯一の存在である。言い換えれば、神は創造物ではなく、子をもうけるものでもなければ、神に匹敵するものもない。聖クルアーンにおけるこの最後の教えにより、ゾロアスター教などの宗教で教えられる多神教の教義の誤りが 証明される。

アルイフラス章で (112:2,3,4,5)、短いが含蓄のある言葉で、万物の中心は神であり、唯一の存在であると記されている。神は、万物の唯一

の源であり、その特性を顕示するのに誰の手も借りない。神は子として生まれたものでも、子をなすものでもない。神の属性を共有出来る程の力を持つものではなく、また神に対抗出来る程の地位につけるような存在もない。このほんの数語で語られた簡潔な章は、他のすべての宗教の神格に関わる教義で犯されている誤りを正し、神の完全なる唯一性を宣言している。

全人類の神

神は自分達とだけ特別の関わりを持って下さっており、その他の人々はすべて除外されていると信徒が信じ込まされている宗教もある。そのような信徒にとっては、神は万物の創造主であるが、神は特別に選ばれた人々だけの神なのである。イスラエル人、ヒンドゥー教徒、ゾロアスター教徒などが、そのような信徒のよい例である。聖クルアーンは、この類の教義を否定し、神は唯一の存在というだけでなく、万物の源であると説いている。アルイフラス章の最初の節で使われている Ahad という言葉は、独一性と唯一性を意味し、即ちそれは、数の中には含まれないが、すべての数がそこに続くようになっている源である。この節が指し示しているように、神は全人類を等しく導き、特定の人々だけに特別の愛着を示すようなことはない。神に少しでも近づきたいと努力をする者に対しては、神は みもとへの道を示して手招きして下さる。神はすべての人類の創造の源であるため、アラブ人、ユダヤ人、ペルシャ人、インド人、中国人、ギリシャ人、アフリカ人等すべてを平等に見ておられる。神だけが万物の源となる唯一の存在なのである。神は子として生まれたものではないと宣言することにより、聖クルアーンは、ヒンドゥー教やキリスト教の中心的教義を論破している。子として生まれた者は、自らの誕生を誰か他の者に依存している訳だから、彼自身は神ではあり得ない。光と闇は明らかに相反する力で、事実上、二つの均衡する神を

打ち立てている宗教もあるが、神には匹敵するものがないと宣言することにより、聖クルアーンは、そのような宗教の教義の誤りを証明している。

神 — あらゆる創造の究極的起因

聖クルアーンは、神はあらゆる創造の究極的起因であるとも教えている。即ち、創造はすべて神から始まり神に返るということである。聖クルアーンには このように書かれている。

「彼こそは最初にして、最後なり、また顕^{けん}なるものにして、隠^{いん}なるもの、^{しか}而して彼こそは萬事を熟知し給う」(57:4)。

この言葉の意味は、万物はすべてその存在を神に負っており、あらゆる物の差異も、神の法によってもたらされているということである。もし神が万物の存在を許さないと決めたなら、万物は存在し得なかったであろう。そしてもし神が万物の破壊を招く法を普及されなかったならば、万物は破壊することもなかったであろう。創造も破壊もすべてこうして神の法の下に支配されている。そしてこれにより、世界万物のシステムは 知的なるものによって確立されているという事実が証明されているのだ。聖クルアーンは 次のように語っている。

「彼は諸天と大地の創始者なり、配偶者も持たずして、安んぞ彼に子在らんや？されど彼一切を創造し、また彼はあらゆることを知り給う。それがお前たちの主アッラーなり。彼の外に神なし。万物の創造者なり。されば彼を崇拜せよ。而して、彼は一切を監視す」(6:102,103)。

神はあらゆる創造の源だから、神には息子を持つ必要がないという点をこの節は指摘している。息子は、偶然か或いは或る必要を満たすために生まれる。男と女が結ばれれば、時には子を産む目的ではなかったとしても、結果的に子供が出来ることもあるであろう。だが神に関して言えば、この可能性はあり得ない。上述の節にあるように、神には配偶者

が居ないからである。しかし神が一つの生き物を創り、その者に御自身の息子としての地位を与えられるという場合もあると考える人もいるだろう。だが、息子が必要となるのは、父親が自分に課せられた役割を遂行するのに助けがいる時や、父親の名を永遠に存続させたい時だけである。万物の創造主であり、支配者でもある神は他の助けなど必要ないし、永遠の主である神の名はいつまでも残るものだと聖クルアーンは指摘する。だから神にとって、息子を創造したり指名したりする必然性は何もないのである。時には人間は、将来の不測の事態に備えて準備をすることもあるだろう。だが、神は完全にすべてを見透かしておられるので、将来の不測の事態に備える必要は何もない、と聖クルアーンは明示している。神は過去も未来もすべて御存知なので、将来に備えて事前に対策を取る必要はない。更に聖クルアーンは 次のような事実にも目を向けるよう促している。神は人間を創造されただけでなく、弱く劣ったものから強く優れた者へと人間を育て、発達させて下さっている。この神以外には神はない。神が万物を創造されたのだ。ペルシャ人であろうと、アラブ人であろうと、ユダヤ教徒であろうと、ヒンドゥー教徒であろうと、神はすべての人類を平等に見守って下さっている。神はすべての人間を創造され、すべての人間が進歩出来るように手段を与えて下さっている。だからこの神に対してのみ信仰を捧げるのが 人間すべてに与えられた義務なのである。神だけが万物を支配し、人間は神との関わりを育むことによってのみ 滅亡と破壊を免れるのであって、神を離れての平穏はあり得ないからである。

神は世界のすべてを御存知だと 聖クルアーンは教えている。神の視界に入らぬ物は何もない。聖クルアーンは このように語っている。「天にあるもの地にあるもの、すべて彼の^{もの}所有なり」(2:256)。

別の箇所には 次のような記述もある。

汝が如何なる状態にあり、またその中でクルアーンを読誦しようとも、またお前たちがどんな行為をなさうとも、お前たちがそ

れに夢中になっている時、われらはお前達を立証す。また地においても、天においても、たとえ微塵^{みじん}の重さでも汝の主より隠れる^{あた}能わず。またそれよりも小なるものも、或いは大なるものも、明白なる聖典^{うち}の中にあり (10:62)。

この節からわかるように、人間の精神状態、人間が口にする言葉、一挙一動、すべてが神には明らかである。原子一個程の細かいこと、いやそれ以上に小さなことでも神の目を逃れることは出来ないのだ。神は最小のものから最大のものまですべてを感知されている。そして、すべてを御存知だけでなく、行なわれること、起こることもすべて、来たるべき時に当然の結果が生まれるように保存されているのである。上記の節に、これらすべての事柄は、明瞭な書にすべて記録されていると書かれている。即ち、通常の記録は人間の目から隠されて保存されている間に、記録者自身の視野からも消えてしまうのに対し、あらゆる出来事が記されている神の記録は、それ自体がすべてを物語る。言い換えれば、あらゆる行動は、神の法と神の意志に従って当然の結果を引き起こすようになっているのだ。更に、聖クルアーンの別の箇所、神は肉体的な感覚を超越しているため「視覚は彼を追いつかず、されど彼は視覚を追いつくなり」(6:104) という記述がある。つまり、神はその本質において、あらゆる物質的なものとは異なっているため、肉体的感覚を通して神を感知するのは不可能だということである。

神には、神の構想を実行する力が充分にあると聖クルアーンは教えている。このような言葉がある。「全能にまします」(2:110) この節がただ単に「神には何でも出来る力がある」ということだけを意味しているのではないことを特記しておこう。このような言葉遣いをすると 愚かな質問をしたがる人がいるからである。例えば、神には自らを破滅させる力もあるのか、とか 神には自分と同じような別の神を創造する力もあるのか、などといった質問である。明らかに神にとって、このようなことをするのはばかげていて、望ましいことではないのであろうし、愚か

しいことや望ましくないことに力を注ぐのは神の尊厳と完全さに相反する行為である。それ故聖クルアーンでは、神にはすべてを成す力があるという表現を避け、単に、神には、神が行なおうと決められたことを実行する力があるという表現に留めてある。完全なる神は完全なことだけを決意されるのだ。神が自らを破滅したり、神と同じような別の神を創ろうと望まれるなどと考えるのは愚の骨頂である。

神の主要属性

聖クルアーンの最初の章（アルファーティハ章）では、神の属性の効果について説明されている。その説明によると、神には四つの主要属性があり、その効果はそれぞれにあらゆる方面で人間に影響を与えている。この四つの属性の内の第一は Rabb al-Ālamīn である。即ち、神は万物を創造され、万物が徐々に完全なものへより近づけるように育てて下さっている。

第二に、神は Rahmān である。即ち、神に創造された者達が何の努力もしていなくても、神は 彼等の発達や進歩に必要なものをすべて用意して下さっている。

第三に、神は Rahīm である。即ち、神に創造され、意志と知性を与えられた者達が自ら進んで善行を重ね、悪と戦う道を選べば、神は彼等に最高の恩恵を与えて下さり、その恩恵は 限りなく続くであろう。

第四に 神は Mālik Yaum al-Dīn である。即ち、あらゆる事柄に関する究極的な判定は神の御手に委ねられている。万物の起源は神であり、万物の終局もやはり神の御手にある。人間を始めすべての創造物は一時的なはかない変化を引き起こすかもしれないが、世界に恒久の変化を与える程の力はない。例えば、人間には物や魂を創造する力はない。同時に、物に一時的な影響を与えて形を変えることは出来るかもしれないが、物を破壊してしまう力も、人間は持ち合わせていない。創造という属性

が神だけのものであるように、破壊という属性も神だけのものなのである。神が破壊を命じられる迄は、如何なる物にも究極的な破壊は起こらない。これは明白な真理であり、聖クルアーンは、神は最後の審判の主であるという表現でこの真理を説明している。つまりあらゆるものが審判を受ける時、最終的な判断は神の御手に委ねられており、万物の主としての能力をたずさえた神が、判定をして下さるのを待つのである。この時の神は、単なる、目の前の裁かれる両者の権利について判定を下す一般の裁判官ではない。一般の裁判官は、それぞれの権利と義務について訴えている両者の争い事に、公平な判定を下す義務を持っている。神はそのような義務には束縛されない。神が判定を下される時には、すべての人間が公平に、当然の裁きを受けるけれども、神御自身が望まれる限りにおいて、罪を軽減する自由をお持ちだからである。神は決して、よく言われる一ポンドの肉などを要求されはしない。主人が自分の奴隷に対して慈悲を持って接し、優しく振る舞い、思いやりを示してやるように、神も御自分の創造物の罪を許し、彼等の過ちを見逃し、思いやりを示して下さるのである。神のこの属性に感謝が出来ないために、キリスト教徒がいう贖罪のような、とうてい支持出来ないような教義が生まれてしまったのである。キリスト教の教義によれば、神には世間の裁判官と同様に、人間の過ちを許す力がない。キリスト教徒達はこのような間違った想定をしてしまったがために、裁判官は訴えている両者の間で裁定を下すために必要となるだけであって、裁判官自身には争点となっている問題に関しては何の権利もないという事実を見落としてしまっている。しかし神とその創造物との関わりは、裁判官と争いの両当事者達との係わりとは全く異なったものである。神は原告でもあり、裁定を下す権威者でもあるのだ。裁判官は 彼自身が同時に原告にはなり得ない。裁判官は、目の前の両者の権利について決定を下すために必要とされるにすぎない。言葉を換えれば、裁判官は原告と被告の間の決断を下さなければならないのだ。裁かれる両者は 民間人同士かもしれないし、片

方が国の代表で もう一方が 一個人であるかもしれない。神の場合は、神御自身とその創造物との関わりに決断を下されるのである。神はこのように二つの立場に立っておられる。神は 原告でもあり、裁判官でもあられる。原告としての神は 全面的に罪を許したり、望む限りの軽減をする資格も持っていられる。このような罪の軽減は慈悲であっても、決して不当ではない。何故ならば、罪の軽減は神御自身の要求に係わり、誰かからその権利を奪ってしまうような事ではないからである。このように考えれば 完全に 理にかなっている。

一方、贖罪という教義は 全く理に反している。もし、イエスの受難への信仰が罪を許す上に欠くべからざるものならば、イエス以前の預言者達及び、その信徒達は如何にして救いを得たのであろうか。全人類が救いを得られるためには、イエスの受難は 創生の時に起こるべきではなかったのか。又、罪の軽減は、一人の人間の十字架上の死への信仰によってのみ得られるものであって、心の浄化を図る自然の方法とも言うべき悔恨を通してではないというのはどういうことか。外的な事柄への信仰は心の浄化を図る自然な方法ではない。それに対して深い悔恨や悔い改めは、人間の憧れや願望に或る種の死を科し、彼に有徳の人生への道を歩むべく新鮮な決意をさせるものであるため、そのような悔恨は心の浄化を図るのに自然で確かな方法である。イエスの受難を信仰することによって罪人（つみびと）の心が浄化され、その結果、神がその人の罪を許して下さるとキリスト教徒は信じている。それなのに、罪人が悔い改めて神の御前で自らの過ちを認め、許しを請えば、神はその人の罪と過ちを許して下さるという真理をキリスト教徒が受け入れようとなしないのは 正に驚きである。

キリスト教徒達は日常において、この原則に従っている。或る人間が罪を犯し、心からの良心の呵責にさいなまれ、罪を認め、改心を約束すれば、彼等はこの人間を許す。例えばこの原則は学校などでも守られている。校長先生が、誤った行動をしているか、学業や果たすべき義務を

おろそかにしている生徒を見つけ、その生徒が悔恨して、今度は悔い改めようとしているのを確信すれば、彼はこの生徒を許してやる。だが、もし贖罪という教義を取り上げるならば、このような場合に必要なのは、その生徒に「私は間違っていました、今はイエスの受難への信仰を持っていますので、私の罪を見逃して下さい」とでも言わせることであろう。しかし、このようなことは起こらない。許されるためには、まず生徒が自分の過ちを恥じており、今後は悔い改めるという態度を示さなければならないと、校長先生は主張する。彼は、その生徒がただ単に、イエスの受難への信仰を抱いていると確信するだけでは、その生徒を許す気などないのだ。

しかしながら、イエスの受難への信仰は心の浄化に等しいと思われているかもしれない。だが、この考えは世界中のキリスト教徒達の指導の下に伝えられた偽りなのである。キリスト教諸国にはびこっている悪や墮落は世界の他の地域ではどこでも中々受け入れられないだろう。それでは、贖罪への信仰を通して、キリスト教徒は一体何を得ているのだろうか。もし、彼等がこの教義への信仰を通して救いを得ると断言するならば、これは支持出来ない。救いは心からの悔恨を通してのみ得られるものだし、イエス以前の預言者達やその信徒達は、この方法だけで救いを得ていたと既に証明済みだからである。もし、キリスト教徒達が、贖罪は心を浄化させてくれると主張するならば、彼等がいくら贖罪への信仰心を抱いていたとしても、彼等は目的を達することはないであろう。我々は決して、純潔な心を持ったキリスト教徒は一人もいないと言っているわけではない。我々が断言するのは、贖罪への信仰のおかげで心の純潔さを保っているキリスト教徒は一人もいないという点である。一人のキリスト教徒の心が純潔であるのは、他の人々の心と同様に、悔恨や悔い改め、或いは神への崇拜、即ち祈り及び断食によって浄化されているのである。イエス自身の言葉にもあるように、「このたぐいは、祈りや断食によらなければ、どうしても追い出すことは出来ない」(マルクによ

る福音書 第9章 29節)。

神のその他の属性

聖クルアーンに出て来る様々な神の属性について詳細な説明をすることは、明白にであれ、推論としてであれ、無理である。というのも、すべての属性が今迄語って来た主要特性から派生して来ているものだからである。だが、ここでは 簡単にだけ説明しておこう。

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| (1) Al-Mālik | 主権 |
| (2) Al-Quddūs | 聖なるもの |
| (3) Al-Salām | 平和の源 |
| (4) Al-Mu`min | 安全保障の贈り主 |
| (5) Al-Muhaimin | 保護者 |
| (6) Al-Azīz | 強力 |
| (7) Al-Jabbār | 征服者 |
| (8) Al-Mutakabbir | 崇高なる者 |
| (9) Al-Khāliq | 創造主 |
| (10) Al-Bārī | 作り主 |
| (11) Al-Musawwir | 造形者 |
| (12) Al-Ghaffār | 偉大なる許す者 |
| (13) Al-Qahhār | 至高者 |
| (14) Al-Wahhāb | 贈り主 |
| (15) Al-Razzāq | 偉大なる支持者 |
| (16) Al-Fattāh | 開放者(審判、人類を成功へと導くドアの) |
| (17) Al-ʿAlīm | 全知 |
| (18) Al-Qābid | 統制者；万物を限界内に納め置く者；
捕らえる者 |
| (19) Al-Bāsīt | 拡大者；生存手段を拡大する者 |

(20) Al-Khāfid	失望させる者；高慢な者の気をくじかせる者
(21) Al-Rāfi	称揚者
(22) Al-Mu‘izz	栄誉を授ける者
(23) Al-Mudhill	威信を下げる者；奢り高ぶる者の威信を引き下げる者
(24) Al-Samī	全聴
(25) Al-Basīr	全視
(26) Al-Hakam	賢明なる審判
(27) Al-Adl	正義
(28) Al-Latif	不可能なる者；微妙なもの迄すべてを知る者 ；慈悲深き者
(29) Al-Khabīr	全認知
(30) Al-Halīm	忍耐
(31) Al-Azīm	偉大
(32) Al-Ghafūr	最も許しを与えてくれる者
(33) Al-Shakūr	最もよく感知せる者
(34) Al-Aliyy	高き者
(35) Al-Kabīr	比類なき偉大さ
(36) Al-Hafīz	守護者
(37) Al-Muqīt	保持者；あらゆる創造物の能力を維持させてくれる者；強大な力
(38) Al-Hasīb	評価する者
(39) Al-Jalīl	尊厳の主
(40) Al-Karīm	高貴な者
(41) Al-Raqīb	監視者
(42) Al-Mujīb	祈りに応える者
(43) Al-Wāsi	寛大；すべてを包み込んでくれる者

(44) Al-Hakīm	英知
(45) Al-Wadūd	愛する者
(46) Al-Majīd	栄誉の主
(47) Al-Bā'ith	(死者を)起こさせる者
(48) Al-Shahīd	証人；観察者
(49) Al-Haqq	真理
(50) Al-Wakīl	物事の段取りをする者；管理者
(51) Al-Qawiyy	強大な力
(52) Al-Matīn	強者
(53) Al-Waliyy	友人
(54) Al-Hamīd	賞賛に値する者
(55) Al-Muhsī	記録者
(56) Al-Mubd ī	(生命の)創造者；創始者
(57) Al-Mu'īd	(生命の)反復者
(58) Al-Muhyī	生命を授ける者
(59) Al-Mumīt	死の原因の支配者；破壊者
(60) Al-Hayy	生きている者
(61) Al-Qayyūm	自立 及び 全維持
(62) Al-Wājid	発見者；探知者
(63) Al-Mājid	栄光
(64) Al-Qādir	権力 及び 権威の所有者
(65) Al-Muqtadir	全能
(66) Al-Muqaddim	(進歩と発展の手段の)提供者
(67) Al-Mu'akhkhir	墮落させる者；遅延させる者
(68) Al-Awwal	最初
(69) Al-Ākhir	最後
(70) Al-Zāhir	顕在；創造された者すべてがその存在を

	指摘する者
(71) Al-Bātin	隠れし者；その存在を通してあらゆるものの隠された現実が暴露されるというその主
(72) Al-Wālī	統治者
(73) Al-Muta‘ālī	最高；優れた特性の所有者
(74) Al-Barr	慈愛
(75) Al-Tawwāb	思いやりを込めた反復；悔恨の受容者
(76) Al-Mun‘im	恩恵を授ける者
(77) Al-Muntaqim	適切な罰を与える者；報復者
(78) Al-Afuww	罪を抹消する者
(79) Al-Ra‘ūf	哀れみ深き者
(80) Mālik al-Mulk	主権の主
(81) Al-Muqsit	公正
(82) Al-Jāmī	召集者；統合者
(83) Al-Ghaniyy	自給自足
(84) Al-Mughnī	充足手段の提供者；富ませる者
(85) Al-Mānī	制止者；禁止者
(86) Al-Dārr	罪を科す者
(87) Al-Nāfi	慈善者
(88) Al-Nūr	光
(89) Al-Hādī	導き
(90) Al-Badī	考案者
(91) Al-Bāqī	生き残る者
(92) Al-Wārith	相続人
(93) Al-Rashīd	正しき道への指導者
(94) Al-Sabūr	受難者
(95) Dhul Arsh	王座の主

(96) Dhul Wqār	冷静さと威厳の所有者；すべてを無理なく処理し、或る目的を達成する者
(97) Al-Mutakallim	語り主；その僕達に語りかける者
(98) Al-Shāfi	治癒者
(99) Al-Kāfi	充足者
(100) Al-Ahad	比類なき存在；唯一性の主
(101) Al-Wāhid	唯一
(102) Al-Samad	すべての懇願の的；自立；永遠
(103) Dhul Jalāl wal Ikrām	尊厳と博愛の主

三種に分類される神の特性

以上が、聖クルアーンに明確に記されているか、或いは聖クルアーンの各節から推論出来る神の属性である。これらの属性をよく考慮してみると、聖クルアーンが強調している精神的世界の構想が はっきりと浮かび上がる。これらの特性は大きく3つに分類出来る。

その一：神独特のものであって、その創造物とは何の関係もない属性。例えば Al-Hayy — 生きている者、Al-Qādir — 権力及び、権威の所有者、Al-Majīd — 栄光 など。

その二：創造された万物に関係があり、神とその創造物との関係や、自らの創造物に対する神の態度を示す属性。例えば、Al-Khāliq — 創造主、Al-Malik — 主権 など。

その三：神の創造物の内、意志を与えられた者が重ねる善行又は悪行の結果、作動し始める特性。例えば、Al-Rahīm — 神は人間の自ら進んで行なう善行に対して、豊富に且つ、何度も報いる。Mālik Yaum al-Dīn — 最後の審判の日の主、Al-Afuww — 神は過ちを見逃す、Al-R`aūf — 神は哀れみ深き者、など。

このような属性は 一部重複しているように見えるが、よく考えて

みると、その中には微妙な差異があるのがわかる。例えば Khāliq Kullī Shai'in、Al-Badī、Al-Fātir、Al-Khāliq、Al-Bāri、Al-Mu'īd、Al-Musawwir、Al-Rabb など は すべて創造に関する属性である。一見は、すべて重複しているように見えるが、実は、それぞれが異なった面を持っているのである。

Khāliq Kullī Shai'in は、神が万物を創造されたという意味であり、神が事柄や魂をも創造された主であることを示している。神は形成をされるが、創造をされるわけではない と信じている人達もいる。例えば、そのような人達は、神を事柄や魂の創造主とはみなしていないのであろう。彼等は、事柄や魂は自立した存在であって、神御自身同様、永遠のものだと信じ込んでいるのだ。もし神が聖クルアーンの中で単に創造主としてのみ記述されていたとすれば、そのような人達は、神が肉体と魂を結合させて形成されるのだから見方によっては神が人類を創造されると言っても構わないという点で、自分達も神を創造主として信じると主張出来たであろう。だが、このような解釈をすると、この問題に関する聖クルアーンの本当の意味が 疑わしくなる。聖クルアーンは、神を万物の創造主であると記述することによって 創造という属性の範囲を拡大し、事柄や魂の創造をも含めるようにしたのである。

Badī という属性は、神が宇宙のシステムを計画し、構想案を練られたという意味である。だから、このシステムは偶然に出来上がったものでもなければ、どこから模倣したものでもない。

Fātir は、殻を破って何かを取り出すという意味である。故に Fātir という属性が示すように、神が 発達能力を内在させた事柄を創造され、時が熟すのを見計らって、神はこのような能力を内に閉じ込めている殻、或いは 覆いを打ち破り、中の能力を発揮出来るようにして下さるのだ。例えば、種子は苗木や木に成長出来る能力を持っているが、或る一定の季節に 一定の条件下になれば、この成長能力は作動しない。条件が整い、季節が来れば、種子は成長し始める。このように、神は一連の法

に従って宇宙を創造され、その宇宙の隅々迄がその法に従って発展するというのがこの属性で示されている。絶えず宇宙のどこかが準備段階を通過して行き、時期が来ると、内在していた能力が作動し始め、新しい形の生命が認められるようになる。

Khalq（創造）という属性も やはり 構想を意味している。だから Khāliq（創造主）の意味も、神が万物を適切な秩序で整理して下さっているので宇宙は一つのシステムによって支配されている ということである。

Bārī' という属性は、神が様々な形で創造を表わし始め、それから 法を定められるということを示している。神によって創造された物はその法に従って反復し、その種族を増やして行くのである。この属性は、反復を意味する Mu'īd という属性によって強化される。

Musawwir は、神が各々の創造物にその機能に適した形を与える属性を示している。この属性からわかるように、創造とは、単に創造物に適した能力を与えるのみでなく、適した形をも与えて初めて完成するのである。

Rabb という属性の意味は、神が創造の後も、創造物の能力を徐々に育てて行くことによって、その創造物を完全体へと導いていくことである。

このように、上記のすべての属性が、それぞれ 創造における異なった面を示している。同様に、一見は重複していたり、単に繰り返しの思えるような他の特性も 実は非常に微妙な差異を示すように出来ている。それぞれの属性の意義を一度把握してしまえば、聖クルアーンが述べている精神的世界の美しさや栄光が よくわかるようになるであろう。

新約聖書は、神の属性について殆ど触れていない。モーゼ五書も、他のどの啓典も、これらの属性については全く語っていない。だが ユダヤ教の教典を全部ひもといてみれば、我々が上記に示した属性の大部分が、様々な箇所で述べられているのがわかるであろう。それでも、全部

の属性が述べられている訳ではない。ムスリムは一般に、神には 99 の属性があると考えている。この考え方は、ユダヤ教の教典で語られている神の属性に基づく、或るユダヤの伝承に関連している。聖クルアーンでは、我々が上記に示した 103 をはるかに超える数の属性について語られている。我々が全部を列記しなかつただけである。事実、人間とは関わりがないような神の属性の多くは 聖クルアーンの中でも述べられていない。だから神の属性にはいくつあるかなどと 数を特定してしまうのは 賢明なことではない。イスラムの文学において、この問題に関する数が挙げられている場合もあるが、それは ただ ユダヤ人の主張と対比させるためだけのものであって、絶対的事実を示すためのものではない。

ヴェーダも 神の属性については余り触れていない。ゼンダベスタも同様である。真実、聖クルアーンだけは 完全なる書であり、精神的発達の全段階を完全に導いてくれるものなので、人間が知っておく必要がある神の属性について、すべてを述べている。その属性の中には、それ以前の啓典に書かれていたものも、余り書かれていなかったものも、すべてが 含まれている。

矛盾のない神の属性

上述のような神の属性には、お互いに一致しないものがあるという申し立てが行なわれることがある。例えば 神は慈悲深いにも関わらず、罰を与え給う。神には必要とするものが何もないにも関わらず、神が人間やその他の生き物を導くために必要なものを創り、準備して下さっているのは、神が彼等の存在を望んでおられるということになる。このような批判が出て来るのは、概して、人々の心の中での反省が充分ではないからである。そのような人々は、宇宙の本当の美しさの大部分は その多様性のおかげであるという事実気付いていない。又彼等が不一致と考えるような事柄は、如何に宇宙の模様が豊かなものであるかを示す

証拠であるという事実すら彼等にはわかっていない。宇宙に存在するすべてのものが、その指定された球の中で動いており、その一つ一つが巨大な鎖をなす輪であると考えてみたらよい。

神が罰を与え給うのは事実である。だが、罪に対する報いや罰を規定する神の法に従って、罰は与えられるのだ。この法に従って罰を科す必要がある時には、神は罰を命じられる。これに対し、神は慈悲や許しの属性を示す法をも定めて下さっている。この法に従って、慈悲や許しの属性を行使する必要が生じた場合、このような属性が発揮されるのである。このように、一人の人間に対しては処罰の属性が示され、別の人間に対しては 許しや慈悲や恩恵の属性が示されるという事が同時に起こるのである。神の創造の属性が発揮されて、一人の人間が誕生する一方で、神の破壊の属性が示されて別の人間が死んでいく。聖クルアーンが神を Rabb ul-Ālamīn、即ち「創造し、育て、完成へと導く神」と称しているにも関わらず、何故 神は人間に死をもたらすのか、という質問が概して問いかけられる。このような疑問を抱くのは、人間に反省の念が 欠如しているからである。聖クルアーンでは、神は この世の Rabb ではなく、あらゆる世界の Rabb である、と表記されているのだ。死とは、ある宇宙から別の宇宙への移転を意味する。このように移転された人間は、新しい宇宙で、神の Rubūbiyyah（創造と育成）の属性の顕示を受けるのである。如何なる宇宙であろうとも、存在するすべてのものが Rubūbiyyah の属性の下で育成される。然しながら、もし何かが存在することをやめてしまったと考えるならば、その時そのものは宇宙の一部としての存在を放棄してしまうのであり、そのものに対する Rabb ul-Ālamīn（森羅万象の創造主、維持者、そして 育成者）としての属性は一切顕示されなくなってしまうのである。

人類に影響を与える神の属性を 規制し調整するために、神は二つの法を施行された、と聖クルアーンは教えている。その第一は、「…我が慈悲は一切を包容す」(7:157) そして、第二は「お前たち如何になりしか、

お前達がアッラーに如何なる尊厳をも望まざることは？」(71:14) という節で始まっている。第二の節では、神がなされることは、すべて英知に基づいている、という意味が表わされている。聖クルアーンで述べられている神の属性の一つに「英知」があり、その語の意味もやはり同じである。

以上二つの法からわかるように、神の属性が顕示されるのは、或る一定の目的を成し遂げるためである。又、処罰を求める法と、慈悲をかける必要を求める法との間に闘争が生じるような場合には、必ず慈悲の方が優先し、処罰の方が一歩退かなければならなくなるということも、この二つの法からわかる。これらの法の施行について熟考すると、ムスリムの心は 創造物すべてに行き渡っている神の慈愛に満たされる。神に対する愛と献身の心を育むためとはいえ、ムスリムは自分自身を冒瀆したり、贖罪の教義やあらゆる罪を背負った人間の受難を受け入れたりする必要はない。聖クルアーンの教えによれば、神の属性が顕示されるかどうかは、すべて英知によって支配されており、どの顕示にもそれぞれに目的がある。又、時には人間故に罪深い程の弱さを曝け出したり、過ちを犯したりし、そのために後悔や自責の念にさいなまれ、その後の誤った行動をすべて慎もうと決心する場合もあるが、その際には 神の愛や許しが完全にその人間を包んで下さるであろうと聖クルアーンは説いている。人間はこのような聖クルアーンの教えに従うだけで充分である。この教えさえ知っていれば、人間の心は和らぎ、神への愛に我を忘れることが出来るであろう。神は「創造主」であり「主権」ではあるが、神の僕達の罪を許し、その過ちを見逃し、彼等が進歩出来るようにあらゆる必要なものを準備して下さるということを、ムスリムならばわかっているはずだ。神が罰を命じられたとしても、それは決してその人間に苦しみを科したり、屈辱を与えたりするためではない。神の目的は、その過ちを犯した僕達が自ら改心し、進歩への道を歩むようにして下さることにある。ムスリムならば、神はいつでも心からの悔い改めを感じ取って下さり、僕達の過ちを被い隠し、悔恨と悔い改めを通して、その過ち

をすべて拭い去って下さるということがよくわかっているはずである。「尊厳と称揚の主」である神は僕達の祈りを聞き届け、彼等が神に近づこうとする熱意の何倍もの熱意をもって、僕達に近づこうとして下さっていることをムスリムならば、知るはずである。このようなことをすべて認識することにより、ムスリムの心は神の愛に満たされ、幼子を母親の腕の中へ飛び込ませる愛や献身よりも更に強い愛と献身の心を抱いて、ムスリムは 神の方へと飛んでいくのである。そして 神も又、悩んで泣いている子供をなだめようと駆けつける母親よりも何倍も深い愛と優しさをもって、神の僕達の方へ心を傾けて下さっている。

宇宙の中心をなす人類

神は、神の尊厳と光を顕示するものとして、宇宙を存在させることを望まれた。これこそ、宇宙創造の起因であったと聖クルアーンは教えている。聖クルアーンによると神は六つの段階に分けて天と地を創造された。まず神は 海を支配された。神が海から天地を創造された目的は、善悪を見極める意志を持つ存在を誕生させることにあった。

こは彼がお前達を試さんがためなり、お前たちのうち誰が最も優れたる振舞いをするかを (11:8)。

この節からわかるように、現在の形を取る以前は、すべては液状であった。言い換えれば、物質的宇宙の創造は正に水素原子から始まり、その宇宙は その原子から徐々に発達していったのである。物質前の状態について、聖クルアーンは次のように述べている。

「不信せし者どもは解らざるか？げに諸天と地が閉じたる（塊）でありしが、われらが両方を分けたることを。^{しか}而して、われらは、水よりすべての生物を創造せり。それでも彼等は信ぜざるか？」(21:31)。

この節は、天と地は最初は 形のない物体であったが、神がその塊を

引き裂き、太陽系を創られ、そして、始めから神は常に水から生命を創り出して来られたのだ、ということの意味する。この節からわかるように、物質的宇宙が発達して来たように、精神的宇宙も発達して行くであろう。神は、御自身が施工された法に従って、物事の塊を引き裂かれた。そして、その散らばった破片が太陽系を成す一つ一つの物体になったのである。同じ様に 神は精神的宇宙においても改革を起こされた。人間の精神状態が墮落し、精神的状況が愚鈍になり、重苦しくなると、神は暗闇に動揺を与えるべく光を当てて、闇を攪乱させて下さる。すると、この明らかに生命のない塊から永遠に動き続ける精神的太陽系が創り出される。この精神的太陽系はその中心から拡がり始め、結果的にその背後にある力に従って、あらゆる国々、即ち、全地球を包括してしまうのである。物質的宇宙の創造は水から始まる。同様に精神的宇宙も啓示とも言うべき天の水を受けて、生命を運び始めるのである。

聖クルアーンによると、地球が形を成し、人間の生命を維持できる資産を発展させる迄、宇宙は次から次へと段階を通り越していった。人間の創造は少なくとも我が太陽系の創造における最終的な目的であったと、聖クルアーンは教えている。その段階に到達すると、人間が神の属性を顕示する存在となり、神の素晴らしきイメージを映し出す鏡の役割を果たし、精神的宇宙の基盤となるように、神は物質的宇宙に人間を創造された。神の創造物は何百万もの種にわたる。聖クルアーンは次のように伝える。「主の軍勢を知る者は、主御自身の外になし」(74:32) しかし人間は神の属性を映し出す鏡であるが故に、全創造物の中で尊厳と榮譽ある地位を占める。だからこそ、ムスリムの神秘論者は人間のことを小宇宙と呼ぶ。即ち、人間はあらゆる創造の属性を所有する、宇宙の縮図ともいえる存在という意味である。一枚の概観図がその地図に載っている国々の特徴をすべて表わしているのと同様に、人間の体には宇宙の特徴がすべて現れている。だからこそ、人間は 創造された宇宙の軸、或いは中心なのである。神は人間のために全宇宙を創造された、と聖ク

ルアーンは述べている。又、よく観察してみればわかるように、人間は全創造物を支配しており、人間を支配するような創造物は 何1つない。人間は確かに、天候、惑星や恒星の光、雷鳴や稲妻、嵐や吹雪、伝染病や疫病などの影響を受ける。だが、決してこのような現象に支配されているわけではない。支配者は被支配者の影響を受けるものであるが、然しながら支配者と被支配者を識別するのは決して困難なことではない。このように人間はその他の創造物の影響を受けてはいるが、支配者はやはり人間である。人間は 川、海、山、風、雷、雨、野草、薬などを制御しており、明らかに創造物の中心的な存在である。少なくとも、我々の宇宙に関わる創造物の中心なのだ。神の創造は果てしないため、恐らくどこかに我々の知らない世界もあるであろう。だから、そのような世界を憶測することは、無理なのである。

頂点を極めた進化の過程

新約聖書や旧約聖書で述べられている説明とは対照的に、聖クルアーンでは、人間は段階的過程を経て創造されたと教えている。我々はこれまで、上述の問題を言及し、命題を証明するため、聖クルアーンを引用してきた。人間の創造は、段階的過程を経て辿り着いた頂点であったと述べている節が、聖クルアーンの中にもう一箇所ある。この節では、神が土から人間を創造され、神の息をその人間に吹き込まれたというのは間違っていると書かれている。聖クルアーンは 次のように述べている。

「アッラーはさまざまな形と状態にお前たちを創り給えり」
(71:15)。

即ち神は 次から次へと段階を経て、且つ次から次へと条件が変わる中で人間を創造して下さったのだ。聖クルアーンによれば、人間は一瞬で創られたのではなく、段階的過程を経て完成されたのである。同様に、人間の精神的発達も徐々に進んでいった。人間はアダムが生まれる以前

に既に存在していたのだが、啓示された神の法に定められた責任を果たす能力はなかった、と聖クルアーンは説いている。人間は洞穴や山の中の安全な場所で暮らしていた。そのため、聖クルアーンはこのような人間を「精霊」即ち、人目にふれない場所に住む者と呼んでいる。この言葉を、おとぎ話や寓話に出て来る妖精と解する人達もいるが、そのような解釈は聖クルアーンでは認められない。アダムとその仲間達が園を出て行く時（聖クルアーンでは、この「園」とは、地上のある地域のことであり、天の「樂園」ではない）、神は「精霊」に属する Iblis について彼等に警告を与えられた、と聖クルアーンははっきり指摘している。アダム達が一生を過ごし、死を迎えることになる地球でお互い共に暮らさなければならなくなるため、Iblis やその仲間達に気をつけなさい、というのが神の警告であった（7:26,28）。更に、アダムとその仲間達及び Iblis とその仲間達の両方に向けて、神は別の警告を与えられた。神に遣わされた預言者達が時々彼等の中から現れた場合には、その人々を預言者として受け入れなさい、という警告を（2:39）。以上のことからわかるように、アダムの時代の精霊達やその統率者である Iblis は人類であった。寓話に出て来る妖精は人間と一緒に暮らしたりはしないし、人間とは何の関わりもない。だから、聖クルアーンは、寓話の精霊という考え方を認めない。聖クルアーンが アダムとの関わりの中で精霊として描いている者は地上に住む人間であるが、その精神的能力はまだ充分な発達を遂げていない。人間の精神的能力が充分に発達した頃を見計らって、神は、その世代の最も完全に近い人間に啓示を与えられた。その人間がアダムであった。だが、この頃の啓示はほんの少しだけで、然も社会の形成、食糧の供給、そして、その食糧を維持する手段などに限られていた。社会的感覚がまだ充分に発達していない者達はアダムに従おうとはしなかった。神はそのような者達を罰し、アダムに勝利をもたらして下さった。そして今後も預言者が次々と現れ、預言者を信じる者は アダムやその仲間達の中に加わり、信じない者はアダムに逆らう精

霊達の中に加わることになるであろう、と神は 宣言された。預言者達はそれぞれに、人間の知的及び精神的進化を手助けするために遣わされた。進化の次の段階を受け入れようとモーゼず、且つ進化を促そうと手助けをする預言者を通して神が課そうとしていらっしゃる限定や規制に従おうとはしない者達は、預言者を拒否した。

簡単に言えば、人間の肉体的創造と発達とは進化の成果であり、同様に人間の知的発達も進化の成果である、と聖クルアーンは教えている。アダムは最初の人間ではなかったが、神の啓示に対する責任を負い、果たす知的能力を持った最初の人間であった。神が人間を創造することを望まれたが故にアダムを創造された、などとは聖クルアーンのどこにも書かれていない。聖クルアーンが明確に主張しているのは、神が「地上の代理人」を指名することを決心され、アダムを指名された、という点である。このことからわかるように、アダムが「地上における神の代理人」として指名された頃、地上には既に人間が住んでいた。しかし彼等の精神的能力が十分に発達していなかったため、誰一人神の啓示を受けることが出来なかった。社会を形成し、組織化された制度に従って暮らせるレベル迄、人類の知性が発達した時、神はアダムに啓示を与えられた。アダムはその時代で最も高い発達した知性を持っていたからであり、こうして彼は最初の預言者となった。アダムは最初の人間ではなかったが、最初の預言者であった。そして、彼が受け取った啓示は 明確ではあるが簡単な社会的法を少し定め、神の特性の1部を簡単に説明するものであった。

聖クルアーンの別の箇所には次のような記述がある。

「われらはお前たちを創造し、しかる後にお前たちに形を与えたり。
^{しか}而してわれらは天使たちに向って「アダムのために叩頭(サジダ)せよ」と命じたり」(7:12)。

この節の意味は、神が人類を創造され、そして人類の能力に形を与え

られ、そして御使達にアダムに対して跪き拝めと命じられた、ということである。この節から明らかなように、人類はアダムの時代以前に既に存在していた。アダムが出現する前に、人類は進化における数段階を既に経過していたという事実が、人間の知的能力の発達からわかる。人類は創造された後、自分の能力を段階的に発達させ様々な形を帯びさせ、その結果、自分を取りまくその他の動物達と区別され始めたということが上述の節に述べられている。そして、人類の知性が或る程度迄発達した時、アダムが創造され、神は彼に啓示を与えて下さったのであった。

人類創造の目的

人類が創造されたのは、神の属性を顕示し、その生涯を通してその属性を例証するためであった、と聖クルアーンは教えている。聖クルアーンには次のように書かれている。

「されば我ジンと人間を創りしは、彼等が我を崇拜せんがために外ならず」(51:57)。

(既に説明した通り、ジンというのは、目に見えない類ではなく、或る階級の人間を示すものである)。別の箇所、聖クルアーンはこのようにも言っている。

「彼こそはお前たちを地上に於ける後継者たらしめたり。されば、不信せし者あらば、その不信心（の結果）は彼自身に対して表れるべし」(35:40)

即ち、もし人間が神から与えられた地位を自ら放棄したとしても、決して神を傷つけることにはならないが、その結果苦しい思いをするはめになるだけである。以上二つの節が示すように、人間は自分の生涯を通して神の属性を例証するために創造されたのであり、人間は地上における神の代理者なのだ。故に人間は物質的宇宙の中心である。人間を改善し、その生涯の目的を人間に思い起こさせ、正しくその目的達成に向かっ

て進んでいけるように人間を導くために、預言者は遣わされる。その後、預言者は各領域において人類の中心となる。言い換えれば人類は太陽のようであり、その周りに物質的宇宙が公転している。そして各々の預言者がその範囲の中で太陽のようであり、彼等の周りにその範囲の人間達が巡回しているのである。

自然の法則とシャリーアの法則

人間に己の義務を自覚させ、進歩の道を歩ませるため、神は二つの法則を施行された。その内の一つは自然の法則であり、人間の物質的進歩に関するものである。この法は人間の精神的発達に直接関係するものではないため、この法に背いても人間は物質的損害を被るだけで、神の不機嫌や怒りは招かない。全物質的宇宙がこの法から適度の刺激を受け、この法により動かされている。この法の詳細に関して、直接的な神の啓示はない。

二つ目はシャリーアの法であり、それは人間の精神的進歩を規定する。この法に背けば、神の不機嫌を招く。何故ならば、人間が自分自身が創造された目的を首尾よく果たすためには、この法に服従する以外にはなく、この法に背くと、その目的に向かっての進歩を阻止することになるからである。しかし、このシャリーアの法に背くことは、必ずしも全人類が完全にこの目的に到達する機会を失うことを意味しない。シャリーアの法は、人間が精神的浄化と高揚を成し遂げられるように、統合的に手伝いをしてくれるものだ、と聖クルアーンは教えている。自然の法則に一つでも逆らえば人間は破滅と崩壊への道を辿らなければならないなどということが決して起こり得ないように、栄養面で少し注意を怠ったからといって、病気になるわけではない。ましてやシャリーアの法に少し逆らう度に、神の怒りを招き、目標に到達する機会をすべて失ってしまうはずなどないのである。シャリーアの法の真の目的は、人間が精

神的に完成する手助けをすることにある。一定の結果をもたらすように考案されている大きな制度があるところでは、或る意味での失敗は是正され、又或る意味での成功によって補われて、要求通りの結果に到達することになるはずである。例えば、人間の肉体は複雑な組織であり、人間の生命は、食料、水、空気などのさまざまな要因に頼って、その健康を維持している。時にはこのような要因の一つ又は、それ以上が汚染されることもあるだろうが、だからといって必ずしも肉体が病気になるとは限らない。一つの要因の欠落のために生じた欠陥は他の要因の健全なる働きによって克服されるであろう。シャリーアの法においても同じことがいえる。この法を構成しているのは、人間の精神的発達を目指して、統合的に考案された規則や原理である。神の王国やその預言者の威厳に対する拒絶がそれ程ひどくない場合には、過ちや弱さ故に生じる人間の行動上の欠陥は、まだ治癒が可能なのである。欠陥が重症の場合でも、真の悔い改めと誠実な祈りがあれば、治癒の道は残されている。

以上の二つの法以外にも 常に機能している法が二つあると、聖クルアーンは指摘する。即ち、社会法と道徳法である。だが、この二つの法は、実質的には自然の法とシャリーアの法の境を延長したものである。道徳法は、シャリーアの法の範囲にあり、社会法は自然の法の範囲にある。そして両方はお互いかなりの程度迄影響し合っている。社会法に定められる規則は道徳に基づくものが多く、道徳法に定められる規則は社会学に基づくものが多い。人間は社会の一員として生きるよう創られているから、この法の両方を必要としている。社会法は、いわば自然の法の延長線上にあり、その枠組内において人間には広い選択の自由が与えられている。道徳法はシャリーアの法と深い関わりがあり、その基盤はシャリーアの法の支配を受けている。詳細部分では、人間に選択の自由が残されている。全宇宙の体系がこれらの法を基にして動いている。自然の法とシャリーアの法は神によって指定され、人間はその構成に口出しを許されない。だが社会法と道徳法は、神の命令と人間の規制との組み合わせ

わせであり、このように人間同士の協力と神の構想とを結び合わせることで、正に最高の導きが整い、宇宙が動かされているのである。このように二つの流れが平行して動いている限り、世界は平和で、人間は神の王国と一致した恵み深い体系を築き上げることが出来る。だが、このような二つの流れがお互いに逆方向に流れ始めると、つまり人間の理性が神の導きに平行して流れるコースからはずれてしまい、神の恵みを失ってしまうと、世界は紛争の餌食になってしまう。そうなれば神からも人間からも統制を受けない世界となり、悪が世界をほしいままにする。人類が人間であると主張出来るのは、神の導きに従っているからである。神に従うことをやめた時、人間は畜生道に堕ちてしまうのだ。

人間が神に近づくためには、人間に自分の進む道を選択する自由を与える必要があった。人間には自由な領域と強制された領域がある、と聖クルアーンは教えている。人間はシャリーアの法に関しては自由であるが、自然の法が適用される範囲においては、選択の自由を与えられていない。人間がこの自然の法の領域で強制される理由は、人間の精神的進歩と自然の法の作用とに直接的な関係がないからである。人間はシャリーアの法に従うことによってのみ、神の恵みや愛を受けられる。従ってシャリーアの法の領域内で、自分の行動を選択する自由が与えられている。もしその自由が与えられていなければ、何の報酬も得られないはずである。強制されて行なうことには何の報酬もない。

人間の精神的福祉や進歩は、その物質的環境の影響を受けるが、その影響を受ける程度には限界があると聖クルアーンは認めている。だが人間の行為は、その背景や環境に照らした上で神が評価してくださるのだとも、聖クルアーンは述べている。例えば、もし億万長者長者が人道的福祉のために、自分の財産のほんの一部を費やし、それと同じ額の財産しか持ち合わせていない貧しき者が仲間への福祉のために全額投入した場合、神の目には、この二人に与えられる評価は同じではない。億万長者は 神の喜びを勝ち取るために、自分の財産の千分の一か、十万分の

一を捧げたのに対し、貧しき者は同じ目的のために全財産を投げ出したからである。両者が受け取る報酬は各自が払った犠牲と比例したものとなるであろう。神は人間の行為の額に注目されているのではなく、行為の背景に照らしてその行為を評価して下さる。行動範囲を制限してしまうような、人間に与えられた不利な条件を神は決して見落とされることはない。又人間が行動しやすいような楽な好条件も見落とされはしない。

聖預言者ムハンマドにおいて完成された精神的宇宙の進化

物質的宇宙が徐々に発達したのと同様に、精神的宇宙にも段階的発達が定められていたと聖クルアーンは教えてくれる。だからこそ、宇宙の始まりの頃には、完全な法の規定が啓示されなかったのだ。啓示は、人間の発達段階に応じて人間に下された。やっと完全なシャリーアの法に対して責任を負える段階に、人間は到達したのである。それで英知の神は、イスラムの聖預言者ムハンマドという人物に、最も完全に近い人間像を表わされ、彼に完全なシャリーアの法と完全な聖典を啓示された。精神的宇宙の進化は、聖預言者ムハンマドにおいて完成された。人間が物理的宇宙の中心的存在であり、且つ預言者達がそれぞれに遣わされた国や時代の中心的存在であったように、イスラムの聖預言者ムハンマドは、全人類の中心的存在なのである。それ故、聖クルアーンによって進められた宇宙の構想によると、宇宙における第1の中心的存在は人間である。各地域で人間はそれぞれの預言者を中心にまわり、預言者達はイスラムの聖預言者ムハンマドを中心にまわり、そして聖預言者は全宇宙を中心にまわって宇宙を神へと導いている。こうして精神的宇宙は完全な形へと進化している。

完全なる聖典－聖クルアーン

神が預言者たちを通して、シャリーアの法、道徳法及び社会法により、

人間が進歩し、完全な形へと近づけるようにしてくださったということは既に述べた。最も完全な聖典である聖クルアーンは、以上の三つの法をすべて取り上げている。聖クルアーンはまずシャリーアの法と道徳法を十分に説明し、それから社会法の基本的な原則について述べた。だが、社会法のその他の分野に関しては、人間自身が発展させ、自ら埋めるべく余白が残してある。道徳法の領域について聖クルアーンは、この法の基本的原則は、高い道徳性を築くのは、自然の能力の正しい使用によってであると定めている。自然の能力や要求を抑圧したり、無能扱いしたりすることは、自然の支配に全面的に服従するのと同様に道徳的罪である。自分自身の本来の能力を殺したり、自然な要求を完全に抑え込もうとする者は、自然の法を無視しているのだ。自然な要求を満たすことに夢中になって全精力を傾けているような者は、シャリーアの法を無視して、精神的破滅への道を歩んでいる。どちらの場合も人間の発達には致命的である。自然の法とシャリーアの法のどちらを無視しても、罰を受けることになる。あらゆる物が人間のために創られているのだから、人間はそれらの物を使用してもさしつかえないと聖クルアーンは教えている。但し、明らかに有害となる使い方だけは禁じられている。この原則によると、禁欲に対するイスラムの見方は、徳ではなく、悪である。同様に清潔な食物や飲み物、衣服などを用いないことは、自然の法を無視し、神の恩恵に感謝しないことになるため、悪であって徳とはならない。しかし食物やその他の物を追い求めるだけに全時間を費やし、完全に楽しみだけにふけるのも、やはり悪である。こうすることにより人間は、人間の真の存在目的である精神の発達を無視することになるからである。人間が絶えず働き続け、あらゆる滋養物を控えてしまうのも罪深いことである。そのようなことをすれば自ら死を招き、仕事を未完成のまま放り出してしまうことになるからである。同様に人間が肉体的要求の充足のみにふけり、有益な活動を自制してしまうのもやはり罪深い。

このような人間は人生を通して手段のみを追求し、目標を無視しているからである。手段がなければ目標は達成し得ないし、目標を掲げていなければ適切な手段も作り出し得ない。

社会的秩序設定の原則

社会的領域内に秩序を築き、有益な方向付けをするために聖クルアーンは以下の原則を定めている。

- (1) 絶対的所有権は神のみにあり、あらゆる物が神のものである。
- (2) 神は全人類の総合的利益のために、あらゆるものを人間の支配下におかれた。
- (3) 人間が存在する目的は精神的完成にある。従って人間には自分の行動において、かなりの幅の選択の自由とその活動の場を与えなければならない。
- (4) 人間の進歩の基盤となっている物質は、全人類共通に与えられた遺産であり、人間の労働による産物は、個人及び地域社会の両方に適切な分け前が行き渡るように分配されなければならない。
- (5) 人間の社会制度を適切に規制するため、誰かに行政上の権威を委ねなければならない。その人間は、行政を行うべき社会の人々の中から協議の結果選出された者でなければならない。彼の役割は法を定めることではなく、神の法を施行することである。
- (6) 異なった社会の政治の政治制度には恐らくさまざまな違いがあるという点を考慮に入れて、聖クルアーンは次のように教えている。
 - (a) 二カ国、もしくはそれ以上の国家間に政治的紛争が起きた場合、その他の国々が結束して、紛争の解決を計らなければならない。
 - (b) 紛争の当事者間に友好的解決が訪れない場合、その他の国々がその紛争の中心となっている問題に関して公平な裁定を下すべ

きである。

- (c) 紛争の当事者のどちらかが裁定の受け入れを拒否するか、受け入れたにもかかわらず、施行しようとしないうちに、他の国々が結束してその抵抗する国の説得に当たり、国際平和のために裁定を受け入れさせるべきである。もし説得に失敗したならば、武力に訴えてでも、問題の国の政府を裁定に従わせなければならない。
- (d) 頑強に抵抗していた国が降服した場合、判定を下す他の諸政府は元の紛争に関して裁定し、自分の有利に計らってはいない。このような行為は、新しい紛争を引き起こす種となるかもしれないからである。

13世紀半以上昔に、このようなことすべてが聖クルアーンによって定められた。国際連合はこのような原則の一部を採用しているが、他の部分を見逃しているために本来の目的を達成できない恐れがある。国際連盟は妥協しようとしないうちに、武力に訴えてでも国際的決定や裁定には従わせるべし、という聖クルアーンの実施しなかったために失敗した。国際連合に関して言えば、強制的にでも解決を押し進めるべき大国は、自分達の利益のために敗戦国に犠牲を強いてはならず、対立を引き起こした紛争を解決できるように努力をしなければならないという点をなんとか保証しようという態度が見られない。それ故に、国際連合も国際連盟と同じ運命を辿るのではないかという懸念が生じる。平和は、聖クルアーンで規定されている原則に基づいてのみ築かれ、維持され得る。

死後の生命

聖クルアーンの教えによると、人間が死ぬ時、魂は新しい宇宙に入り、

新しい体になる。その体はこの生命の必要条件に適した肉体とは異なっている。その体は、神の素晴らしい属性を感知できる特別の能力をもった、新しい種類の精神体である。完全な魂は、楽園と呼ばれる国へすぐに入ること許されるであろう。この世での発達が充分でなかった魂は、地獄と呼ばれる精神の病を癒してくれる国に行くことになるであろう。各々魂に関して治癒の過程が終了すると、魂は天の楽園に行くことができる。究極的にあらゆる魂が神の楽園に到達し、地獄という国がすべて終わりを迎えるまで、この形が続くであろう。神から生まれたものは、最後にはすべて神の許へ帰る。彼等の喜び、悲しみ、そして慰めは、すべて精神的なもの。そして神を心に抱き、神からの愛を受けることは彼等にとっての心の糧であり、神の御姿を拝することは、彼等にとって無常の誉れなのである。

「それを知るは、ただ主あるのみ」(79:45)

という言葉で、聖クルアーンはこの点に注意を促している。即ち、宇宙は神と共に始まり、神と共に終わるのだ。神から生まれたものは、神の許に帰る、という教えをイエスは、次のような言葉で表した。

「天から下ってきた者、すなわち人の子のほかには、だれも天に上った者はない」(ヨハネによる福音書第3章13節)。

メシア 約束された救世主 アハマド

精神に関する完全な法が、イスラムの聖預言者ムハンマドを通して啓示されたのだから、彼以降、法を伝える預言者はもう誰も現れないという原則が、聖クルアーンの中で説かれている。聖クルアーンは、最後に啓示された聖典であり、全面的にであろうと部分的にであろうと、その後の啓示によって破棄されるようなことはない。精神的宇宙は、最後の審判の日が来る迄、聖クルアーンと聖預言者ムハンマドの支配を受け続けるであろう。だが人間は忘れっぽく、誤ちを犯したり、反乱を起こし

たりしがちである。聖クルアーンの支配力を維持するためには、このような病を治す治療法が必要であった。忘れっぽい者には思い出させて、誤ちを犯す者を止め、反逆者を降服させる必要があった。物質的宇宙では、月は太陽から光を受け、地球が太陽の光を直接受けられない間だけ、月が地球を照らしてくれている。同様に聖預言者ムハンマドの精神的光を受けられる人間が次々に現れ、精神的宇宙を照らし出し続けるであろうと聖クルアーンは我々に教えてくれる。このような人々は、充足すべき必要の程度に応じて、改革者とし現れて来るが、精神の領域における無秩序や悪影響が余りにも広がってしまった場合には、彼等、厳然たる服従の下に聖預言者ムハンマドに従属する預言者としての指名を受けることになるであろう。聖預言者ムハンマドの精神像を映し出すような預言者の出現について、聖クルアーンは様々な箇所以示唆している。その人物の出現は、聖預言者ムハンマド自身の出現とみなされるであろう。
^{ハディース}伝承の中では、このような聖預言者ムハンマドの如き人物^{メシア}に救世主という名が与えられており、聖クルアーンも又或る箇所、その人物にこの名があてはまると述べている (43:58)。

^{ハディース}伝承では、この預言者を Mahdi という別の名前でも呼んでいる。
^{メシア}救世主と Mahdi という二つの名は、それぞれ別の能力を表しているが、共に同じ人物を指すのに使われている。福音書でも、イエスの再来の約束を取り上げることで、聖預言者ムハンマドの再来についても触れている。この聖預言者ムハンマドの出現の時について示唆する最も古い各聖典や聖クルアーンの中で述べられている証は、この時代において成就している。だから、聖クルアーンの中で約束されている預言に従い、聖預言者ムハンマドの精神像を受け継いだ人間が、この時代に神の手によって遣わされ、その人物の出現によって、聖クルアーンに含まれる預言が成就されたことこそが、正に聖クルアーンの真理性を明確に証明する。

その人物の説明によると、イスラムの王国を再建し、聖クルアーンの真の教えを照らし出すために神が彼を起こされたのであった。この人

物こそ、アハマディア運動の創始者である、故 Hazrat Mirza Ghulam Ahmad であった。60 年程前に、彼はイスラムと聖預言者ムハンマドに仕え、世界中に神の名を高めるために働くよう指名されたことを、神の啓示を通して知った。彼は神から預言者としての尊厳を与えられたが、次のような二つの条件がついていた。まず、彼は常に聖預言者と聖クルアーンの完全なる信奉者であること、そして彼に与えられる啓示は、聖クルアーンの教えに従うものであり、何の新しい法も含まれないということであった。Ahmad が受けた啓示の一つに、「あらゆる祝福は Muhammad から授けられる。教えを授けし者（即ち聖預言者ムハンマド）に祝福あれ。そして、教えを学びし者（即ち、この啓示の受け取り主 Ahmad）に祝福あれ」（Haqiqat ul-Wahy）というものがあつた。又、別の啓示として、次のようなものも彼は受けた。「警告者がこの世に現れたが、世の中は彼を受け入れようとしなかった。だが、神は彼を受け入れられ、厳しい激動を通して、彼の真理を確立して下さるであろう」（Barahīn Ahmaiyyah）。聖クルアーンで使われている言葉の中で「警告者」とは預言者を指しており、アハマディア運動の創始者が受け取ったこの啓示を著わした書物の中には、「警告者」の代わりに「預言者」（Ek Ghalati Ka Izala）を使っているものもある。Ahmad に課せられた役割は、この暗黒の時代に人々をその創り主と対面させ、新鮮な証と啓示によって、この物質的世界に精神的進歩の種をまくことであつた。彼が最初に彼の主張を発表した頃、彼はたった一人で、彼と志を同じくする者は誰一人いなかった。彼が出現したのは 1400 人から 1500 人の住人しかない小さな村で、郵便局、電報局、鉄道の駅などの近代的な設備は何もなかった。彼はその時、神が力強い証によって、彼の真理を確立してくださり、彼の名は世界の果て迄も知れ渡ることになるであろう、と主張した。彼が創立した運動はしっかりと確立され、繁栄し、広まり、彼に従う者は神に近づくことができるであろうという宣言に加え、この宣言の日から数えて九年以内に彼に息子が生まれ、その子を通して、彼の

言う預言の多くが成就されることとなり、その子の名前も世界の隅々に迄、知れ渡るようになるであろうということも彼は伝えたのであった。Ahmad は、次から次へと勢いよく成功をおさめ、精霊の祝福を受けた。彼がその主張と彼が受けた啓示を出版した途端、あらゆる分野から、そしてあらゆる社会からの激しい反対を受けることになった。ヒンドゥー、ムスリム、シーク、キリスト教の信徒達がすべて結束して彼に反対し、彼を破滅させると決めた。このように世界的な反対に遭遇するのは、通常、真の預言者だけである。従ってアハマディア運動の創始者が神に導かれているということを、この反対運動の存在自体が現していた。彼は孤独で、あらゆる社会から反対を受けていたにもかかわらず、神が Ahmad の声を力強くしてくださったおかげで、少しずつ人々は彼を信じるようになっていった。彼を信じる人々がパンジャブ地域に徐々に増えていき、インドの他の地域にも伝わり、又インド以外の地域にもその輪が広まっていった。

メシア 救世主の約束された息子

1908 年にアハマディア運動の創始者が没すると、その反対者達は、この運動は自然消滅をするであろうと断言した。ところがイスラムの原則に従って結束したアハマディア教団は、故 Maulawi Nur'ud-Din を初代カリフとして選出した。初代カリフの時代になって、この教団の中から、西洋的な考え方の影響を受けていた者達が、カリフ制度への批判を始めた。彼等の見解に対して、その教団の一部から支持をする人々が現れ、その結果 1914 年に Maulawi Nur'ud-Din が死亡した途端、カリフ制度の廃止を訴える運動がこの人々から起こり、活発になった。約束された救世主、且つアハマディア運動の創始者である Ahmad の息子こと私は、その時まだ若冠 25 才で、何の資産も持ってはいなかった。教団の幹部組織は、カリフ制度に反感を抱いている者達に支配されていた。

当時 Qadian に参加していた教団員の大部分は、カリフ制度の反対派達からやじ馬呼ばわりをされていたが、自分達だけは、聖クルアーンに定められた原則に基いてこの制度を維持していこうと心に決めていた。そして彼等は私に、カリフの役割と責任とを負うように求めた。このような状況の下で、私は二代目カリフとして、教団の忠誠を受けることに同意し、それだけの能力はなかったのにもかかわらず、教団、イスラム、そして人間愛のために尽くし始めた。だが、教団の指導的立場に立っている者達の大部分がカリフ制度に反対していたため、教団は危機に瀕していた。教団の解散や分裂は、もう時間の問題だと外部者達は考えていた。丁度その時に、神が私を援助して勝利をもたらし、強力な私の対立相手の中に内乱を引き起こし、彼等を分裂させて下さるという啓示を私は受け取った。そして偉大なる奇跡が起こった。教団の中でも教養が高く経験も豊かだとみなされていた人々が、その試練の時に教団を去っていった。中身があり、影響力も強いとみなされていた人々が教団から手を引いた。教団の頭脳として尊敬されていた人々が、教団から切り離された。カリフ制度に反感を持っている人々が、教団の業務の指示が経験の浅い若者の手に委ねられてしまったから、アハマディア運動は、すぐに分裂してしまうであろうなどと言い始めたのである。だが、聖クルアーンを啓示し、世界が進歩している法に従って宇宙を創造された主は神である。約束された救世主^{メシア}であり、Mahdi でもある Ahmad は、1886 年から 9 年以内に息子を授かり、その息子は、神の愛と慈悲に守られて、世界中の隅々までその名を知られるようになり、イスラムの布教を通して奴隷を解放し、精神的に死んでしまっている人々に命をよみ返らせる勤めを果たす者となるであろうと、Ahmad 自身に啓示を与えて下さったのも神である。その神の教義は、成就され、神の言葉は崇高であった。夜が明ける毎に、私の成功を助けてくれる新しい要因がもたらされ、一日が過ぎる毎に私に反対する者達の失敗を急がせる要素が残されていた。このように、神のおかげで、私は世界の隅々に迄、アハマディア運

動を広める役割を果たせたのである。一步踏み出すごとに神の導きを受け、何度も繰り返し、神の啓示を受けるという榮譽を受けることが出来た。私が誕生する3年前の1886年に約束された救世主によって既に約束された息子の出現が通知されていたが、私こそその約束された息子であるという神の啓示を受ける日がついにやって来た。その日以降、神の支持と援助は急速に増大し始め、今日では、アハマディアの宣教師達があらゆる大陸で、イスラムの戦いを繰り広げている。ムスリムの手の中だけで閉ざされていた聖クルアーンが、神の力により聖預言者ムハンマドの祝福と、約束された救世主の仲介を通して我々にとって再び開かれた本となった。聖クルアーンを通して新しい知識の源が我々に開かれたのである。聖クルアーンの中の教えや教義が新しい科学の発達に基いた批判的となるたびに、神は私に聖クルアーンの中に表されている真の答を明らかにして下さる。我々は聖クルアーンの王国の御旗を掲げるべく選ばれた手段なのである。神の言葉や啓示から信仰と確信を得て、我々は、聖クルアーンの崇高さを世界に示している。世界の資産に比べれば我々の資産は余りに少ない。だが、どんなに激しい反対に遭おうとも、聖クルアーンの王国は確固たるものとして確立されるであろう。太陽はその軌道はずれるかもしれない。星がその定められた場所から動いてしまうかもしれないし、地球が公転をやめてしまうかもしれない。それでも、イスラムと聖預言者ムハンマドの勝利は、何者にも何人にも妨げられることはない。聖クルアーンの王国は再建されるであろう。人間は、他の人間をあがめたり、自らの手で作り上げた神を崇拜したりせず、唯一の神だけに跪き祈るようになるであろう。人間社会に聖クルアーンの教えに逆らうような風潮が実際あるにもかかわらず、イスラムの王国は再び確立され、厳然たるものとなり、人間にはその王国を根底から揺さぶることは出来ないということがわかるであろう。神が、悪魔によって荒廃させられたこの世の荒地に、慈愛の種をまかれたのだ。そしてこの種は、芽をふき、伸びて木を成し、その木は枝を広げて豊富な果実を実

らせるだろうと、私はここに宣言する。高まりたいと望み、神と共にありたいという憧れに励まされている魂は、いつか物質的富の夢から目覚め引き離されて、この木の枝に降りて止まりたいという感情にかられるであろう。その時、あらゆる無秩序状態が姿を消し、苦悩もすべて終わりを告げることになる。神の王国が地上に再び確立され、神の愛も又、人間にとって最高の価値を持つ宝物となるであろう。この革命に導かれて平和と秩序の時代が来る。この世に平和をもたらし、無秩序を取り除こうとする努力であっても、上述の原則に矛盾するようなものは、すべて無に帰してしまうであろう。

他の言語への翻訳

聖クルアーンは、聖預言者ムハンマドに、聖クルアーンの助けを得て、彼の最も偉大なる戦いを続けていくように指示した。聖クルアーンこそ、この目的を果たすには、最も効果的な武器だったからである（25:53）。聖クルアーンのこの指示に従って聖クルアーンの英語訳と解説書が出版された。英語版の他にも、ロシア語版、フランス語版、イタリア語版、ポルトガル語版、そしてスペイン語版が完成しており、もう間もなく出版されるであろう。今後も主要言語すべての訳書が出来上がるまでこの翻訳作業が続くと思われる。既にドイツ語版、オランダ語版、スワヒリ語版が出版された。

イスラムの布教と聖クルアーンの教えを解説するために、アハマディア運動の伝道所が世界の各地に設立された。伝道本部はイギリスにあり、現在フランス、スペイン、イタリア及び、スイスの伝道支部が活動が続けている。アメリカ大陸では、合衆国とアルゼンチンに支部があり、カナダとブラジルに支部を開設する計画が進行中である。英領西アフリカ諸国にも支部が既に開設されており、英領東アフリカ地域では、10人の宣教師が各所で活躍をしている。伝道活動は、エジプト、スーダン、

アビシニアでも行われている。中東地域では、パレスチナ、シリア及びイランに、東南アジア地域では、マラヤ、ジャワ、スマトラ、ボルネオなどに支部がある。我々は、これらの訳書や伝道所がイスラムの勝利を目指して運動を発足し、いつの日か成功を収めるものと信じている。なぜならば、我々の努力が神によって既に定められたことに従うばかりではなく、我々は神の直命に従って、努力しているからである。

この知的な贈り物に加え、我々は、何如なる宗教に信仰を誓っていても、真理を愛する者全ての人に「木を知るには、その果実を見ればよい」という優れた原則についてお知らせしたい。聖クルアーンはいつの時代にもその実を産出し、聖クルアーンに縋りつく者は神の啓示を受ける者となり、神は、その者達を通して神の御業をお示しになる。されば、真理を追求するために、何故我々は、理性や反省だけでなく、別の聖典が実らせている果実を観察することを追求の助けにしないのか。もしキリスト教徒たちが、私が受けた啓示に対して、ローマ法皇やその他の聖職者達の先任者達が、自分達に降された新鮮なる全能且つ預言的啓示を提示するよう、彼等の同意を受け得ることが出来るならば、真実は世界の人々に明らかになるであろう。然し、彼等はイエスの穩健な教えを無視して、イスラム国家に対して聖戦を起こそうと必死になっていたのである。今日、彼等はこの精神的戦いのために自らを捧げることは出来ないのでしょうか？もし彼等がこの招きを受け入れる気になれば、或いは、その信徒達の説得により、その招きに応じようとすれば、人類が長年苦しんで来た精神的病を治癒する効果的な解決方法がわかるであろう。そして神の尊厳と力が驚くべき形で姿を表し、人間の信仰を確立し、精神的発達へと導いてくれるであろう。

謝辞

最後に、病弱の身にもかかわらず、多大な時間を労して英文翻訳をして下さった Maulawi Sher Ali(B.A) 氏に感謝の意を表する。同氏と共に私の話しや書物の中から注釈を付加するべき資料を抜き出し、その注釈の準備をもして下さった Mirza Bashir Ahmad (M.A), Malik Ghulam Farid (M.A) および、今は亡き Ch. Abū Hashim Khan (M.A) の諸氏にも心から御礼を申しのべたい。残念ながら各注釈に目を通す機会には恵まれなかったが、諸氏の経験及び献身を鑑みれば、神の愛のおかげで私がこのために聖クルアーンや約束された救世主^{メシア}の教えから、直接得ることが出来たものを諸氏が正確に訳して下さったものと私は確信する。また、この機会を利用して、この入門書をウルドゥー語から英語に翻訳して下さった Lahore の国立大学教授である Qadi Muhammad Aslam 氏 (M.A) と Muhammad Zafrullah Khan 卿両氏の御尽力にも感謝の意を表したい。各氏及び、その子孫達に神の祝福あらんことを。そして、神が今世においても来世においても彼等を見守り導いて下さいますように。アーメン。

私は今は亡き初代カリフ Hazrat Maulawi Nur'ud-Din の弟子であったため、私が彼から学んだことが多分に注釈の中に反映されている。このように注釈は、実際に約束された救世主^{メシア}、初代のカリフ及び、私自身による聖クルアーンの解釈に基いている。神が約束された救世主^{メシア}を神の聖霊によって聖別し、彼にとって名誉なことに、現世及び来世の発達には不可欠な知識を彼に授けて下さった。それ故に、必ずやこの解説書は、現世来世の人々の病を沢山治癒することになろう。この解説書により、盲目の者は目を開かれ、耳の不自由な者には音の世界が与えられ、口のきけない者も言葉を話し、歩行が困難な者も歩けるようになるであろう。神の御使の祝福はそれ程偉大であり、この解説書は、出版された本来の

目的を充分満たすことができるであろう。主の御導きを給わらんことを。

MIRZA BASHIR-UD-DIN MAHMOOD AHMAD

(Khalifatul Masih II)

QADIAN,

28 February, 1947.

6th Rabi`al-Thani, 1366

28th Tabligh, 1326

あとがき

この本の翻訳は日本アハマディアムスリム協会が1999年に完成させました。それをアハマト・ファテルさんがデジタル化しました。その後2009年にムハマド・オウエイス・小林先生がパキスタンに聖クルアーンの翻訳の改訂のためにいらした際に、小林先生にこの本の翻訳の改訂もお願いしました。小林先生は齢八十歳にもかかわらず、長い間精根を傾け、ついに改訂版を完成させるという快拳を成し遂げられました。ズィアウッラー・ムバッシル導師とムハンマド・勝子パルウィンさんは翻訳監修の任務を果たしました。また、出版に当たり、日本アハマディア協会の多数の青年たちが協力してくれました。

ヒズキール・アハマト、ナジブ・ウラ・アヤーズ、ウマール・アハマト・ダール、ムアダム・ベグ、ムハンマド・イブラヒーム、ムハンマド・タヘル、小林教友様、特に嶺崎寛子先生はイスラム教の研究者でもあり、その知識などをフル回転していただき、お忙しい中でも文章の校正や文章表現にもたいへんご尽力頂きました。また他のご協力いただいた皆様に感謝し、アッラーのご加護とご慈悲が授かりますようにお祈り申し上げます。そしてこの本が日本人の心に、勇気と希望と潤を与える助けとなれば、これに勝る喜びはありません。この世とあの世、生まれたことの意味について考えを巡らせることで、人生を意義あるものにしようと思い、勇気づけられることでしょう。

この本をお読みになる皆様に、アッラーのご慈悲とご加護が授かりますように…

アニース・アハマト・ナディーム
日本アハマディア・ムスリム協会
日本本部長、主任宣教師

聖なる預言者ムハンマドの生涯

2014年7月1日 発行

© イスラム・インターナショナル・パブリケーションズ

翻訳者：日本アハマディア・ムスリム協会

監修者：アニス・アハマド・ナディーム

発行所：イスラム・インターナショナル・パブリケーションズ

〒496-0004 津島市蛭間町宮重 526 番

TEL:0567-55-9322

印刷所：いろは株式会社

Life of Muhammad^(saw)

Translated by : Ahmadiyya Muslim Association Japan

Editorial Supervisor : Anees Ahmad Nadeem

Published by : Islam International Publications

Address: Aichi Ken Tsushima City Hirimacho

Miyashige 526 〒496-0004

Tel:0567-55-9322

Printed at : Iroha Co., Ltd.

ISBN978-4-931236-12-7

